遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩

― 孝と自我の狭間で ―

日本大学大学院総合社会情報研究科
博士後期課程　　総合社会情報専攻

平成２５年度

指導教員　　小田切　文洋

20110414004　　小谷　喜久江

目次

序章　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
１節　本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
２節　先行研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
３節　新研究の位置づけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
４節　新研究における考察視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
５節　各章の説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第Ｉ章　江戸詩風の変遷と地方詩壇の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
一節　江戸詩壇の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1-1 古文辞派の終焉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1-2 江湖詩社の清新性霊説の受容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1-3 江湖詩社の活躍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
1-4 菊池五山の『五山堂詩話』出版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

二節　長崎来航清国人との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
2-1 草場珮川と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
2-2 市河寛斎と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
2-3 頼杏坪と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
2-4 頼山陽と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
2-5 梁川星巌・紅蘭と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
2-6 広瀬淡窓と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
2-7 田上菊舎と長崎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

三節　女性漢詩人の輩出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
3-1 袁枚の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
(1)袁枚について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
(2)袁枚の詩論と女性観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
(3)『隨園女弟子詩選』にみる女弟子の実像・・・・・・・・・・・・ 28
(4) 頼山陽の女弟子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
3-2 袁枚の女弟子と江戸の女弟子の違い・・・・・・・・・・・・・・・ 36

四節　九州詩壇の動向―福岡藩と秋月藩を中心に―・・・・・・・・・・・・ 39
4-1 福岡藩の藩学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
4-2 秋月藩の藩学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

4-3 寛政異学の禁の余波・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
4-4 九州詩壇の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
4-5 亀井学と江戸詩壇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

第Ⅱ章　采蘋の少女時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
一節　亀井少琴との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
1-1 原家と亀井家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
1-2 儒者の娘―采蘋の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
1-3 儒者の娘―小琴の場合・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
1-4 采蘋と小琴―異なる人生の選択・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

二節　父古処の願望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
2-1 古処の手紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

三節　秋月藩の政変・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

四節　婚約の破談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

第Ⅲ章　漢詩人としての修業時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
一節　父母との遊歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
1-1 遊歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
1-2 父母との遊歴と采蘋の評判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

二節　漢詩人としての決意・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

三節　佐賀・長崎における評判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

四節　初期の作品―自筆詩稿を巡って・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

五節『有煒楼詩稿』について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

六節　采蘋の詩風・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
6-1 父の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
6-2 李白の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

第Ⅳ章　遊歴詩人としての出発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

一節　京都への旅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
1-1 出郷の動機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
1-2 別れの挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
1-3 諸葛亮孔明との比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
1-4 菅茶山との出会い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
1-5 一年半の京都滞在と父の死・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

二節　江戸への旅立ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
2-1『東遊日記』について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
2-2『東遊日記』に見る中国地方の文人たちとの交流・・・・・・・・・・ 89
(1) 兄弟に別れを告げる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
(2) 琴を孝ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
(3) 相思の詩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
(4) 広島での二カ月・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
(5) 広瀬旭荘との再会と頼杏坪との会遇・・・・・・・・・・・・・・ 98
(6) 「□思唱和集」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
2-3『東遊日記』の旅程図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112

三節　京都の再遊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

第Ⅴ章　江戸での二十年間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
一節　江戸における交友関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
1-1「原采蘋女子秘柬」にみる江戸到着時の状況・・・・・・・・・・・ 117
1-2『金蘭簿』にみる交友関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
1-3『有煒楼日記』にみる交友関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
1-4『 日間瑣事備忘』にみる広瀬旭荘との交流・・・・・・・・・・・ 133

二節　羽倉簡堂との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
2-1『南汎録』を読む・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
2-2 羽倉簡堂の側室佐野氏の碑文を読む・・・・・・・・・・・・・・・ 136

三節　江戸における采蘋の名声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
3-1 天保期の『人名録』に見る采蘋の名声・・・・・・・・・・・・・・ 137
3-2 文人間における采蘋の名声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
3-3 江戸在住の本当の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140

四節　江戸客中の詩と秋月藩への上書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
4-1 江戸客中の詩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
4-2 秋月藩への上書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
(1)井上参政への上書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
(2)藩主への上書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・149

第Ⅵ章　房総遊歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
一節　幕末房総地方の文化的状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
1-1 采蘋の人脈・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152

二節　『東遊漫草』に見る房総文人との交流・・・・・・・・・・・・・・・ 153
2-1 江戸文人と房総文人との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
2-2『東遊漫草』について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
2-3『東遊漫草』の詩と訪問先・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
2-4 人名録について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
2-5 旅程図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189

三節　房総における采蘋の足跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・189

第Ⅶ章　帰郷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・190
一節　帰郷後の采蘋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・191
1-1 幕末の山家の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・193
1-2「宜宜堂」の開塾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
1-3『戸原卯橘日記』に見る山家時代の采蘋・・・・・・・・・・・・・ 196
1-4 宜宜堂の門弟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199

二節　肥薩遊歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200
2-1『西遊日歴』について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200
2-2 日記にみる肥薩遊歴出発の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
2-3『漫遊日歴』について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
2-4 肥薩遊歴の旅程図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・223

三節　最後の出郷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
3-1 萩での二カ月・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
3-2 萩における終焉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・231

第Ⅷ章　終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・235
一節　采蘋にとっての「孝」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
1-1 父に対する孝心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 237
1-2 母への孝養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 239
1-3 父母兄弟の墓の整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・240
1-4 父の遺稿の上木・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・241

二節　采蘋のジェンダー意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
2-1「爲阿源」にみるジェンダー意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 244
2-2「讀南汎録」にみるジェンダー意識・・・・・・・・・・・・・・・・・ 246
2-3 貝原東軒への眼差し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・246
2-4『漫録』にみる政治への関心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 248
2-5 上書にみる経済への関心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250

三節　采蘋の自我意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・251
3-1 采蘋の恋愛にみる自我意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
3-2 馬関・広島での恋愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
3-3 駿府の石上氏との恋愛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 257

四節　漢詩人としての原采蘋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・259
4-1 男性文人の評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 260
4-2 江馬細香・梁川紅蘭・原采蘋の漢詩人としての意識の違い・・・・ 265
4-3 近代への架け橋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267

原資料・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・272
謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・278

序章

１節　本研究の目的

江戸時代には幕藩体制強化のために儒教が取り入れられ、特に武家の女性は支配階級維持のために、子孫繁栄のための道具として扱われ、儒教的な徳目を説いた「女訓書」などによって教化されていた。その実態は「女子の学は、字を写し、歌を詠じ、裁縫し、織紝し、三線を弾じ、踊を習ひ、箏を弄し、香を聞き、茶を瀹し、花を插み、諸礼を学ぶ等の類なり。....彼漢籍を読み、詩文を作るが如きは、極めて稀なる事にて、其の父母たる者、多く之を戒めたり。謂ふ其心高挙して、夫を凌ぎ、人に驕りて、其身に利あらずと。」[1]というものであった。さらに寛政の改革を推進した、老中松平定信は「修身録」の中で「女はすべて文盲なるをよしとす、女の才あるは大に害をなす、決して学問などはいらぬものにて、仮名本よむ程ならば、それにて事たるべし。女は和順なることをよしとす。」[2]という見解を示していたが妻の峰子のために書いた教訓書では「始もしるしゝ如く、女は学問とても、男とは大にたがひ候、たゞ四書、小学など、宜しくわきまへ候はゞ、姫かゞみ、仮名列女伝の如きふみ、よりより心をとめて見るべく候、かつ古き記録なども、見やうにより、行にたよりあり候故、しかるべく候」[3]と少なくとも四書、小学などは読む必要性を述べている。このように建前では「学問などはいらぬもの」としていながら各家庭での教育は父親や夫の考え方に柔軟に対応していたと考えられる。また武家でも階級によって女性に求められる教養は異なっていたが、おおむね女性の教養は和歌・和文・書・画などが主流であり、漢詩・漢文は男性の教養とされていた。

しかし江戸時代も後期になるとこの状況は次第に変化し、漢詩は武士の教養や学問の一部となり、詩文を専門とする職業詩人も誕生するようになった。その背景には商品経済の発展とともに豪商や名主階級の間でも需要が高まっていたこと、また中国から性霊説を説く袁枚などの新しい書物が長崎に舶載され、江戸の詩壇に影響を及ぼしたことなどがある。そのため詩は商人・町人・女子にも作りやすい作詩方法が提唱され、作詩人口は増大していった。こうした傾向は、武家女性の中にも男子と肩を並べて詩文を学ぶ風潮を生みだしていった。この結果、江戸後期には江馬細香(1787 - 1861)、原采蘋(1798 - 1859)、亀井少琴(1798 - 1857)、梁川紅蘭(1804 - 1879)に代表される女性漢詩人が誕生することとなった。とはいってもこうした女性たちは自分の作品を出版することには消極的であった。作詩行為は公に認められつつも、出版に関しては未だ儒教意識が女性たちを束縛していたと考えられる。

本研究で女性漢詩人原采蘋を研究テーマに選んだ理由は、江戸時代の女子教育が和歌・和文を中心としたものであった中で、儒者や医者の娘の中には、詩書画の教養を主体とする中国文化の教育を受けて育った武家の女性たちの存在があることを知り、なぜ彼女たちがそのような教育を受けたのか、またどのような時代背景があったのかに興味を持ったこ

---

[1] 佐藤誠実著、仲清他校訂『日本教育史２』平凡社、1973 年、144～145 頁。
[2] 松平定信「修身録」桜井役『女子教育史』日本図書センター、1981 年、5 頁。
[3] 松平定信「難波江」黒川真道編『日本教育文庫　女訓編』日本図書センター、1937 年、728 頁。

とに始まる。調べてみると江戸時代に漢詩を作った女性は意外に多く、人名録や地方誌等に見られるだけでも百名を超えている。中央詩壇で活躍した著名な詩人だけでなく、地方で活躍した多くの女性漢詩人の存在があった。にもかかわらず、和歌・和文の研究はかなり進展しているが漢詩文に関しては女性の領域では未開拓であるのが現状である。その中で上記に挙げた四人の女性については少しずつ研究が進んでいるように思われる。江馬細香・梁川紅蘭についてはすでに研究書や作品集も出版されており、知名度もある程度定着している。しかし、原采蘋、亀井少琴については未だ漢詩集の出版も見られないことから知名度が低く、その業績についてもあまり知られていない。この差は何に由来するかと言えば、おそらく史料の所蔵・保管状態などが大きく関係していると思われる。江馬細香の場合、生家に残る膨大な史料が子孫の手で管理されており、研究会も発足して史料の解読が進められた結果、翻刻が進み研究の条件が整ってきたという利点ともう一つ、頼山陽の弟子という声名も働いて、その名前は海外の研究者の間でも知られるようになった。また梁川紅蘭の場合は夫梁川星巌が著名な漢詩人であることから夫の研究とともに妻の紅蘭の研究・出版も進められた。一方原采蘋の場合、生涯を旅に明け暮れ、各地を転々としたために、その遺作は方々に点在した可能性がある。また多くの史料は今でも個人宅に所蔵されていることもあって、研究を困難にしている状況は否めない。さらに二十年間という長期に亘った江戸在住時代の作品が殆ど残されていないことも致命的であるとされている。同じ九州出身の亀井少琴も優れた文人として詩書画の業績を残しているが、多くの史料は今だ遺族の所蔵となり、一部の研究者による研究に留まっているのが現状である。今後亀井少琴の研究も進展されることを望むものである。

本研究で論じる原采蘋はこうした困難さを乗り越えて研究を進める価値を十分に備えている女性漢詩人である。これまでの原采蘋の研究は、地元秋月の原采蘋顕彰会によって、生誕百年を記念して出された伝記や詩集は昭和初期の研究が中心であり、近年の研究としては、九州出身の女性文学研究家前田淑氏によって研究が進められたが、一部の日記の紹介に留まっており、いまだ全詩集の刊行やまとまった研究書は出されていない。漢詩人として卓越した才能を持った女性でありながら、様々な理由から正当な評価を受けてこなかった原采蘋の漢詩人としての再評価を試み、執筆を予定している研究書へと発展できればと考えている。

サブタイトルを「孝と自我の狭間で」とした理由は、采蘋の生涯の中で「孝」と「自我」の問題は極めて重要な位置を占めると考えるからである。自立した漢詩人としての人生の選択は、采蘋の場合「孝」によるものであり、「自我」による選択ではなかったと私は考える。自立した女性漢詩人として時代を先駆けたとの評価を受けてはいるが、果たして彼女の内面では何を望み、何を後悔していたのだろうか。江戸時代の女性は表面的には自我を表に出さなかったが、内面での葛藤があったはずである。采蘋も詩や文章の中では本音を語っている。采蘋の「孝」と「自我」の問題はこれまであまり問題とされてこなかった。孝のために抑圧された采蘋の自我を詩集や日記の中から読み取り、これまで定着してきた

「男装の女性詩人」という勇ましい采蘋像の後ろに見え隠れする女性らしい一面や、政治や経済に対する采蘋の経世家としての思想にも光を当てて考察して行きたい。

２節　先行研究について

原采蘋についての先行研究は、采蘋没後五十年に、鹿児島藩士出身で明治・昭和前期の郷土史家春山育次郎（1866－1930）が読売新聞に、大正二年十月十六日より翌三年三月四日まで七十三回にわたって連載し、後に出版された『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』（原采蘋先生顕彰会編、1958 年）は原采蘋の伝記としては唯一の詳細なものである。春山は元秋月藩士であった藤野房次郎の紹介で、読売新聞に誰賞談客のペンネームで連載を始めた。東大教授であった井上哲次郎は采蘋の弟子に師事した関係から多くの資料を提供し、法学博士倉富勇三郎や外交官の末松謙澄も采蘋とゆかりのあることから、この連載に深い関心を寄せ、それぞれ数回、或は数十回にわたり寄稿したということである。このように大正初期には原采蘋と何らかの関係を有していたか或は資料を保存していた知識者が幸いにも存命中であり、伝記執筆に多大な協力を惜しまなかった様子が知られる。しかし春山の伝記はパトロンであった藤野房次郎の死去に伴い、中断の憂き目をみることとなった。その後、原采蘋百年忌に当たる昭和三十三年に郷土篤志家により、春山の伝記に加筆され出版されることとなった。このようないきさつから生まれた采蘋伝には、郷土秋月の生んだ女性漢詩人に対する地元藩士の遺族たちの熱い思いが込められている。残念ながらこの伝記の欠点は、研究書として見る場合、資料の出典が明らかにされていないために、事実の裏付けの確認が困難なことと、内容的には采蘋先生顕彰の意味が強く主観的に書かれている傾向があること等があげられる。それにしても、現在ではこの伝記に勝るものは出版されていない。

秋月藩士出身で春山の跡を継いで原采蘋の研究を続けた山田新一郎の『原古処・白圭・采蘋小伝及詩鈔』（秋月公民館発行、1951 年）は原氏三儒の小伝記と詩集であり、それぞれの人となりと作品が分かるようにまとめられている。采蘋の小伝については、春山の伝記をコンパクトにまとめたもので、内容はほとんど同じである。上記の二冊の伝記の特徴は現存するすべての資料を入念に調査して書かれていることである。参考資料をいちいち明記していないため、どこからこの情報を得たのだろうと思うことがたびたびあるが、この伝記が書かれた当時は多くの参考資料が個人宅に所蔵され、あるいは原氏にまつわる逸話などを知る古老たちも存命であったと思われる。現在ではこれ等の資料の一部が財団法人秋月郷土館に寄贈あるいは委託されており、その他の貴重な史料は各地の大学の図書館に所蔵されているものもある。これとは別に、個人蔵の資料もかなりの数に上ると推測される。個人蔵の資料については、なかなか自由に閲覧できないことなどから研究に生かすことが難しい。こうした状況が原采蘋の研究を遅らせている一つの要因ではないかと思われる。

これまで采蘋研究にとって致命的なのは、資料の散逸であると言われてきた。これは原

家の直系の子孫が絶えたことと、采蘋の生涯が遊歴の一生であったことから生じた問題である。秋月郷土館はこれまで財団法人であったが、今年度から朝倉市が管理することとなり、秋月藩関係の資料や原家の史料の整備が完了し、史料の閲覧も容易になれば、采蘋研究にも進展が見られることが期待される。

伝記の他に注目されるのは、前田淑の二つの論文である。福岡地方出身の女性を中心に、作品と人物紹介をライフワークにしている前田氏は、原采蘋の「東遊漫草」の紹介[4]と、帰郷後の様子を「原采蘋の晩年」[5]と題して発表している。これらの論文は、女性史の分野では江馬細香の研究と並んで海外の女性史研究者にも注目されている。前田氏の研究は原采蘋の存在を世に知らせることに貢献したと言える。その他の研究としては、女性史の立場から「女性の自立」をテーマに論じた関氏と志村氏の論文がある。関氏の論文は幕末に輩出した女性漢詩人群の現象を取り上げ、その理由を時代背景から読み取り、また女性史の立場から原采蘋の生き方を分析している。幕末に活躍した女性漢詩人の在り方を客観的に分析した興味深い論文である[6]。志村氏の論文は江戸末期の女性が漢詩人として自立することの困難さを論じているが、この論文で興味深いのは、采蘋の人生の目標を「揚名・折桂」と提示していることである[7]。このテーマは重要なテーマであり、それぞれの論文においても意見が分かれていると思われるので、今後の課題である。黒川氏の論文は采蘋の「女性意識」をテーマに論じたものである[8]。総体的に見ると、女性史の観点から江戸末期において男性の職業であった漢詩人として、独身で生計を立てた采蘋の女性意識を問う論文が目立つ。

長瀬氏は原采蘋の論文で海外の大学から博士の学位を習得した最初の研究者であると思われる。幕末に活躍した三人の女性漢詩人を取り上げ、その中の一人として原采蘋を論じている[9]。長瀬氏の研究は、采蘋の江戸における考察を一歩進めたことで貢献したと言える。

江戸の二十年間の資料不足の中で、采蘋の自筆日記「有煒楼日記」の翻刻を試みたのが片倉比佐子氏の「江戸の女性文芸家たち」である[10]。片倉氏は文化・文政期から幕末に到るまでの、江戸で活躍した女性文芸家たちを「人名録」から拾い出し紹介し、その中で「有煒楼日記」の紹介も合わせて行うことで、采蘋が暮らした江戸の文化的背景を明らかにし、江戸での二十年間の生活の一端を垣間見せてくれた。しかし、翻刻も再考の余地があり、

---

[4] 前田淑「閨秀詩人原采蘋と『東遊漫草』」『江戸時代女流文芸史　地方を中心に』笠間書店、1999 年。

[5] 前田淑「原采蘋の晩年」『福岡地方史談話会会報』第 8 号、1969 年。

[6] 関民子「幕末漢詩壇と女性詩人の自立への動向」『江戸後期の女性たち』亜紀書房、1980 年。

[7] 志村緑「江戸末期知識人女性における自立と葛藤―女流漢詩人原采蘋の場合」『芸林』第 40 巻第 2 号、1991 年。

[8] 黒川桃子「原采蘋の女性意識」『江戸風雅』第 3 号、2010 年 11 月。

[9] 長瀬真理「WOMAN　WRITERS OF CHINESE POETRY IN LATE-EDO PRRIOD JAPAN」　THE UNIVERSITY OF BRITISH COLUMBIA　(博士論文)、2007 年。

[10] 片倉比佐子「江戸の女性文芸家たち」『江戸期おんな考』第六号、桂文庫、1995 年 9 月。

内容の検討も今後の仕事である。

この他詩集に原采蘋・江馬細香・梁川紅蘭の詩を取り上げた福島氏の『江戸漢詩選　第三巻「女流」』[11]がある。これは江戸時代を代表する三人の女性の詩と略歴を紹介したもので、それぞれの詩人を知るための手引書となっている。吉木幸子氏の『幕末閨秀　原采蘋の生涯と詩』は采蘋詩の中から百六十首を選んで現代詩に訳したもので、漢詩の苦手な人にも意味を理解することが出来る便利な書である。以上代表的なものを提示したが、このほかにも、地元九州の郷土史家らが原古処・采蘋に関する地道な研究を続けており、地元の研究者ならではの研究を発表している。今後こうした研究も含めて、新たな采蘋研究の進展を期待するものである。

３節　新研究の位置づけ

先行研究で見て来たように、これまでの采蘋研究は大きく二種類に分けられる。その一つは大正時代から明治の初めにかけて、地元秋月の旧藩士などによって、郷土の偉大な人物の顕彰の一環として原采蘋の研究は進められた。その後おそらく漢詩ブームの終焉とともに原采蘋やその周辺の人々も忘れられていたと思われるが、1980 年ごろから盛んになった女性史研究によって再び原采蘋の名が見られるようになった。これまでの采蘋研究の多くは女性史の視点で論じられてきたのである。つまり、江戸時代は儒教による女性の地位の低下に伴い、平安女流文学と明治の女流文学隆盛期の間に挟まれた女性文学の不毛時代とされてきた。その文学史論に反論を唱え、女性史研究家はこぞって江戸時代の女性文学を掘り起こし、世に広めてきた。その成果は日本国内だけでなく、海外の研究者にも波及し、江戸女性文学は少しずつその評価を高めつつある。こうした流れの中で原采蘋も論じられてきた。女性史研究によって原采蘋の名は日本国内だけでなく、海外の研究者にも知られるようになった。この理由は江戸時代の儒教政策下において自己を主張した女性として、近代への橋渡しをした女性として注目されたことによると考えられる。しかしこれらの女性史研究者は江戸時代の「閨秀詩人」、「女流詩人」という枠の中で江馬細香・梁川紅蘭などの他の女性詩人との比較検討から漢詩人としての采蘋を論じている場合がほとんどである。

しかしここで問題となるのは、采蘋の生き方がはたして江馬細香・梁川紅蘭と並列して論じられるかということである。江戸時代の女性として、時代に先行した生き方は、仙台藩医の娘只野真葛(1763-1825)と同じようにセンセーショナルではあった。が、果たして采蘋本人の意識はどうであったのか。これまでの采蘋研究の中で「采蘋の本音」はいまだ明確にされてこなかった。主観的な価値観によって批評され、定義されてきた采蘋の伝記やそこから見出される人生観からは、采蘋の本当の姿は伝わりにくい。原采蘋の詩集、日記、文章を読む限り「閨秀詩人」、「女流詩人」という枠を超えた一人の漢詩人としての人生を生きた采蘋像が浮かび上がってくる。

---

[11] 福島理子『江戸漢詩選　第三巻「女流」』岩波書店、1995 年。

幸い采蘋は三冊の遊歴の記録を残している。これらの記録は漢詩によって旅を記録したもので、それぞれの日記には約百首の漢詩が書かれている。「東遊日記」「西遊日歴」は翻刻も未だ発表されておらず、「西遊日歴」は三百首の詩が挿入されている長編の日記である。秋月郷土館にはこれらの日記から抜粋した詩集が写本として残されているが、二つの日記は大学の図書館に所蔵されている関係からか、日記全体の紹介は未だされていない。

本研究では三冊の遊歴の記録の翻刻を試み、日々の記録から采蘋の本音、心情などを読みとり、これまでの研究では見落されている原采蘋という女性の真髄に迫りたいと思う。それぞれの日記に挿入された詩には、これまでの伝記や研究には封印されたと思われる一人の女性としての素直な感情が綴られている。外見のイメージが先行し、采蘋の内面に光を与えることには手薄であった先行研究に、これらの日記の紹介は貢献するはずである。

新研究のもう一つの狙いは江戸の二十年間の足跡をこれまで以上に明らかにすることである。

４節　新研究における考察視点

上記の問題を解決するには、残された日記類の再検討が必要である。遊歴の漢詩人として各地を漫遊した采蘋には「東遊日記」「有煒楼日記」「東遊漫草」「西遊日歴」「漫遊日歴」の五冊の日記兼漢詩集が残されている。上記の日記中自筆本が残るのは「有煒楼日記」と「東遊漫草」の二冊で、他の三冊は写本のみが伝わっている。「有煒楼日記」を除いて上記の日記の翻刻はいまだ発表されていない。おそらくその所在さえ一部の研究者に知られているのみであると思われる。

新研究では五冊の日記の解読を進め、采蘋の辿った道を追体験し、詩に書かれた采蘋の心情を正確に読みとる作業を通して、これまで見落とされてきた「采蘋の本音」に近づくことが出来ると確信する。さらに重要なことは采蘋の残した文章の内容である。采蘋の遺作の中で文章はほんのわずかではあるが、采蘋の思想を知る上で重要な史料である。これまでも采蘋の文章は詩集の後部に附録されていたが、漢詩人の文章としてあまり多くは取り上げられなかった。本研究では采蘋の文章もなるべく紹介することによって詩の中だけでは表現しきれなかった「采蘋の本音」を紹介出来ると考える。

江戸の二十年間については少しずつ研究が進んでいるように見受けられるが、江戸の日記や秘蔵の采蘋の手紙、江戸在住に書いた文章類なども参考にしながら、現存の史料を丹念に紐解いていくことで、さらに進んだ研究が可能であると考える。采蘋が交流した漢詩人・儒者などは殆ど日記を残している。これらの日記と采蘋の僅かな日記・詩などから江戸の日常をつなぎ合わせることは可能である。この時期は、漢詩人として生きた采蘋の人生の中でも最も注目されるべき時期であるため、その実態の解明は大切であると考える。

ジェンダー意識に関する視点は、女性史研究の中ですでに論じられてきているが、新研究では采蘋のジェンダー意識を遺文の中から拾い出し、検討を加える。「爲阿源」、「貝原東軒手書程伯子詩跋」などの遺文に采蘋のジェンダー意識が読みとれると考えるからである。

父の遺言を全うするために女性性との葛藤を生涯に亘って続けなければならなかった采蘋にとってのジェンダー意識は、複雑で難解である。それは采蘋自身の中で矛盾と葛藤があったからであると考えられる。本稿では詩や遺文の中に散見する言葉から采蘋のジェンダー意識を正しく理解することに努める。

采蘋の詩風については福島氏がその著書で言及されている[12]。これまでの采蘋研究の多くが女性史の視点で論じられてきたことによって采蘋詩の専門的な分析はこれからの研究を待たねばならない。福島氏が指摘するように、采蘋の詩には李白の影響が見られるという。父親を師として漢詩の修業をした采蘋は、李白を尊敬していた父の影響を受けたことによるものである。古文辞学を学んだ原古処は、生涯新詩[13]を否定して古体の詩を作り続けた。三十歳まで父親に学んだ采蘋の基礎は古文辞学であったと思われ、江戸での名声も「古学の儒者」として評価されている。しかし、父の死後は菅茶山、頼杏坪、頼山陽、梁川星巌等、江湖詩社が推奨した中国明清時代の新詩を継承する詩人たちに指導を求めている。漢詩人としての采蘋を論じる場合、詩の分析は今後の研究の大きな課題である。

上記の視点に加え、同時代に活躍した女性漢詩人江馬細香や梁川紅蘭などとの比較検討を試みることで原采蘋の独自性を浮き彫りに出来ると考える。

５節　各章の説明

序章では本研究の目的、先行研究について、新研究の位置づけ、新研究の視点について述べる。

第Ⅰ章では江戸後期の江戸漢詩壇の変遷について概観し、江戸後期に女性漢詩人が輩出した要因について様々な角度から考察を加える。采蘋が漢詩人としての教育を受けた九州における詩壇の変遷の状況と、その後江戸で二十年間漢詩人として活躍した舞台、江戸漢詩壇の状況をふまえることで、采蘋が漢詩人として活躍した時代背景についても考察する。また江戸後期に女性漢詩人が輩出した要因の一つに長崎からもたらされた清国の漢詩人袁枚の漢詩集がある。二節では、江戸の江湖詩社の人々に多大な影響を及ぼし、頼山陽、菊池五山、山本北山などが積極的に女性の漢詩制作を後押しした要因を、袁枚の『随園詩話』や『随園女弟子詩選』に見られる女弟子の実態に迫ることによって分析する。またそうして輩出された江戸時代の女性漢詩人と袁枚の女弟子との比較検討も試みる。

第Ⅱ章では、采蘋の少女時代、十歳前後から十六歳ごろの婚約破棄の頃までを見て行く。少女時代は亀井昭陽の娘少琴との交流、父原古処の江戸在勤中の手紙、娘の采蘋に対する願望など、少女時代の采蘋像を浮き彫りにする。その後、順風満帆であった采蘋の家庭を突然襲った古処の失脚と采蘋の婚約の不成立によって采蘋の運命を大きく変えた出来ごとについて見て行く。

第Ⅲ章では、父原古処が藩の重職を解雇された後、漢詩人として生きることを宣言し、

---

[12] 福島理子前掲書

[13] 古文辞派の疑古主義の詩に対して、清新精霊派が主張した情を主体とする詩。

家族を伴って遊歴の旅を続けるが、采蘋も十八歳の時からこの遊歴に同行し、漢詩人となるべき修業を続ける。その集大成ともいうべき長崎の遊歴は采蘋に大きな自信と勇気を与える結果となった。残念ながらこの時期の采蘋の記録は残っていないため、長崎での遊歴の様子は父原古処の手紙をもとに当地の文化的状況と合わせて見て行きたい。

第Ⅳ章では、父との修業の旅を終えた後、いよいよ専門詩人として独立するためにまず京都に向けて出発した。最終的には江戸を目指していたが、一年半後、父の病気を聞きつけて帰郷する。看病の甲斐もなく父は死去し、京都への出発に当たり父が采蘋に贈った餞別の詩句「不許無名入故城」は、この時遺言となって采蘋の人生を左右することとなる。人生の転機となった父の死によってその後の采蘋の人生は、父の遺命を遂行するための人生と化した。この間のことは采蘋の詩を通して考察して行きたい。二節では父の遺命を帯びて江戸に向けて再出発するが、幸いこの時の旅の記録「東遊日記」が残されているので、日記を中心に考察を進める。

第Ⅴ章では、江戸における二十年間を考察する。江戸に関する采蘋の残した史料には限りがあることから、采蘋の交流した人々の日記から采蘋との交流の記録を拾い出し、これまでの研究にさらなる進展が見られるように考察を進めたいと考える。幸い、采蘋の文章中には江戸在住中に書かれたものが少なくない。これらの文章は采蘋の思想を知る上で貴重なものであり、また漢詩人としても円熟期の采蘋の考えを知るまたとない史料である。

第Ⅵ章では、江戸在住中、二回の房総遊歴を行った采蘋は、二回目の遊歴の記録「東遊漫草」を残している。この日記には百首近い漢詩が書かれており、この詩によって房総遊歴の旅の様子を詳細に知ることが出来る。しかし、采蘋がどのようにして一年以上の遊歴の宿泊場所を確保したのか。このあたりの采蘋の人脈と江戸の漢詩壇との関係を考察し、漢詩人としての采蘋の名声がどの程度房総地域に広まっていたのかについても言及して行きたい。またこの日記は采蘋の目を通して幕末の房総の様子や、文人たちとの交流によって幕末房総地域の文化的状況を伝える貴重な史料となっている。

第Ⅶ章では、志半ばで帰郷しなければならなかった采蘋の帰郷後の生活を追う。二十年のブランクを「故郷　一変して他郷に似る」と表現した采蘋であったが、帰ってみれば村上仏山あり、戸原卯橘あり、采蘋を慕う若者は九州各地から教えを請うものが集まった。しかし、采蘋の帰郷の目的はあくまでも母への孝養であり、たとえ優秀な子弟が集まったとしてもその子供たちのために人生を費やすわけにはいかなかった。嘉永五年(1852)、母を看取った後、三年間喪に服し、次の孝の実行に移る。安政三年から五年まで肥薩遊歴に出かけた采蘋は「西遊日歴」という三百首の詩で綴る日記を残した。采蘋の遊歴の記録で最も長篇であり、漢詩人としても集大成の感がある。三百首の詩を紹介することはしないが、二年強に亘る旅の様子を、もう一つの日記「漫遊日歴」と合わせて検証して行きたい。

第Ⅷ章（終章）では、結論として、采蘋の孝、ジェンダー、自我の意識を総体的にまとめ、新たな原采蘋像を構築するとともに、漢詩人としての采蘋のアイデンティティーの確認をも行うこととする。

第Ⅰ章　江戸詩風の変遷と地方詩壇の状況

一節　江戸詩壇の変遷

1-1 古文辞派の終焉

周知のように、十八世紀半ばに一世を風靡した荻生徂徠の古文辞学は徂徠学ともいい、明の李攀龍・王世貞による擬古主義の文学運動に啓示を受けて確立されたもので、古文辞格調派の詩風は荻生徂徠の名声とともに全国に流行した。明の古文辞派の主張は「文は必ず秦漢、詩は必ず漢魏盛唐」というものであり、詩作の方法は、手本となる古典の詩の模倣と格調を重んじるものであった。しかし、十八世紀の半ばを過ぎるころ（天明期ごろ）から、人々は現実と遊離した模倣だけの詩作方法に次第に厭気がさし、特に京都、大阪方面の、はじめは古文辞学を学んでいた儒者たち、例えば梁田蛻巌、江村北海・清田儋叟兄弟、六如なども擬古的な詩風に批判的な態度を表明していくようになった。上方でのこうした動きに呼応したかのように、幕府の御家人であった山本北山（1752-1812）は天明三年（1783）に『作詩志彀』を出版し、その中で「人ノ詩ヲ剽襲シテ、功ナランヨリハ、吾詩ヲ吐出シテ、拙キガ優レルト心得ベシ」[14]と述べて、物まねではない、個々人の心に湧きでたものを詩にすることの大切さを主張した。しかし実は、北山のこの主張には拠り所があった。中国では既に明の袁中郎（1573-1620）によって李攀龍・王世貞ら明七子の古文辞派に対する批判から性霊説が打ち立てられていた。北山は銭謙益の『列朝詩集』の中の袁中郎小伝に書かれた袁中郎の詩論をそのまま『作詩志彀』の中に引用して、「中郎ガ論一タビ出テ、王季の雲霧忽チヒラケ、天下ノ文人才子、始メテ心霊ヲ疎瀹シ、慧性ヲ搜剔シテ、模擬塗沢ノ病ヲ蕩滌スルコトヲ知リ、竟ニ海内靡然トシテ、草ノ如ク偃シ、明朝ノ詩又大ヒニ一変ス。実ニ剽竊ノ鈍賊ヲ斥モノ、中郎ヲ以テ嚆矢トス。其功亦偉ナラズヤ」[15]と述べている。袁中郎のあと、中国では清の中期に活躍した袁枚（1716-1797）がやはり古文辞派の詩人を排斥し、情を主体とした詩作を主張して清新性霊派を打ち立てていた。袁枚は『随園詩話』正編十六巻を乾隆五十四年（1791）に刊行したが、同じ年、寛政三年（1791）には早くも長崎に到着している[16]。袁枚の清新性霊説に最も同調し、この説を実践したのが昌平黌の学頭まで努めた市河寛斎（1749-1820）によって後に結社された「江湖詩社」の詩人たちであった。

1-2 江湖詩社の清新性霊説の受容

袁中郎の性霊説は山本北山の弟子であった大窪詩仏や、北山とも面識のあった柏木如亭によって江湖詩社の同人に広まっていった。詩論としての性霊説を袁中郎から学んだ彼等

---

[14] 『作詩志彀』「諸家本集」中村幸彦校注『近世文學論』（日本古典文學体系 94）岩波書店、1966 年、297 頁。

[15] 『作詩志彀』「詩變總論」中村幸彦前掲書、327 頁。

[16] 大庭脩「商舶載来書目」『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1981 年 3 月。

は、袁枚によってその実践方法を学んだのである。それでは江湖詩社の同人達はどのような経緯で袁枚の清新性霊説を享受していったのか。上記にもあるように『随園詩話』の正編十六巻は寛政三年には唐船によって長崎に舶載されていた。文化元年（1804）には柏木如亭と神谷東渓が共同で『随園詩話』の和刻本六冊を刊行した。寛政三年に長崎にもたらされて以来人々に読まれていた状況が分かる。この十年後の文化十年、市河寛斎は長崎奉行に就任した牧野澹斎に随行して長崎に渡った。この時に袁枚の『小倉山房詩鈔』三十一巻を手に入れて、三年後の文化十三年に『随園詩鈔』として刊行した。弟子の大窪詩仏は序文に次のように書いている。「清の袁簡斎先生、随園詩話を作り、専ら清新の詩を唱へて痛く七子の風を斥く。年を推して考ふるに、その時正に相当る。これ事の謀らずして相類する者にあらずや。余、随園詩話を読みて心その論を喜び、その詩を愛す。生平、全集を見ざるを以て恨と為す。」[17]と、時を同じくして、同じ考えの詩人がいたことに喜びと感動を覚えた様子を記している。

『随園詩話』は日本の寛政三年に当たる年に刊行されたが、寛政初期の江湖詩社同人の活動を見てみると、天明六年の寛斎の『北里歌』出版に続いて四才子が次々と竹枝詞集を刊行していた時期である。寛斎の『北里歌』出版の意義を門人の大窪詩仏は寛政十一年刊の『詩聖堂詩話』で次のように述べている。「明和の末、菱園の余焔未だ尽きず。詩人動もすれば率するに格調を以てす。寛斎先生北里歌三十首を作り、以て性霊の詩、言ふ可からざる者莫きを見はす。」と。寛斎の勇気ある行動によって性霊の詩の具体例が示されたことで、門人たちは後に続いたのである。

寛斎は天明七年に昌平黌を辞職したものの昌平黌には出講していた。しかし折からの寛政異学の禁は朱子学以外の書物を読むことを禁じたため、「学中に異学の書を読むを以て月俸の半を削らる」という処分を受け、結果的に昌平黌から身を引くこととなった。朱子学以外の学派を奉じる儒者は、この異学の禁によって公的な職に就くことが極めて難しかったと思われる。が詩に熱中していた寛斎にとってはむしろこれが好機となったと捉える事が出来る。なぜならば、昌平黌から完全に身を引いた後は江湖詩社の活動に全力を尽くし、「騒人才を負ふ者、従游寔に繁くして徒有り。当今の世、善詩を号称する者、多く僕の社中に出ず」[18]と言うほどになっていった。実際寛斎の詩の指導法は「その人を教ゆるも亦た墨縄を必とせず。各々をしてその好む所に趨らしめ、人も亦た此に由りて自ら竭くすことを得たり」[19]と言われる如く、優秀な人材が多く育ったのである。

それでは江湖詩社にはどのような人たちが集まってきたのだろうか。まず江湖詩社の四才子と言われる人たちに、柏木如亭（1763-1819）、小島梅外（1772-1841）、大窪詩仏（1767-1837）、菊池五山（1769-1849）がいる。この中で柏木如亭は幕府小普請方の大工棟梁であり、小島梅外は浅草蔵前の札差小島洪卿の息子で、昌平黌当時からの門人であった。

---

[17] 揖斐高「五山堂詩話論」『江戸詩歌論』汲古書院、1998 年 2 月、256 頁。
[18] 揖斐高「江湖詩社の出発」『国文学　解釈と鑑賞』第 73 号、至文堂、2008 年、105 頁。
[19] 揖斐高前掲論文、105 頁。

大窪詩仏は江戸の町医者の息子で、菊池五山は高松藩儒の息子であり、二人は寛斎が昌平黌を辞任した後に入門している。ここで注目されることは、江湖詩社の門人中武士階級出身者は菊池五山のみであり他は町人・僧侶などであったことである。ここには、詩が既に経学からの分離を果たし、俳諧等と並んで独立した嗜みとして人々の心をとらえていた状況が窺われる。

1-3 江湖詩社の活躍

江湖詩社は市河寛斎がまだ昌平黌の啓事役を務めていた時に始めた詩社で、天明七年（1787）に昌平黌を辞職した後に本格的にその活動を開始している[20]。昌平黌当時の寛斎は荻生徂徠門下から古文辞派の詩文を学んでいたようであるが、既に記したように、天明三年には北山の『作詩志彀』が出版され、詩壇の空気は変化しつつあった。当初の江湖詩社のメンバーは昌平黌の学生であった葛西因是と平井黌外以外は町人や神官の息子、僧侶などで、必ずしも儒者になる目的で詩を学びに来たわけではなかった。昌平黌の中にあったとはいえ、江湖詩社は純粋に詩を学ぶ人々が集まる私的なサークルであったようだ。こうした状況は、詩を愛好する人々が儒者だけでなく民間にも拡大していたことを示している。寛斎は天明六年に『寛斎摘草』という詩集を出版したが、同じ年に『北里歌』という吉原の遊郭を舞台にした竹枝詞集を出版したことは、昌平黌の役人としては勇気のいる行為であった。勿論「玄味居士」という匿名を使ったのであるが、それにしても身の危険は危惧されたはずである。出版した意図を寛斎は後年以下のように書いている。「余、昔時、友人と詩を論じて云はく、詩作るべからざる者無し。ただその格を上下するに在るのみと。筆を走らせて此を作る。」[21]昌平黌の役人や学生にとって吉原で遊ぶことは日常的なことであったとすれば、その光景を写実的に詩に移す行為は、北山が『作詩志彀』で唱えたことを実践する行為であったと言える。性霊説の実践者である江湖詩社の同人達は、この後、寛斎の『北里歌』に続いて寛政年間に竹枝詞集を次々と出版するのである。

1-4 菊池五山の『五山堂詩話』出版

菊池五山[22]は名を桐孫、字を無絃、通称は左太夫と言い、五山は号である。高松藩儒の家に生まれた五山は京都で朱子学者の柴野栗山の門人となる。柴野栗山が昌平黌の儒官として招かれた後、五山も江戸に出て、江湖詩社に入門したのである。寛政九年に『深川竹枝』を刊行したあと、二十九歳の時京阪地方に放浪し、「揚州小杜」という印を携え、晩唐の詩人杜牧になぞらえた人生を送っていたという。しかし、文化二年には放浪の詩人としての生活に終止符を打ち、江戸に舞い戻り新しい生活をスタートさせた。それが『五山堂詩話』の刊行である。『五山堂詩話』は袁枚の『随園詩話』の形式をそのまま取り入れたもので、

[20] 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』角川書店、2001 年 12 月、104 頁。
[21] 揖斐高前掲論文、103 頁。
[22] 高松藩儒の家に生まれた五山の末裔には大正の人気作家菊池寛がいる。

毎年あるいは数年を経て刊行し、文化四年から天保三年まで、補遺を合わせて十五巻を刊行した[23]。

それでは『随園詩話』の江戸詩壇での受容はいつ頃からであろうか。おそらく寛政三年以降、長崎奉行等を通してすぐに江戸にも伝わっていたと考えられる。文化元年には柏木如亭が和刻本を刊行していることや、五山は師の寛斎と一緒に『随園詩話』を読んだ経験があり、これらの経験が再出発を心に決めていた五山に刺激を与えたものと思われる。それを裏付ける言葉が、師の寛斎が文化十三年に出版した『随園詩鈔』の五山の序に見える。「偶記曩歳余與先生対讀詩話先生因曰設令無絃値江寧一見即為入幕賓矣余雖不肯当亦竊感先生知己之言」（偶々記す。曩歳、余先生と詩話を対讀す。先生因て曰く、もし無絃（五山）をして江寧（袁枚）に値はしめば、一見して即ち入幕の賓と為さん。余、あへて当たらずと雖も、また竊かに先生の知己の言に感ず。）[24]これによれば、五山はかつて師の寛斎と『随園詩話』の対読を経験した時に、寛斎は五山の才能を高く評価したという。このような師の後押しもあって五山は『五山堂詩話』の刊行に踏み切ったのである。

五山が袁枚の『随園詩話』をまねて江戸で『五山堂話』を刊行したのは文化四年（1807）のことである。『五山堂詩話』は袁枚の『随園詩話』の形式そのままに、毎年、あるいは数年を経て刊行し、文化四年から天保三年まで、補遺を合わせて十五巻を刊行した。袁枚が『随園詩話』の各巻末に閨秀の詩を掲載したように、五山も十五名の女性詩人を紹介している。

二節　長崎来航清国人との交流

江戸時代は鎖国であったが長崎の出島が唯一外国との貿易をおこなう場所として開かれていたことは周知のことである。当時の貿易相手はオランダと中国の二国であったから、出島には蘭館と唐館のそれぞれの役所が置かれており、来航したオランダ人や中国人の貿易商人はその中に居留していた。貿易商人といっても唐人館に居留している清国人は詩書画に精通した人物が多かった。その中でも日本の文人たちとの交流で名が知られているのが朱舜水・陳元贇・江芸閣・江稼圃・陸品三である。江戸時代の儒者や漢詩人がこれらの人物と直接会って、詩の応酬をし、自分の詩の力を試したいと考えたのは当然のことであった。

当時、長崎の情報は江戸から派遣された長崎奉行に随行して長崎滞在をした幕臣や儒者が、帰路各地の儒者の家に滞在する際、長崎の現状を報告したり、また江戸に帰って江戸の文人に伝えられたと考えられる。また長崎警備に当たった佐賀藩や福岡藩、さらにそれを補佐した秋月藩は定期的に藩主に随行して藩士を長崎に出向かせている。長崎の出島における異国文化の華やかさ、珍しさは長崎を訪れた幕臣や儒者によって各地の文雅を愛する人々に伝えられ、彼らの胸に長崎への憧憬を抱かせることとなった。長崎に憧れ実際に

[23] 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』参照。
[24] 揖斐高「五山堂詩話論」『江戸詩歌論』、257 頁。

長崎を訪れた儒者・漢詩人は多かったと思われるが、その中で著名な人物を下表に示し、さらに彼らが実際に長崎で経験した清国人との交流を概観することによって清国人が江戸詩壇に与えた影響がどのようなものであったかを検討して行きたい。

文化五年（一回目）	草場珮川	佐賀藩儒者
文化七年（二回目）	草場珮川	
文化九年（三回目）	草場珮川	
文化十一年	市河寛斎	昌平黌学頭・漢詩人
文化十二年	頼杏坪	広島藩儒者・漢詩人
文政元年	頼山陽	漢詩人
文政六年～七年	原采蘋	秋月藩出身漢詩人
文政七年	梁川星巌・紅蘭夫妻	漢詩人
天保六年	広瀬旭荘	日田の漢詩人・淡窓の弟
天保十三年（一回目）	広瀬淡窓	日田咸宜園主宰の漢詩人・儒者
弘化二年　（二回目）	広瀬淡窓	

2-1 草場珮川と長崎

草場珮川（1787- 1867）は佐賀藩の儒者である。初め藩校弘道館で学び、古賀穀堂に師事した。その他長崎の画家、江越繡浦について画を学んだ。草場家はもともと多久氏の家臣であったため、文化六年には藩主の参勤に同行する多久氏に従って江戸に赴き、古賀穀堂の兄精里に入門した。その後昌平黌で学ぶ。朱子学者であった珮川は六十九歳の時に昌平黌教授に招かれたが、老齢のため辞退した。珮川二十五歳の時には古賀精里に随行して対馬に渡り、朝鮮通信使の対応を任される。珮川はこれの準備のため長崎に行って唐音の稽古をしたとされる。

珮川が藩命で長崎に赴いたのは文化五年、二十二歳の時、フェートン号事件の後に長崎に派遣された。佐賀藩と福岡藩が交代で長崎の警備に当たっていたためである。文化九年には佐賀藩主鍋島斉直の代理として長崎番見廻りの任についた多久茂澄に従って長崎に赴任している。この勤務の間、画を学んだ珮川は長崎の画家との交流を果たしている。珮川は勤勉な鍋島藩士としてその生涯を藩のためにささげた人で、彼の長崎行きは他の文人たちの長崎遊歴とは目的が異なっている。しかし、文化文政時代の長崎を肌で感じた経験を持つ珮川が、江戸や長崎での勤務地で交流した儒者や文人にはその情報を伝えたことであろう。また珮川は画家との交流や、漢詩人としても『珮川詩鈔』を残し、生涯に二万首を超す詩を作ったとされる[25]。珮川は江戸参勤の途中で神辺の菅茶山を訪ねており、ここでも文人間の情報を交換する機会を持っている。珮川にとって鍋島藩士であったことが画や詩

[25] 上野日出刀 前掲書、91 頁。

に直接親しむ好機を与えたとも言えよう。これは福岡藩士やそれを補助した秋月藩士にも共通して言えることではないだろうか。

2-2 市河寛斎と長崎

文化十一年（1814）六月、市河寛斎は長崎奉行に就任した牧野大和守成傑に随行して長崎に赴いた。この年の五月二十七日に江芸閣が長崎に初来航している。七月一日、寛斎は江芸閣・張秋琴と唐館にて会見することが出来た[26]。この時の筆談記録は寛斎の『瓊浦夢余録』[27]として残されているという[28]。それによれば、この日酒の席も設けられ、詩の唱和があったという。寛斎は、翌日にはお礼に伺うべきだが奉行所の規則が厳しいのでと、漢牘を寄せ、それと一緒に『五山堂詩話』七巻と息子米庵の書『試毫帖』及び近作の詩三首を添えて送り届けている。漢牘にはさらに「『五山堂詩話』には自分や大窪詩仏、柏木如亭、小島梅外、菊池五山らの「江湖四才子」の詩が収まり、我が江戸の詩風の由る所が見られるから、批評が欲しいこと、『試毫帖』には以前鄒静岩の跋をもらっているが、張・江のそれもほしい」[29]ことなどを記し、江戸詩壇での江湖詩社の活躍が本場中国の文人にどのように評価されるのか、寛斎や江湖詩社の詩人たちにとって最も関心のある事をすかさず質問しているところはさすが寛斎である。

七月十八日付で江芸閣から寛斎宛てに返書が届き、贈られた書籍に対する感想が下記の如く述べられている。「五山堂詩話、并ビニ米庵先生ノ試毫帖ヲ示サルヲ蒙ル。玩読数四、実ニ深ク驚慨ス。詩話ノ論、情理兼ネ優ル。法帖ノ妙、神怡ビ心曠カナリ。」

また江戸の留守宅に報告した七月二十七日付の家信にはこの時の状況が詳しく述べられている。「…江荷浦の弟江芸閣参り申候。此人売買等にも一向無心にて、只々詩書のみに楽み申候。…五山詩話為見候処、大に面白がり、日本は仙境と嗟嘆いたし候。五山へも御咄可被下候。試毫帖為見申候。跋も出来申候。先度の鄒静厳跋よりは甚簡古にて宜候間、帰宅を不待、此便に遣申候。書法は甚早速にて、兆新などとは大違に御座候。夫故、面白くもなく候也。しかし其人磊落にて、日々の様に旧作など書贈り、数十紙たまり申候。張秋琴も詩は上手にて候。是又唱和いたし申候。是は誠に船主にて、売買方には心配いたし候ゆへ、芸閣程にもなく候。」[30]とあり、江芸閣・張秋琴の人となりがよく伝わってくる。

四カ月間の長崎滞在を終えて帰国の途に就いた寛斎は、九月二十九日、途中備後神辺の菅茶山を訪ねた。そこには廉塾の塾頭をしていた頼山陽がおり、長崎の情報、また袁枚の『小倉山房全集』が到着したことなどを伝える。山陽はこの四年後長崎を目指す。

2-3 頼杏坪と長崎

---

[26] その時の様子は『市河寛斎先生』307 頁を参照。
[27] 市河三陽編『寛斎先生余稿』遊徳園刊、1926 年。
[28] 徳田武『近生日中文人交流史の研究』妍文出版、2004 年、11 月、264 頁。
[29] 徳田武　前掲書、265 頁。
[30] 徳田武　前掲書、270 頁（『市河寛斎先生』307 頁）。

頼杏坪（1756-1835）は頼山陽の叔父で頼春水の弟である。兄弟そろって広島藩儒となり、杏坪は後、御納戸奉行としても登用されている。杏坪の長崎行きは文化十二年、漂流した広島藩大浜村の村民次作と利吉が、清国商船永茂号で長崎に護送されてきたのを引き取るため、藩命によって正月十一日出発した。この時の出張旅行の様子が杏坪の晩年の随筆『老の絮言』に詳しく書かれている[31]。それによれば、二十四日長崎に着いた杏坪は藩の御用聞中尾長三郎宅に逗留し、二十八日に漂流人を受け取ることが出来た。その時の長崎奉行遠山左衛門尉は漢詩人でもあり、杏坪の道中を記録した詩を見せるようにと役人を通して伝えて来た。杏坪は近作の詩を提示し、この機会を利用して唐館蘭館の見物を願い出た。この願いは聞き入れられ、二月一日、役人二人と通詞を付けてくれ、まずは蘭館を見る。杏坪の記録も他の来崎漢詩人たちの報告と違わず、始めて見る「めづらしき」異国の住居の様子、食べ物・飲み物などをそのまま描写している。そのあと唐館に行く。まず財福という役人の住居を見てから、漂流人を乗せて来た船主の劉培原の住居に案内された。劉は数々の料理や清国の珍しい酒でもてなしてくれ、特に酒に関しては「一入めづらしく飲みあへりける。」と感想を書いている。その後、清人の書を見たいと頼んだところ、陸品三のみが書を書くということで、奥の間でそれを見せてもらった。

この訪問で杏坪にとってはなはだ奇妙に映った光景は、清人達が立ったまま挨拶をしたり、酒を飲む習慣に驚き、自分たちは座っているので、革で足を締め付けている清人が自分たちと酒を交わす時は足を伸ばして座るのを「夷踞して酒を飲むもをかし」と書いている。また日本人たちは座ったまま挨拶をしたことを後で「非礼なり。たちてこそ答揖すべきなり。」と後悔している。館門を出るときはいろいろと調べられて何も持ち出すことはできなかったが、書画菓子の類は格別で許可されたようだ。翌二日には唐人の劇場を見て六日に長崎を後にした。途中彼杵で将に長崎に赴かんとしている草場珮川と邂逅する。再会を喜び、佐賀では古賀穀堂を訪い、十九日に広島に帰った。三十九日間の旅であった。この旅行中三十九首の詩を残しているが、「漢詩はこの頃すでに日々の記録となり、社交の具となってきているようである。」[32]と上野氏が述べられているように、長崎での出来事をすべて漢詩で綴っている。

2-4 頼山陽と長崎

頼山陽は廉塾で寛斎から聞いた長崎の話に、いつか自分もと機会をうかがっていたことであろう。文政元年、父の三回忌法要に広島の実家を訪れた山陽は、そのついでにこの機を逃してはと思いたち長崎へと出発する。途中下関では富豪の廣江殿峯や博多の豪商松永花遁らのお世話になりながら旅を続け、博多では亀井昭陽を訪ねている。佐賀では藩校弘道館の儒者たちとも会った。三月に広島を発ってから五月二十三日にようやく長崎に着いた。長崎ではまず材木町の中尾長三郎の家に入り、その後、通詞の遊龍彦次郎や中尾の斡

[31] 上野日出刀『長崎に遊んだ漢詩人』中国書店、1989 年、4 月、108 頁。
[32] 上野日出刀　前掲書、131 頁。

旋で長門屋信蔵の寓居、富観楼に移った。

山陽の長崎遊歴の目的は江芸閣ら清人との詩の応酬であったであろうが、その他に蘭船と唐船の見物も彼の目的の一つであったらしい[33]。七月六日、大通詞の頴川四郎太の案内で蘭船の見物をし、歴史に興味を持つ山陽はここで聞いたナポレオンの話をもとに有名な「仏郎王歌」を詠んでいる。

山陽は外国船の入港を初めて目の当たりにして、「船入港来如巨鼇、水淺船大動欲膠、官舟連珠纍幾艘、牽之而進聲謷謷、蠻船出水百尺高、海風淅淅颭罽旌」[34]とその情景を生き生きと表現している。さらに「蠻情難測廟謀勞、兵營猶不徹豹韜、嗚呼小醜何煩憂目蒿、萬里遂利在貧饕、可憐一葉凌鯨濤、譬如浮蟻慕羶臊、母乃割鷄費牛刀、母乃瓊瑶換木桃」と憂国の念をも現す。文化元年のレザノフの和親条約の失敗、文化五年のイギリス軍艦フェートン号事件などの一連の外交問題を置き去りにしていない山陽の、外国船に対する観察眼が現れている。これらの詩に対し、師である菅茶山は「詩人の長崎に遊ぶ者は、山海に題するのみ。倡芸を咏ずるのみ。旅懐を訴ふるのみ。蛮漢の聞見に及ぶ者は少なし。此等の作は、差や人意を強うすと謂ふべし。」[35]との評価を下している。

七月六日、母梅颸、息子の聿庵に宛てた手紙には、この時代に長崎に遊んだ文人の日常が細かく表現されていて興味深い。「…扨私事、先書に申上候通、築地と申所、長門屋と申水楼に寓居仕候所、此節当所唐人方大通詞頴川四郎太と申方より、請待に預、其家の別荘へ引受と申事にて、理申候へども、達而と申、参申候。されども蘭船見物などには、今迄之水楼よろしく御座候故、ソレモ其儘に借置申候。大通詞と申は、甚勢あるものにて、当地の聞こえはよろしく御座候へ共、何角其子などへ講尺を聞してくれと歟、面倒なる事、旅中且今暫の滞留ゆへ、無益なるべし、詩文の指南にても、少々致置可申など申居候事に御座候。其他、知音も段々出来、日々酒などのませ遊せくれ候て、先々退屈も不仕候へ共、唐船遅きには待兼事に御座候。いづれ唐船参、筆談贈答にても出来候様の奴参、左様候事略相済候て、肥後へまわり、早々帰候様致度奉存候。」[36]

江戸時代の文人のパトロンとなった地元の有力者にとっては、有名な儒者や漢詩人の講釈、或は詩文の指南を子供に与えられるまたとない機会であったから、そのためには率先して自邸に招いたであろう。それを「面倒なる事」「無益なるべし」と断ったのはおそらく山陽ぐらいと想像する。

唐船がようやく入港し、陸品三・楊西亭らと会見し、それぞれ詩の唱和があった。その後も二人と再会し、筆談により清国での詩壇の状況について質問を交わす。結局、待ち人江芸閣は今回の唐船では来崎せず、山陽は長崎を去る決心をする。通詞の水野媚川が送別会を開いてその席に芸閣のお気に入りの芸妓袖咲を聘んでくれた。山陽は芸閣への思いを袖咲に贈った詩に込めた。八月二十三日長崎を発ち、薩摩、熊本を経て日田の広瀬淡窓を

---

[33] 上野日出刀　前掲書、39 頁。
[34] 木崎愛吉・頼成一編『頼山陽全書〔詩〕』頼山陽先生遺蹟顯彰會、1932 年、224 頁。
[35] 上野日出刀 前掲書、41 頁。
[36] 上野日出刀 前掲書、49 頁。

訪ね、竹田の田能村竹田を訪問した後帰路に着いた。

2-5 梁川星巌・紅蘭と長崎

梁川星巌は美濃出身の儒者で漢詩人。星巌は文政二年、長崎から帰った頼山陽を京都に訪ね、長崎の魅力を聞かされたことが刺激となって[37]文政五年、妻の紅蘭を伴って西遊の旅に出かけた。途中備後神辺の菅茶山や福岡の亀井昭陽を訪ねながら文政七年、漸く長崎に辿りつく。おおよその情報は頼山陽から入手していたと思われるが、星巌の目的も当時の文人間で最も人気があった江芸閣に面会することであった。江芸閣は蘇州の人で、貿易商であったが「詩書に耽り候人物」[38]と市河寛斎が家信に伝えたように、江戸の文人にとっては申し分のない教養を身に付けた人物であったようだ。江芸閣が長崎に最初に来航したのは文化十一年で、これより本国との往復を繰り返していたが、星巌が長崎に遊んだ文政七年七月には幸運にも江芸閣は長崎にいた。江芸閣は丸山の花月楼の遊女袖笑をお気に入りとしていたことは有名で、星巌も花月楼にまねかれて袖笑をも含めた詩の応酬を繰り返したことが星巌の西遊記の詩集『西征集』から知ることが出来る[39]。そこには星巌が袖笑に贈った詩や紅蘭が芸閣に次韻した詩も見える。紅蘭の詩は「秋夕、紅芸閣の韻に次す」というものであるが、紅芸閣との会合はどこだったのだろうか。

秋夕次江芸閣韵　　秋夕、紅芸閣の韻に次す
寶鴨焼残拝月香　　寶鴨　焼き残して　月を拝する香
碧梧露潤玉生光　　碧梧　露潤して　玉光を生ず
蟫紅竹素好相近　　蟫紅　竹素好し　相近くに
一點紗燈秋影涼　　一點の紗燈　秋影涼し

これとは別に紅蘭の詩集『紅蘭小集』には「次韻して余東屏に酬ふ」[40]という詩が見える。

詩藻景玄機　　詩藻は玄機を景し
丹青慕仲姫　　丹青は仲姫を慕ふ
争能得神髄　　争でか能く神髄を得んや
形似也應稀　　形似もまた應に稀なるべし

紅蘭はこの時わずか二十一歳、夫の星巌より詩の手ほどきを受け、懸命に学んだと思われる。気丈な紅蘭は貧乏旅行にも耐えながら懸命に夫に従って各地を遊歴した。上記の詩からは、初々しく謙虚な姿勢で夫のあとを付いていく若妻紅蘭の姿が彷彿とされる。後に

[37] 上野日出刀 前掲書、9 頁。
[38] 徳田武　前掲書、263 頁。
[39] 上野日出刀前掲書、14 頁。
[40] 「次韵酬余東屏姑蘇人」『紅蘭小集』（江戸玉池寶漢閣、天保 12 年刊）3 ウ

紅蘭は京都で七弦琴を手に入れる。「老龍琴」と名付けたこの琴を手にした紅蘭は早速「買琴歌」と題する詩を作る。その中には久しく琴を求め続けていたとあるように、おそらく長崎で琴の音色に魅了されたのであろう。

江芸閣は星巌の『西征詩　星巌乙集』に跋を付して、次のように評価している。

> 大楣、多ク貴邦ノ詩ヲ読ムニ、才情ノ美、梁君星巌ニ過グルハ無シ。其ノ西征詩、凡ソ一百卅余篇、俊逸ニシテ丰麗、晴空飛隼ノ飈に乗ジテ盤旋スルガ如ク、碧水ノ芙蕖ノ粉沢ヲ仮ラズシテ、而シテ婷々愛スベキガ如シ。深ク詩人ノ旨ヲ得テ、当ニ以テ一代ノ風騒ノ主ト為スベシ。其ノ我ニ在リテモ、亦タ宜シク之ヲ推シテ憚ルコト無カルベシ。豈惟ダ貴邦ノミナランヤ。
>
> 道光甲申閏月[41]　　姑蘇江大楣敬識

二年間を要して、一度はあきらめかけた長崎行きであったが、幸運にも紅芸閣との交流の場を多く持つことが出来、念願の詩人としての才能を高く評価された星巌にとって、長崎遊歴はその後の詩人としての生涯に大きな糧をもたらしたと言える。

2-6 広瀬淡窓と長崎

幕府直轄地である豊後日田の豪商の家に生まれた淡窓は、寛政八年筑前亀井家の門に入る。足かけ三年亀井塾で学んだ後、日田に帰り塾を開いた。文化十四年、叔父の住まいを譲り受けてそこに咸宜園を開き、日本最大の塾と言われるまでに発展させた。淡窓は江戸や長崎に出かけることもなく生涯のほとんどを日田で過ごしたが、彼の名声は各地に届いており、長崎に於いても清国人の間でその名は広まっていたことが淡窓の日記『懐舊樓筆記』の天保四年五月三日の条に見える。それには「長崎の春禎助より、遠思樓詩集に、清人の序並びに評語を加へし者を送れり。滇生許乃普が序あり。太原伯氏小山、茂陵莫生甫、呉中の迂楮、又沈萍香が批判並びに跋あり。是れ沈萍香が紹介して得たる所なり。序文並びに詩、昔年の韓罫顧が二序に比するに、稍醇真なるに似たり。要するに真贋しるべからず。其れ本家に蔵せり。故に其の審なることを録せず。」[42]とあり、長崎に住む門人の春禎助から淡窓の詩集『遠思樓詩集』に清人の批評並びに跋が加えられたものが送られてきたが、淡窓はこれに対し「要するに真贋しるべからず。其れ本家に蔵せり。故に其の審なることを録せず。」と清人の批判に対し満足のいくものではない様子が窺われる。

天保六年には弟の旭荘が長崎に遊び、その他の門人も多く長崎に遊んでいる。彼等は例にもれず町年寄の高島四郎太夫や兄の久松碩次郎のお世話になり、淡窓も彼らと詩の贈答をしている。また日田の咸宜園を訪れる儒者や漢詩人は多く、頼山陽や梁川星巌は長崎の帰途に淡窓を訪ねており、秋月藩の原古処は娘の采蘋を連れて度々日田を訪れている。自

---

[41] 道光甲申は道光 21 年（1841）

[42] 広瀬淡窓著・大分県日田郡教育会編『増補淡窓全集 上巻』

らは晩年まで長崎に行くことはなかったが、弟子を通じて或は来訪する友人を通じて長崎の情報は詳細に伝わっていたと思われる。

そうした状況の中で、淡窓が長崎に行く決心をしたのは天保十三年（1842）六十一歳の時で、長崎防衛の任に着いていた大村藩から招聘を受けたからである。すでに大村藩の招きで長崎にいた弟の旭荘から手紙が届き、大村藩が藩校の世話を淡窓に頼みたい旨を伝え、「且大人長崎の遊に志したまふこと久し。是は彼地より一日程なり。何とぞ来遊したまふべし」[43]と書き添えていた。この言葉に淡窓はようやく重い腰を上げたのである。九月三日出発して、佐賀では草場珮川の出迎えを受け、その晩の招待に与った。大村には九月九日に着き、十一日からは藩校で論語の講義を受け持っている。長崎観光は講義の合間を縫って十一月一日から六日間の予定で決行された。淡窓にとっても長崎で最も見物したかったのは蘭館と唐館であったはずであるが、十月に聞いた長崎の変によって市中の状況は一変していることが『懐舊樓筆記』に書かれている。まず三日の記事には「…長崎の変をきけり。初め唐通詞神代徳次郎と云ふ者、高島四郎太夫が門に出入して、懇志を受けたる者なり。是の者極めて才諝あり。異国の事に付き、種々邦禁を犯して、利を得ること、一朝一夕にあらず。此の度大尹伊沢侯上命を受け、長崎の弊政を一切改革せらる。其の禁令極めて厳密なり。因って吏人の旧悪をも詮索あり。神代罪を得て獄に下されたり。其の事高島に連及して、是も亦数日前獄に下されしとぞ。長年年寄の任重きこと、天下に比例なし。大君に廷見のことも、格別に重きことなり。長崎にての権威、奉行に次ぎ、大官よりも重し。四郎太夫は又格別に擢んでられ、且名誉一世に震へり。此の度の変、長崎の人は勿論なり、天下の聞く者、みな耳を驚かざるはなし。」[44]と事の起こりを説明し、それが我が身の処遇にも影響を及ぼしたことを次の様に書く。「謙吉先日の長崎に遊びし時までは、無事なり。高島詞を予に伝へて、早く長崎に遊びたまへと云へり。図らざりき、浮世の変転、かくの如くならんとは。」結局舟に乗って外側から蘭館を見物し、大徳寺の庭から唐館を眺めることしかできなかった。

長崎再遊が実現したのは弘化二年のことである。大村侯から依頼されていたが体調がすぐれず延び延びになっていた計画であった。二月二十八日出発。大村での講義は三月三日から四月十八日までの期間とされ、初回目と同じようにその間の六日間が長崎見物に当てられた。しかし、今回の旅は用意周到であった。前回の無念さを繰り返さないがためであった。まず弟子の劉石舟を長崎に行かせ、今は寄力となって長崎にいる吉澤雄之進に淡窓の来崎を伝えさせている。寄力の世話で目的の蘭唐の両館を見ようというわけである。遂に八日にそれが実現した。『懐旧樓筆記』にはその時の様子が一部始終細かに記録されており、この時も禁制は厳しく、奉行所や大村藩を通しての許可を取り付けるのに苦労した様子が書かれている。それにしても遂に念願の唐館と蘭館を見る事が出来た淡窓は長崎遊覧の感想を「長崎に再び遊ぶこと、全く両館の為なり。此の遊已に遂げたり。此の後又遊ぶ

[43] 上野日出刀 前掲書、66 頁。
[44] 上野日出刀 前掲書、68 頁。

の期なからん。之を思ひて、悲喜交生ず。貞助罪を得ること、一悲なり。吉澤意を得ること、一喜なり。両館の遊び遂ぐると雖も、公吏傍に在り、優遊歓晤することを得ず。又幸中の不幸なり。」と締めくくっている。

2-7 田上菊舎と長崎

田上菊舎（1753-1826）は俳人としてその名が知られた人であるが、人生の後半は中国文化に目覚め、月琴・書・画・詩などを学ぶために長崎に数回遊学している。七十四年の人生は芭蕉の旅に誘われて、全国行脚に終始したが、その内容は和漢の文芸に彩られた多彩な芸術の習得と披露に終始した。ここでは菊舎が人生の後半に興味を持った中国文化を学ぶために滞在した九州・長崎での経験を中心に、菊舎と清客との交流を漢詩の応酬から見て行きたい。

菊舎が中国文化に興味を持ち始めたきっかけは、寛政二年（1790）伏見の黄檗宗万福寺を参詣した頃からと言われる[45]。この時に「見聞に耳目を驚かしつつ黄檗山の内を拝し廻り、まことに唐土の心地し侍れば」と前書きして詠んだ有名な句「山門を出れば日本ぞ茶摘うた」から想像出来るように、山門の内と外では国を隔てた文化の違いが顕著であったことを菊舎の句は見事に表現している。黄檗宗寺院内の僧侶の生活について、上野さち子氏は「中国渡来の楽器、楽曲で進行するが、それらが時間に順って流れ、チーク材を用いた雄渾な建造物、幾何学文様の石畳等と相俟って独自の美の領域を形成」[46]している、と説明しているが、黄檗宗寺院内の体験は、俳諧の師である傘狂の死もあったことから、菊舎を俳諧の世界から解放し、中国文化という新たな世界へと興味を移行させて行ったようである。

しかし、菊舎の中国文化への興味はこれ以前からすでに始まっていたのである。天明六年（1786）俳句の師傘狂の命で百茶坊とともに九州勢力拡大のために出かけた福岡で、福岡藩儒であった亀井南冥（1743-1814）に出会った。その後菊舎は、百茶坊と別れてひとりで長崎に赴いている。朝鮮通信使と詩の応酬をも経験し、書に巧みな徂徠学者の南冥との出会いは、菊舎を中国文化へと引き寄せるには十分な人物であった。数か月間の長崎滞在は感受性の強い菊舎にとってどのように写り、どのように感じられたのか。それは菊舎が後に長崎を再三訪れたことで自ずと答えが出る。

菊舎は中国から伝わった七弦琴を携えて旅をしたことでも有名であるが、この七弦琴は、寛政五年、江戸の木工屋作左衛門を十年ぶりに訪れた時に、作左衛門は菊舎の再訪を喜び、自ら作り菊舎に贈ったものである。さらに作左衛門は、薩摩藩士菊池東元から弾琴の手ほどきを菊舎に受けさせた。寛政二年に黄檗宗寺院内で耳にした七弦琴をようやく手にした菊舎の喜びはいかばかりであったか。この琴を携えて京都に立ち寄った菊舎は前右大臣藤公（西園寺賞季）から七弦琴に「流水」の銘を賜った。また平松中納言時章卿に入門して弾琴の手ほどきを受けている。

---

[45] 上野さち子『田上菊舎全集下』和泉書院、2000 年 10 月、1037 頁。
[46] 上野さち子前掲論文、1037 頁。

七弦琴を手に入れた菊舎は寛政八年、唐音と漢詩の勉強をするために九州の旅に出かけた。一度目の九州旅行とは違って、今度の旅の目的は詩人や儒者と交流することであった。約二年間の長崎滞在中、通事の平野柄悟から華音と漢詩を学び、シーボルトの鳴滝塾で医学を学んだ佐賀鍋島藩の医者で儒者の楢林公極にも漢詩を学んだ。平野柄悟に別れる時に次の詩を贈っている。

奉留別平野先生余始学華音於先生　　平野先生に留別し奉る、余始めて華音を先生に学ぶ
夙昔従来愜素心　　夙昔　従来の素心に愜し
弾奏琴譜誦華音　　琴譜を弾奏して華音を誦す
帰郷欲報賢師徳　　郷に帰り賢師の徳に報ぜんと欲す
泰岳巍々河水深　　泰岳巍々たり河水深し

平野先生に漢詩を習い終えた菊舎は翌年、唐人屋敷に出かけて清人の蔣菱舟、費晴湖、劉雲臺らと会見し、菊舎の画に賛をしたり、琴譜を読み合わせたりして一日を楽しんだ。この時漢詩を求められたがすぐには書けず、後に手紙で贈ることとなった。さすがの菊舎も清人を相手には即興で詩を詠むまでの自信は付いていなかったようである。
菊舎が蔣菱舟に贈った詩は次のものである。

余在長崎春日贈清人蔣菱舟　　余長崎に在りて　春日清人蔣菱舟に贈す
高士相逢翰墨林　　高士相逢ふ　翰墨林
春風携手杏花深　　春風手を携て　杏花深し
幽談坐久論琴譜　　幽談坐して　久しく琴譜を論じ
始聴泱々中土音　　始めて聴く　泱々　中土の音

費晴湖は額商の一族で南画をよくし、来舶四大家の一人と称された人である。その費晴湖が菊舎に与えた詩がある。

清人費晴湖贈余詩序併存于此　　清人費晴湖余に詩序を贈る併て于此に存す
独抱雲和遍九州　　独り抱雲和を抱いて　九州に遍し
仙風道骨傲王侯　　仙風道骨　王侯に傲る
揮弦徽奏猗蘭操　　弦を揮て徽奏す　猗蘭操
流水高山孰興儔　　流水高山　孰か興に儔しからん
（序は略）

二年間の漢詩修業によって清客と堂々と漢詩の応酬を試みたところに菊舎の才能と行動

力を見る事が出来る。このような長崎での漢詩の修業の成果は、享和三年（1803)、九月に長府藩主毛利元義の前田の別荘「閑習庵」に招待された時に発揮された。そこには御用絵師で菊舎の絵の師匠でもある度会文流斎が招待されており、関門海峡を眼下に見下ろす絶景の地で、文流斎には景勝二十題の絵を、菊舎にはその絵にちなんだ句を元義公から求められた。毛利元義は号を蘭斎ともいい、文人大名として名を知られた人である。菊池五山の『五山堂詩話』には二回登場し、十四首の漢詩が紹介されており、狂歌にも手を染めている。菊舎は元義の求めに応じて漢詩と発句を組み合わせて賛を作り、「長府侯前田別業二十勝」として『手折菊』三・風の巻に採録されている。句を求められたにも関わらず、絵の賛として二十首の漢詩を藩主元義の前で披露したのは、文雅を解する藩主に、長崎で覚えた漢詩の腕前を披露せずにはいられなかった表現者としての菊舎の姿がある。

このような経験を経た菊舎は、漢詩をさらに上達させる目的で九州の儒者を訪ねる旅に出た。博多では再び亀井南冥や弟の曇栄禅師を訪ねて詩の贈答を繰り返している。亀井南冥と曇栄禅師に贈った詩がある。

發亥杪冬詠曇栄禅師　　發亥杪冬　曇栄禅師を詠ふ
携琴此日上高台　　琴を携て　此日高台に上る
白雪霏々復快哉　　白雪霏々として　復た快哉
更有紫陽山色好　　更に紫陽山色の好き有り
洋々雅興入絃来　　洋々たる雅興　絃に入り来たる

杪冬従南冥先生遊柏水　　杪冬　南冥先生に従いて柏水に遊ぶ
偶爾相携所　　偶爾として相携る所
高亭柏水頭　　高亭　柏水の頭
生松栖老鶴　　生松　老鶴を栖す
静渚伴閑鷗　　静渚　閑鷗を伴ふ
時試朱絃響　　時に試む　朱絃の響
更聞白雪謳　　更に聞く　白雪の謳
追随堪卒歳　　追随堪へて　歳を卒るを
疑是到滄州　　疑ふらくは是れ滄州に到る

文化二年（1805)、長府に帰っていた菊舎は、長府藩主元義から「鶴氅裘」を賜った。これは鶴の羽根で織った被布羽織で琴士の服するものであった。菊舎はこれを大いに喜び、「南州の諸先生に吹聴せばや」と四度目の九州行きを決行し、博多に亀井南冥・曇栄を訪ねて鶴氅裘を披露するのであった。

三節　女性漢詩人の輩出

3-1 袁枚の影響

日本の漢詩文の隆盛は安永・天明期(1772-1788)ごろから始まり、幕末に至るまで約百年間続いた。特に文化・文政期(1804-1829)の文化の興隆は女性にも学問の機会を与え、それまで男性の学問とされていた漢詩文の分野にも女性の進出が目立ってきた。この文化的状況は中国明の嘉靖期（1522-1566）から清の乾隆期（1736-1795）に起こった女性文化人の輩出状況と酷似している。両国の当時の社会背景には貨幣経済の発達に伴う文人の続出・多様化があることは周知のことであるが、日本の文化文政期における漢詩文の隆盛の陰には、中国の明・清の漢詩壇の動向が大きく作用していた。漢詩人たちは 長崎から逐一もたらされた明・清時代の詩集や文集をお手本として、精力的に和刻本を出版して行った。

本節では、寛政期ごろから江戸の漢詩人に最も影響を与えた清中期に活躍した袁枚（1716-1797）の詩論に注目し、江戸時代の漢詩人頼山陽や江湖詩社の同人を熱狂的な虜にした原因を探ると同時に、袁枚は七十歳を過ぎてから女弟子を持つことに意欲を燃やし、五十名を超える女弟子を持っていたことで有名であるが、このことも江戸の漢詩人の羨望の的となっていた。袁枚は死の前年である嘉慶元年（1796）に『隨園女弟子詩選』六巻を友人の汪穀に依頼して出版したが、この詩集も江湖詩社の同人の手によって和刻本が出版された。儒教の規範の厳しい国で、このように女弟子を数十名持つこと自体前代未聞であったが、さらに『女弟子詩選』まで出版した快挙は当地の中国だけでなく隣国の日本の漢詩人をも驚嘆させた。

これまでの近世漢学史では袁中郎の性霊説、袁枚の清新性霊説やその影響については詳しく研究されているが[47]、袁枚の女弟子の実態についてはあまり知られていないと思われる。袁枚の女弟子の実態を把握することで、江戸時代の漢詩人たちを魅了したものは何であったのか、さらには幕末から明治にかけて女性漢詩人が急増した要因について理解を深めることが出来ると考える。

(1)袁枚について

袁枚、字は子才、号は簡斎または随園は康熙五十五年（1716)、浙江省銭塘の貧しい家に生まれ、叔母の沈に家庭教育を受けて育った。教養のあった叔母に育てられたことは、後の袁枚の生き方に大きな影響を及ぼしていると考えられる。六歳で史中という師について本格的に勉強を始め、十一歳で童試に合格した。これは普通の子供よりも五、六年早い進級であった。この間、師の家で見つけた詩集によって、詩に興味を持った袁枚は密かに詩作を試みていたという。さらに読書欲も芽生え、書店に通う日々を過ごした。しかし貧しいため本を買うことは出来なかった。二十歳になり、北京で実施された博学鴻詞の試験に最年少で臨んだが、これには失敗した。乾隆四年（1739)、試験に受かった袁枚は進士の称号を得て、さらに翰林院庶吉士にもなる事が出来た。こうして翰林院で三年間の修業をすることとなった。この時期袁枚は満州族出身の刑部尚書である尹継善（1696-1771）に才能を認められるようになる。尹継善はその後袁枚の後援者として、あるいは友人として交際

[47] 松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその摂取―』明治書院、1963 年 3 月。

を深めていった。袁枚にはもう一人の有力な満州族の後援者がいた。鄂爾泰（1680-1745）は乾隆帝の若い時期に帝を支えた実力者で、袁枚の文章の実力に注目していた。しかし満州語の習得に苦労した袁枚は翰林院庶吉士の終了試験で、満州語は最低点を与えられた。結果として地方官吏として県知事の職に就くこととなった。

二十七歳で南京の東南にある溧水県の知事に就任し、続いて江浦県知事となった。どちらも数カ月間の勤務に終わり、次に江蘇省北部の流陽県に転任した。この時期に陶という娘を妾にしている。（妻は王氏で 1739 年に結婚している）1745 年、尹継善の計らいで江寧（南京）県に転任することになった。江寧県知事の仕事は多忙であったが、ここでの仕事ぶりを評価した尹継善は二年後の 1747 年の夏、袁枚をさらに重職である高郵の州知事に推薦した。しかし吏部はこの人事に反対した。翌年の末、袁枚は三カ月間の病気賜暇を願い出た。これは辞職願の方法で、三か月後に仕事に復帰しなければ職を失うということになっていた。辞職の理由は 1797 年の「遺嘱」に「蒙総督尹文端公保薦高郵州知州、部駁不准、我心不楽、適老母患病、遂乞養帰山」とあるように尹継善が推薦した高郵の州知事の職を吏部が認めなかった事が直接の原因であった。この時僅か三十二歳であった。しかし、この時点で袁枚は官職から永久的に引退するとは考えていなったようである。

退職した袁枚は 1 カ月分の給料で、南京にあった随氏の別荘地を購入した。ここでの生活をしながら、再び官吏の職に就くことを模索していた袁枚は、1752 年、北京に行く機会に恵まれた。北京での滞在は三週間ほどで、この間、袁枚は旧知を尋ねて仕事の斡旋を頼んだようである。その一人満州人の高官（1686-1762）は北京での職に袁枚を推薦しようとしたが、南京近くの職を希望していた袁枚はこれを辞退した。次に会ったのは満州語の教官だった史貽直で、その時既に七十歳であった。この時、史貽直は袁枚に「聞汝宰江寧有善政、誠不負所言。惜杜牧之未免風流耳」と言ったという。南京での政治はよくやったが、杜牧まがいの風流な生活の事も聞いていると言われ、結局は仕事の紹介もしてもらえなかったようである。北京から長安（西安）に向かった袁枚は陝甘の総督として勤務していた黄廷桂（1691-1759）に面会した。袁枚は 1751 年に皇帝が蘇州を訪問した時、当時の江南地方の総督であった黄廷桂の不人気な仕事ぶりを調査する仕事を皇帝から依頼され長文の手紙をしたためた。これの結果北京への旅行が成立したことになる。皮肉にも黄廷桂は袁枚の手紙を読んで、好感を持ち、袁枚との面会を望んだようである。黄廷桂によって長安での職に就いた三日後、袁枚は父の訃報を受け取った。これを最後に袁枚は官職から完全に引退した。三十七歳の時である。

(2)袁枚の詩論と女性観

周知のように、儒教の女性観は男尊女卑であったが、元末明初の文人楊維楨（1296-1370）は、女性の才覚が男性に劣らないとする見解を示し、『詩経』を例にとり、

予聞詩三百篇、或出於婦人女子之作。其詞皆可被於絃歌、聖筆錄而爲經律。諸後世

老於文學者、有所不及。其得以磹磹女人棄之乎[48]

（予聞く、詩三百篇は、或は婦人女子の作に出づと。其の詞は皆弦歌に被らしむべく、聖筆錄して經律と爲す。諸の後世の文學に老ゆる者も、及ばざる所有り。其れ磹磹たる女人なるを以て之を棄つるを得んや。）

と主張した。その後この文が女性の才覚を評価する際の決まり文句として使われるようになったという[49]。袁枚も例にもれず、その常套句を用いて女子の詩作を奨励している[50]。袁枚はまた、女子だけでなく、知識階級から外れた村氓残学の者たちの詩をも認めている。

詩境最寛。　有學士大夫讀破萬卷、窮老盡気、而不能得其閫奥者。有婦人女子、村氓浅學、偶有一二句、雖李・杜復生、必為低首者。此詩之所以為大也。作詩者必知此二義、而後能求詩於書中、得詩於書外。[51]

（詩境は最も寛なり。学士大夫の、万巻を読破し、老を窮めて気を尽くすも、其の閫奥を得る能わざる者有り。婦人女子、村氓残学の偶たま一二句有りて、李杜復生ずと雖も、必らず為めに首を低るる者有り。此れ詩の大と為す所以なり。）

こうした考え方もやはり詩経から学んだことであることが下記の文章から理解できる。

《三百篇》半是労人思婦率意言情之事；誰爲之格、誰爲之律？[52]

（三百篇は半ばは是れ労人思婦の意に率ひ情を言ふの事なり。誰か之れが格を為さん。誰か之れが律を為さん。）

袁枚の詩論はこのように詩経から学んだもので、詩を作る人々に対する偏見を排除し、一方では袁中郎から学んだ性霊説を自らの信条として、性情を優先させる詩作方法を提唱した。「要以情眞而語直。故勞人思婦，有時愈于學士大夫，而呻吟之所得，往往快於平時。」[53]（要めて情の眞にして語の直なるを以ての故に、労人思婦は、時有りてか學士大夫に愈り、

---

[48] 楊維楨「曹氏雪齋弦歌集序」『東維子文集』（『四部叢刊集部』）卷七
[49] 蕭燕婉『清代の女性詩人たち』中国書店、2007 年、20 頁
[50]「俗稱女子不宜為詩、陋哉言乎。聖人以關雎、葛覃、卷耳、冠三百篇之首、皆女子之詩。」（『隨園詩話補遺』卷一第 62 則、王英志主編《袁枚全集　第三冊》江蘇戸籍出版社、1993 年、570 頁）
[51] 『隨園詩話』卷三の第五十則（王英志主編《袁枚全集　第三冊》江蘇戸籍出版社、1993 年、84-85 頁）
[52]『隨園詩話』卷一の第二則（王英志前掲書、2 頁）
[53] 錢伯城箋校《袁宏道集箋校》上海古籍出版社，1981 年 7 月、1114 頁。

呻吟して得る所、往往にして平時より快し。）とは袁中郎が既に指摘していたことであったが[54]、袁枚はこの考えに基づいて、労人思婦の詩を収集し、『隨園詩話』に載せたのである。

『隨園詩話』十六巻の刊行は乾隆五十四年（1791）、袁枚七十五歳の時のことで、七歳のころからの詩が収録され、『補遺』十巻は、それから死の前年に当たる嘉慶元年（1797）袁枚八十二歳までの詩を収録したものである[55]。「詩話」という形式の書物は多数出版されていたが、その多くが古典を中心とした有名詩人についての随筆や雑話であった。袁枚の「詩話」のスタイルの特徴は、同時代の詩人を取り上げたことである。袁枚の交流した人々、宰相から僧侶、商人まで様々な階層の人たち千七百人が「詩話」に取り上げられているが、まずその人たちの逸話を記し、その次に詩を載せる場合もあり、詩だけ取り上げる場合や、その人物に関する逸話だけの場合もある。袁枚の『隨園詩話』は詩を紹介する媒体というだけでなく、袁枚の交流した人々、また袁枚の人生そのものをすべて含めて書き残した詩や随筆によって、自叙伝的なものとなっている。これは従来に出版された有名詩人や有名な詩だけを扱った詩話とは違い、袁枚の独自性を現わす交流人物の幅の広さとその人たちに対する袁枚の着眼点からこれまでに類を見ない「詩話」を作り上げることが出来たのである。例えば巻十は袁枚の詩論を載せている。『隨園詩話』の特筆すべき点は、各巻末に「閨秀」のスペースを設けたことである。ここには有名な袁枚の女弟子だけでなく、袁家の女性たちの詩も含まれている。

それでは袁枚のこのような女性観はどこから生まれたのだろうか。南京の小倉山にある「隨園」には袁家一族が一緒に住んでいた。袁家の女性たちは有能で、袁枚を育てた姑母の沈氏の教養の高さは、少年時代の袁枚に多大な影響を及ぼしたと考えられる[56]。沈氏は母親の代わりに袁枚の身の回りの世話をし、歴史書の中の偉人にまつわる話を聞かせてくれたという。『書経』の読み方や発音の仕方さえも指導してもらったという。妹の袁機、袁杼、従妹の袁棠はそれぞれ詩集を残しているほどで[57]、そのほかにも従妹の袁杰、女孫の袁嘉、袁緩、妾の陶姫等々、袁枚から詩の指導を受けた袁家の女性たちは多数に上った。このような環境から女性の才能を身近に確認できたことも影響していると考えられる。こうした環境もさることながら、袁枚は、地方官吏だった時代には多くの妾を抱え、さらに妓女との遊興に耽る生活が長く続いた。このような妓女達の中にはおそらく薛濤（768-831）[58]に代表されるような詩才にたけた女性も多くいたと思われる。これらの女性たちの才能にも影響を受けたことは想像に難くない。

しかし袁枚の女弟子の中には親族の女性たちは含まれていないという[59]。袁枚が親族以外

---

54 松村昂「「隨園詩話」の世界」『中国文学報』第二十二冊、1968 年 4 月、66 頁。
55 松村昂 前掲書、58 頁。
56 アーサー・ウェイリー『袁枚』東洋文庫(650)、平凡社、1999 年 3 月、13 頁。
57 蕭燕婉氏によれば袁機には『素文女子遺稿』、袁杼には『楼居小草』、袁棠には『繡餘吟』があるという。
58 中国唐代の妓女・詩人。
59 蕭燕婉　前掲書、29 頁。

の女弟子を受け入れたのは晩年のことで、六十八歳ごろからと言われている。若い時は専ら妓女との遊びに興じていたが、ある時からその遊びに興味を失ったことが『隨園詩話補遺』巻五の六に、「余中年以後、遇妓席無歓。人疑遁入理学、而不知看花当意之難」（余中年以後、妓席に遇ひて歡なし。人理學に遁れ入ることを疑ふ、花を看るを知らずして當意これ難し）とあることから、その経緯が知られる。

それにしても袁枚が七十歳近くになって女弟子の教育に積極的になっていったきっかけは何であったのか。直接の理由は定かではないが、間接的な要因から推測すれば、まず、袁枚の住んでいた江蘇州とその隣の浙江省は文化水準が高く、女性詩人の占める割合がこの二つの州に集中していた。実際袁枚の女弟子たちの出身地は主にこの二州である。この二州における女性詩人の輩出の要因は、この地方には優れた文人や画家といった芸術家が集まっていたということである。女性詩人が誕生する条件として『広東女子芸文考』の編者、冼玉清は「名ある父の女なり」、「才士の妻なり」を揚げている[60]が、袁枚の女弟子たちの経歴を見るとやはりこれに当てはまる。

詩人としての条件を備えていた彼女たちがどのようにして袁枚の女弟子となったのかは次の項で取り上げるが、やはり袁枚の広い交友関係を通じて弟子入りをしている。たとえば女弟子の一人、杭州出身の孫雲鳳は、一門皆吟詠に優れた家庭に育ち、妹たちも皆詩に巧みで、画も善くしたという。雲鳳の曽祖父と父はそれぞれ袁枚と交遊があった。雲鳳は1788 年頃に入門したが、有力な女弟子となり、1790 年と 92 年の二度に亘って袁枚が開催した詩会に参加している。一回目は杭州西湖の宝石山荘に於いて、当地の女性詩人を集めて詩会を開いた。この時は十三人の女性詩人が参加している。その時の様子が後に「隨園先生十三女弟子湖楼請業図」として描かれ、楽園に蝶が舞遊ぶような光景は、多くの人に刺激を与え、題詩題賛を添えたり、詩に詠む人たちが多く出たということである[61]。袁枚はこれより以前にも隨園においてたびたび詩会を開いていた。乾隆二十九年（1764）、枕徳潜が南京に立ち寄った際も詩会を開いた。この時の様子が「隨園画集図」として描かれ、多くの画賛詩が残されたという[62]。このように「画集図」や「請業図」の魅力は実際には参加できなかった詩会にもそれらの絵を見ることによって、あたかも詩会に参加しているような錯覚を覚えさせる効果があったのかもしれない。それと同時に文人たちの優雅な園遊会の風景は、知識人たちの憧れの象徴でもあった。女弟子だけを集めた詩会の「湖楼請業図」の華やかさは見るものをうっとりさせずにはおかない理想郷が描かれている。これに続いて二回目の詩会には七人が参加し[63]、さらにこの詩会の帰路、蘇州の繡谷園でも女弟子を招集して詩会を開いたことが、金逸の「随園先生来呉門、招集女弟子于繡閣」という詩から知ることが出来る[64]。金逸は病気のためこの詩会には参加できず、その残念な気持ちを詩に

---

[60] 蕭燕婉の前掲書の引用による。267 頁参照
[61] 合山究『明清時代の女性と文学』汲古書院、2006 年 2 月、661 頁。
[62] 王標「メディアとしての「隨園画集図」」人文論叢第３１巻、2003 年 3 月、63 頁。
[63]「今年、余在湖楼、招女弟子七人作詩会」（『詩話補遺』巻五の第四十四則）とある。
[64] 『隨園女弟子詩選』巻二の金逸の項参照

表している。

袁枚の女弟子集大成ともいえる『隨園女弟子詩選』六巻は友人の汪穀に版行を依頼して嘉慶元年（1796）に出版された。1790 年頃から女弟子を育てることに積極的になっていった袁枚のもとには女弟子たちの詩や詞、雑文が多く集まった。袁枚はこの中から二十八名の女弟子の優れた作品を選んで、六巻に仕立てた。

(3)『隨園女弟子詩選』にみる女弟子の実像

袁枚が五十数名中から選んだ二十八名の女性にはどのような女性がいたのだろうか[65]。中でも席佩蘭・金逸・厳蕊珠の三人は「閨中三大知己」と言われた優秀な詩人たちであった。文政十三年（1830）、袁枚の出版に遅れること三十四年、江戸では江湖詩社の同人大窪詩仏によって和刻本『隨園女弟子詩選選』が出版された[66]。上記の三人のうち袁枚が最も評価した詩人は席佩蘭であったが、詩仏は金逸の詩を多く採録している。日本において金逸の人気が高かったことは頼山陽の女弟子江馬細香が「自分はとても金逸には及ばないが、先生は小倉である。」[67]といっている事からも金逸を女弟子の代表格ととらえていることが窺われる。金逸が日本で注目された理由として考えられるのは、金逸は病弱で痩身の美女であり、字の纖纖がそれを象徴しているかのように、二十五歳の若さで死去したため、『紅楼夢』の女主人公林黛玉を連想させた[68]ことや、実際に金逸の詩には「寒夜待竹士不歸讀紅樓夢傳寄有作」と題する次の詩があり、

軽陰釀雪逼人寒	軽陰　雪を釀し　人に逼りて寒し
宛轉香消瑪瑙盤	宛轉として香は消ゆ　瑪瑙の盤
待爾未來抛夢起	爾を待てども未だ來らざれば　夢を抛ちて起ち
遺愁無計借書看	遺愁を遺らんとするも計無く　書を借りて看る
情惟一往深如許	情は惟だ一往にして深きこと許の如し
魂不勝銷死也拚	魂は銷ゆるに勝へずして　死しても也た拚てんや
弾盡涙珠猶道少	涙珠を弾じ盡して　猶ほ道少しと道ふ
細思于我甚相干	細かに思へば　我に于て甚だ相干はれり

（『隨園女弟子詩選』巻二）

---

[65] 二十八名の詩人は以下のとおりである。席佩蘭・孫雲鳳・金逸・駱綺蘭・張玉珍・廖雲錦・孫雲鶴・陳長生・嚴蕊珠・錢琳・王玉如・陳淑蘭・王碧珠・朱意珠・鮑之蕙・王倩・張絢霄・畢智珠・蘆元素・戴蘭英・屈秉筠・許德馨・歸懋儀・呉瓊仙・袁淑芳・王蕙卿・汪玉軫・鮑尊古　(下線の人物は、名のみで詩を収めていない)

[66] 大窪詩佛は以下の十九名の詩人の詩を収録している。席佩蘭・孫雲鳳・金逸・駱綺蘭・張玉珍・厳蕊珠・王玉如（以上上巻）廖雲錦・孫雲鶴・陳長生・錢琳・陳淑蘭・王碧珠・朱意珠・鮑之蕙・王倩・蘆元素・戴蘭英・呉瓊仙（以上下巻）

[67] 「癡才弟子非金逸　授業先生是小倉（痴才の弟子、金逸に非ざるも、授業の先生、是れ小倉なり。）」入谷仙介監修・門玲子訳注『湘夢遺稿　下』汲古書院、1994 年 6 月、352 頁。

[68] アーサー・ウェイリー　前掲書、255 頁。

この中で林黛玉に自らを投影させていることなどから、美人薄命のイメージが詩人たちを引きつけたと思われる。合山氏は『紅楼夢』は仙女崇拝小説であると結論づけておられる[69]が、江戸時代の漢詩人たちにも仙女崇拝思想は浸透していたのだろうか。

ともかく江戸時代の男性詩人の女性観は、頼山陽に代表されるように「女らしさ」を作詩の中に求め[70]、大窪詩仏も菊池五山も同様の女性観を有していたことは『随園女弟子詩選選』や『五山堂詩話』の女性の詩の選択方法からも窺われる[71]。金逸の詩は夫に対する女性らしい情感を詠った詩や病気に対する悩みを詠みこんだ詩が多く、それらの詩が美人薄命のイメージと重なって江戸時代の男性詩人の心を捉えたと考えられる。

金逸（1770-94）は優れた感性と詩才を持って生まれ、十五歳ごろ陳基（字は竹士）に嫁ぎ、夫婦ともに詩を唱和する仲の良い夫婦であったという。その上、彼女には多くの女性詩人の仲間があり、風光明媚な場所に集まり、詩会を楽しみながら詩論を戦わせる機会が多くあった。そのようなサークルの中でも彼女の才能と美貌は際立っていたという[72]。金逸が生まれ育った江蘇省は女性が文学を論じ、また詩作に耽ることを男性知識人が称賛する土壌が出来あがっていた。そのような中で金逸は袁枚の詩集を愛読し、乾隆五十七年（1792）ごろ弟子入りを願って自分から袁枚に手紙を書いたという[73]。金逸は死の一か月前に初めて袁枚に面会し、その喜びを「呈随園夫子」という詩に詠んでいる。

雙拜會經約隔年	雙拜　會て隔年を約す經
今春果得拜花前	今春　果して花前に拜するを得たり
得瞻夫子温良貌	夫子の温良の貌を瞻ることを得て
永結如来香火縁	永く如来の香火の縁を結ばん
搦管許稱詩弟子	搦管　詩の弟子と稱するを許され
掃眉新到大羅天	掃眉　新たに大羅天に到る
自憐蓬蓽清寒甚	自ら憐れむ蓬蓽　清寒甚しく
贅見惟持五色箋	贅見　惟だ五色の箋を持するのみなるを

（『續同人集』）

もう一人の女弟子駱綺蘭（1756-？）は、乾隆五十六年（1791）、袁枚七十六歳の時に入門

[69] 合山究『『紅楼夢』新論』汲古書院、1997 年、180-299 頁。

[70]「真閨秀之詩也」、「真是閨秀語」等の評語が江馬細香の詩集に散見する。また原采蘋の詩「歳晩即事」と題する詩を評して「女子詩自有所宜　他篇往々類丈夫語　如此詩不然」（女子の詩自から宜しき所有り。他篇往々にして丈夫の語に類す。此の詩の如きは然らず。）という言葉によって知る事が出来る。

[71] 菊池五山は『五山堂詩話』巻六の多田季婉についての記事の中で「余遽取其集讀之、真女丈夫詩也。遂就中抄稍優柔者、以酬其意。」（余遽にその集を取りて之を読むに、真に女丈夫の詩なり。遂に中に就きて稍や優柔なる者を抄して、以てその意に酬ゆ。」と、その選択方法を窺わせている。

[72] 蕭燕婉前掲書、191 頁。

[73]『隨園女弟子詩選』に附雑作として「上隨園父子書」と見える。

した。江蘇省句容の人で幼少より書史を読み、吟詠を好んだという。金陵の龔世治と結婚し、広陵で共に吟詠を楽しみながら結婚生活を送ったが、夫の早死によって子供もなく、寡婦になってからの綺蘭は詩作に専念し、自立した詩人としての道を選択し、『聽秋軒詩集』を残している。綺蘭も金逸同様、自ら袁枚に手紙を書き弟子となることを乞うたことが詩集の序文に見える。

蘭幼讀先生詩而愛之、且學爲之。顧私淑不如親炙之益也。先生其許之乎。

（蘭は幼きより先生の詩を讀みて之を愛し、且つ學びて之を爲れり。顧(おも)ふに私淑は親炙の益に如かざるなり。先生其れ之を許すか。）

（『聽秋軒詩集』序）

翌年袁枚を尋ねた綺蘭は弟子入りを許されて、「隨園謁袁簡斎師二首」を詠んでいる。そのうちの一首

閨閣聞名二十秋　　閨閣にて名を聞くこと　二十秋
今朝纔得識荊州　　今朝　纔かに荊州に識るを得たり
忽忽問字書牕下　　忽忽として字を問ふ　書牕の下
權把新詩當束脩　　權りに新詩を把りて　束脩に當てん

その中で、長年袁枚の詩を愛読し続けて、今日、漸く弟子入りが叶った喜びを語り、新しい詩を束脩として先生に渡したという。
『聽秋軒詩集』は袁枚がその出版を強く望んだ結果に由るものであることが『聽秋軒詩集』の袁枚の序文で知ることが出来る。

余今年八十矣。明知佩香之學問後進無涯、而余則暮景頽光、前途有限。故勸其板而行之、以及於吾身親見之也。

（余今年八十なり。佩香〈綺蘭の字〉の學問の後に進むこと涯無きを明知するも、余は則ち暮景頽光にして、前途に限り有り。故に其の板して之を行ふことを勸め、以て吾が身の親しく之を見るに及ばしむるなり。）

（『聽秋軒詩集』の袁枚の序文）[74]

八十歳になった袁枚が優秀な女弟子の作品を出版させることに意欲を燃やしたことは、女弟子が優秀であったこともさることながら、袁枚にとっても優秀な女弟子を育てた証と

---

74 『聽秋軒詩集』（金陵金陵龚氏、清乾隆 60 年刊） 4 オ

して必要なことであったかもしれない。事実袁枚の名声は晩年の優れた女弟子の業績によって高く評価されていることは間違いない。綺蘭の女弟子としての特徴は、寡婦であったということもあり、男性と同様に自立して生計を立てたことである。家庭教師や詩画を売って生計を立てることはこの時代でもそれほど易しいことではなかったようで、生活は貧しかったという。そのため綺蘭は積極的に男性文人と交わり、名声を高めようと必死であった。しかし、綺蘭の行動は開明的な江南の知識人社会にあっても非難の的になった。余りにも貪欲に名声を求め続けた結果によるものであった。後年四十歳を過ぎて、綺蘭は行き過ぎた行為を反省し、詩作から遠ざかり、得意な絵を描くことにその情熱を向けて行った。

最後に袁枚の女弟子の中で、「詩を以て本朝に冠たり」[75]と袁枚に言わしめた席佩蘭について見てみたい。席佩蘭は夫の孫原湘とともに袁枚の弟子となり、「夫婦能詩者」として袁枚との交流を深めて行った。席佩蘭の場合、才能はあったが夫を押しのけてまで自分の才能を誇示したのではなく、婦徳をわきまえた上で夫との詩作の鍛錬に励んだ。袁枚に弟子入りしたのも孫原湘が先で、その四年後にようやく弟子入りが叶った。袁枚は始め席佩蘭の詩は孫原湘の代作と考えていた[76]。しかし、孫家を尋ねた袁枚に席佩蘭が贈った詩を見た時、その素晴らしさに彼女の才能を認めざるを得なかったという。「上袁簡斎先生」と題する三首の詩がそれである。
その中の一首

慕公名字讀公詩	慕公の名字を慕ひ　公の詩を讀み
海内人人望見遲	海内　人人　望見して遲し
青眼獨來幽閣裏	青眼　獨り來る　幽閣の裏
縞衣無奈澣妝時	縞衣　無奈んともする無し　妝を澣ふの時
蓬門昨夜文星照	蓬門　昨夜　文星照らし
嘉客先期喜鵲知	嘉客　期に先だちて　喜鵲知らす
願買杭州絲五色	願はくは杭州の絲の五色なるを買ひ
絲絲親自繡袁絲	絲絲　親しく自ら袁絲を繡はん

（『隨園詩話補遺』巻八第十一則）

上記の詩はまさに「詩を以て本朝に冠たり」という言葉に相応しい秀逸な詩である。席佩蘭の場合は常に夫を立てて袁枚との交遊を果たした点で他の女弟子とはスタンスが異なるが、その才能においては群を抜いていた。

このほかにも女弟子の中には、結婚はしたものの夫の経済力の無さから、家庭教師をしながら家計を支えた帰懋儀など文学的な家庭に育った女性の姿が多く見られる。彼女たちは袁枚の女弟子となる以前から十分な教養を積み、才能を育む環境に育っている。しかし、

[75] 蕭燕婉前掲書、117 頁。
[76]「女弟子席佩蘭、詩才清妙、余嘗疑是郎君孫子瀟大作」（『隨園詩話補遺』巻八第十一則）

袁枚の弟子となることに恋焦がれていたことは彼女たちの詩から十分読み取れる。そこからは袁枚が彼女たちにとって教祖的な存在であったことが読み取れよう。さらに言えることは、袁枚が女弟子の崇拝を勝ち取っていたことも事実であるが、袁枚にとってこれほどの才能を持った女性たちに巡り合う喜びを感じていたこともまた事実であった。その証拠に、女弟子を得る喜びを八十二歳に到って「昨冬下蘇松、喜又得女弟子五人」と詩に書いていることからも窺われる[77]。

(4)頼山陽の女弟子

袁枚の女弟子に影響されて日本の漢詩人たちも女弟子を抱える風潮が見られた。山本北山や頼山陽がその例として知られ、明治には鈴木松塘の塾に女弟子が集まったことは有名である。ここでは頼山陽の女弟子江馬細香と頼山陽の関係を、長崎に来航した江芸閣との書簡のやり取りを通して袁枚の女弟子との関係を比較検討して見ることとする。

頼山陽が長崎に遊んだのは文政元年五月から八月までであることはすでに述べた。この間江芸閣を待ち続けたが、船が遅れたために山陽は待ち切れず長崎を発った。しかし、江芸閣に対する想いは芸閣の狎妓であった花月楼の袖咲を通して伝えられた。文政二年二月二十四日の船で五度目の来崎をした江芸閣は早速頼山陽に手紙を送り、その中に江馬細香宛ての詩を託している。江芸閣がどのようにして彼女の存在を知り得たのかは確かな史料を見いだせないが、おそらく頼山陽を通しての事であろう。

頼山陽が袁枚に傾倒していたことは長崎での陸品三との筆談でも袁枚の名前が見える事や袁枚の詩集を弟子の細香に紹介していることなどから推測できる。さらに山陽が細香に対し、清人との交流を促し、詩集の出版をも勧めた影には、明らかに袁枚の女弟子を意識していることが窺われる。山陽が長崎で確かめたかったことは、自らの詩の実力だけでなく、女弟子細香の実力をも確かめ、それを認めさせる目的もあったのではないだろうか。

ともかく江芸閣は三度細香に詩を送っている。この間十一年を要している。

文政二年四月の江芸閣の詩に云う。

能詩能畫總文章　　書を能くし　画を能くし　総べて文章あり
有女清貞号細香　　女有り　清貞にして　細香と号す
京洛風華游藝学　　京洛の風華　藝学に游び
此生不喜作鴛鴦　　此の生　喜ばず　鴛鴦と作るを
巳卯又清和月、細香女学士ニ寄贈ス、崎陽客舎ニ出稿ス。姑蘇江芸閣[78]

これに対し、山陽は十一月十六日の書翰で細香の答詩を入念に指導し、題も細かく指示していることが判明する。

---

[77] 「昨冬下蘇松喜又得女弟子五人」と題する詩は『小倉山房詩集』巻三七に見える。
[78] 入谷仙介監修・門玲子訳注『湘夢遺稿　上』汲古書院、1992 年 12 月。

…唐人詩差越之義、通事の密計為小子相働候ニて役筋なとニ表立ぬ事ニ御座候間、其御心ニて御被露可被成候、答芸閣詩は、随分おもしろけれともまたあるへし、猶御考可被成候、墨竹一枚画箋紙なとニ被成、上ニ何れぞ題詩ハ、題　　己卯孟冬写併題、因頼老師、奉贈江芸閣先生、

細香女史嬝々斂衽再拝

なと可然候、先々題詩五六首も御見せ可被成候、其内ニてゑらひ可申候、御遺可被成と被思召候詩を先御題此落款を稽古之ために御認御越被成てもよろしく候、見合可申候、…

十一月十六日　　山陽

細香女史

また十二月十七日の手紙でも手取り足取りの細かな指導を続けている。ようやく翌年三月十四日の手紙では手本を添えて、下記のような細かな説明を加えている。

ケ様ニ横物ニ被成可然候、画ハ（十竹斎ナトノ様）繊筆柔韵、書モ細字よろしく候、時ニ北山定置れ候へ共、アマリ竹ニ計ヨリタル貴名字ハ不面白候ユへ嬝々ヲ名ニ被成、細香を号ニモ字ニモ被成可然候、印ハムリニ皆々急にハホリカヘニモ及ましく候、嬝々之印ハ此方ヨリホラセ贈可申候、此通出来候ハゝ僕モ次韵、其後ニ認遺可申候、幅モ横ハヾ一尺余位ノ小巻ニナリ候カ可然候。

結局細香はこの指導の通りに作成し、芸閣に贈ったようである。
芸閣への答詩は以下の如くである。

寒閨萬里見文章　　寒閨に　万里　文章を見る
宝鴨先焚一炷香　　宝鴨　先づ焚く　一炷の香を
幾日柔荑耽把翫　　幾日か　柔荑もて　把翫に耽る
金針不復繡鴛鴦　　金針もて　復た鴛鴦を繡はず

癡唫無句報来章　　癡唫　句の来章に報ずる無し
漫写脩篁親爇香　　漫りに脩篁を写して　親しく香を爇く
海外不知何日達　　海外　知らず何れの日にか達するを
霜深閨瓦冷鴛鴦　　霜深くして　閨瓦　鴛鴦冷ゆ

文政十一年四月十二日になって芸閣からの手紙が山陽に届き、細香にも畳韻詩を贈ってきた。

再来詩に云ふ。

多謝瓊瑤報短章　　多謝す　瓊瑤　短章に報ゆるを
筆痕瀟灑墨痕香　　筆痕　瀟灑として墨痕香し
浪玕欲把黄金鋳　　浪玕　黄金を把って鋳せんと欲す
懐袖殷懃護彩鴦　　懐袖　殷懃に　彩鴦を護す

清詞麗句好文章　　清詞　麗句　好文章
嬝々風懐字字香　　嬝々たる風懐　字字香し
雨夜披図吟到暁　　雨夜に　図を披きて　吟じて暁に到る
自憐鰥況泣鴛鴦　　自ら憐れむ　鰥況　鴛鴦に泣くを
前韻に畳和し報謝す。二首。江芸閣拝草

これに対して細香の再畳韻詩は文政十一年の夏・秋ごろに書かれ、天保元年（1830）の五月十日に水野媚川の手紙に同封されて姑蘇の江芸閣に届けられた。その詩に云う。

再畳前韻奉答紅芸閣先生　　前韻に再畳し紅芸閣先生に答えて奉る

天涯両度領瓊章　　天涯　両度　瓊章を領す
五彩吟箋墨有香　　五彩の吟箋　墨に香有り
欲就幽窓誦来句　　幽窓に就きて来句を誦せんと欲す
春池水暖浴鴛鴦　　春池　水暖かにして　鴛鴦浴す

到手天邊雲漢章　　手に到る　天辺　雲漢の章
無由一面浴薫香　　一面して　薫香に浴するに由無し
結他翰墨因緑在　　他の翰墨因緑を結んで在り
何恨孤鴛不遇鴦　　何ぞ恨みん　孤鴛　鴦に遇はざるを

女兒何足接文章　　女児　何ぞ文章を接ぐに足らん
自訝相知情意香　　自ら訝る　相知りて　情意の香しきを
百度千回思不得　　百度　千回　思へども得ず
前身或是両鴛鴦　　前身　或は是れ　両鴛鴦ならん

停鍼聊欲報来章　　鍼を停めて　聊か来章に報ひんと欲す
先払几牀先爇香　　先づ几牀を払ふて　先づ香を爇く
一片情懐達千里　　一片の情懐　千里に達す
乃知鴻雁勝鴛鴦　　乃ち知る　鴻雁の鴛鴦に勝るを

これを受け取った芸閣は三度目の返書を唐通詞を介して送ってきた。しかし今回の詩は細香が贈った「再畳前韻奉答」の紙の余白に書きつけて転送されたものだった。

三来詩に云ふ。

山陽絳帳産文鴦　　山陽の絳帳　文鴦を産す
意蕊心花細細香　　意蕊　心花　細細として香し
千里新交絲不断　　千里の新交　絲断えざるがごとし
天孫慣織錦雲章　　天孫　慣れて織る　錦雲の章

前生焼了數頭香　　前生　焼き了る　数頭の香
地角天涯鴛与鴦　　地角　天涯　鴛と鴦と
千種思量無一語　　千種　思量すれども　一語無し
吟聲和涙誦瑶章　　吟声　涙に和して　瑶章を誦す

琅玕一幅墨痕香　　琅玕　一幅　墨痕香し
玉手題詩和短章　　玉手もて　詩を題し　短章に和す
早付装池懸臥榻　　早く装池に付して　臥榻に懸く
此情一似並鴛鴦　　此の情　一に似たり　並べる鴛鴦

相思相望杜蘭香　　相思ひ　相望みて　杜蘭香し
双鯉迢迢寄翰章　　双鯉　迢迢として　翰章を寄す
問取天台会仙石　　問取す　天台　仙石を会すを
幾時遇合両鴛鴦　　幾時か　遇合せん　両鴛鴦

梅雨瀟瀟、灯窓岑寂、稿ヲ脱スルノ後、神ハ裙履ノ次ニ往キ、恍トシテ袂ヲ把ル光景ノ若シ。懸カニ音容ニ擬シ、一ニ座ニ在ルガ如シ。天ヲシテ仮スルニ緑ヲ以テセシメバ、定メテ廬山ノ真面ヲ寓館ノ外ニ識リテ幸ナラン。何如ゾ仙史ノ性霊情韻、中華才女ノ上ニ駕スルヤ。固リ山陽公ノ女彭宣タルヲ忝メルコト無シ。此ノ詩、庚寅五月初十日申刻ニ于テ、才カニ姑蘇ニ到ル。水君媚川ノ札中ニ由リテ付シ来ル。捧誦シテ時ヲ移シ、覚エズ神ハ妝閣ニ馳セ、玉容ヲ覿ルニ似タルヲ。即チ原韻四首ニ和シ、今夏崎ニ赴クヲ俟チテ、便ヲ覓メテ寄セ奉ランノミ。江芸閣識ス。

十月九日付の山陽書簡には水野媚川が京都を訪れ、山陽は高尾・嵐山を案内した様子が書かれている。江芸閣の詩がこの時山陽に手渡されたことは、十月十七日付で山陽が細香宛ての手紙と一緒に送っていることからも理解できる。

此江芸閣畳韵、此間参候。是ハ唐山へ帰居候処へ、長崎知音より相達候て、蘇州ニて認候事也。万里波涛を両度踰候一帋也。大事ニ可被成候。是ハ帋生毛之虞あり。表工に被諭候て、上へふのりをそろと御引せ候て、表背為幅も佳なるべし。先外の事もあれども、此一紙うしなハぬ先ニと如此ニ候。

細香はこの詩に対し畳韻はしていない。江芸閣との交流はこれを機に終わったようである。山陽は十二月二十一日の書簡で詩集の刊行を細香に勧めている。

…それニ付御勧申候義有之、此節江戸より詩仏新板随園女弟子詩選々と申もの贈越候、丁度貴処ニ有之てよろしきもの故呈上候、只今老夫女弟子有之候へとも莫若君者ハ勿論ニ候、世間の女子と違ひ何も外ニ御楽事と申事も有之ましく、御生涯ノ思出ニ是迄之詩を選候て上木被成候ハヽ、可面白候、求名於世ニてハ無之、自娯而已、老夫も相楽可申候、中ニ唐人贈答も有之、芸閣詩も挿入中間候ハヽ、屹度面白詩集出来可申候、…」[79]

これの動機となったのが大窪詩仏が出した和刻本『随園女弟子詩選選』であったことが手紙の内容から推測できる。手紙からは詩集の刊行を熱心に勧める師山陽の姿が読み取れる。袁枚も晩年女弟子に詩集の刊行を勧めた。山陽はやはり袁枚を意識して細香に詩集の刊行を勧めたのだろうか。山陽の熱心な勧めにも関わらず、細香は「女の身としては僭越にすぎる」[80]として断った。

3-2 袁枚の女弟子と江戸の女弟子の違い

菊池五山(1769-1849)[81]が袁枚の『随園詩話』をまねて江戸で『五山堂詩話』を刊行したのは文化四年（1807）である。『五山堂詩話』は袁枚の『隨園詩話』の形式をそのまま取り入れたもので、毎年、あるいは数年を経て刊行し、文化四年から天保三年まで、補遺を合わせて十五巻を刊行した。この期間は袁枚がおよそ四十年の歳月をかけて執筆した『随園詩話』に比べると短期間であった。『五山堂詩話』の刊行については、五山と大窪詩仏による「書画番付」の発行によって、二人の意に反して文人界の批判を浴びたことが原因で『五山堂詩話』巻十以降の出版に陰りが見えて来たと指摘される[82]。もとより袁枚が『隨園詩話』を刊行した動機と五山が『五山堂詩話』を刊行した動機は必ずしも同じではない。五山にとっての『詩話』刊行は多分に商業的な意味合いが強かったと言えるのではないか。

それにしても袁枚が『隨園詩話』の各巻末に閨秀の詩を掲載したように、五山も「余、

---

[79] 江馬文書研究会編『江馬細香来簡集』思文閣出版、1988 年、70 頁。
[80] 江馬文書研究会編『江馬細香来簡集』、71 頁。
[81] 高松藩儒の家に生まれた五山の末裔には大正の人気作家菊池寛がいる。
[82] 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』角川書店、2001 年 12 月、232-234 頁。

閨秀の詩に逢ふ毎に、必ず抄存して以て流伝を広む」[83]と積極的な姿勢を示し、１５名の女性詩人を紹介した。それに加えて、大窪詩仏が文政十三年に和刻本『随園女弟子詩選選』二巻を出版したことは幕末の漢詩壇に女性漢詩人を輩出したことに大きく貢献した。詩仏は和刻本を出版するに当たり、『女弟子詩選』六巻を上下二巻に編集し、『女弟子詩選』中の名前のみ掲載された詩人は削除して、十九名の詩人を掲載した。さらに、『女弟子詩選』中には詩だけでなく、詞と雑文が多く収録されている。袁枚の女弟子は詞や散文でもその才能を発揮していたのだが、詩仏はこれらを削除し、また古体詩も掲載しなかった。日本女性にとっては難解な詞や古体詩を省くことで、女性にも親しみやすい詩集の出版を心がけた詩仏の意図が窺われる。出版後間もなく、頼山陽が弟子の江馬細香にこの詩集をプレゼントしていることが細香の詩集に見える[84]が、この事も江戸詩壇において漢詩人の間で袁枚の『隨園女弟子詩選』が注目を集めていた事実を証明している。

『五山堂詩話』の十五名の女性詩人は江湖詩社の詩人の門人や妻、五山の知人・友人の女弟子、あるいは五山と交流のあった文人大名や家老の侍女・妻などである。補遺を含めて十五巻を出版する中で、十五人という数は袁枚の女弟子の数を考えると決して多い数ではない。九州地方には亀井昭陽の娘少琴や原古処の娘采蘋が漢詩を作っていたが、九州は亀井南冥の信奉する徂徠学が主流であったことが災いしたのか、詩の採録はされていない。原采蘋は文政十二年（1829）江戸に出て、漢詩人として活躍したが、人物紹介のみに留まっている[85]。こうしたことから五山が詩を採録するにあたって、一定の基準を設けていたことが読み取れるのである。

以上のことから、江戸時代の女性にとって漢詩を作り、発表する機会を持つことは非常に限られていたことが理解できる。特に才能を持って生まれ、男性と互角に競争できる知識を身に付けた女性が平穏に生きる道を見つけるのは困難であった。『五山堂詩話』に取り上げられた女性の中で、多田季婉や大崎文姫は自らの教養や才能に比して伴侶となる男性のそれに満足できず、不遇な人生を送る結果となっている[86]。

上記で見て来たように袁枚の女弟子の教養の高さと、詩才、さらにはその積極性については儒教国家の女性としては目を見張るものがある。同じ儒教の政策下に置かれた江戸時代の女性たちは、果たして袁枚の女弟子ほどのエネルギーと積極性を持ち合わせていたのだろうか。おそらくそれは袁枚と五山のエネルギーの差とも比例していると思われる。さらには袁枚と江戸漢詩壇における男性詩人の女性観の違いから生じた結果であることは間違いない。

---

[83] 「余毎逢閨秀詩必抄存以廣流傳」『五山堂詩話』巻二』清水茂他校注『日本詩史　五山堂詩話』（新日本古典文学大系 65）岩波書店、1991 年、552 頁。

[84] 「列媛詩選今在籍　妍朱題贈短文章」（隨園の女弟子詩選新刻成る。少文を朱書して余に賜ふ。）（『湘夢遺稿』下）

[85] 「原采蘋亦不失為秦穆婺精爛煥足以徴文明矣」と紹介されている。

[86] 揖斐高　前掲書、157-162 頁。

しかし、ここで注意しなければならないのは、女性の教養を漢詩文に限って比較することは危険であるということである。乾隆期の女性詩人の輩出は、我が国の十八世紀後半に賀茂真淵が開いた県門に百名以上の女弟子が集まったことを想起させる。文化文政期の江戸における文化の興隆は、国学者による伝統文化の再考をも促した。もともと女性の教養は和歌和文を主体としていたため、女性にとって漢詩文を学ぶための環境は必ずしも整っていなかったのである。乾隆期の女性漢詩人と江戸後期の女性漢詩人の比較検討はこうした条件を考慮した上で可能になると考える。

それにしても、江戸の後期には女性漢詩人の輩出を見たことは確かである。山本北山の塾には有能な女弟子が集まってきた様子は五山の次の言葉からも知れる。

> 此来閨秀鍾于北山先生一家。先生之室緗桃女史善畫卉翎。女弟子文姫號小窓。聡慧能詩。……又有雲章年纔過笄。極愛誦書不願適人。亦奇女子也。先生絳帷講書。此二人毎捧冊侍側。殆有南郡家風。[87]

（此来、閨秀、北山先生一家に鍾る。先生の室緗桃女史は善く卉翎を画く。女弟子文姫、小窓と号す。聡慧、詩を能くす。……又雲章有り。年纔かに笄を過ぐ。極めて書を誦することを愛し、人に適ぐことを願はず。亦た奇女子なり。先生、絳帷して書を講ず。この二人、毎に冊を捧げて側に侍す。殆ど南郡の家風あり。）

（『五山堂詩話』巻五）

また頼山陽も江馬細香や平田玉蘊などの女弟子を各地に持っていた。明治に鱸松塘が結んだ詩社は「七曲吟社」と言い、娘の采蘭や蕙畹を含めた女弟子が多く集まったことから、清の鴻儒兪曲園に「松塘門下女弟子甚多有隨園之風矣」（松塘の門下には女弟子が甚だ多く、隨園の風あり）[88]と言わしめたように、松塘の詩社はあたかも袁枚の隨園のようであったという。このほかにも篠田雲峰・原采蘋のように男性に頼らずに漢詩文・書・画によって自立を試みた女性も出て来た[89]ことなどを見ると、江戸末期から明治にかけて漸く袁枚の影響は各地に波及していたことが窺われる。

江戸時代に漢詩を作り作品を残している女性は、江戸時代から明治にかけて出版された詞華集や地方史に載っている限りでは百名を超えている。女性の作詩人口が増大したとはいっても女性が自らの詩集を出版することは江戸時代ではまれであった。出版費用もさることながら、従属的な考え方は自己を主張することを拒んでいた。「三従総欠一生涯」と言い放った江馬細香でさえ、漢詩人として高い評価を受けていながら、詩集の出版を勧めら

---

[87] 池田四郎次郎編『日本詩話叢書　第十巻』文会堂書店、1922 年、538 頁。
[88] 兪樾撰　佐野正己編『東瀛詩選』汲古書院、1981 年、555 頁。
[89] 天保十三年に出版された『江戸現在　広益諸家人名録』には、一、二編合わせて四十三名の女性が収録されている。

れた時にそれを拒否し、もしどうしても出版したいなら私が死んだあとに出版するようにと言い残したという[90]。そのため細香の詩集『湘夢遺稿』は没後十年たってようやく遺族によって出版された。梁川紅蘭の『紅蘭小集』も夫梁川星巌の『星巌集』の附録として出版されている。原采蘋の場合は自らの詩集よりも父の詩集の出版が優先され、それが叶ったときに出来れば自分の詩集も附録として後ろにつけてほしいと遺言している[91]。江戸時代の女性の生き方としては比較的に主体的であったと思われる上記の三人でも、詩集出版に関しては儒教のモラルが根強く反映されている。この点に関して袁枚の女弟子にはこのような消極性は見られない。

袁枚の女弟子とその影響を受けて江戸詩壇に出現した女性漢詩人を概観して見えて来たことは、女弟子たちの積極性の違いである。袁枚の女弟子たちは自ら手紙を書き、弟子入りを乞うている。自分の才能を信じて、袁枚に弟子入りすることでさらに詩作の技を高めようと願った積極性は、多くの女性詩人の輩出の中で競争意識が芽生えていたことも背景にはあると思われるが、その点は江戸の女性漢詩人には希薄であったように思われる。江戸時代には儒者か医者、あるいは名主階級の家庭以外は、女性が漢学を学ぶ場所が限られていた。たとえ儒者や医者の娘であっても世間体を気にして漢学を学ぶことを許さなかった父親の存在も多く見られる[92]。女性が漢学を学ぶことによって男性よりも高度な知識を身に付けることは、女性の結婚に不利な条件を与えるという考え方である。事実『五山堂詩話』に取り上げられた女性たちの中には、才気豊かな故に不幸な人生を送った女性たちが紹介されている。

こうした背景には江南の開放的知識人社会よりもさらに強く儒教的モラルが日本の女性たちの行動を束縛していた事実が浮かび上がってくる。

四節　九州詩壇の動向―福岡藩と秋月藩を中心に―

4-1 福岡藩の藩学

福岡藩では貝原益軒に始祖をおく朱子学を奉じていたが、宝暦のころ亀井南冥の父聴因が荻生徂徠の古文辞学を奉じて、蘐園の学問を唱えた。この父の志を継いだ南冥は既に少壮のころよりその才能を発揮し、次第に藩主以下皆南冥の説に傾倒するようになった。その結果、福岡藩では安永七年、従来の朱子学を宗とする修猷館のほかに徂徠学を講じる甘棠館が建てられた。南冥の実力は人々を甘棠館に集め、修猷館で学ぶ者はわずかであったという。南冥の評判は支藩である秋月藩にも及び、原古処の父は朱子学者であったにもかかわらず、甘棠館が出来ると同時に古処を入学させた。秋月藩の儒者ももともとは貝原益軒の教えを受け、朱子学を学んでいたが、南冥の名声には勝てず、藩主自ら南冥を招聘し

---

[90] 門玲子『江馬細香―化政期の女流詩人』BOC 出版部、1980 年。

[91] 采蘋の死後土屋蕭海が秋月藩に送った手紙の中に「只心懸りは先父之詩稿未だ上木不致に付兄江託候故、折も有之時は念願相届候様、是のみ頼入との事に候。且又當人詩文稿は可取者あらば先父之後に附刻し、尚暮銘等相調被呉候はゞ望外なり」とある。

[92] 山川菊枝『武家の女性』岩波文庫、1983 年 4 月。

て講義を聴くこととなった。このように、寛政異学の禁の圧力が及ぶまでは福岡藩、秋月藩では古文辞学を講じていた。

原古処は甘棠館の一期生であり、南冥の門人中でも頭角を現し、特にその詩才を認められた人物であった。南冥の教えを忠実に守り、終生古文辞学を奉じたと考えられる。その証拠を挙げれば、寛政元年、松平定信の寛政の改革により、各藩の学問も朱子学に統一された。福岡藩にもその影響は及び師南冥は寛政四年に職を失い、学館甘棠館はその六年後に撤廃された。秋月藩もその余波を受けたが、藩主長舒は南冥を庇護し、引き続き秋月に迎えて講義を続けさせたが、表向きには京都より古学派の山崎闇斎門小川才次を呼んで教授と為し、朱子学を奉じる藩としての対面は保った。しかし、長舒の死後、秋月藩に政変がおこり、本藩の福岡藩の支配が強まった結果、南冥の学統を継ぐ古処は学館教授の職を解任された[93]。こうした結末を見る限り、古処が朱子学者であったはずはなく[94]、その教えを受けた采蘋も古文辞学を学んだことになる。

福岡藩の藩学は種々の理由により天明四年（1784)、他藩には類を見ない学派の異なった二つの藩校を東西に別れて同時に発足させた。一つは貝原益軒の流れをくむ竹田定良を館長とする修猷館、他は徂徠学の流れをくむ御納戸組儒医に抜擢された亀井南冥を館長とする甘棠館である。福岡藩が代々筆頭藩儒として三百石をはむ名門竹田家の他に、町医者から出発し、次第に頭角を現し、朝鮮通信使との詩文の応酬によって天下にその名を馳せた亀井南冥に藩校を任せたことはそれなりの理由があった。もともと徂徠学は儒学を政治学ととらえる学問であり、南冥は藩儒の立場から藩の政治改革を説く『半夜話』や肥後藩の宝暦の改革を題材にした『肥後物語』を書いて藩に献上したことからその才能が認められ御納戸組儒医に出世する結果となった。そもそも竹田家は初代定直（春庵）の父と二代藩主忠之の夫人とは従兄弟という血筋であり、実力をもって認められた亀井家とは学派の違いだけでは片づけられない対立が存在していたようである[95]。

こうした長年の対立が寛政異学の禁を引き金にして亀井南冥は寛政四年に廃黜されるのだが、「伸フルコトヲ能クスレトモ、屈スルコトヲ能クセス。物ニ克ツニ勇ニシテ己ニ克ツニ怯シ」[96]と広瀬淡窓がその性格を指摘したように南冥の起用は、藩主に近い竹田定良にとっては喜ばしいことではなかったことが定良の「与木村」の書簡に見える[97]。文章の道を以て指導する立場を主張した南冥と藩中の道徳の繁盛をのみ願った定良の対立はこの後の両者の書簡のやり取りに顕著に現れている[98]。

こうした対立があったものの南冥の儒者としての地位は明和に始まり寛政の初めまで隆

---

[93] 名倉英三郎「秋月藩稽古館史試稿」(『『日本教育史資料』の研究Ｖ』) 1986
[94] 春山育次郎氏は原古処の学説を朱子学とする。
[95] 井上忠「亀井南冥と竹田定良―藩校成立前後における―」『福岡県史』近世研究編、1989 年。
[96] 広瀬淡窓『懐旧楼筆記』巻八、日田郡教育会、1925 年、97 頁。
[97] 「亀生ナル者ヲ起シテ文学ニ叙ス。彼ノ栄寵ハソノ稽古ノ力ニ由ルト雖モ、吾ガ公ノ斯道ヲ興起スルノ志有ルニ非ンバ、彼ノ如キ亦ナンゾココニ及ブヲ得ン乎。」井上忠前掲論文の引用による。
[98] 井上忠前掲論文参照

盛の一途を辿る。しかし寛政二年の異学の禁は対立していた竹田家にとって修猷館を盛り上げる格好のチャンスであった。宗藩である福岡藩は真っ先に徂徠学者の南冥を免職に追いやり甘棠館館長には南冥の高弟江上苓洲が着任した。さらに寛政十年には亀井家の火災とともに甘棠館は焼失し、再建は許可されなかった。亀井家の不幸はこれだけでなく南冥のあと家督を相続した昭陽までが藩儒としての職を解かれることとなった。亀井家は再建した家も寛政十二年にふたたび火災で焼失し、遂に郊外の百道松原に移り、ここで家塾を開いて子弟の教育を続けた。次節で述べるように、秋月八代藩主長舒の推挙により廃黜後の南冥は秋月藩に招聘されて毎月の講義を行い、また南冥の長年の労作『論語語由』を秋月藩によって版行するという恩恵を受けている。

4-2 秋月藩の藩学

秋月藩は福岡初代藩主黒田長政の第三子長興が元和九年（1623）に筑前秋月に分封されて出来た藩で、明治維新まで十三代の藩主が統治した。秋月藩の教学は安永四年（1775）、七代藩主黒田長堅の時に「始テ学校ヲ設ク原百助教授タリ」[99]とあり、原古処の養父百助（坦斎）を起用して最初の学問所「稽古亭」が出来た。坦斎は貝原益軒の門人である福岡藩儒竹田春庵父子に従学し、朱子学を講じていたが、本藩の福岡藩では十年後の天明四年（1784）、朱子学を講じる東学問所修猷館と亀井南冥が徂徠学を講じる西学問所甘棠館が開設されている。これに従い秋月藩も同年十月、同じ野鳥の新小路の「稽古亭」を改築し、大規模な藩校「稽古観」を完成させた。さらにこれに加えて武芸所も新築され、文武両道の教育が始まった。教授は坦斎が引き続いて任命された。

その後八代藩主となった長舒は、日向高鍋藩の秋月家より封襲された秋月中興の名君であり、大いに文教を奨励したことで知られる。長舒が執った政策はまず文武の道に練達した臼井孟門を学館文武の頭取に抜擢し、また原坦斎の養子古処の才能を見込んで学館訓導に充てた。古処の養父坦斎は、朱子学者である恩師の竹田春庵が教える東学問所修猷館ではなく、荻生徂徠派の古文辞学者である南冥の門下に古処を入門させている。古処はわずか三年間の入塾であったが南冥の門の逸材として頭角を現した。長舒の南冥に対する信認は篤く、毎月秋月に招聘して講読に当たらせた。このころの福岡・秋月両藩の学問は朱子学が衰退し、徂徠学の隆盛が顕著であったことを物語っている。

しかし、やがて両藩とも寛政二年に発せられた異学の禁を無視することはできなかった。秋月藩では長舒が東学問所修猷館の訓導安井金龍・奥山審軒・真藤峨眉らを招いて藩主自ら講義を聞いたという。福岡藩では寛政四年（1792）、西学問所甘棠館の儒者亀井南冥が突然禄を奪われる事態になった。これを受けて秋月藩も長舒が家老の宮崎織部を京都に遣わし、闇斎学派の朱子学者小川晋斎を藩学教授に招いている。原古処も長舒から晋斎に入門するよう命じられたが、長舒のこれ等一連の対処は幕府に対する表向きの処遇であり、内内では相変わらず徂徠学を奉じていた。寛政八年以降の秋月藩の藩校関連事業を見ればそ

[99] 文部省編『日本教育史資料』臨川書店、1969。

れが明らかである。

天明七年、原家の家業である儒者を継いだ古処は、小川晋斎が離任した後、寛政八年には藩校稽古観の助教となり、寛政十二年（1800）、教授頭となっている。さらに文化元年（1804）、古処の家塾の門人が増え、家が手狭になったため、長舒は新しい屋敷を与えて優遇している。また文化三年には亀井南冥著『論語語由』のために序文を附し、出版の費用を秋月藩が出すという異例の事業をおこなった。翌文化四年、新築された古処の家塾に二公子を伴い訪問している。これも藩主としては異例の行動であった。

このように藩主長舒の後援によって亀井南冥・原古処を中心とした徂徠学は秋月藩において健在であったが、この状況は藩主の代が変わることによって次第に変化して行った。藩校稽古観は文化三年（1806）、火災のために焼失し、文化六年再建されて名称も「稽古館」と改められたのは翌年のことであった。原古処は九代藩主長韶の参勤交代に随行して江戸にあった文化九年、突然の辞任を申し渡された。原古処の退任後は長韶が福岡藩から朱子学者の藩儒井土学圃を講師に招き、その後真藤永淵が学館教授として着任している。十代藩主長元の時代には朱子学者の近藤木軒を藩校教授に任命し、天保八年には江戸で佐藤一斎に学んだ吉田平陽[100]を教授に抜擢している。

以上が秋月藩学の最盛期にあたる学風の推移を概観してきたが、ここでも寛政異学の禁が藩校の教育に及ぼした影響が如実に表れている。

4-3 寛政異学の禁の余波

周知のように寛政二年に発令された寛政異学の禁は、時の老中松平定信によって朱子学以外の学問を禁止するものであった。林家によって代々受け継がれていた幕府の教学朱子学は時代とともに少しずつ理念を変えて異なった学派を形成して行った。もともと幕臣や藩士の教学であった儒学が学者の学問と化し、様々な議論を生む結果となっていた。一方、藩士は平和が続く中で藩校での授業に身が入らない状況があった。この状況は天明期の福岡藩藩校創立期の状況にも当てはまり、両藩校の館長は運営に頭を悩ませたという。藩校の衰退ぶりは入学申し込みをしておきながらあまり出席をしない「惰廃者」が多く、また家老が学館に出席する日は出席者が多く、家老のいない日は書生が減少するという状況であった[101]。寛政異学の禁はこうした状況を立て直すために昌平黌の学問を本来の幕府の教学である朱子学に統一し、幕藩体制強化につなげる目的があった。しかし、井上忠氏によれば「これを契機として朱子学以外の藩校教官を罷免した例は、南冥の場合を除いては他に見出し得ない。」[102]とあるごとく、福岡藩のケースは二つの藩校の同時設立状況から見て避けることが出来ない問題を初めから抱えていたのである。支藩である秋月藩の場合も南

---

[100] 平陽は原古処に学び、後に采蘋にも学んでいる。平陽が江戸で佐藤一斎に入門したことを聞いた古処は「一斎へ入門さす程なら亀門にて経学さすべし」と言って悔しがったという。（春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、127 頁）

[101] 井上忠前掲論文、28 頁。

[102] 井上忠前掲論文、34 頁。

冥門下の原古処が文化九年に失脚したことは直接原因ではないにしろ、宗藩と支藩という関係から福岡藩の支配を免れず、寛政異学の禁の余波を被ったものであることは疑う余地がない。亀井門の後輩広瀬淡窓が、古処の退職二年後の文化十一年に古処に贈った詩にその時代の潮流を見る事が出来る。

呈古處先生

梅苑春風鳴佩環　　梅苑の春風　佩環は鳴る
承恩嘗厠侍臣班　　恩を承り　嘗て侍臣の班に厠る
嚢中諫草焚皆盡　　嚢中の諫草　皆焚き盡す
唯有新詩落世間　　唯だ新詩　世間に落つる有り[103]

〇佩環：玉の装飾品

4-4 九州詩壇の動向

九州詩壇について見てみると、貝原益軒他その一門も詩文集を残している[104]ことや、益軒の門人古野元軌が編集した『扶桑千家詩』には元禄期までの京都や福岡詩壇で活躍した儒者の名前が確認できるという。この時代の儒者は折からの朝鮮通信使との応対を経験し、国外の人に詩文を評価してもらう機会があったことも、儒者たちの詩文に対する心構えに刺激を与えたと思われる。

貝原益軒の後、二代藩主黒田光之の時に藩の儒者として召し抱えられた竹田春庵は京都の人で、光之との縁戚関係もあり、代々藩儒としての家租を築いた。春庵は朱子学者であったが益軒と同様和漢の文学に通じ、詩文集『春庵詩稿』『春庵文稿』、和歌集『春庵歌稿』を残している。また春庵は正徳元年の朝鮮通信使と応接しており、その後の享保四年の通信使来朝の際にも竹田家の門人が対応している[105]。

この時代の福岡詩壇で注目すべき事は、すでに一世を風靡していた荻生徂徠の古文辞学が九州の地にもようやく到達したことである。それは竹田春庵が京都の出身である事が大きく作用していたと見られる。春庵の交友は公家や旗本を始め、徂徠学派の服部南郭や雨森芳洲などとの広範囲に渡っており、流派を超えての交際がなされていた事が竹田家文庫の書簡からみられるということである[106]。春庵と徂徠学派との交流は荻生徂徠の旧友である肥前蓮池の釈大潮を通して行われたようで、春庵も時には古文辞格調派の詩を作ることもあったという。享保期に刊行された神屋立軒の紀行詩集『帰鞍吟艸』は江戸勤務の後、帰国途次の風物を詠んだもので、既に格調派の詩風を取り入れたものであるが、貝原益軒は跋文に「新奇」という言葉でその詩風を表現したという。享保初期の福岡詩壇の状況を

[103] 山田新一郎編『原古處先生小伝』34 頁
[104] 宮崎修多「四　漢詩文」『福岡県史』通史編、福岡藩文化（下）、1994 年 3 月、100 頁。
[105] 宮崎前掲論文、104 頁。
[106] 宮崎前掲論文、106 頁。

見る事が出来る。

竹田春庵が荻生徂徠とその門下との交流を深めたことは、春庵の門人にも受け継がれ、中には稲留希賢のように福岡藩士を辞して荻生徂徠に入門したものまで出たこともあり、古文辞格調派は次第に福岡詩壇の主流となっていったと思われる。福岡以外での例を挙げれば、豊後日田では、服部南郭に師事した僧法蘭は地域の詩人の作品を集めた『豊城濫吹』という詩集を寛延四年に刊行し、古文辞学を広めていた。また柳川では明和元年に立花玉蘭が服部南郭の序を付して自らの詩集『中山詩稿』を刊行するなど、九州において徂徠門の名声が高まっていた事を表している。

亀井南冥に到っては父の聴因から徂徠学の洗礼を受け、黄檗僧大潮元皓や永富独嘯庵に師事した。南冥はまた宝暦十三年（1763）二十一歳の時、朝鮮通信使と詩の唱和をはたし、その名が全国に知られる結果となった[107]。青年時代の南冥が置かれた環境は徂徠学隆盛の真っただ中であり、その学を奉じたための学館祭酒の抜擢であったが、皮肉にも、徂徠学を福岡藩に受け入れる窓口となったはずの竹田家と派閥争いとなったのは、やはり時流の波に逆らうことが出来なかった結果といえよう。

4-5 亀井学と江戸詩壇

これまで九州詩壇と江戸詩壇の推移を見て来たが、九州詩壇を代表する亀井学が江戸詩壇にどのように評価されていたのかを見て行きたい。江戸詩壇の推移は上記で見て来たように「李白杜甫はすでに古くさく、李夢陽や李攀龍は似せものの詩にすぎない」[108]状況であった。しかし、江戸には常に地方の藩士が参勤交代で滞在し、短期間の滞在中には詩会に招待されることもたびたびあったが、そこで繰り広げられる江戸と国元在住の藩士との詩風の違いは原古処の江戸滞在記にも見られる。宮崎修多氏が古処の自筆詩稿を辿り、江戸滞在中の行跡を明らかにされた論文「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」[109]はこの状況を詳述している。その中から古処の二度目の江戸滞在にあたる文化九年九月十五日に行われた興味深い詩会の様子を見て見たい。この詩会は豊前中津藩儒倉成龍渚の書室対鷗楼にて開催され、久留米藩大夫有馬息焉を始め久留米藩儒を中心にした詩会であった。原古処も親しくしていた久留米藩儒樺島石梁に同伴して詩会に参加した。この詩会には詩観詩風を異にする久留米藩江戸定府の藩儒高田西巷と国元の藩儒安元節原が同席し、日ごろから詩席に同席することを嫌った二人がたまたま同席することとなったのだが、この二人は同年春に行われた安元節原送別の詩会でも同席している。そこで繰り広げられた詩の論争について樺島石梁の『石梁文集』巻二には以下のようにある。

高曰子誠田舎漢、不解世遷詩亦移、方今轂下名家起、首唱宗元立大旗、大旗所指人風

---

[107] 井上忠前掲論文、24 頁。
[108] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」（『江戸時代文學誌　第五号』）柳門舎、1987 年、30 頁。
[109] 宮崎修太前掲論文。

靡、天下誰得不師資、青蓮工部已陳腐、北地濟南是偽詩[110]

（高曰く、子誠田舎漢なり、世は遷り、詩も亦移るを解さず、方に今、轂下名家起り、宗元を唱へ大旗を立て首む、大旗の指す所、人の風に靡くがごとし、天下誰か師資なきを得んや、青蓮工部已に陳腐にして、北地濟南是れ偽詩なり。）

それに対して安元は、

安曰都人趨時勢、明人豈不子前師、舎旧投新君子恥、我豈に忍為軽薄児。[111]

（安曰く、都人時勢に趨る、明人豈に子の前師にあらずや、旧を舎て新に投ずるは君子の恥、我豈に軽薄児となるを忍ばんや）

とやり返している。同じ久留米藩儒であっても江戸在住者と参勤交代の度に行き来する人々の間には、感情的な優越感と劣等感が入り混ざった複雑な文化意識が成立していたようである。二度に亘って江戸での詩会にたびたび参加した古処はこうした光景をどのように受け止めたのか。古処はすでに一回目の江戸滞在で、秋月に残る巻阿公子の首春詠に和答した詩「恭次瑶韻奉和答巻阿公子見寄懐」に「東都文献非疇昔」と報告している事や、秋月出身で十歳で渡邊湊水の門に入り、後に渡邊の姓を襲った南画家渡邊玄対の詩に対し、「今の東都ニ而無之面白」と感想を漏らしていることから窺えば、亀井門で鍛えられた古処にとって江戸の詩風に迎合する気はなかったようである。勿論古処にとってはその必要もなかったことは菊池五山によって『五山堂詩話』巻八に「筑前の原古處、詩を以って名有り。最も古體に長ず。余再四相見ると雖も稠廣座中衷を訴るに由無し。将に另に雞黍を具て相邀んとす。早已に郷に還る。僅に其花下酔歌一首を得るに云ふ。謝公曾て東山の客と作る、山花酒を勧て山月白し、一朝風雲蒼生を起こす、苻秦百萬膽先づ落つ、我青山に坐して春花に酔ふ、放歌宛も金石を出る如し、一局の残棋圍未だ解せず、誰が為に先折山陰の屐。是短篇と雖も沈雄古健筆力自ら見ゆ」[112]と評価されていることからも、江戸詩壇にその詩名が伝わっていたことが、致仕後に古処に詩を求めて来た旧藩主・幕臣・旗本あるいは藩儒の如き文化人たちの存在があったことによって証明することが出来る[113]。

このように古処の場合は二度の江戸滞在を経験し、その間に多くの文人との交流を果たし、詩名も知れ渡ったことでその後の詩人としての人生を豊かなものにすることが出来たが、亀井南冥・昭陽の場合はどうであったのか。南冥父子は藩主に陪行して江戸に行くことを望んでいたが南冥は遂にその機会に恵まれなかった。しかし息子の昭陽は文化四年、

---

[110] 宮崎修太前掲論文、30 頁。
[111] 宮崎修太前掲論文、30 頁。
[112] 菊池五山編『五山堂詩話』（『詞華集　日本漢詩　第二巻』汲古書院、1983 年、450 頁）
[113] 宮崎修太前掲論文、35 頁。

秋月藩主長舒に陪行してその夢をかなえる事が出来た。その四カ月間の江戸滞在中の出来事を後に『烽山日記』に記している。そこには豊前中津藩儒倉成龍渚が主催する正月詩会に招待された時の様子が書かれている。かつて原古処も樺島石梁に同伴して倉成龍渚の詩会に参加したことは上記に述べた。この詩会の席で昭陽は六七十人の客が苦吟しているのをよそに料理にしたずつみを打つばかり。それに腹を立てた客が詩片をもって昭陽の所に来たが、昭陽は手を振って「江都の酒味、好生人口に可なり」といった。それに驚いた客は咳払いをした。昭陽はその場の空気を読んで「都下群才各自高し、氷絃・斗酒、周遭するを喜ぶ。未だ知らず、座に鍾期の耳有るを。一曲米絃、誰が為にか操らん。」と客の詩韻に次韻した。これに対して客は怒りを爆発させて「天下の大都会、那の田舎と一様ならず。唐宋元明、色々並び作る、総来てただ文化の日々盛んなるに因る了。」と返した。昭陽はまた「呀、信じられず、今日文化の盛んなりとは」と客をやりこめた。

こうした昭陽の態度から見ても明らかなように、山田新一郎は昭陽の江戸陪行に関して「南冥父子に於いては、昭陽の学問修行妍鑽なんどといふ考えは毛頭之れを有せず。関東学者に一本御面を喰はするが目的なるは、当時南冥が兒昱之東遊を懐ふの詩序に、文戦都に傾くといへるにても知らるべし。…亀門の陣営は千百の豕共の寄り付けるものにあらずと、見えを切りたる態度はすさまじきものなり」[114]と亀井家の自信ぶりを説明している。

亀井父子に見られるこうした態度はそのまま亀門の門弟にも受け継がれ、江戸の詩壇に対して一種の対抗意識を燃やしたことを「この時期の北部九州の詩人、とくに亀井門生の一に盛唐以前を奉ずることが、単にそれまでのいきがかり上の所為からだけではなく、三都、なかでも東都の詩風の変化を批判的に踏まえつつそれへのアンチとして自覚的に開天の詩風を選択していったのではないか」[115]と宮崎氏は説明している。

原古処にしても例外ではなく、文政元年ごろの詩稿の中には、東都の詩風の変化を批判的に詠みこんだ詩が散見できる。

> 以怨以群詩可知、変風今日太新奇、洗心試聞開天韻、李杜高標百世師。（読竹渓沼伯経論詩作有感依韻賦之、文政元年五月四日）[116]
>
> （怨を以ち群を以ちて詩は知る可し、変風今日太だ新奇、洗心試みに聞く開天の韻、李杜高標百世の師。）
>
> 詩教塗々耽新趣、瓢竊清人奇字布、青黄錦繡彩斑爛、不出山東骨董鋪。（首春詠三十首のうち、文政六年一月）[117]

---

[114] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（三）」『筑紫史談第五拾集』1930 年、14 頁。
[115] 宮崎修太前掲論文、32 頁。
[116] 山田新一郎編「第一巻　古處山堂詩鈔」84 頁。
[117] 山田新一郎編「第一巻　古處山堂詩鈔」93 頁。

（詩教塗々新趣に耽る、瓢竊の清人奇字を布く、青黄錦繡斑爛を彩る、山東の骨董鋪を出でず。）

このような古処の気概は致仕後に家塾や甘木詩社で育てた門弟に対する期待感にも表れている。古処が京都にいる采蘋に宛てた手紙に「吉太郎儀[118]大学様より一人半扶持に金二両披下候大美談。足下も吉太郎と天下之名を成す不佞が楽に御座候。」[119]と、十歳から育て上げた愛弟子の出世に喜びを隠せない様子であったが、実は本心は弟の瑾次郎が采蘋に宛てた手紙に次のように表れている。「吉太郎は東行後一向寂寥、佐藤一斎へ入門文章等出精之由、詩会には未だ出席不致由、武昌城にて虎視之事はさて置孤視。一斎へ入門さす程なら亀門にて経学さすべしと大人家兄不気之色あり。養泰（吉太郎の養父）もつまらん公と封ずべし。」[120]

異学の禁によって災難を被った亀井南冥・原古処にしてみれば、愛弟子が朱子学者の佐藤一斎門に入門することなどもってのほかであった。

第Ⅱ章　原采蘋の少女時代

一節　亀井少琴との交流

1-1 原家と亀井家

原家の租喜多崎周庵は福岡の黒田藩に仕え、貝原益軒に学んだ。享保二年、支藩の秋月に招聘され無足組に加えられる。原姓を名乗ったのは周庵の子坦斎、通称百助の時で、即ち原古処の養父となる人である。坦斎は貝原益軒の門人である竹田春庵父子に従学し、朱子学を学び、秋月藩の文学の基礎を築いたとされる。

原古処は手塚甚兵衛の第二子で、名は叔曄、字は士萠、震平と称した。古処は号である。母は名門佐谷氏藩医の松庵の娘である。名門の血筋を引く古処は坦斎に学び、その才学を見込まれて養子となった。養父坦斎は恩師の竹田春庵の東学問所修猷館ではなく、荻生徂徠派の南冥の西学問所甘棠館に古処を入門させた。古処はわずか十八歳から三年の塾生経験であったが、亀門中頭角を現していった。古処が帰省するにあたって南冥が贈った詩がある。

秋月原生来入学。賦此。送其帰三首（その内の一首）

古處山高秋月城、君家賦筆冠崢嶸、期他竹帛千秋擧、莫墜模楷三世名。[121]

（秋月原生来たりて入学。此れを賦して、其の帰るを送る　三首。

古處山高し秋月の城、君が家賦筆は崢嶸を冠す、他の竹帛千秋の擧を期す、墜すなか

[118] 矢野吉太郎、後の江藤柯亭
[119] 春山前掲論文、127 頁。
[120] 春山前掲論文、127 頁。
[121] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二）」『筑紫史談第四拾九集』1930 年、15 頁。

れ模楷三世の名を）

〇崢嶸：卓越したさま。
〇竹帛：書物。

天明七年、父坦斎老衰のため隠居、古処は原家の家業である儒者を継いだ。寛政八年には藩校稽古観の助教となり、寛政十二年（1800）、教授となった。この出世は天明五年、高鍋の秋月家より秋月藩の黒田家に封襲された八代藩主黒田長舒の推挙によるものとされ、以後秋月藩の学問は、上杉鷹山の甥にあたる長舒による藩学振興の政策を受けて最盛期を迎えることとなる[122]。

さて、亀井家と原家の交流は古処が甘棠館に入学した時点から始まり、以後采蘋の代まで続く。天明五年、封襲直後の藩主黒田長舒は亀井南冥と息子昭陽に秋月で謁見している。この引き合わせが誰によるものかは不明であるが、南冥は翌天明六年からは毎月秋月藩において藩主及び藩士に講義をすることとなった。南冥の秋月滞在は原家であったことが南冥の古処宛ての書翰から知られる[123]。このように原家と亀井家の交流は秋月と福岡を行き来して続けられていたが、その他にも書簡を通して親密に行われていた。南冥にとっては優秀な門弟である古処に対し、書翰を通して勉学に励むよう指導をしている。寛政二年十月二十六日の書状には次のように記す。

…後十年名を成候者、此両人（肥後の富田大鳳、八代の法海）と被存候。筑に而は、足下之詩、兒昱之文、當時之勢甚奮進之様子に相見申候。何卒小生見込ちがひ不申候様、御勤可被成候…書は御修業可被成候。此節江戸に遣候に當り、各敗北は書に御座候。餘り見事にも不及候へども、見苦しからざる程はなく而は不叶事に御座候。技中の易き事と相見申候、必御学可被成候…[124]

上記にあるように古処の詩才と昭陽の文才を南冥が指摘し、後に「原詩亀文」と言われる所以となった。この手紙の二年後、南冥は廃黜の憂き目にあい、自宅幽居させられるのだが、秋月藩では家老の宮崎織部が直々に南冥の自宅を訪問し、失意の南冥を激励している。この激励を受けた南冥は、それまで中止していた詩作を再開させるほど宮崎訪問に慰められたという[125]。支藩といえども一国の家老が直々に一儒者の家を訪問することは異例の事に見えるが、小藩であるだけに、藩主（長舒）・家老（宮崎・渡邊）・藩儒（古処）の結束も強く南冥を庇護する体制が整っていたと見られる。

---

[122] 秋月藩は寛政異学の禁に対して表向きに、京都より山崎派の小川才次を招いて寛政四年～九年まで稽古観教授としている。
[123] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二）」『筑紫史談第四拾九集』1930 年、16 頁。
[124] 山田新一郎前掲論文、17 頁。
[125] 山田新一郎前掲論文、17 頁。

南冥は自宅幽居の間『論語語由』の執筆に取り掛かり、寛政五年には脱稿しているが、この版行にも秋月藩の資金を用いて文化三年にようやく行われた。財政難にも関わらず[126]、藩主自ら序を附し、『論語語由』の出版に踏み切った長舒の意図は何であったのか。長舒が封襲直後に南冥に謁見した事はすでに述べた。その後南冥を師と仰ぎ、毎月の講義を聞き、廃黜の後も庇護に努めている。こうした長舒の一連の南冥擁護は、政治を超えて純粋に学問・文芸の振興に意を用いた結果によるものと思われる。

秋月藩の亀井家庇護は南冥だけに留まらず、昭陽にも及んでいる。『論語語由』の開版を果たした同じ年、長舒は昭陽を参勤交代に随行させた。もともと亀井父子は江戸行きを長年の望みとしていたようで、その意を汲んでの決行と思われる。江戸文化はまさに百花入り乱れての盛りの時に、九州第一の亀井学者を引き連れる事は長舒にとってもそれなりの意味があったと山田新一郎は指摘している[127]。昭陽はこの時、四カ月間の江戸滞在を経験している。この時の経験談については節をあらためて述べる。

1-2 儒者の娘―采蘋の場合

原采蘋は寛政十年（1798）四月、原古処三十四歳、母雪二十三歳の娘として生まれた。同じ年、亀井家でも女児少琴が生まれている。采蘋、名は猷、またの号を霞窓とも言った。幼少のころから学才を現し、その書斎の名を有煒楼と名付けている。五歳上の兄に瑛太郎がおり、四年後に弟謹次郎が生まれている。采蘋三歳の時、即ち寛政十二年に古処は藩校稽古館の教授となり、文化三年（1806）、九歳の時には私塾古処山堂を開くための新家屋を賜り、翌年には藩主黒田長舒が二人の公子を連れて書画御覧の名目で古処山堂を訪れ、書画を賞し、詩文を談じる機会があり、采蘋や母の雪も藩主に謁見している。このような儒者の家庭を藩主自ら訪れる等は異例の事で、少女の采蘋にとってはこの上ない名誉を感じ取ったに違いない。実際原家の家塾は古処の名声により藩外からも塾生が集まり、采蘋は塾生から「采蘋さま」と呼ばれていたという[128]。

しかし、采蘋の家庭教育がどのようなものであったかは記録が残らず、想像の範囲を出ないが、男の兄弟に交じって儒学の経典を学んだであろうことは亀井昭陽の娘少琴の家庭教育を見れば想像がつく。采蘋と少琴は八、九歳ごろから父に連れられ福岡と秋月を行き来して交際を始めた[129]。父親同伴の二人の交際の様子は昭陽の手紙から察せられる。

> 友之（少琴）目痛。敬之（少琴の妹）頭痛。皆在褥。メノイタミマスユヘテカミハアケマセンと道（猷）君に傳語仕候。孫之曾祖は近頃頗困窮難渋多々不可言。道君御再遊は出来間敷や。細君友之さる三より同辞懇請仕候。御出被成候はゞ、宰府に一泊被

[126] この時期、幕府による神田の聖堂の修繕のため、秋月藩もその一役を担っていた。（山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（三）」『筑紫史談』第五拾集、1930 年、13 頁）
[127] 山田新一郎前掲論文、14 頁。
[128] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二）」『筑紫史談』第四拾八集、1929 年、17 頁。
[129] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（三）」『筑紫史談第』五拾集、1930 年、20 頁。

成、一日五里にて御出可被成候。松に其通り申聞置候。[130]

二人の交友が両家にとっても慰めであった事が窺われる。南冥は聡明な采蘋をこよなく愛したと伝わるが[131]、この時期の南冥の精神状態に苦慮していた家族が、采蘋に助け舟を出した模様である。この時采蘋は十一歳、すでに南冥からその才覚を認められ、亀井家からも頼られていた様子が知られる。

この年、原家は新藩主長韶によって馬廻組に昇格し、百石を支給される。その二年後に御納戸頭となってさらに二十石が加増された。藩学の教授が政務をも兼務する異例の人事であるが、前藩主・家老らの信認が新藩主にも引き継がれていた事が確認できる。古処は新藩主長韶に随行して文化七年と九年、二度の江戸詰めを経験している。南冥によって詩才を認められた古処にとって、文化期の江戸滞在は後の人生に大きな影響を与える結果となった。最初の滞在では、佐賀藩の古賀精里・古賀穀堂父子、久留米藩の樺島石梁、広島藩の頼春風・杏坪兄弟らと交流した。すでに第Ⅰ章で見てきたように、文化期の江戸は、江湖詩社の活躍めざましく、菊池五山が『五山堂詩話』を出版し、女性の文壇での活躍も次第に注目され始めていた頃である。十四・五歳の才能豊かな娘を持つ父親の心情はいかばかりであったのか。幸い江戸から采蘋に宛てた古処の手紙が残る[132]。この手紙の内容については次節で詳述することとして、ここでは原家の隆盛期に儒者の娘として育てられた采蘋が、どのような少女時代を過ごしたかを主に亀井家との交流を通して照査するに留める。

1-3 儒者の娘―小琴の場合

亀井昭陽の娘少琴は、祖父南冥によって亀井学と称される家学を樹立した名家に生まれ、四才から習字を習い始め、六歳で『孝経』の素読を覚えたという。七歳になると『論語』に進み、また『詩経』をも読み始めている[133]。嘗て南冥が古処にあてた書状に「書は御修業可被成候。此節江戸に遣候に當り、各敗北は書に御座候。」[134]と書の稽古に励むように勧告していることからも察せられるように、少琴も書を厳しく教えられて育った。その成果は文化三年(1806）の太宰府における書画会にわずか九歳の少琴の書が出品されていることからも察することが出来る。この書画会は秋月八代藩主黒田長舒が原古処と亀井昭陽に命じて、太宰府天満宮に於いて開催されたもので、「西都雅州集」と銘打っている。江戸参勤で幾度か経験したであろう書画会を、西都福岡でも開催したいと願った黒田長舒の、文雅に注いだ情熱を知ることが出来る。少琴はこの書の出品により、長舒から縮緬帯を賜って

---

[130] 山田新一郎前掲論文、20 頁。
[131] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、38 頁。
[132] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」(『江戸時代文學誌』第五号）柳門舎、1987 年、18 頁。
[133] 庄野寿人前掲書、15 頁。
[134] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二)」『筑紫史談』第四拾九集、1930 年、17 頁。

いる。おそらく九州の地で書画会が開催されたのは初めての事であり、そこでの華やかなデビュウは九歳の少女にとってのこの上ない名誉と自信になったはずである。

十五歳の時、少琴は自室を与えられ、昭陽によって『詩経』の国風・周南・関雎からその名をとって「窈窕邱」と命名された。少琴はこの三年後、これまで詠みためた詩を一冊にまとめ、『窈窕稿乙亥』として残した。おそらくこの詩集は独身時代の記念碑としてまとめられたもので、少琴の居室「窈窕邱」は結婚後には昭陽の書斎になっている。

翌年の文化十三年(1816)には昭陽の門人で、少琴とは再従兄弟にあたる三苫源吾と結婚する。源吾は南冥の希望で亀井家本来の家業であった医業の再興を担うべく、医者としての修業をし、亀井家を分家して以後、娘婿をもって医業と儒者の兼業を南冥以来復活させることとなった。結婚してからの少琴は、二人の弟がまだ小さく父親の助けが出来ないため、昭陽の著述の清書を手伝い、弟たちの詩の添削など、実家の手伝いに忙しい日々であったため、結局夫妻は実家の敷地に移り住むこととなった。こうした状況は昭陽がいかに少琴の才能に依存していたか、また娘夫妻の存在に依存していたかが窺われる。

また少琴は画が得意であることはその遺作の多さによって証明されているが、師は誰なのか不明である。少琴の名声は漢詩ではなく画によって広められた。天保二年の『画乗要略』や嘉永六年の『古今南画要覧』に作品が取り上げられ、画家としての才能を開花させている。文政六年には長崎奉行からの懇切な依頼が福岡藩に届き、少琴の書画各一枚、昭陽の書二枚を要請している。

少琴は昭陽の長子として誕生した。初めての子供の誕生が女の子であった事に失望する父親は稀ではなかったとしても原古処に宛てた昭陽の手紙には彼独特の表現を以てその誕生を報告している。

> …拙荊十九日月分娩。生無益兒候（十六日之夕、夢両蛇繞身　果然得女奇絶）乍然婉孌吁々、不免酒公之情態候。是又可笑…[135]

昭陽の長男は少琴八歳の時に生まれ、続いて二男は十一歳の時であった。この時まで少琴は既に一通りの学問を学んでいた。亀井家の教育が男女を問わず行われたものかは今後研究しなければならない問題であるが、少琴の業績を見る限り昭陽の子供の中でも突出した才能を持って生まれて来た事は推察できる。昭陽は文政元年、頼山陽が亀井家を訪問した際、少琴に命じて席画を描かせている。山陽は少琴の描いた「竹図」に題して「過元凰題其女少琴墨竹」という七言絶句を残している[136]。この時少琴は二十一歳、すでに結婚していたが、遠方からの来客の前で席画を披露させるということは、少琴の画才がそれなりの評価を得ていた事を示している。

少琴には「守舎日記」という天保二年四月から三十六日間の日記が残る。夫の留守中の家

---

[135] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（三）」『筑紫史談』第五拾集、1930 年、20 頁。
[136] 庄野寿人前掲書、40 頁。

の出来事を記録したもので、少琴の日常のあり様が垣間見える。この日記には「書画依頼」という記録が頻繁に出てくる。すでに記したように、天保二年の『画乗要略』に紹介されたこともあって、大坂の絵師が少琴の絵を求めて訪ねて来た。少琴は親戚以外のこれらの求めには応じず、「嗚呼、小人の非礼を悪む」[137]と日記に記す。幕末の武家女性のこうした態度は紀州藩藩儒の妻川合小梅（1804～1889）にも見られるが[138]、自らの作品を金銭で売買することに対して嫌悪感を示している。

1-4 采蘋と少琴―異なる人生の選択

上記で見て来たように、少琴の家庭教育については、今宿亀井家のご子孫が大切に保管している資料によって詳しく知ることが出来るが、采蘋についてはその資料を見出すことは困難である。それでも、昭陽の古処宛ての書簡によって知られるように、八、九歳頃より亀井家と交流し、少女期に南冥・昭陽の薫陶を受けたであろう事、また古処の教育熱心ぶりは江戸から采蘋に宛てた手紙から読み取れることなど、采蘋の家庭教育も少琴と変わらない儒者の教育を受けて育ったであろうことは想像に難くない。さらに福岡・秋月両藩は長崎に近いことから詩書画三絶の中国文化の影響をいち早く受ける環境にあり、少琴の教育もまさに三絶の教養を習得している。采蘋の場合は書と詩は多く残されているが、絵は殆ど見るものがない。

ここで、少女時代の采蘋にとって影響を及ぼしたであろう人物を紹介しておきたい。秋月藩士江崎家に生まれた東軒は後に貝原益軒の妻になり、才徳兼備の東軒は益軒の著述の書写をし、内助の功でその名が知られている。江崎家と原家とは目と鼻の先であり、東軒の存在は采蘋の少女時代の憧れの対象であった。少女時代の采蘋は東軒を目標に勉強に励んだことと思われる。後年采蘋は東軒の書に賛を依頼され、次のように書いている。

> …我國稱爲佳偶者。獨有吾宗藩貝原益軒先生而已。其室江崎氏才德兼備。而博涉徑史善書及和歌。先生之著述亦頗有内助云。余先生賞從遊于先生。業成而爲藩文学。是以具伝聞其事蹟。而常汲々有企羨之志。雖然資性謭劣不才。從倣其顰以使人掩口焉耳。…[139]

自分が生まれる八十四年前に生まれた同郷の才媛であり、常に「汲々有企羨之志」として大人になってもその志は忘れていなかったのである。原家に降りかかった災難がなければ、采蘋は東軒のように才徳兼備の妻となって、夫に内助の功を尽くす人生を選択していたことであろう。この東軒を目標にした采蘋の願望は古処も承知の事であったと思われ、致仕する前の古処の手紙にも教育熱心な父親ぶりが窺われる。十六歳まではこのような夢

---

[137] 庄野寿人前掲書、60 頁。
[138] 川合小梅著　志賀裕春・村田静子校訂『小梅日記１～３』東洋文庫、平凡社、1976 年参照。
[139] 春山前掲論文、33-34 頁。

を抱きながら順調に勉学に励んできたが、文化九年の古処の失脚は原家の運命ばかりでなく、采蘋の運命をも変えることとなった。病弱な二人の兄弟に代わって儒家である原家の後継者としての運命を背負わされたのである。

こうして少琴と采蘋は、儒教の教えに背くことなく父親の望む通りの人生を歩んだ。少琴は家庭の主婦となり、かつて自分が受けたように、子供の教育に力を注ぎ、夫を支えて内助の功を尽くし、晩年は絵を描くことに喜びを見出していった[140]。一方采蘋は生涯独身で漢詩人としての一生を貫いた。

二節　父古処の願望

2-1 古処の手紙

原古処は致仕する前、二度の江戸勤務を果たしている。最初の江戸行きは、文化七年十一月、九代藩主黒田長韶に随行して翌年の五月秋月に帰着。二回目は文化九年三月から翌年の五月ごろまで滞在している。この間の詳細な研究には宮崎修多氏の論文[141]がある。以下の稿は多くを宮崎氏の論文に拠る所が多い。

一回目の東上は前年に無足四人扶持十四石から蔵米百石馬廻組に昇格した晴れやかな江戸随行であり、途中山口の亀井門人や神辺の菅茶山、たまたま塾長をしていた頼山陽に会い、詩の贈答を楽しみながらの道中であった。十二月二十一日に江戸着。江戸においては秋月出身の画家渡邊玄対の林麓草堂を中心にして詩書画の文化的交流が行われており、藩主を始め江戸家老一家も林麓草堂の門人として学んでいたという。古処も連日のように詩会に参加し江戸詩壇の饗宴に身を置いていた。

こうした中、文化八年閏二月二日、古処は御納戸頭本籍に昇格し、同日娘采蘋に宛てて手紙をしたためている。

一筆申進候。□□□□催候砌、御揃御無事□□□□候。われら達者也。□□□つ裾つきいもし等下候。御受取可有之候。此も餘程かゝり申候。其替り稽古事出精可有之候。書抔ハ今少し御上達ハ可有之存候。江戸の女に御國の様なる惡筆愚筆無筆の者ハ身受不申候。いわし売抔の女房ハ格別、御奉公等いたし候者ハおすゑ抔迄も相応ニ達者ニ認申候。何卒御出精可有之候。書物ハ取止候や。江戸の様、拙者隙有之候へハ世話も出來候へ共殘念に候。尚近々可申入候。あらかしこ。

古処

閏月二日

阿猷殿[142]

---

[140]「母は一昨年以来のもとめの書画を日々書き申しおり候。書画がなによりまぎれてよろしく候。」と息子雋永宛の書簡に見える。（森川登美江「少栞女史のこと」『江河万里流る』亀陽文庫、1994年、243 頁。

[141] 宮崎修太前掲論文参照

[142] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」（『江戸時代文學誌』第五号）柳門舎、1987

文面には何か着る物でも贈ったのか、その替わりに稽古事に精を出すよう勧告している。数か月の江戸滞在で見聞きした御殿奉公の女性の教養の高さに目を見張り、娘にも同様の教養を身につけてほしいと願う父親の姿が窺われる。実は古処を驚かせた才女は身近な秋月藩江戸藩邸の奥で働く側女たそであった。文化八年閏二月二十五日に古処が秋月の長谷川源右衛門、中村直記に宛てた手紙にたそに関する記述が見える。古処は二月望日、慈光院おける雅会の模様を詳しく報告し、その末尾に「奥ニたそと申御側居申候。才女ニ御座候。歌を読書も達者ニ仕候。詩を遣申候処返歌仕候。」とあり、側女のたそという才女に巡り合った驚きを付け加えている。たそに贈った古処の詩は「赤紫清泉才足誇　千秋翰苑闘芬葩　紅桃緑柳今猶古　春満風流女史家」、それに対してたそは「汲れすよ花も柳もそれなから赤紫泉の水清くして」と返し、さらに古処は重ねて「赤羽橋辺花鳥春　西冥弧客意難親　真成莫是遺彤管　争識東方有美人」と贈っている[143]。

秋月にはかつて貝原東軒という才女の存在があったが、その後は身近な女性では、側女たそのように漢詩を理解し、和歌で切り返すような才媛は見当たらなかった。側女であれば御殿奉公のための厳しい教育を受けての結果である。古処が娘の将来をこのあたりに照準したとしても不思議ではない。

二通目の采蘋宛ての手紙は文化九年五月四日に出されている。即ち古処にとって二回目の江戸滞在の時である。文化八年五月、一回目の江戸勤務から帰った後、十一月に藩士七名による福岡藩への出訴に端を発した、所謂「織部崩れ」といわれる政変が起こり、古処と親しかった渡邊、宮崎の両家老は処分を受けた。政変が落ち着いた十二月、古処は退役を願い出たが聞き入れられず、藩からの要請に従って文化九年三月三日、二度目の藩主随行を果たした。一度は「来春江戸御供御免被仰付」と命が下ったものの「又々御供被仰付」と改められた結果によるものであった。こうした事情を含んだ二度目の東上である。

江戸に着いて間もなくの手紙には、前回の勤務とは違った生活の窮乏を訴える言葉とともに、手習いを奨励する文言を忘れていない。

> 指書拝見御無事御暮一段之事ニ候。小生無恙候。定綺羅も中々物入多由に御座候。衣服不一方事の由ニ御座候。八九兩之給銀にて常きらゆへ事六か敷候と申候。被仰下候品も此便にとも下可申候。一向ニ御門外不致候。去廿八日十番様江上り申候。其前神明前江一へん出遊申候。赤穂入江鷗助送別ニ候。尚、近々可申入候。手習見事ニ出来上り候ハヽ出世も出来可申候。頓首。
>
> 古処山樵
>
> 五月四日
>
> 采蘋足下

年、18 頁。

[143] 宮崎修太「古処山樵東行譜」(『江戸時代文學誌』第七号）柳門舎、1990 年。

尚々自愛専一ニ候[144]

「手習見事ニ出来上り候ハヽ出世も出来可申候。」と結んだ古処の真意は何であったのか。采蘋にとっての出世とはいったい何を意味するのか。寛政の初めごろ、亀井南冥が古処に宛てた手紙の中で「書は御修業可被成候。此節江戸に遣候に當り、各敗北は書に御座候。餘り見事にも不及候へども、見苦しからざる程はなく而は不叶事に御座候。技中の易き事と相見申候、必御學可被成候」[145]と書の大切さを力説していた。南冥の教訓の通り江戸在中の古処が痛感したことは手習いの大切さであった。御殿奉公であれ儒者であれ、書さえ上手であれば江戸では出世が可能であることを古処は見てとったのである。

三節　秋月藩の政変

文化八年に起きた秋月藩の政変は、それまでの秋月藩の情勢を一変させるものであった。事の起こりは帰国中の藩主長韶と古処二人が福岡に向かう途中、藩士間小四郎・手塚安太夫・末松左内・手塚龍助・伊藤出来助・坂本汀の七名が宮崎・渡辺両家老の「我侭之次第」、「御政道取斗不宜」を理由に本藩のお目付けに出訴し、長韶と古処はこの報を二日市で受けた。これにより宮崎織部は家老罷免・知行召上られ福岡に送還され、息子の藤右衛門も家老職分御雇勤を解かれ同じく福岡に送還された。渡辺帯刀は家老罷免、五百石減知のうえ押隠居となり、息子の領地内に蟄居となった。息子の半之助は家老職分解雇され、馬廻組に格を下げられた。これに代わって福岡藩より家老浦上四郎大夫、大目付根本孫三郎、御裕筆頭取安藤新平、十人目付御側筒頭坪田庄左衛門・井上権之進外が送り込まれた。

政変終結の達せられた十二月、古処は退役隠居を願い出た。先代藩主長舒の時以来、宮崎・渡辺両家老と古処は藩の中心となり秋月藩の文化の興隆に貢献してきた。しかし、秋月藩の財政はこの時期窮乏を極め、一部の藩士は詩書画にうつつを抜かす両家老や古処の藩政に不満を持つようになっていた。古処にとって宮崎・渡辺が去ったあとの藩には仕える気持ちはなかった。しかし、この願いは却下され、翌九年三月三日、再度の東上となる。宮崎・渡辺が失脚したとはいえ、江戸に上ってみれば多くの詩友と交わる機会には事欠かなかったことが古処の詩集から読み取れる。古処はこの頃より『源氏物語』を読み、その感想を漢詩で表現する事を試みている。致仕後には源氏物語五十四帖を詠んだ漢詩を絵巻物に仕立て、友人や娘に贈っている。

秋月藩は古処が江戸滞在中の十一月、「御省略ニ付学館御取止」とした。藩儒としての家系を守ってきた古処にとってこの決定は承認出来る事ではなく、藩主に対して再三諫言を呈したと言われる。その結果、帰国後の六月二十六日、「江戸詰中思召不叶候儀有之退役被仰付」られた[146]。御納戸頭退役を申し渡された日、古処は息子の瑛太郎と詩を賦して過ご

---

[144] 宮崎修太前掲論文、21 頁。
[145] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二）」『筑紫史談』第四拾九集、1930 年、17 頁。
[146] 宮崎修多「四　漢詩文」西日本文化協会編『福岡県史　通史編　福岡藩文化（下）』西日本文

し、報を聞きつけて集まった門弟たちと会したという[147]。

古処に対する処分はこれに留まる事はなかった。政変終結後もくすぶりつづけていた火種は、八月四日、蟄居中の渡辺帯刀他六名が福岡の役人に投文したことが発覚し、八月八日、六人は流罪となった。古処が八月二十一日に「御詮議ヲ以家業御免、平士被仰付」られたことはこの事件ともあながち無関係ではないと推測されている[148]。さらに九月二十四日には「願通隠居、家督被仰付」られて、長男瑛太郎が百石の馬廻組を相続した。

財政難、寛政異学の禁令などの複数の要因によって、八代藩主長舒を中心とした宮崎・渡辺両家老・古処による秋月藩の文化奨励の政策は終わりを告げた。秋月藩の学問は古処の弟子、吉田平陽らの時流の波にのった「実学」中心の学問へと移行して行った。古処は以後、詩文を旨として生きる人生を選択したのである。

四節　婚約の破談

文化九年(1812)三月二日の日付けで[149]、亀井昭陽は采蘋に縁談を紹介する手紙を古処に送った。この日は古処にとって二度目の江戸出発の前日に当たる。それには、

> 高輪一昨日相達申候。返書認置候得共貴价不再来、昨朝より出立天山に罷越申候。未知復書如何。先以御清福大慶奉存候。扨道閨秀御縁之儀に付、縷悉被仰遣候趣奉了知候。高輪は民平方へ卽刻遣申候。春藏方は父母及小弟又有老祖母合五人禄百十石かと覚申候。春藏、俗人よりは不娶との見識故、其父相望候由に御座候。友ももらわれ申候得共、之は他の家に安じ可申氣質に無之故斷申候。向方は血類生計何事も申分無之候。友も遣候得ば、よき安心に御座候へども、乃公之甜犢に而、迂遠におほし立候故、後来無覚束断候儀に御座候。奩之儀は春藏何望、定而被仰遣候通りに而可宜奉存候。しかし氷人は甚不得手に御座候。民平より聞合せ申候上委細御掛合可仕候。十日迄滞申候。其内御閑出来候はゞ高献方迄なりとも御出浮被下候。春藏は道草と改名仕候。取交錯雑御諒察可被下候。[150]

とある。春蔵は福岡藩医香江春蔵のこと。香江氏は昭陽の祖父聴因と同門であり、また香江氏の子弟は亀井門に学んだということから両家の交際は長年のものであった。故にまず小琴を春蔵の嫁にと申しこんだのであろう。友は小琴のこと。民平は南冥に学んだ山口白賁で昭陽の妹と結婚している。小琴が断った縁談を采蘋に紹介した形となったこの縁談は、結果的に成立を見なかった。その理由については様々取りざたされているが、確かなこと

化協会、1994 年 3 月、160 頁。

[147] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」(『江戸時代文學誌』第五号）柳門舎、1987 年、28 頁。

[148] 宮崎修多「四　漢詩文」『福岡県史』通史編、福岡藩文化（下)、1994 年 3 月、160 頁。

[149] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、44 頁。

[150] 春山育次郎前掲論文、44 頁。

は知るすべがない。またこの手紙を受け取った古処がどのように対処したのかも伝わっていない。ただこの手紙を受け取った翌日、江戸に向けて出発し、五月四日に采蘋に宛てた手紙に「手習見事ニ出来上り候ハヽ出世も出来可申候。」と書き添えていることから鑑みれば、この時点で婚約が成立していたとは考えにくい。春山氏によれば古処帰国後に破談になったと推測されておられるが、この手紙の内容からその説は妥当とは言えない。

ともかくこの破談後も結婚をあきらめたのではなく、養子の縁組についてやり取りがあったことが亀井昭陽の書翰から知られる。

> 直方より近來書到申候。他家へ行事は決而不相叶身上也と申切遣候。殘念之儀に奉存候。近來は平戸に居申候。鳥渡來遊仕候筈に御座候相待居申候。面唔に而相勸可申候得共、是は嘘言は不申生に付不諧と奉存候。垂轅は御改被成可然奉存候。[151]

七月三日の日付のあるこの手紙は、何年に書かれたかは不明とのことであるが、昭陽に頼んだと思われる養子縁組が断られた旨が書かれている。

第Ⅲ章　漢詩人としての修業時代

一節　父母との遊歴

1-1 遊歴

第Ⅰ章一節でみて来たように、寛政の改革以降、朱子学者以外の儒学者は藩儒としての仕事に就きにくい状況や、また、三都の文化興隆が地方の豪農や名主などの裕福な教養人を刺激して『五山堂詩話』に見られるように詩を嗜む人々の増加に着目した儒者たちは、藩儒としての窮屈な生活を嫌い自由に各地を遊歴し、詩を吟じ、書を講じ、また詩の添削をしながら生計を立てるライフスタイルを確立して行った。このライフスタイルは芭蕉に代表される俳諧の世界では早くから行われていたが、漢学の世界でも近世後期になってようやく行われるようになった。こうした背景には学問を習得した人々の都会での就職難と地方都市での文化的な需要増大があった。地方都市の文化向上に一役を担ったものに武家の参勤交代がある。江戸勤務を経験した武士は江戸と国元の文化の違いに気付き、新しい江戸文化を国元に持ち帰った。采蘋の父原古処もその一人であった。文化七年から九年にかけて藩主に同行した古処は、江戸での文化の爛熟期を身を以て経験することとなった。古処は秋月九代藩主黒田長韶や文人大名として有名な前伊勢長島藩主増山正賢らが出席した雅会に同席した様子を、国元の藩士に手紙で知らせている。それには詩人、画家、書家、音楽家など一流の文人が会し、特技を披露し、それぞれが見事であること、また奥女中のたそという才女が歌や読書が達者であると驚きを以て報告している[152]。こうした光景は秋

---

[151] 春山育次郎前掲論文、50 頁。

[152] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」（『江戸時代文學誌』第五号）柳門舎、1987 年。

月や宗藩の福岡でも経験しなかったことであり、まして奥女中が漢詩を理解し、それに対して見事な返歌を書き送ったことは古処にとって新鮮な驚きであったに違いない。

古処が江戸に滞在した頃は菊池五山がすでに『五山堂詩話』の四巻～六巻を出版していたころであり[153]、江湖詩社を取り巻く詩人の中には女性の弟子もあった頃と思われる。古処のこの時の経験は、采蘋の将来を決定する上で少なからず影響を及ぼしたと思われる。采蘋のみならず古処自身の身の振り方にも大きな影響を及ぼしている。文化八年の秋月藩に起こった政変以来、古処の胸中を巡っていたことは、かつて師南冥から詩才を認められたことを胸に秘め、詩人として生きたいという願望ではなかったか。江戸で繰り広げられた書画会、頻繁に行われた詩会に出席した古処にとって、持ち前の詩才を発揮する上でのまたとない機会であった。太田南畝や増山正賢などの一流の文人との交流がいかに古処を喜ばせたかは古処が秋月に送った手紙に書かれている[154]。それまで藩政に関わる仕事に多忙を極めた古処であったが、宮崎・渡辺の両家老の文化的嗜好がかろうじて古処の慰めであったと思われるが、その両家老も失脚した今、秋月藩はもはや古処にとって居心地の良い場所ではなくなっていた。

1-2 父母との遊歴と采蘋の評判

原古処が退役した後に選んだのは遊歴詩人として生きることであった。学派の違う秋月の領内で古文辞学を講じることも易しいことではなかったであろう。それよりも専門詩人として生きることにより魅力を感じていたと思われる。かつて李白の生き方に憧れを抱いていた古処であったが、養子となってから原家の家学を守ることに精を尽くし、詩作に費やす時間はなかった。ようやく家業御免となった今、その機会が到来したのである。この個人的な事情に加え、社会の文化的状況も追い風となった。藩主の参勤交代によって藩士の文化意識も向上し、また江湖詩社同人のように職業詩人の台頭が目立ってきた事などである。幸いこの時期に藩主随行によって江戸の詩壇状況を確認した古処は自らの選択に確信を得たに違いない。

こうして文化十一年三月、古処の遊歴が始まった。采蘋と母雪を同行したのは翌年の文化十二年春、采蘋十八歳で初めての遊歴経験である。この旅は下関、山口、萩、三田尻、徳山、宮島、広島の各地を経て、三月から九月までの七カ月間に及んだ。初めての長旅に采蘋と雪は郷愁をおぼえ、帰宅を促したと古処の詩にある。「昨来妻子指郷關、爭說天涯夢裡山、何事歸心頻撩亂、不教余待故人還。」古処はこの時の旅を『逍遙餘適』として残しているが、采蘋にはまとまった詩集はない。しかしこの旅の旅程は文政十年、采蘋が江戸を目指して遊歴を開始した時に同じルートを辿っていることが『東遊日記』によって知られる。おそらく文政八年の初度の出郷の時も同じルートであったと思われるが、この時の記録は残っていない。この後も毎年のように父母に従って遊歴を繰り返した。それを下表に

---

[153] 古処は『五山堂詩話』巻八に登場している。

[154] 宮崎修太「古処山樵東行譜」(『江戸時代文學誌』第七号）柳門舎、1990 年、101-102 頁。

示す。

日時（年齢）	同伴者	訪問地	期間
文化十二年三月（十八歳）	父母	下関、山口、萩、三田尻、徳山、宮島、広島	七ケ月
同十三年八月（十九歳）～ 同十四年八月（二十歳）	父母	山口（豊浦で越年） 下関（海鷗吟社）	七ケ月 六ケ月
同十四年九月（二十歳）	父	豊前、英彦山、日田	
文政三年九月（二十三歳）	父	日田、耶馬渓、中津	
同五年八月（二十五歳）	父	福岡	
同六年八月（二十六歳）	父	佐賀、長崎	七ケ月

二度目の旅は、古処が長男の白圭に与えた「留別児瑛用其韻」と題する詩に「爲結山陽社、携家復遠遊」とあることから、古処が山陽地方で結社の要請を受けたため、再び妻子を同伴しての旅となった。八月に出発して豊浦に着いたのは十月四日、十一月になって小家屋に移り、ここで詩社を結成した。豊浦で新年を迎えた采蘋は二十歳になり、旅先で迎えた新年を祝う詩を詠んでいる。

丁丑元旦、豐浦客中作　　文政十三年元旦、豊浦客中の作
山駅風輕柳色春　　山駅　風は軽し　柳色の春
短篷亭子挙杯辰　　短篷亭子　杯を挙ぐるの辰
無端爲客逢新歳　　端無くも客と爲りて　新歳に逢ひ
始信東西南北人　　始めて信ず　東西南北の人

この前年には古処が「東西南北人」の印を南冥の遺品として昭陽から渡されている。采蘋は「東西南北人」の印の意味は父から聞いていたのであろう、この旅でそれを実感したとある。順調に見えた豊浦での垂帷は二月までで打ち切りとなり、豊浦退去を命じられた。これも何らかの藩政の余波であろうと山田氏は推測しておられる[155]。そのため古処を招聘した清末藩[156]の渡邊厚甫らは同士と相談して馬関（下関）の海鷗吟社に移動することになった。ここで古処は論語や孝経の講義を行い、八月中旬秋月に帰った。

四度目の旅は父に従って日田の広瀬淡窓を訪ねた。日田は二十歳の時にも父に従って訪れている。今回は淡窓が咸宜園に高弟を集め、原父子のために雅会を開いてくれた。淡窓の日記『懐旧楼筆記』の文政三年二十三日の条に「原震平其娘采蘋ヲ携ヘテ。来訪セリ。

[155] 山田新一郎編、「第一巻　原采古処先生小傳」『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』秋月公民館、1951 年。
[156] 長府藩主毛利光弘が弟の元知に分地して別家として立藩した藩。最初は長府にあったが後に清末に移ったため清末藩となった。

因ツテ宴會ヲ設ク。坐客。飯田呼傳。佐藤玄猷。熊谷見順。僧虚白ナリ。呼傳ハ長門清末ノ士人ナリ。近日此地ニ来リ。我家ヲ訪ヘリ。采蘋時ニ歳二十三四ナルヘシ。幼ヨリ讀書文藝ヲ學ひ。尤詩ニ長セリ。其行事磊々落々トシテ。男子ニ異ナラス。又能ク豪飲セリ。」[157]とあり、淡窓の眼に映ったのは、他の男子と異ならない詩人として成長した采蘋であった。

咸宜園の秀才中島米華は後に亀井昭陽に入門するが、この時二十歳の青年で、この席上、次の様な詩を采蘋に贈っている。

唐體一首贈采蘋賢媛、時予友蒲池君逸將結社友請諸家詩、故七八句爲致其意。
彤菅久知原氏賢、今宵相過月臨莚、嘗傳看雪評飛絮、更憶聞琴辨斷絃、嚢裡有詩皆錦繡、樽前無語不虚玄、春閨若許通知字、一部新篇待汝編。[158]

（唐體一首を采蘋賢媛に贈る、時に予、友蒲池君逸將に社友を結びて諸家の詩を請ふ、故に七八句を爲して其意と致す。
彤管久しく知る原氏の賢媛なるを、今宵相過ぎりて月莚に臨む。嘗て傳ふ雪を看て飛絮(飛んでいる柳絮)を評し、更に憶ふ琴を聞きて断絃を辨ふと。嚢裡詩有りて皆錦繡なり、樽前語虚玄ならざるは無し、春閨若し知字に通ずるを許さば、一部の新篇汝が編を待たん。）

咸宜園の秀才の目に映った采蘋の実像は、すでに若者の憧憬を含んだ言葉で表現されている。采蘋は日田に遊んだ時の様子を次のように詠んだ。

遊日田　　日田に遊ぶ
去年相追隨　　去年　相追隨し
坦蕩月下船　　坦蕩　月下の船
今年又來過　　今年　また来りて過ぐ
同嘯月明前　　同く嘯く　月明の前
明月長如此　　明月　此の如く長く
個人心亦然　　個人の心　また然り
豈無盈樽酒　　豈　樽酒盈ること無らん
相對理五絃　　相対し　五絃を理ふ

日田から耶馬渓を経て中津を訪ねた父子は、松下堂での歓迎会を受けた。席上で山川正功が采蘋に贈った詩がある。

---

[157] 広瀬淡窓「懐旧楼筆記」日田郡教育會編『増補　廣瀬淡窓全集　上巻』思文閣出版、1971 年
[158] 山田新一郎編「原采蘋詩鈔」69 頁。

一位賢媛字阿盈、才媛慧麗有佳聲、衞婦人筆重相見、曹大家書今欲成。朝日辨時花蕾綻、午風恬處柳枝輕、可知慈父深鍾愛、杖屢提携千里行。[159]

（一位の賢媛字阿盈、才媛慧麗佳聲有り、衞婦人の筆重を相見る、曹大家の書今成らんと欲す。朝日辨時花蕾綻ぶ、午風恬處柳枝輕し、知る可し慈父の深鍾の愛、杖屢提携し千里を行く。）

二十三歳の才媛の娘は男性ばかりの九州文壇の中で、まさに大輪の花を咲かせようとつぼみを大きく膨らませたていた。そのような采蘋を前にして、酒宴は大いに盛り上がった状況が窺い知れる。その後秋月の家塾と天城詩社で父の手伝いをする合間を縫って、二十五歳の時には父と福岡に遊んだ。その時に詠んだ詩がある。

秋紅夜泊[160]

爲客天涯歳月過	客と為りて　天涯　歳月過ぐ
孤舟夜泊大江阿	孤舟　夜泊す　大江の阿
霜降岸樹葉微脱	霜降りて　岸樹　葉微かに脱し
風落長流水易波	風落ちて　長流　水波だち易し
明月偏從横笛苦	明月　偏へに横笛に従りて苦し
悲秋一傍遠人多	悲秋　一に遠人に傍ひて多し
哀猿嘯起還郷夢	哀猿嘯き起こす　還郷の夢
不是三聲涙已沱	是れ三声ならずして　涙已に沱なり

二十歳の時に「東西南北人」としての自分を自覚して以来、父に従って山陽地方、あるいは九州各地を遊歴してきた。二十五歳になった采蘋は既に旅人の郷愁を詠いこんでいる。

二節　漢詩人としての決意

父古処の遊歴に伴われての十年間は、父の死後単身上京し、漢詩人として生計を立てるための実地教育であった。文政十一年の一年間各地を遊歴した古処は文政十二年の正月次の様な詩を賦した。

暘谷春光冠九州、仙雲送色自瀛洲、舜平二百懽虞俗、道路三千汗漫遊、
初日揚輝高嶽雪、祥風解凍漲江流、東西南北開詩社、堪喜同聲相應酬。[161]

---

[159] 山田新一郎前掲書、29 頁。
[160] 自筆詩稿『有煒楼詩稿』秋月郷土館蔵
[161] 山田新一郎編「第一巻　原古處先生小伝」20 頁。

（暘谷春光九州に冠す、仙雲色を送りて瀛洲に自る、舜平二百懽虞の俗、道路三千汗漫の遊、初日輝を揚ぐ高嶽の雪、祥風解凍す漲江の流れ、東西南北詩社を開き、堪だ喜ぶ同聲相應酬するを。）

最後の二句には、秋月の地を離れていたる所に詩社を開き、詩友と詩を交わす喜びを詠っている。この時は南冥の遺品である「東西南北人」の印を昭陽から譲り受け、携えながらの旅であった。一年間の遊歴の成果は、思いがけなく各地で歓待され上記の詩を賦す結果となったのである。原古処は生涯経書に関する書物や文章を一切残さず、詩を以てすべてを記述する姿勢を貫いた。この理由が師南冥の言葉「…後十年名を成候者、此両人（肥後の富田大鳳、八代の法海）と被存候。筑に而は、足下之詩、兒昱之文、當時之勢甚奮進之様子に相見申候。」[162]に由来するものか否かは定かではないが、長年藩儒を勤めた儒者としては異例の事であった。

采蘋もこのスタイルを受け継いでいる。師と仰いだのは父親の古処一人であり、長年の遊歴のお供で見習った結果によるものと思われる。采蘋の自筆の詩集は日記兼詩集であり、詩集の後には旅中交流した人物の名が記録されている。これも古処の詩集から習ったものである。采蘋の性格は「大よふ人物」[163]と母雪が表現したように、細事にこだわらず、おおらかな人柄であった[164]と言われるが、また頼山陽が初めて采蘋を見た時の印象に「肥笨頗有乃翁之骨」[165]と書いていることから、父譲りの体格とおそらく大ような性格も父から受け継いだものであったと思われる。また母雪の美貌を受け継いだ大柄な瓜実顔の美人であったという秋月の古老の言い伝えからも采蘋像は容易に想像できる。この容姿に加え、采蘋は酒豪でもあった。采蘋の酒豪ぶりは上記の広瀬淡窓の日記にも見える通りで、年を経るに従いその酒量は増える一方であったことは采蘋の詩集から知ることが出来る。

采蘋が詩人として生きる決心をしたのは何時ごろからであろうか。十八歳から父に同行して遊歴詩人の実際を目の当たりにしてきた。十九歳の時には「始信東西南北人」と東西南北人のなんたるかを自覚している。

二十歳から二十三歳の間は暫らく遊歴を休み、その頃甘木の勇士が古処のために開設した天城詩社を手伝うことに時間を費やしている。文化年間の後半から文政の初期にかけてようやく甘木地方にも藩士以外の子弟の教育に関心が高まってきたことを物語る。秋月の家塾に甘木の詩社が加わることで、古処の日常が多忙になったため、その助手としての役

---

[162] 山田新一郎「亀井南冥家と原古処家（二）」『筑紫史談』第四拾九集、1930 年、17 頁。

[163] 母雪が秋月藩医の戸原歴庵が江戸に勤務の時、江戸在住の采蘋を「よきに御さとし下さるべく候。」と頼んだ手紙の中に見える。福岡地方史研究会編『近世に生きる女たち』海鳥社、1995 年。

[164] 広瀬淡窓『懐旧楼筆記　巻２０』の文政三年七月二三日の条に「其行事磊々落々トシテ、男子ニ異ナラス」と見える。

[165] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年。

割を与えられたのである。兄の白圭は藩士としての職を持ちながら古処山堂で子弟を教えていたが病気がちであり、古処と采蘋がそれを助けていた。そこに天城詩社が加わり、近隣の子弟、篤太郎、琳太郎、吉太郎、敬次郎、松、乙、元などと称す子供たちの教育を依頼されることとなった。後に采蘋が東遊する際、道中どこまでもついていった青年はこの甘城詩社の門弟たちであった。特に矢野吉太郎は貧しい家の子供であったが、古処にその才能を見いだされ、采蘋とともに江戸で出世を嘱望された子供である。吉太郎は期待通り佐藤一斎の門に入り、林家の奨学金を得ることが出来、又昌平黌の特待生にもなって古処を大喜びさせた。この時期の采蘋は門弟の指導の手伝いとともに、将来の江戸での出世に向けて門人とともに学んでいたと思われる。

その後文政五年、采蘋二十五歳の秋には豊前の京都郡より村上彦助（仏山）、平石湯山らが古処山堂に入門した。この時彦助はわずか十三歳、白圭を師と仰ぎ、後に白圭が豊前に病気療養の傍ら巖邑堂で垂帷した時も指示を仰いでいる。

このように二十歳を過ぎた頃より家塾と甘城詩社の手伝いをすることで、本格的に学問の修業を弟子たちとともにしている。この頃の古処は、藩士の子弟の教育から離れ、地域の敏童の教育に情熱を注ぐようになり、秀才の将来に期待を寄せるようになっていた。娘の采蘋もそのうちの一人であった。古処の意気込みは後に長崎滞在中の白圭宛ての手紙から窺われる。「…兼吉（旭荘）福岡へ参候由、ヌルクテハ負可申候。千万出精祈申候事に候」[166]広瀬旭荘が福岡の亀井塾に入門したことを知り「ヌルクテハ負」と悔しさを表明している。そのため白圭は門弟に対し厳しく指導をしたことが後世に伝えられている[167]。

三節　佐賀・長崎における評判

修業時代の最後は文政六年（1823）、采蘋二十六歳から二十七歳にかけて父とともに佐賀・長崎を遊歴した。第Ⅰ章一節で見て来たように、この頃には市河寛斎、頼杏坪、頼山陽らは既に長崎を訪れている。長崎の評判は儒者間に広まっていた時期であり、原父子にとってもこの時を心待ちにしていたのである。機会が到来したのは、長男瑛太郎（白圭）が病のため御武器方の役職を辞し、代わりに養子を迎えたため、家塾と甘城詩社の代講を任せる事が出来たからである。秋月藩は宗藩である福岡藩の藩主幼少のために、代行して佐賀藩と交代で長崎警備の任にあたっていた。古処は藩主長韶に隋行して長男白圭とともに長崎に滞在した経験を持つ。このため秋月藩士である古処は、長崎の奉行所の役人、地元長崎の有力者とも顔見知りであり、同じ警備を任されていた佐賀藩の藩士とも交流があったのである。

秋月を出て佐賀に到り、佐賀城下では古賀殼堂と親交があった医者の古賀朝陽を訪ねた。朝陽は、藩学教授であり古賀精里の高弟でもある中村嘉田らを賜金堂に会して古処父子を歓待した。その席上での采蘋の詩は残っていないが、古賀朝陽と中村嘉田が古処父子に贈

[166] 春山育次郎前掲書、74 頁。
[167] 春山育次郎前掲書、75 頁。

った詩が残っている。古賀朝陽曰く、

喜古處山人見過、時帯令愛采蘋女、山人削意混塵氛、獨有詩名終不群、老子東來乗紫気、史公南滞誤青雲、言談草閣燈花冷、風雨江城木葉聞、膝下彩雄携道薀、才情愧苑卓文君。[168]

（古処山人の過らるるを喜ぶ、時に令愛采蘋女を帯ぶ。
山人迹を削り塵氛混りて、獨り詩名終に群ざる有り、老子東に来りて紫気に乗る、
史公南滞青雲を誤る、言談草閣燈花冷し、風雨江城木葉聞く、膝下彩雄道薀を携へ、
才情は愧苑卓文君。）

古賀朝陽は采蘋を謝道薀や卓文君に準えて采蘋の才女ぶりを称えている。中村嘉田が采蘋に宛てた詩に曰く、

原采蘋。是古處硯學仲女。一時閨秀。莫或先之。二十餘歳未嫁。従尊大人行天下。
此日初見。
君自班家曹大姑、低看卓氏巧當壚、笄年偃蹇數夫去、宛轉關何爲掌珠。[169]

（原采蘋。是古處硯学の仲女。一時の閨秀。或はこの先は莫し。二十餘歳未だ嫁がず。
尊大人に従ひて天下を行く。此日初見。
君は自ら班家曹大姑、低看卓氏巧に壚に當る、笄年偃蹇數夫去る、宛も轉關何
んぞ掌珠と爲らんや。）

〇笄年：女子の結婚適齢期。　〇偃蹇：多く盛んなさま。

中村嘉田も始めて会った采蘋に、曹大姑（班昭）や卓文君を例にとってその才能を形容している。中村嘉田は詩を最も好み、朝陽とともに藩の詩壇を牛耳っていたといわれ、頼山陽も六年前にここを訪れ賜金堂に会したという[170]。この後、一行は九月に長崎に入った。采蘋の目的も唐人屋敷に住む清国人と詩の応酬をすることであったが、嘗ての朱舜水や陳元贇のような学者は既に長崎にはおらず、貿易商の中でも文芸を解する人たちとして知られた江芸閣や陸品三らと会見することが出来た。残念ながら江芸閣らと応酬した詩は伝わっていないが、長崎の感想を兄の白圭に贈った詩が二首ある。

[168] 春山育次郎前掲書、79 頁。
[169] 春山育次郎前掲書、79 頁。
[170] 春山育次郎前掲書、79 頁。

崎陽書感奉寄伯氏　　長崎にて感を書す。伯氏に贈り奉る
華夏詞章有素聞　　華夏の詞章　素より聞くこと有り
舟船勿謂濟阿焚　　舟船　自ら謂ふ　河を済りて焚くと
詩鋒筆陣寥無競　　詩鋒　筆陣　寥として競ふ無く
辨髪禿頭椎小文　　辨髪　禿頭　椎として文少し
緑眼胡帰秋月暁　　緑眼の胡は帰る　秋月の暁
紅衣砲破海天雲　　紅衣の砲は破る　海天の雲
瓊江蕞冉彈丸地　　瓊江は蕞冉　彈丸の地
滿目山川獨絶群　　滿目の山川　獨り絶群

又
躑躅花開日　　躑躅　花開く日
清陰拾翠依　　清陰　翠依を拾ふ
蘿衣兄與弟　　蘿衣　兄と弟
重向北山歸　　重ねて向ふ　北山歸[171]

一首目は長崎の様子を知らせているが、二首目の詩は豊前香春で病気療養中の兄弟に思いを馳せている。兄弟思いであったと言われる采蘋は旅先から病気の兄弟を気遣って便りを送っている。長崎は江戸時代唯一の貿易港として栄え、異国情緒を醸し出すオランダ館[172]や唐人館が立ち並び、オランダ館には商館長、次席、医員など十人前後に限られた人々が住み、唐人館には、商人や船主たちが居住していたが、その中には来泊の画家や書家も交じっていた。その中でも、蘇州出身の江芸閣は当時最も有名であり、彼に逢うことを目的として長崎を訪れる儒者や詩人は多かった。梁川星巌、頼杏坪、頼山陽、広瀬淡窓、草場珮川、みな長崎を訪れている。女性では江馬細香が師の山陽を介して江芸閣と詩の贈答をしている。梁川星巌や頼山陽の長崎滞在に比べ采蘋の滞在ははるかに恵まれていた。その理由は、長崎警備の任にあたった福岡藩の代行として秋月藩が文化七年までその役目を担っており、古処は藩主に従って長崎を訪れた経験もあり、秋月藩と長崎奉行所との関係が有利に働いていたと考えられる。それにしても采蘋同伴の今回の旅は、古処の家族あての手紙に見えるように、長崎の町年寄で西洋砲術の租として知られる高島秋帆（1798-1866）や、秋帆の実兄で久松家の養子になった碩次郎らの破格の歓待を受けたことを伝えている[173]。古処の次の手紙には、采蘋は丸山の遊郭に案内され、そこでも歓待された様子を以下

[171] 山田新一郎編、「第三巻　原采蘋先生小傳」（『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』）秋月公民館、1951 年、10 頁。
[172] オランダ商館は、商館長、次席、医員など十人前後に限られていた。
[173] 「扨此節之遊びは采蘋珍敷趣に而定而大評判と被存候。追々知己抔も多人数、昨今に相成候而は振舞案内にまけ、今日杯は蘋也も茫然いたし居申候。…昨夜は久松碩次郎（六人衆、年寄年采田、当春江戸へ拝礼に罷出候也）高島四郎太夫（六人衆）両人出会高島宅、奥に唐人部や、阿らん

のように記している。

> 扨昨夜丸山豐後屋とやらにて、高島四郎太夫兄弟杯六人衆中年以下振舞候由、四郎太夫若黨草履取り迎に遣し候由、村尾下婢付遣申候、皆に飲みふせられ候由、八時分駕に而帰申候、皆々御高名承り及候と高島同役中同伴之者數十人、女郎共迄（箔屋にて御見掛申候杯）取別盛に申候。やりて、はやし子杯多く出居候が近來は山にてもあなたの御評判の日夜近承り候と挨拶申候由。佐賀一夜逗留被地学士大に驚模様、此方にても猶更の評判、今朝も各別宿醒も無之候、詩酒博名こまり入申候。[174]

手紙の文面からは父親の娘自慢も見え隠れするが、采蘋の詩酒博名は長崎中に知れ渡っていたことが古処の手紙から知れるのである。采蘋を同伴することで、佐賀や長崎の実力者による思いもかけぬ歓待ぶりに古処も戸惑っている様子が窺われる。

長崎での采蘋の評判は、滞在期間を延長して教授を依頼されるところまで発展した。古処はこの経緯を早速手紙で知らせている。

> 久松碩次郎高島四郎太夫年寄也、村尾三右衞門油屋町長、嶋谷三郎兵衞本籠町長、山田熊四郎本大工町長、水野勝太郎唐人番頭、西村俊次郎唐人通詞、岡村屋惣兵衛長崎豪家也、此等面々是非々々と申而留申候事再三候故、先留候。衣服等も少しく難儀なれども此は出來可申[175]

高島らの斡旋によって、風流を解する町長の村尾三右衛門の所有する柳簣池館に留まり、三右衛門の家族や奉行所の役人たちを相手に講義や詩文の手ほどきをすることとなった。この仕事は父の手を離れ、采蘋が主となって講義をし、古処はそばから身守る役目であった。これにより采蘋は六カ月ほど延長して長崎に滞在した。古処はこの時の様子を「世間の風説は随分沙汰宜敷由に御座候、才女長崎に遊候はみちを始と被存候」[176]と書き送っているように、父親の自慢話もエスカレートするが、長崎で受けた采蘋の評判の程が十分覗い知れる。「珍敷趣にて」と古処が手紙の中でも言っているように、これまで長崎を訪れた漢詩人は何人もいたが女性は采蘋が初めてであった。

采蘋の滞在が長引くために古処は一足先に秋月に帰ることとなり、采蘋にとっては始めての一人暮らしの経験であった。帰路の途中で詠んだ詩にはその思いが込められている。

だ部やを擬似普請奇々妙々驚耳目候儀眞より百倍致し候由。馳走無量一向記得不申候。海魚三枚ふた鶏うなぎ杯珍味のみ。…」とある。(春山育次郎前掲論文、80 頁)

[174] 春山育次郎前掲論文、81 頁。

[175] 山田新一郎編、「第三巻　原采蘋先生小傳」『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』秋月公民館、1951 年、8 頁。

[176] 山田新一郎編、「第三巻　原采蘋先生小傳」『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』秋月公民館、1951 年、8 頁。

自崎陽帰途　　崎陽自り帰途
一年強半崎陽客　　一年強半　崎陽の客
遊倦長風破浪歸　　遊倦の長風　浪を破りて帰る
肥筑連山迎旦送　　肥筑の連山　迎へ旦つ送る
風帆截水送如飛　　風帆水を截り　送りて飛ぶが如し
候潮江口舟膠處　　候潮の江口　舟膠の処
入夜篷窓人起稀　　夜に入り　篷窓に人起くること稀なり
郷近吾儂欣不寐　　郷近く　吾儂欣びて寐ず
揚眉先整故園衣　　眉を揚げ　先ず整ふ故園の衣

采蘋の郷愁は知るはずもない柳篁池館の主人村尾三右衛門とその娘月嬌は留別の詩を賦して別れを惜しんだ。

奉餞霞窓賢媛還郷
崎山春満忽将還、一路鶯花送錦衣、愚我乃教華客慕、到郷應解小郎圍。
煒樓繡罷牽閑夢、彤管題来對夕暉、君去書房光彩減、新薫嫩柳更依々。
半村農萬（村尾三右衛門の号）[177]

（霞窓賢媛郷に還る餞に奉る
崎山春満忽ち将に還る、一路鶯花錦衣を送る、我が愚の華客慕ひ教ふ、郷に到りて小郎圍を解きて應ふ。煒樓繡罷閑夢を牽く、彤管題來つて夕暉に對す、君去りて書房光彩減ず、新薫嫩柳更に依々たり。）

鏡奩相共不多時、快忽鶯花促別期、要把琴絃寫儂意、般々愁思上蛾眉。
月嬌　村氏嫣[178]

（鏡奩相共に多時あらず、快忽として鶯花別期を促す、琴絃を把りて儂意を寫すを要す、般々として愁思蛾眉の上。）

佐賀・長崎への旅は、采蘋の漢詩人としての修業の集大成ともなる旅となった。古処の手紙には、文人たちとの交流を「此節は遠遊の羽根繕ひも出来可申也」[179]と評価し、また滞在期間延長についても「采蘋も世間いたし候に大心遣ひ無之様に相成りも可致也」[180]とあり、すでに江戸に旅立たせることを前提としての佐賀・長崎への旅であったことが分か

[177] 春山育次郎前掲論文、89 頁。
[178] 春山育次郎前掲論文、90 頁。
[179] 山田新一郎前掲論文、11 頁。
[180] 山田新一郎前掲論文、11 頁。

る。女性であってもこれほどの評判を得たことで、むしろ女性であったからこそ、嘗て古処が経験した江戸の漢詩壇においても十分に対処できるとの判断を古処は下したと思われる。采蘋にとっても清国人との詩の応酬で得た自信と、長崎や佐賀の詩人たちに評価されたことで、江戸への期待は膨らんでいったと考えられる。それに加え、帰郷後秋月に届いた梁川星巌の手紙は采蘋の気持ちを後押しするのに十分であったと思われる。星巌は采蘋が帰った後長崎を訪れ、采蘋の詩と評判を聞き、次の詩を贈った。

讀采蘋女史閨詠却寄。采蘋向在碕開講肆。延生員。故詩尾及之。
麗句吟來愜素聞、香風揺曳柳絲裙、可無佳婿如温嶠、儘有清才亜左芬、桃醉杏酣春黯澹、蘭言竹笑氣氤氳、絳紗弟子音塵隔、悵望瓊山一段雲[181]

（采蘋女史の閨詠を讀むに却て寄す。采蘋向に碕に在りて講肆を開く。生員を延く。故に詩尾之に及ぶ。
麗句吟じ来つて素聞の愜、香風揺曳す柳絲の裙、佳婿は温嶠に如くに無かる可けんや、儘く清才左芬を亜ぐ有り、桃醉杏酣春黯澹し、蘭言竹笑氣は氤氳なり、絳紗の弟子音塵隔つ、悵望す瓊山一段の雲）

この手紙が縁となって、采蘋にとって星巌はよき師として終生交際を続けることとなる。

四節　初期の作品―自筆詩稿を巡って

采蘋の遺稿の中に初期の作品と思われる自筆の詩稿がある。表紙は他の人が付けたもので「采蘋女子遺稿」と題し、「古処先生批點」とその上に付してある。また「此稿二十歳前後之作也」とも明記し、古処の母親の実家である佐谷家の蔵書であった。現在は秋月郷土館に所蔵されている。この遺稿はおそらく采蘋詩稿の中でも最も初期のもので、これ以前の詩稿は見つかっていないと思われる。采蘋のおおらかな人柄を表す水茎は、二十歳前後の初々しさをそのまま伝えている。「鄙稿」と書かれて始まる二十余首の漢詩は朱で古処の批点が付けられている。習作であることを示す「春」の字を冠して詠んだ詩がほとんどで「春閨」「春興」「春雨」「春月」…と二十首近く続く[182]。おそらく古処が詩題を与えて詠んだものであろう。詩稿の最後には「伏乞」と書き、行を変えて「郢斧」と記し、最後に「劣女采蘋再拝」と記している。儒者の娘としての教育のあり様が忍ばれる。それではその中から数首を紹介する。

春雨

[181]「西征集二」『星巌集』（佐野正己解題『詩集日本漢詩　15 』 汲古書院、1989 年）
[182] 春のつく題詩は「春閨」「春興」「春雨」「春月」「春暁」「春山」「春蚕」「春餞」「春城」「春晴」「春泛」「春寒」「春山」「春愁」「春水」「春宵」の１６首が確認できる。

裊裊江雲起	裊裊として　江雲起こり
霏霏微雨斜	霏霏として微雨斜めなり
暖煙迷柳浦	暖煙　柳浦に迷ひ
春樹鎖人家	春樹　人家を鎖す
渓澗泉聲響	渓澗　泉声響き
池塘草色加	池塘　草色加はる
不知新霽日	知らず　新霽の日
釀得幾枝花	釀し得るは　幾枝の花なるか

春蚕

春風三月暖	春風　三月　暖かにして
先禱馬頭娘	先ず禱る　馬頭娘
日々携輕籠	日々　軽籠を携え
遅々條翳桑	遅々　翳桑條し
氷蚕再將起	氷蚕　再び将に起きんとして
玉女一停粧	玉女　一たび粧を停む
辛苦何爲厭	辛苦　何為れぞ厭はん
期栽公子裳	公子の裳を栽たんと期す

老馬

少時盡力老相思	少時力を盡し　老いて相思ふ
伏櫪銜寃獨自傷	伏櫪銜寃　獨り自ら傷む
憶昨驍騰刷燕越	憶ふ昨驍騰　燕越を刷く
飛鳥驚疑止飛翔	飛鳥驚き疑ひ　飛翔を止む
青春弄影黄金埒	青春　影を弄して　黄金に埒し
奔逸絶塵匹練長	奔逸絶塵　匹練長し
秋風八月黄河北	秋風八月　黄河の北
烽焔焼雲飛羽檄	烽焔雲を焼き　羽檄を飛ばす
城南戰合遂驕胡	城南戦合　驕胡に遂げむ
横行萬里汗血滴	横行萬里　汗血滴
一朝毛摧氣凋喪	一朝毛摧　気凋喪す
還與駑駘相匹敵	還に　駑駘と相匹敵す
人間世路轉羊腸	人間の世路　羊腸に轉ず
倒行逆施晩倀々	倒行逆施　晩倀々たり
壯心不已曹孟德	壯心　已まず　曹孟の徳
瘦骨難々田子方	瘦骨　難々として　田子方

近更爲駒待將斃　　近更駒と為り　将に斃るるを待たん
何由重蹈邊塞霜　　何由　重ねて邊塞の霜を蹈まん

「老馬」はこの遺稿の最初に書かれた詩であり、七言古詩に挑戦した労作である。これらの習作からは、父古処の期待に答えようとする采蘋の努力の跡が窺われる。それと同時に采蘋の後半の人生に詠まれた詩からは想像できない、希望に満ちた初々しい少女の姿が彷彿として浮かび上がってくる。

采蘋の初期の作品としては、写本であるが戸原氏蔵と書かれた戸原継明（卯橘）氏による写本が慶応義塾大学斯道文庫に所蔵されており、七十首ほどの詩が採録されている。秋月藩士で勤皇の志士として活躍し、二十九歳で非業の死を遂げた戸原継明は、十五歳で采蘋が晩年に開いた山家の塾「宜宜堂」に入り、十年間の指導を受けている。また戸原家は采蘋の母雪が最初に嫁いだ家であり、原家とも親しい間柄である。戸原継明によるこの写本は表紙には「原采蘋詩集」と書かれ大正二年に加表装されたものである。しかし内題には「采蘋女史詩」とあり、「女史幼年作」と明記されている。戸原氏によって采蘋の自筆詩稿から初期の作品を一冊にまとめたものと思われる。采蘋の初期の作品はこの写本によってほぼ知ることが出来るはずである。

五節『有煒楼詩稿』について

現在秋月郷土館には采蘋の自筆詩稿である『有煒楼詩稿』が残されている。これとは別に『有煒楼早稿抜粋』と表紙に書かれた写本が存する。この写本の内容は江戸在住の僅かな詩と初期の作品、また『東遊日記』中の詩をそれぞれから集めて一冊にしたものである。ここでは自筆詩稿である『有煒楼詩稿』について見ていくこととする。『有煒楼詩稿』は文政四年の元旦に当たって書き始めたと思われる。文政四年は采蘋二十四歳、前年には父とともに日田に遊んだが、この年は遊歴の記録はなく、おそらく秋月と甘木詩社の手伝いで月日を送ったのであろう。自室の「有煒楼」に籠って詩作に耽る時間もあったとみられる。父と遊歴を共にして、書きためた詩稿も出来たころである。ようやく一冊の詩集にまとめようと新年に当たって書き始めたものと思われる。文政四年の元旦から書きはじめられた詩はほとんどが七言律詩で三十首近くの詩が収められている。これらは文政三年から五年にかけて作られた詩であろうと推測するが、ほとんどが七言律詩で詠まれているのはどうしたことか。古処から課題を与えられた故なのか、或は書きためた中から七言律詩の詩だけを筆写したものか、内容の検討が必要である。七言律詩に続く詩群は、三節で紹介した春を詩題にした二十歳の時の習作がそのまま写し取られており、それに加えて他の初期の作品も加えられている。

これらの事から『有煒楼詩稿』は、ある時期に思いたって自作の詩稿の整理をしたものと考えられる。それにしても、習作期の詩に続いて、江戸在住である天保二年の正月から四月までと天保四年の僅かな日記が続いて書かれ、一冊に綴じた形となっている。書きか

けだった詩集を江戸に持っていき、江戸で日記を書き足したのであろうか。あるいは江戸で詩稿の整理を始めたとも考えられる。そのいきさつは分からない。ここでは文政四年から五年にかけて詠まれた七言律詩の中から数首を紹介したいと思う。日記については第五章で紹介することとする。

元旦

寅賓紅日對蓬萊　寅みて紅日を賓きて蓬萊に對せしむ
習習東風海上来　習習たる東風　海上より来たる
魚躍柳塘薄氷伴　魚は柳塘に躍りて　薄氷伴い
鶯遷梅塢淡烟催　鶯は梅塢に遷りて　淡烟催す
詩懐駘蕩神稍王　詩懐駘蕩として神稍く王んなり
琴韻鏗鏘興共開　琴韻鏗鏘として　興共に開く
不防穿林問花去　防げず　林を穿ち花を問ひて去くを
熙熙春色若登臺　熙熙たる春色　臺に登るが若し

春雨思郷

孤客高樓多所思　孤客　高楼　思ふ所多し
况逢烟雨亂如絲　况して烟雨の乱れて絲の如きに逢ふに
春來天地鶯聲暢　春天地に来たりて　鶯聲の暢やかに
家隔雲山雁字遲　家雲山を隔てて　雁字遲し
笛裏梅花愁裏落　笛裏の梅花　愁裏に落ち
夢中芳草句中滋　夢中の芳草　句中に滋し
歸心紛若風前柳　帰心紛として　風前の柳の若く
終日飄揚難自持　終日　飄揚として　自ら持し難し

秋江夜泊

爲客天涯歳月過　客と為りて　天涯　歳月過ぐ
孤舟夜泊大江阿　孤舟　夜泊す　大江の阿
霜降岸樹葉微脱　霜降りて　岸樹　葉微かに脱し
風落長流水易波　風落ちて　長流　水波だち易し
明月偏從横笛苦　明月　偏へに横笛に従りて苦し
悲秋一傍遠人多　悲秋　一に遠人に傍ひて多し
哀猿嘯起還郷夢　哀猿嘯き起こす　還郷の夢
不是三聲涙已沱　是れ三声ならずして　涙已に沱なり

六節　采蘋の詩風

6-1 父の影響

采蘋は亀井少琴と同様父に従って漢学・詩文・書を学んだ。父以外の師に付いて学んだという記録はないが、後年、頼山陽・梁川星巌に詩の添削を依頼していることは遺稿によって知ることが出来る。古処が亀井南冥の古文辞学を修めたことはすでに見て来た通りであるが、采蘋もその父の教えを忠実に受け継いでいる。従って文化文政期の江戸詩壇を賑わせた新詩風の詩は采蘋も得意とするところではなかったはずである。古処の詩風について菊池五山が『五山堂詩話』巻八に「以詩有名最長古體」[183]と紹介し、その詩について「沈雄古健筆自ら見ゆ」[184]と評した如く、采蘋も終始盛唐風の詩を書き続けた。古処が江戸に在ったころ、江戸の詩壇はすでに荻生徂徠が提唱した擬古主義の詩風は古臭いものとされ、宋詩風が主流となっていた。古処の友人で秋月出身の画家渡邊玄対の書いた詩を「今の東都風ニ而無之面白覚申候」[185]と、秋月の友人宛てに書き送っている事からも、古処にとっては江戸で流行している詩風に迎合する気はもともとなかったようである。

では、采蘋の場合はどうであったか。采蘋の詩は江馬細香や梁川紅蘭などの詩に比べると男性的な威風堂々とした詩である。福島理子氏は「李白への傾倒が非常に顕わである。」[186]と指摘する。古処が李白の詩を愛したことからその影響は娘の采蘋にも及んだということであろうか。江馬細香は、師である頼山陽に女性らしい詩を書くよう指導され、努力していかにも繊細な女性らしい詩を書いた。それというのも、細香の気質はもともと「父蘭斎譲りの自主独立の気質、物事の本質に直接参入する気迫・・・剛毅な詩をもしばしば作る」[187]というものであったから、師の意向に沿うような努力は並々ならぬものであったと思われる。頼山陽は、采蘋が自作の詩の添削を依頼した際、女性的な繊細な詩を褒めているが[188]、采蘋の場合、頼山陽の意向に沿うよう努力した形跡は見当たらない。采蘋にとっての師は古処であり、古処の教えだけが絶対的であったと思われる。ただ古処の時代と比べ、江戸の詩風も次第に流動的になりつつあったと思われ、采蘋の詩風がそれほど問題ではなく、その質を問われる時代が到来していたこと[189]は、菊池五山が詩風にこだわることなく優れた詩人を紹介することで『五山堂詩話』の読者を獲得しようとしていたことからも納得できるのである。

江戸在住中、采蘋は松崎慊堂との交流があり、彼の日記『慊堂日歴』の文政十二年十一月二十四日の条には「采蘋女史来、史は筑之秋月君儒士原古處女、善詩、余為借小倉詩鈔

---

[183] 菊池五山編『五山堂詩話』(『詞華集　日本漢詩　第二巻』汲古書院、1983 年、450 頁)
[183] 宮崎修太前掲論文、35 頁。
[184] 菊池五山前掲書
[185] 宮崎修太「古処山樵東行譜」(『江戸時代文學誌』第七号) 柳門舎、1990 年、102 頁。
[186] 福島理子『江戸詩選３　女流』岩波書店、1995 年、327 頁。
[187] 入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集『湘夢遺稿』下』汲古書院、1992 年、583 頁。
[188] 采蘋の詩稿中に頼山陽と梁川星巌の評がついている詩がある。その中の頼山陽評に拠る。(山田新一郎「原采蘋詩鈔」『原古処・白圭・采蘋小伝及詩鈔』秋月公民館、1951 年、5、7 頁)
[189] 宮崎修太「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」(『江戸時代文學誌』第五号) 柳門舎、1987 年。

二冊。廿二至廿八」[190]とあるように、その当時江戸で流行していた袁枚の詩集を借りたものと思われる。また父の死後、采蘋は多くの父の友人知人に詩の添削を依頼している。黄葉夕陽村舎の菅茶山を始め、頼山陽、梁川星巌を尊敬し、その指導を仰いだものと思われる。ここで注意しなければならないのは、上記の三人は亀井学とは詩風を異にしている人たちであるということである。采蘋の詩風は古文辞学を基礎とし、その後、山陽や星巌などの時代の潮流に乗った詩人たちの影響を受けながら、独自の詩風を構築して行ったものと思われる。

6-2 李白の影響

采蘋の詩に李白の影響が見られることはすでに指摘されている[191]。その理由として、父古処が「尚友李太白」と常に語っていた如く、李白を敬愛していたことが娘の采蘋にも影響を与えたものと考えられる。二十歳前後の詩には李白の影響が散見されることから、このころは『唐詩選』などの古典を基礎にして詩作に励んでいた様子が、秋月郷土館に残る自筆詩稿、あるいは写本で伝わる習作期の詩稿から読み取ることが出来る。「惜花　三首」は可憐な少女の気持ちが素直に詩に表現されている。

惜花　三首[192]

その一

抱琴惜春暮　　琴を抱きて　春の暮るるを惜しめば
無風花自飛　　風無くも花自ら飛ぶ
花乎如有意　　花や　意有るが如く
來襲美人衣　　来りて　美人の衣を襲ふ

その二

莫言春百二　　言ふ莫れ　春は百二と
百日豈花開　　百日　豈花開くや
所以頽然醉　　所以に頽然として酔へば
愁思何處來　　愁思　何處にか来る

その三

倏忽春將暮　　倏忽　春将に暮れんとす
花飛啼鳥頻　　花は飛び　鳥は頻に啼き
愁心總如醉　　愁心　総じて酔ふ如し

[190] 松崎慊堂著・芳賀登監修『松崎慊堂全集　附・日歴上・下』冬至書房、1988 年。
[191] 福島理子『江戸詩選３　女流』岩波書店、1995 年、327 頁。
[192] 慶応義塾大学斯道文庫蔵『原采蘋詩集』

有似送情人　　有るに似たり　情人を送るるに

「夢遊芙蓉」その一

維岳鍾靈不二名　　維岳　霊を鍾めて　不二の名あり
青天白日雪崢嶸　　青天　白日　雪崢嶸たり
鄒家瀛海眸中小　　鄒家の瀛海　眸中に小さく
張氏河源脚下生　　張氏の河源　脚下に生ず
平視星辰纏宿處　　平視　星辰　宿に纏る処
俯聞仙子歩虚聲　　俯して聞く　仙子　虚に歩む声
詩成更欲驚眞宰　　詩成りて　更に真宰を驚かさんと欲するも
枕簟風寒山月傾　　枕簟　風寒く　山月傾く

「夢遊芙蓉」その二

昨夜神遊富士峰　　昨夜　神遊　富士の峰
霄間獨立玉芙蓉　　霄間　独立　玉芙蓉
垂敷三國疑鵬翼　　三国に垂敷するは　鵬の翼かと疑ひ
俯願群山是蟻封　　群山を俯願すれば　是れ蟻封
氷雪崔嵬太初色　　氷雪　崔嵬たり　太初の色
瓊瑰粲爛秀靈鐘　　瓊瑰　粲爛として　秀霊鐘まる
如餐仙液輕凡骨　　如し仙液を餐して　凡骨を軽くせば
月裡姮娥或可從　　月裡の姮娥にも或ひは従ふ可し

上記の二首は戸原継明氏の写本[193]に見える詩で十八歳から父母に同伴して詩の修業中であったころの作品と思われる。采蘋はまだ実際の富士山を見ていない。夢や空想の世界で富士山に遊び、頂上から下界を見下ろす壮大なスケールの詩である。また仙人が登場したり、仙液を飲んで仙人になれば月にも届くかもしれないと詠むこの世界観はまさに李白の空想の世界に遊ぶ詩と類似している。その元となった詩は「夢に天姥に遊ぶの吟」[194]とい

[193] 慶応義塾大学斯道文庫蔵『原采蘋詩集』

[194] 夢遊天姥吟留別

海客談瀛洲，煙濤微茫信難求，越人語天姥，雲霓明滅或可覩，天姥連天向天横，勢拔五嶽掩赤城。天台四萬八千丈，對此欲倒東南傾。我欲因之夢吳越，一夜飛度鏡湖月。湖月照我影，送我至剡溪。謝公宿處今尚在，淥水蕩漾清猿啼。脚著謝公屐，身登青雲梯。半壁見海日，空中聞天雞。千巖萬轉路不定，迷花倚石忽已暝。熊咆龍吟殷巖泉，慄深林兮驚層巔。雲青青兮欲雨，水澹澹兮生煙。列缺霹靂，丘巒崩摧。洞天石扇，訇然中開。青冥浩蕩不見底，日月照耀金銀臺。霓為衣兮風爲馬，雲之君兮紛紛而來下。虎鼓瑟兮鸞回車，仙之人兮列如麻。忽魂悸以魄動，況驚起而長嗟。惟覺時之枕席，失向來之煙霞。世間行樂亦如此，

う題の詩と思われ、李白が北方の山東省滋陽県あたりを放浪している時に作ったとされる詩である。李白はこれから南遊するに当たり空想の世界で天姥山に遊んだ詩を作ったのである。その内容は「青空は浩蕩として底が見えず、日と月は金銀の台を照輝かす。霓を衣に風を馬と為し、雲の君は紛紛として来たり下る。虎は瑟を鼓し鸞は車を回らし、仙人は列なること麻のようだ」というものである。采蘋は李白の空想の世界を自分のものとし、うまく詩に表現する技術をすでに身に付けていたのである。その他にも采蘋二十五歳の時に父とともに福岡に遊んだときに作った「秋江夜泊」[195]という詩は旅人の郷愁を詠んだもので、ここにも李白の影響を見る事が出来る。

第Ⅳ章　遊歴詩人としての出発

一節　京都への旅

1-1　出郷の動機

文政八年（1825）、二十八歳の正月、采蘋は単身京都に向けて故郷を出る。采蘋が最愛の父母兄弟と別れて、単身京都を目指して旅立とうと決心した本当の理由は何であったのか。その理由は、すでに第Ⅱ章二節でみて来たように、父古処の采蘋に対する期待に起因している。采蘋の東遊の決意はすでに二十一歳ごろから徐々に固まってきたもので、修業時代を経てこの年に到ってようやく出発の時が到来したのである。

１、「手習見事ニ出來上り候ハヽ出世も出來可申候。」[196]

２、「吉太郎儀[197]大学様より一人半扶持に金二両披下候大美談。足下も吉太郎と天下之名を成す不佞が楽に御座候。」[198]

上記の二件の例は古処が采蘋に宛てた手紙に書かれたもので、これらの言葉から古処が采蘋に期待していたことが明確になる。吉太郎は文政七年江戸に遊学を決心し、文政八年には江戸に遊学している。二件目の手紙は采蘋が京都にいる時に届いた手紙であり、この時すでに吉太郎の出世が確認されている。古処は娘の采蘋も江戸に行くことで、吉太郎と同様出世は間違いないと確信していたと思われる。文政八年の出郷はおそらくこうした状況に拠るものと思われる。古処は当初京都にも一緒に行く予定であったが、長男白圭が病気療養のため豊前に移ったこともあり、采蘋一人での出郷となったのである[199]。古処が采

古來萬事東流水。別君去兮何時還？且放白鹿青崖間，須行即騎訪名山。安能摧眉折腰事權貴，使我不得開心顔！（詹英主編《李白全集校注彙釋集評》百花文艺出版社，1996 年 2101 頁。

[195] 第Ⅲ章一節 1-2 参照。

[196] 宮崎修太「古処山樵東行譜」（『江戸時代文學誌』第七号）柳門舎、1990 年、21 頁。

[197] 矢野吉太郎、後の江藤柯亭。

[198] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、127 頁。

[199] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、99 頁。

蘋に同伴して京都に行く予定にしていたことにはそれなりの理由があった。それは秋月藩の藩制によるものであった。秋月藩では藩士の婦女が単独で藩外に出る事を禁じていたために、采蘋が文政六年から七年にかけて、半年余りも長崎に滞在し、その活躍ぶりも藩の耳に入っていたことから、藩内では異義が唱えられたという経緯があったためである。これに対し古処の取った対策は、采蘋を久留米藩士の豊島左善の養女とすることであった。この対策を講じた後、古処は藩に対し憤激の情を現し、「足下は既に秋月の人ならず」と采蘋に告げたといわれる[200]。こうした事情があって、文政八年に采蘋が京都に出発するにあたり、古処の送別の詩に「不許無名入山城」という句が挿入されたのは納得がいくのである。

それにしても、采蘋はいつ頃詩人としての人生を歩む決心をしたのであろうか。春山氏の意見によれば、三十歳のころの詩の断片に「我年二十有一春。供養朝夕侍老親。従遊子弟皆狂簡。医外別占化育仁。」或は「苦請父兄母夕死」「刻意勤学遠企羨」「学詩三年如有得」などの言葉が散見されることから、采蘋が二十一歳の時に文学をもって身を立てる決心をしたとする。さらに采蘋の立志の趣旨について「自ら奮うて家学を興し家声を揚げて父兄の志を成さむなどを期したる儒教的忠孝の信念と、婦人には珍らしき英雄的の功名心とより起これり。」[201]と説明をされているが、確かに儒教的忠孝の信念は彼女の詩にしばしば現れており、その信念の強さが采蘋の人生を左右したと言える。

1-2 別れの挨拶

父から「足下は既に秋月の人ならず」との言葉を言い渡され、東遊を余儀なくされた采蘋は、文政八年正月一日に、門弟の村上彦助と桑野琳次郎を連れて、亀井家や知友に別れの挨拶に出かけた。まず、太宰府に住む昭陽の弟大壮を訪ね、翌日博多の清賞堂に宿る。清賞堂は松永花遁の書斎の名で、文化文政以来文人が逗留する処となっていた。采蘋は文政五年、矢野吉太郎と父とともに福岡に遊んだ時にも逗留した場所である。松永花遁、名は豊、字は子登、花遁は号。質店を営む富豪であり、書画詩文を愛し、菅茶山・菊池五山・頼山陽・梁川星巌・中島棕隠・田能村竹田・浦上春琴・広瀬淡窓等の文人墨客と交流し、またパトロンとして名が知られた人である。原父子もこれらの人々を通して交友があったものと思われる。采蘋はここに逗留し、一月四日に亀井昭陽の草江亭を訪れた。この時、広瀬旭荘は淡窓の勧めで亀井塾に入門し、塾長を務めていた。文政三年以来の旭荘との対面であった。采蘋の訪問を受けて昭陽が詠んだ五絶は広く知られている。

今春有三喜、広子在吾門、迎得蘋閨秀、抱斯紅女孫。[202]

---

[200] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年。
[201] 春山育次郎前掲書、52 頁。
[202] 春山育次郎前掲書、104 頁。

（今春三喜有り、広子吾が門に在り、迎へ得たり蘋閨秀、斯ち抱く紅女孫。）

少琴はたまたま娘の紅染を連れて里帰りの最中であり、昭陽にとっては喜びにあふれたお正月となったわけである。しかし、采蘋の来訪を喜びとしたのもつかの間、東遊の餞けに送別の辞を請はれると憤懣の情溢れる一文を呈した。

原閨秀遠来告別、走筆贈之

孟春惟羊日、蘋子遠方來、驚間此何故、吾將遊洛師、乃翁手栽柬、懇徵贈別辭。
又云衰態消豪氣、此女儘存我舊時、咄嗟乃翁年將耆、耆德成人正在玆、淮海氣象年少事、傲骨消磨豈曰哀、切怪乃翁豪未下、書上淳々母乃欺、不然季蘭猶在室、何能獨行客千里。女子有閨範、閨範無遠離、乃翁視蘋子、礌落若男児、胸中豪氣天來大、我輩瞠々何得知。古來賢哲詩文集、無送室女遠遊辭、自我始古人将笑、任君笑我老態癡。

（原閨秀遠来して別を告ぐ、筆を走らせて之を贈る。

孟春惟羊日、蘋子遠方より来る、驚間此れ何故ぞ、吾れ将に洛師に遊ぶ、乃りて翁手づから柬を栽す、懇に徵して別辞を贈る。
又云ふ衰態し豪気を消す、此の女儘く我舊時を存す、咄嗟乃ち翁年将に耆ん、耆徳人と成りて正に玆に在り、淮海気象年少の事、傲骨消磨豈哀と曰ふ、切に怪しむ乃ち翁豪未だ下らず、書上淳々として母乃ち欺く、然らず季蘭猶ほ室に在り、何んぞ能く獨行して千里の客となる。女子閨範に有り、閨範遠離無し、乃ち翁の蘋子を視るは、礌落として男児の若く、胸中豪気天来の大、我輩瞠々として何をか知り得ん。古来賢哲の詩文集、室女の遠遊を送る辞無し、我自り始めて古人将に笑はん、君に任す我が老態の癡なるを笑ふを。）

昭陽の憤懣は、采蘋の出郷を勧めた古処に向けられた。古処の采蘋の育て方はとうてい昭陽には理解することは出来ないものであった。昭陽の性格は江戸における詩会の席での傲慢な態度と同様、他を受け入れる事は不得手であったようだ。これとは別に「贈原女子遊京師語」という一文があり、これには少し頭を冷やして送別の辞に相応しく、上京後の結果を待って采蘋の東遊の賛否を決めるというところまで譲歩している。

昭陽の送別の辞に加えて、急遽家に帰ることとなった少琴に代わって、昭陽が代詠した詩がある。結婚後の少琴は「不顧風流事、詩腸久已枯」の状態にあり、少女時代に競いあって詩を作っていた幼馴染の友に送別の詩を贈る自信はなかったのかも知れない。

送原女子遊京師代女友。友也與女子同庚。居雖融百里。自八九歳時。各従其父往来相歡。此行不無一言。然偶爲拜年。来寧邂逅。又以家有烈山祭急帰。故自叙其意請父詩之。乃援筆作此達意之詩云。

（原女子京師に遊ぶを女友に代りて送る。友也女子と同庚。居は百里に融きと雖も。八九歳の時より、各おの其の父に従ひて往来し相歓ぶ。此行一言も無きにあらず。然りして偶たま拜年と為る。来り寧んじて邂逅す。又家は烈山祭有るを以て急帰す。故に其の意を自叙し父に詩を請ふ。乃ち筆を援て此の達意の詩を作ると云ふ。）

〇拜年：家長に新年の挨拶をすること

父兮恩愛我、憐惜如寶珠、帰寧僅愆期、阿母常倚閭、女子雖有行、豈忘撫育初、時月離膝下、無日不献書、不報平安字、二親不甘餔、尊翁殊倜儻、命君遊大都、嗟闊経年別、別在天一隅、君纓猶未説、許嫁而纓嫁則夫説之、獨行如丈夫、揮毫搖五嶽、把酒接名儒、斯父有斯子、斯事無古今、承歡眞在此、努力愼前途、人生皆有命、君命與妾殊、妾昔在閨闥、頗亦玩史圖、自主中饋後、世事日相紆、父曰無違命、母曰無棄予、事人原不易、懼辱自辱艱劬、修身愼行懼辱先也、不顧風流事、詩腸久已枯、見君行色壯、何以献巴歙、怖酒如怖鴆、何以繁驪駒、交情思舊日、聊陳鄙婦思。[203]

（父愛我の恩、憐惜寶珠の如し、帰寧僅かに期を愆る、阿母常に閭に倚る、女子行有ると雖も、豈に撫育の初を忘れんや、時月膝下を離れ、日び書を献ぜざる無し、平安字を報ぜず、二親甘ず餔せず、尊翁殊に倜儻なり、君が大都に遊ぶを命ず、嗟闊しきは経年の別、別に天の一隅に在り、君が纓猶未だ説かず、許嫁而纓嫁則夫説之、獨行の丈夫の如し、揮毫五嶽を搖し、酒を把りて名儒と接す、斯の父にして斯の子有り、斯の事古今に無し、承歡眞に此に在り、努力して前途を愼む、人生皆命有り、君が命妾と殊なれり、妾昔閨闥に在り、頗る亦史圖を玩ぶ、自主中饋の後、世事日び相紆る、父曰く命を違ふ無しと、母曰く予を棄つる無しと、人事は原易からず、辱を懼み自ら艱劬を辱む、修身愼行懼辱先也、風流の事を顧みず、詩腸久しく已に枯れ、君が行色壯んなるを見る、何以てか巴歙を献げん、酒を怖るは鴆を怖るが如し、何以てか驪駒の繁き、交情舊日を思ふ、聊か鄙婦の思を陳ぶ。）

采蘋の福岡滞在中、一月九日には咸宜園の優等生数名が草江亭を訪問し、南北（日田と福岡）に別れて詩戦を繰り広げた。采蘋は亀井陣営に加わり見事に日田の陣営を打ち負かした。昭陽は始めは旭荘を福岡陣営に入れようと謀ったが、旭荘は断ったため、采蘋の滞在を延期させ、味方に加えさせた。その結果「幸有一丈夫女之力擧石臼者」と采蘋のお陰で勝利を収めることが出来たと喜んでいる[204]。旭荘の詩にはこの時の様子が次の様に詠ま

[203] 春山前掲書、106 頁。
[204] この時の状況は徳田武「広瀬旭荘と遠山荷塘また旭荘と原采蘋」『江戸文学』第八号に詳しい報告がある。

れている。

代五子和采蘋女史　　広瀬謙　再拝
筮逢大有代重離、旗鼓相當新舊知、羊革雖多孤腋在、五陽空被一陰支、愛毛禽占長流浪、解語花開最上枝、天壌王郎今不少、任他謝女獨嘲嗤。[205]

（筮は大有に逢ひて重離に代ふ、旗鼓相当る新旧の知、羊革多しと雖も孤腋在り、五陽空く一陰に支へらる、愛毛の禽は長流の浪を占め、解語を解す花は最上の枝に開く、天壌王郎今少なからず、任他謝女独り嘲り嗤ふ。）

旭荘といえども采蘋には太刀打ち出来なかった様子が述べられている。謝女とは謝道韞に采蘋を準えている。上記の出来事から言えることは、すでに九州詩壇において、亀井門、広瀬門中には采蘋を超える実力者の存在しないことが明らかとなった。

こうして悲喜こもごものうちに福岡滞在も終り、一月十一日には秋月に帰った。

1-3 諸葛亮孔明との比較

亀井昭陽や松永花遁らの恩人に別れを告げた采蘋は、文政八年（1825）、二十八歳の正月二十三日、単身京都を目指し故郷を出た。その時の決心を詠んだ詩がある。

乙酉正月廿三日、発郷
夙起拝高堂　　夙に起きて　高堂を拝し
新年出故郷　　新年　故郷を出づ
門前手栽柳　　門前　手づから栽えし柳
殊繫離情長　　殊に離情を繫ぎて長し
朝獻后天壽　　朝献す　后天の寿
使我二尊昌　　我が二尊をして昌んならしめん
行人亦安穩　　行人も亦安穏ならん
一飲騎鯨觴　　一飲　鯨に騎るの觴
一飲騎鯨觴　　一飲　鯨に騎るの觴
此行氣色揚　　此の行　気色揚がる
唯我二十八　　唯だ　我　二十八
愧亮出南陽　　愧づ　亮の南陽を出づるに

最後の二句は、三国時代の英雄諸葛亮孔明が、劉備の三顧の礼を受けて南陽を出た時の年齢が二十七歳であったことを受けて、自分は既に二十八になって孔明に後れを取ったこ

[205] 関儀一郎編「采蘋詩集」『日本儒林叢書』鳳出版、1970 年 11 月。

とを愧じている内容である。李白が孔明を尊敬していたことは既に知られているが、采蘋にとって孔明はどのような存在であったのだろうか。「蜀の劉備に仕えた有能な軍師で経世への強い意志と豊富な学識を持つ一方、俗塵を嫌う高い心を持つ」孔明と自分を比較して考える采蘋にはどのような野望が潜んでいたのか。『春秋左氏伝』や『三国志』『史記』などの古典を学んで育ったというが、三国時代の英雄を自分の人生と比較することは女子としては稀有に映る。あるいは李白を意識して、詩人として名声を得ることで幕府か大名家に出仕することを望んでいたのであろうか。諸葛亮孔明との比較だけを考えれば稀有に映るこの詩は、もう一つの出来事が采蘋の脳裏にあったのではないかと想像する。それは古処が手塩にかけて育てた矢野吉太郎の存在ではないだろうか。十九歳ですでに江戸に遊学することが決まったことを采蘋も知っていたはずである。父の期待がかかった二人であったが、相手の若さに比べて自分の年を恥じたとも考えられる。

それはともかく、これからの自分の前途に対する不安を払拭する意味でも、不可欠な発想であったのかもしれない。気色を揚げて前途に立ち向かう気概を見せている。父は老いてこの頃は詩作もやめていたが、采蘋のために餞別の詩として「不許無名入山城」の言葉を書き与えた[206]。残念ながらこの詩は残っていないため全文をしることが出来ないが、三代続いた儒者の後継者として、家名再興の期待がこの言葉にはこめられている。

采蘋の東遊に際し、矢野吉太郎[207]の送別の詩が残されている。

奉送霞窓女史之京師

春鶯將出谷之幽、君佛征衣去不留、壯馬宜貞千里路、雌飛能作丈夫遊、行鞋本爲看花早、離笛空教折柳愁、錦繡江山新麗日、詩恩豈似繭絲抽。[208]

（霞窓女史を京師に送り奉る

春鶯将に谷の幽を出づる、君は征衣を佛ひて去を留むらず、壯馬宜しく千里の路を貞むべし、雌飛能く丈夫の遊を作る、行鞋本花を看る為に早ぎ、離笛空しく折柳の愁を教ふ、錦繡江山新麗日、詩恩豈繭絲の抽くに似るあらん。）

京都の花見に間に合うようにと早々に出発する師に対して「詩恩豈似繭絲抽」と結んでいる。この後采蘋の弟子、矢野吉太郎、村上健平、桑野琳次郎、儀之助の四人は采蘋の東遊を送って下関にまで随行した（吉太郎は小倉で帰る）こと、さらにその後の消息について兄の白圭が京都の采蘋に送った手紙に詳述されている。それによれば吉太郎一人は帰ってきたものの他の三人はなかなか帰ってこないので秋月では大騒ぎとなって、捜索願が出された旨を伝えている。桑野琳次郎は兄に続いて甘木詩社の古処の弟子で、医者となるべ

206 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、114 頁。
207 矢野吉太郎は古処が甘木の民家で見出し、十歳の時から古処が育てた秀才の弟子。
208 春山育次郎前掲書、114 頁。

く修業していた。このため桑野家では琳次郎を連れ戻し、山中に一年間幽居するという罰を与えている。采蘋を慕って京都まで付いていく少年たちを見れば、采蘋の人柄が自ずと知れる。さらに白圭はこの手紙で「吉太郎采蘋様は京摂不面白直様江戸へ出ると被申候との事を甘木宗官よりきゝ出し…、」と采蘋が京摂に失望し、江戸に行くことを弟子たちに漏らしていることが書かれている。白圭は采蘋が古処の後継者として名を挙げることには賛成であるが、やはり妹の事を心配して「…しかし相手無之こまり入申候。」[209]と手紙に書いている。

1-4 菅茶山との出会い

采蘋は京都への途次、神辺の菅茶山の黄葉夕陽村舎を訪ねた。菅茶山、名は晋帥、字は礼卿、通称太中といった。茶山は始め京都に遊学して古文辞学を学んだが、徐々に「叙景と叙情が程良く調和して、清新であるとともに穏健な写生詩」に移行して行った。三十四歳の時に神辺に黄葉夕陽村舎を開いてより、この地方の農村の風景や生活を詠った詩に茶山の特徴が表れている。古処は文化七年の江戸陪従を命じられた際、神辺の黄葉夕陽村舎に当時六十三歳の茶山を訪ねている。これ以降、黄葉夕陽村舎をたびたび訪れて菅茶山との交流を深めていったようである。古処は娘の東遊に際して声名の高いこの大詩人に教えを請うよう促したのである。

采蘋の遺稿には、文政八年の歳に菅茶山の批点を請うた詩が残されている。その中で、「讀張良傳」と題した古詩には「此等詩出女手、洵為可畏」との評を付けている。その他の詩は「漁父二首」「春日田家」「子規啼」「山城晩感」「東里草堂小集得霞字」「山水」「山居」「赤壁」「春暁」と題する詩であった。これらの詩に対する茶山の総評は次の様なものであった。

紫清諸氏名壇彤管、然亦國字之文爾、至若所謂男文。世有有智子内親王之後、寥寥乎莫聞焉、余曽歎本邦文運亦不復振矣、而今見斯詩、頗強人意。

文政酉二月　　晋　帥　批[210]

（紫清諸氏名彤管を擅にす、然れども亦國字の文爾（のみ）、所謂男文の若くに至るは、世に有智子内親王有るの後、寥寥として聞く莫し。余曽て本邦文運亦復振せざるを歎く、而して今斯の詩を見るに、頗る人の意を強からしむ。

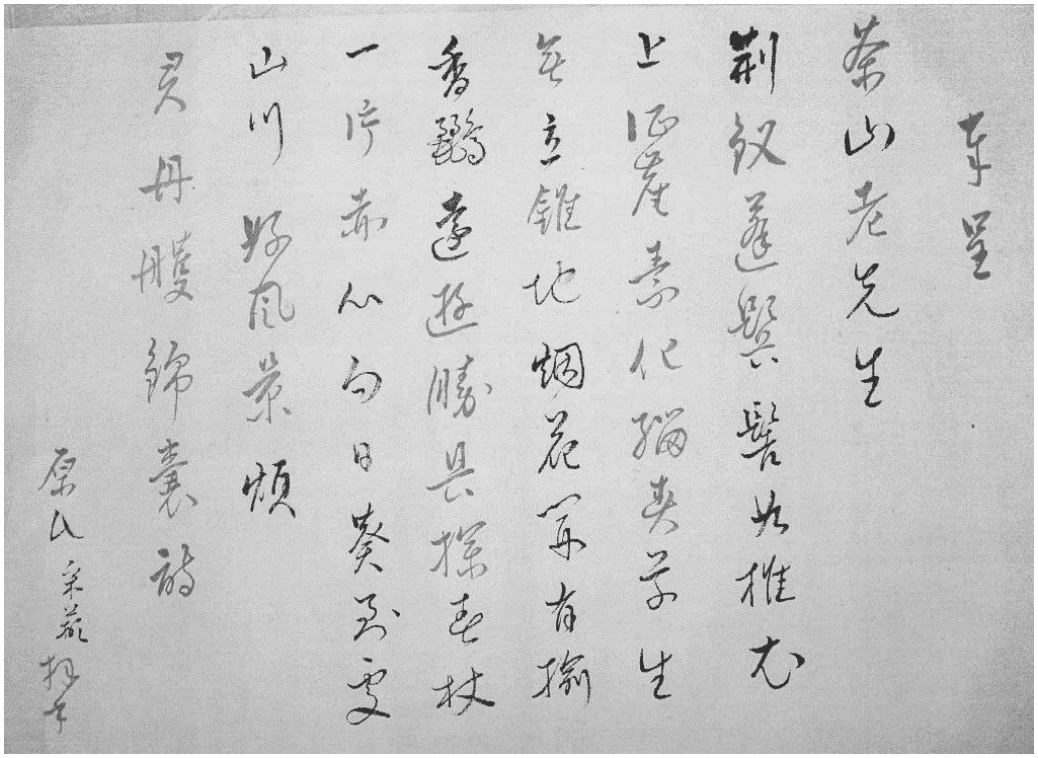
文政酉二月　　晋　帥　批）

古処と菅茶山は詩風を異にするにも関わらずお互いにその詩才を認め合い、交流を続けた。娘の采蘋に詩の添削を依頼させたことも、詩風にとらわれず一流の詩人に評価を請うことが采蘋にとっての教育であると古処が考えたからであろう。采蘋が二度目の東遊の際、

[209]春山育次郎前掲書、118 頁。
[210] 山田新一郎編「原采蘋詩鈔」2 頁。

頼山陽・梁川星巌の両詩人に詩の添削を依頼したことも亀井門ではないこれらの優れた詩人に教えを請う必要性を古処が感じ取っていたからである。

この時采蘋が茶山に贈った詩は、これまでの伝記には紹介されてこなかったが、現在、広島県立歴史博物館に所蔵されている黄葉夕陽文庫資料の中にその詩を見出すことができる。采蘋の詩は、五言絶句一首と七言律詩一首が残されている[211]。茶山は黄葉夕陽村舎を訪れた人々に詩や画を依頼した短冊を詩巻として残している。この数は膨大なものがあるという[212]。その中の采蘋の詩を以下に紹介する。



奉呈

茶山老先生

荊釵蓬鬢髻如椎　　荊釵　蓬鬢　髻は椎の如し

衣上征塵素化輜　　衣の上　征塵　素より輜に化す

春學生無立錐地　　春　學生　立錐の地無し

烟花開有揄香鸝　　烟花開きて　香鸝を揄く有り

遠遊勝具探春杖　　遠遊の勝具　探春の杖

一片赤心向日葵　　一片の赤心　向日葵あり

至處山川好風景　　至る處　山川　風景を好む

煩君丹雘錦囊詩　　君を煩す　丹雘　錦囊の詩

原氏采蘋　　拝書

[211]広島県立歴史博物館主任学芸員の岡野将士氏にご教示いただいた。

[212] 広島県教育委員会の花本哲志氏のご教示による。

〇荊釵：後漢の梁鴻の妻孟光の粗末な服装の様子から。〇髻如椎：椎髻はつちの形をした髷。夷振りの髷の形容。〇立錐地：立錐之地は錐の先を突き立てるほどの非常に狭い土地。漢語大詞典に「…滅六國之後、使無立錐之地。」とある。〇丹雘：丹はあかい。雘は上質の顔料。〇錦囊：錦のふくろ。転じて桂作の詩。詩囊をいう。唐の李賀は良い詩を得る毎に錦の囊に入れておいたからという。

菅茶山は采蘋の贈った詩に次韻して次の七絶を賦した。

次原女史見贈韻[213]

椿堂曾是定交人、莫怪逢君即相親、更看髯蘇送行句、詞華羨見一家春。

（椿堂曾て是れ交を定めし人、怪む莫れ君と逢ふて即ち相い親しむを、更に看る髯蘇が行を送るの句、詞華羨みて見る一家の春。）

茶山は、父や兄の愛情に育まれた采蘋の才能を見て、原家の優れた儒者としての家系を祝福している。また、茶山はこの詩の註に次のように書いている。

女史父古處翁曾屢過余女史酒閒出示家兄送別詩東坡有妹頗富才藻。[214]

（女史の父古處翁、曾て屢しば余を過ぐ。女史、酒閒に家兄の送別の詩を出し示す。東坡妹有り。頗る才藻に富む。）

この註によれば、古処は茶山を数回訪問したことがあり、また采蘋は兄白圭の送別の詩を酒閒に茶山に見せたという。その詩を見て茶山は、白圭を蘇東坡に準えて采蘋の才能をほめている。茶山はこの時七十八歳、二年後にこの世を去った。采蘋が文政十年十二月、二度目に神辺を訪ねた時には茶山の墓参となった。茶山の死に後れること三ヶ月半であった。

1-5 一年半の京都滞在と父の死

采蘋は京都での桜の開花に間に合うようにと早々に旅程を切り上げ、三月の初め京都に入った。京都では宗真寺の鐵翁上人に庇護を受けて此処に滞在し、京都近郊の観光を楽しんだ模様である。今回の京都では梁川星巌は紅蘭を連れて西遊の途中であったため会う機会はなかった。しかし頼山陽にはこの時会っている可能性がある。それは山陽が菅茶山の詩「次原女史見贈韻」に加えた頭註の内容から推測することが出来る。

---

[213] 菅茶山『黄葉夕陽村舎詩（全）』復刻、児島書店、1981 年 12 月、840 頁。
[214]春山前掲書、124 頁。

此女子来京、一相逢於朱雀旗亭、肥笨頗有乃翁骨。口誦此詩琅琅[215]。

（此女子京に来り、一たび朱雀の旗亭に相逢ふ、肥笨頗る乃翁の骨有り。此の詩を口誦して琅琅たり）

菅茶山は毎年二回ずつ絹売商人に託して山陽に詩の添削を依頼していたことが知られており[216]、この評が出来たのは采蘋が京都に滞在中に朱雀旗亭で山陽に出会った後の事であろう。この時に山陽に面会したことが上記の頭注によって知られ、また采蘋は酒席で、茶山から贈られた詩を琅琅たる声で読み上げたことも知られるのである。

采蘋は京都で脚気を患い、四月、たまたま丹後峰山で医者を開業していた叔父坂口玄龍を訪ねた。玄龍は古処の養父丹斎の晩年の子で、京都で医学を学び、坂口家の養子となった人である。ここで病を治し、また京都に戻っている。京都での一年半に亘る生活の状況は采蘋による一切の記録が存在しないため、僅かに父古処と兄弟の手紙によってその消息がつかめるだけである。古処が五月節句に送った手紙には京都での困窮した状況が読み取れる。

當春は西六条に入込飜飛可被致之處無其義進退維谷之由、不佞病魔同状扨々困窮之次第に御座候。併し宗真寺手を離れられ候は愉快に御座候。[217]

（當春は西六条に入込、飜飛致さるべきの處、其の義無く、進退維れ谷れるの由、不佞病魔同状にて扨々困窮の次第に御座候ふ。併し宗真寺手を離れられ候ふは愉快に御座候。）

もうひとつ兄白圭が送った詩には、妹采蘋から三月以来音信がないことに業を煮やしている様子が書かれている。

尚懐采蘋

三月平安信、重遊丹後州、暑徂書未至、木落苑先秋、欲寫匪他意、難哉無拯憂、高堂老親在、何事久淹留。[218]

（尚采蘋を懐しむ

三月平安の信、重ねて丹後州に遊ぶ、暑徂[219]書未だ至らず、木落苑先秋、他意匪きを

[215] 富士川英郎前掲書、240 頁。
[216] 富士川英郎『菅茶山と頼山陽』（東洋文庫　195）平凡社、1971 年 9 月、148-149 頁。
[217] 春山前掲書、127 頁。
[218] 山田新一郎編『原白圭小伝』11 頁。

寫さんと欲す、難きかな無拯の憂、高堂老親在り、何事久しく淹留す。）

「京摂不面白直様江戸へ出る」と弟子に伝えたように、京都から江戸に向かうつもりでいたはずの采蘋に思わぬ手紙が実家から届いた。おそらく白圭が父の病状の悪化を知らせて来たのであろうが、この手紙は残っていない。この手紙を受け取った時の采蘋の心情は後に佐野贅山に留別する時に贈った詩によって知ることが出来る。佐野贅山、字は宏、号は竹原、筑前甘木の医者で采蘋とは長崎から帰路を共にした幼馴染である。

…忽報造物兒、驀地苦庭椿、狼狽唯一身、掛席度波瀾、無名入故城、空負罔極恩、…。[220]

（…忽ち報ず造物の兒、驀地庭椿に苦しみ、唯一身を狼狽すと、席を掛け波瀾を度りて、名無くして故城に入る。空しく罔極の恩を負ふ、…。）

一年半を京都や近郊の行楽地を楽しみ、或は書の揮毫の依頼等によって生計を維持し、或は江戸行きの費用を捻出するために滞在した京都であったが、志半ばでの帰郷となった。この年の九月、原家は藩医緒方春暢の次男顯之丞を養子とし、白圭の隠居がようやく許されたため、采蘋の帰郷を待って豊前での療養のため転地を決めたのである。父の看病のため帰郷した矢先、兄と弟二人が家を去るさみしさを次の様に詩に賦している。

奉送伯氏遊豊　　伯氏の豊に遊ぶを送り奉る
人生足別離　　人生　別離足る
何能常聚頭　　何んぞ能く常に頭を聚めん
秋風吹落葉　　秋風　落葉を吹き
分飛更飄□　　分飛し更に飄□たり
同根三子在　　同根　三子在り
萍泛無時休　　萍泛　時として休むこと無し

去年隻身客京洛　　去年　隻身　京洛に客たり
雲愁海思嘆飄泊　　雲愁　海思　飄泊を嘆く
高堂不豫仍憶兒　　高堂　豫しまず仍りに兒を憶ふ
跂涉不敢恐剽掠　　跂涉　敢へて剽掠を恐れず
悲歓執手日未多　　悲歓　手を執りて日未だ多からざるに

---

[219] 徂暑は陰暦６月の異名。
[220] 「留別佐野贅山」山田新一郎編『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』秋月公民館、1951 年、20 頁。

友于追随遊巖阿　　友に追随して　巖阿に遊ぶ
此意非他三鍼口　　此の意他に非ざるも　三たび口を鍼す
秋冬之際興如何　　秋冬の際　興如何
膝下承歡蘋也在　　膝下　歓を承くるは　蘋也た在り
好將優遊養舊痾　　好し優遊を将って　旧痾を養へ

父の看病をしながら文政十年正月元旦を迎える。その時の詩に云う。

紅暾將上曉如烟　　紅暾　将に上らんとして　暁は烟の如し
北斗春回而立年　　北斗　春は回りて　立年す
身侍病牀愁似醉　　身は病牀に侍りて　愁は酔に似たり
東風隨例到軒前　　東風は例に随ひ　軒前に到る

新年二日目の詩は一転して父の具合もよさそうで、客人を迎えて明るい新年を祝った様子が詠まれている。

二日即興
東風淡蕩柳條烟　　東風　淡蕩　柳條の烟
古處山雲欲佛眠　　古処山の雲　眠を佛はんと欲す
今日高堂頗起色　　今日　高堂　頗る色起きる
迎人一笑賀新年　　人を迎へて一笑し　新年を賀す

三日には兄伯圭が巖邑より帰省し、その喜びを詩に詠っている。

伯氏從豊帰、喜而賦。　伯氏の豊前より帰る、喜こびて賦す。
時月之間不見君　　時月の間　君に見えず
胸中鄙客日紛紛　　胸中　鄙吝　日び紛紛
何圖一夕圍爐處　　何ず圖らん一夕　爐を圍ふ處
淡蕩詩懐劈絮紋　　淡蕩たる詩懐　絮紋を劈く

四日の詩は原家が養子を迎えたことに対して采蘋なりの苦言を呈している。おそらくこの詩は養子の取り決めが、采蘋がまだ京都にいるときに決まったことを暗示している。

四日偶成
籃輿百里省尊親　　籃輿百里　尊親を省みる
草木返魂春覺春　　草木に魂は返り　春は春を覚ます

或恐螟蛉癡漢子　　或は恐れる　螟蛉の癡漢子
家園花柳折爲薪　　家園の花柳　薪の為に折るを

五日と、七日の七草の節句にも家族そろって新年を迎える喜びの詩を詠んでいる。

五日即興
有時難安貧　　時有りて貧に安んじ難し
高堂有二親　　高堂に　二親有るも
營求不在家　　営求して　家に在らず
各爲遊方人　　各おの　遊方の人と為る
聚散不相見　　聚散して　相見えず
佳節易傷神　　佳節には　神を傷ましめ易し
啼鶯嚶求友　　啼鶯　嚶いて求友を求め
歸鴻漸呼群　　帰鴻　漸みて群を呼ぶ
欲報平安字　　平安の字を報ぜんと欲するも
天長度幾旬　　天長くして幾旬かを度る
今年何施環　　今年　何ぞ施環せん
同是侍庭椿　　同に是れ庭椿に侍す
願獻南山寿　　願はくば献南山の寿を献じ
二尊壽萬春　　二尊　寿くして　萬春ならんことを

人日
今年春勝去年春　　今年の春は　去年の春に勝る
兄弟承歓陪二親　　兄弟歓を承け　二親に陪す
憶在長安行樂地　　長安の行楽地に在るを憶ふ
曽爲人日思郷人　　曽て人日は郷人を思ふが為なり

帰郷後の采蘋にとって父が病気であるということさえ除けば、兄弟両親がそろった久しぶりの団らんを過ごした数カ月であった。故郷でのゆったりとした毎日をいとおしみかつ楽しんでいる様子が伝わってくる。四人がそろうのはこの時が最後となり、二十二日に古処はこの世を去った。
その父に対する敬意の詩である。

偶成
憶昨先考致仕後　　憶ふ　昨　先考致仕の後
携家遠作山陽遊　　家を携へ　遠く山陽の遊を作す

逍遙餘適詩千首　　逍遙の餘適　詩千首
探奇廣陵又瀛洲　　探奇す　広陵　又瀛洲
爾来汗漫遊不倦　　爾来　汗漫として　遊びて倦まず
蹝與白雲同去留　　蹝は白雲と同に去留す
到處結社爲盟主　　到る処　結社し　盟主と為り
文場雄師有誰儔　　文場の雄師　誰か儔有らん
常言尚友李太白　　常に言ふ　尚ほ友するは李太白なり
詩成五岳飛筆頭　　詩成りては　五岳も筆頭に飛ばん
恨不與爾同時世　　恨む　爾と時世を同じくせずを
椎碎仙人黃鶴楼　　椎砕す　仙人の黄鶴楼を
而後一醉方累月　　而る後　一酔して方に月を累ね
死將枯骨葬糟丘　　死しては枯骨を將って糟丘に葬らしめんことを
文政丁亥春正月　　文政丁亥　春正月
六十有一甲子周　　六十有一　甲子周る
夫子應厭人間世　　夫子　応に人間の世を厭ふなるべし
奄骨鳧舄去悠悠　　奄骨として　鳧舄　去ること悠悠たり
追思纔到曽遊處　　追思　纔かに曽遊の処に到れば
蕭蕭風樹帶雨愁　　蕭蕭たる風樹　雨を帯びて愁ふ

二節　江戸への旅立ち

2-1『東遊日記』について

采蘋は父の死後、三十歳になった文政十年（1828）六月三日、江戸を目指して再び故郷の秋月を出発した。その道中記として漢詩を交えつつ記録した『東遊日記』を残している。采蘋はこれまで父母に同伴して各地を遊歴し、また京都へも単独での遊歴も経験したが、日記は残さなかったようである。遊歴の記録としては『東遊日記』が最初のものであると考えられる。日記は六月三日の出発の日から記録されており、今回の旅の意気込みが感じられる。山陽地方の文人を尋ね、詩酒を交わし、旧交を温めながら、時々に贈答した詩を挿入した道中記であるが、この日記は残念ながら江戸までは続かず、途中、翌年の四月十四日の兵庫県明石までで終わっている。日記の後には「□思唱和集」と題された漢詩集が付記されており、道中唱和した百二十九首の詩が収められている。この詩集に付随した記録として、文政十一年正月、赤穂（兵庫県）の小田盤谷を訪ねた時から記録した人名録『金蘭簿』が自筆本で残っている。『金蘭簿』には日記が途絶えた後の交遊録があり、また江戸にて交遊した人物も記録されている。これらの史料を組み合わせて考察することで、采蘋の出郷から江戸までの、およそ一年半の旅の行程を辿ることが出来る。『東遊日記』の原本は秋月郷土館所蔵の「山田氏手許残留書目」中に「函入り一巻、采蘋自筆、原氏蔵」と書かれた『東遊日記』『漫遊日歴』の存在が確認できるが、現在はその所在は未調査である。

写本で伝わっているものに、大阪大学の「小天地閣叢書」所収の写本と、秋月郷土館所蔵の写本一冊、山田新一郎氏によるペン字書きの写本二種類の四冊がある。いずれも誤字、脱字、訂正箇所が多く、それぞれに異同が多く見られる。山田氏の『原采蘋先生小傳』には『東遊日記』を自筆と書かれている[221]ことから、山田氏は自筆本を参考に『小傳』の執筆をされたことが分かる。なお、「小天地閣叢書」所収の写本には初めの頁に「旭」と名乗る人物が采蘋に宛てた手紙が付され、また梁川星巌と頼杏坪が采蘋の旅の道中の便宜を図って書き与えた紹介文も付されているが、秋月郷土館所蔵の写本にはこれらは省略されている。采蘋研究の拠り所である『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』[222]の著者春山育次郎氏も「東遊日記」の道程をその著書の中で紹介しているが、その中に採録されている詩は「小天地閣叢書」所収の写本とも一致しない。春山氏が何を参考にして書かれたものかは不明である[223]。

本節では、采蘋が父の死後、父の遺言[224]を胸に、江戸での成功を誓って単身秋月を出発してから、その後二十年間を過ごすこととなる江戸までの、遊歴の漢詩人としての舟出の旅を考察し、その中で、山陽地方の一流文人との交流を通して見えてくる采蘋の決意、或は心情、采蘋の漢詩人としての評価、女性詩人に対する男性詩人の見解などを明らかにしていきたい。また、三十代の采蘋が六十二年の生涯の中で、おそらく最初の本格的な恋愛を経験したと思われる内容の詩がこの日記と唱和集に見られることから、采蘋の女性としての心情に光を当てて考察を進めることとする。

2-2『東遊日記』に見る中国地方の文人たちとの交流

(1) 兄弟に別れを告げる

旅のはじめにまず采蘋が立ち寄ったのは豊前（大分県）に病気療養中であった兄の白圭が住む岩熊村と弟の公瑜（瑾次郎）が住む香春であった。病弱であった兄弟は名医が住んだといわれるこの地方で病気療養の傍ら豊前の子弟を教授していた。稗田村にはかつての古処の弟子である村上彦助とその弟健平（後の佛山）が住んでおり、彼等にとって白圭は尊敬する先生であり、近隣の子弟に学問を教えてくれるまたとない先生であった。健平は藤本平山の塾、巌邑堂に白圭を招いてそこで教えてくれるように手配をしている。采蘋は旅の途中に別れを告げる目的で立ち寄ったはずであったが、結局四十日余りの滞在となり、閏六月十八日にようやく岩熊を出発した。兄の病状は回復の見込みのないものであり、これが最後と覚悟の別れであった。この時、白圭に与えた留別の詩に云う。

---

[221] 山田新一郎『原古処・白圭・采蘋小伝及詩鈔』秋月公民館、1951 年、49 頁。

[222] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年。

[223] 最近の調査で秋月郷土館の原家資料の中に、宮内省からの送付目録があり、その中に「采蘋自筆、東遊日記（山陽）、漫遊日歴（肥薩）原氏蔵、箱入一巻」とあることを発見したが、その所在は不明である。

[224]「不許無名入故城」

秋風吹一葉　　秋風　一葉を吹く
無見不悲哉　　見るものとして悲しまざるは無きかな
同根客異郷　　同根　異郷に客たり
客中又分離　　客中　又分離す
吾曹所情鍾　　吾が曹　情の鍾まる所
何能得不悲　　何ぞ能く悲しまざるを得ん
此行聊爾耳　　此の行　聊爾なるのみ
得失唯自知　　得失　唯だ自ら知るのみ
達人在略情　　達人は情を略するに在り
相會非無期　　相會　期無きにあらず
千金且自重　　千金　且く自ら重せん
各是先人遺　　各おの是れ　先人の遺なり

兄の白圭とはこの時の別れが最後となった。「此の行聊爾なるのみ、得失唯だ自ら知る」と、この行にいささかの不安を見せるが、「各おの是れ先人の遺なり」と、父の遺命であることを自分に言い聞かせ納得しようとしている。岩熊で兄に別れを告げた後、日記は続く、

弟公瑜（瑾次郎）并びに竹田玄中、藤本寛蔵、村上健平、吉田顴吉、吉武玖次郎、弥山の庵に送り到りて飲む。寛蔵は弥山より帰る。餘皆送りて稗田村の彦甫宅に到る。時に明月中天にあり。彦甫胡牀を稗水の中央に移し、別筵を開き飲む。其上既に酔ふ。弟瑾及び玄中巌邑に帰る。予亦た就寝、鶏鳴きて東方微白なり。覺むる時日出づること三竿、宿醒猶ほ未だ解さず、此日亦た留る。

と日記にあるように弟たちが巌邑に帰った後も稗田村の彦甫の所に留まった。翌十九日いよいよ出発。彦甫の送行の詩に次韻して云う。

三千屈指豫期程　　三千屈指し　期程を豫す
幾歳琴書尋舊盟　　幾歳か琴書をもて　舊盟を尋ねん
数脚胡牀移水面　　数脚の胡牀　水面に移す
一樽村酒有風情　　一樽の村酒　風情有り
絳河星少懸明月　　絳河星少く　明月に懸く
傑嶂秋高佳夕晴　　傑嶂秋高く　夕晴佳なり
看取此行吾有誓　　看取せよ　此の行　吾に誓有り
無名豈敢入山城　　名無くして豈に敢て山城に入らんや

結句に父の遺言を入れることで、家族や友人との楽しい時間にも区切りをつけなければ

ならないと自らを戒めている詩である。

二十日　晴れ　七ッ半稗江村を発す。大有（健平）並びに猛（健平の弟）、観（観吾）玖（玖次郎）送り來て、門司の旅館に宿る。
二十一日　陰　早朝門司を發す。雀水橋邊にて村大有兄弟[225]に別す。大有（健平）の詩あり、次韻して云ふ。（次村大有送別之詩）

一從萍跡出郷山　　一たび萍跡に從せて　郷山を出づ
離恨綿々如循環　　離恨綿々として　循環するが如し
月桂秋高香馥郁　　月桂秋高く　馥郁として香る
看吾更折一枝還　　吾を看て更に一枝を折りて還る

二十二日　陰　早天神田を發す。九ッ比小倉に到る。舟を買ひ、七ッ過馬関に達す。西細江の江大聲（広江大聲）に投ず。
二十四日　晴れ　晝飯の後、吉田吉武二生を送行す。阿弥陀寺に到り、別詩に云ふ。（その内の一首）

二子乗舟帰故城[226]　二子舟に乗り　故城に帰る
帳然西望夕陽傾　　帳然として西のかた望めば　夕陽傾く
長風不管離情切　　長風管らず　離情の切なるを
帆影如飛破浪行　　帆影飛ぶが如く　浪を破りて行く

二十二日、小倉より下関に到り、西細江の広江大聲の海鷗吟社に投ず。健平、観吾、玖次郎は第一回目の東遊の時も下関或はさらに遠くまで同行した子弟であり、今回も下関まで同行している。ついに二十四日、二生とも別れを告げ、ここからはまさに千里独行の旅が始まるのである。二十四日の詩には、故郷の子弟との別れの切なさが詠まれている。

(2)　琴を学ぶ

ようやく弟子たちとも別れ、一人になって、かねてからの念願であったと思われる琴を習い始めた。琴については采蘋の詩中でも珍しい記述であり、どのような種類の琴であったのかは定かではないが、文政八年に福岡の亀井家を訪問した采蘋に託して、亀井昭陽が古処に与えた手紙に「日夜月琴賑々敷事に而皆相楽申候」[227]と見え、采蘋もおそらくこの時に月琴の調べを耳にしていたと思われる。月琴は中国から長崎にもたらされ、長崎では

[225] 村上健平・猛の兄弟
[226] 詩経の引用
[227] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、111 頁。

流行したようである。みだらな音楽と揶揄されることもあったが、亀井家は一家を揚げてこれを習い、楽しんでいた様子が昭陽の手紙から分かる。果たして采蘋の習った琴はこれと同じ琴であったのか、はたまた七弦琴であったのか今は知るすべがない。おそらく七弦琴が琴の俗称とされることから、采蘋の習ったのも七弦琴の可能性がある。俳人田上菊舎は天明六年に亀井南冥と知り合い、以来亀井家との交流を続けたが、菊舎も七弦琴の名手であり、漢詩や唐音及び弾琴は長崎で学んでいる。梁川星巌の妻、紅蘭も文政七年、夫妻で長崎を遊歴した際、清楽を耳にしたことから、紅蘭も晩年、京都にいるときに七弦琴を買い求め愛用していた[228]。

采蘋が友人阿策とはどこで知り合ったかは不明であるが、あるいは父に同行した前回の旅で知り合っていたのかも知れない。数日間の琴の師匠と楽しい日々を過ごしたことが日記から窺われる。采蘋の人生は後半になるに従い、父の遺言が重くのしかかり、益々男性的な剛健な詩が見られるが、三十歳の采蘋が女師匠から琴を習うという女性らしい一面をこの日記から垣間見る事が出来るのは貴重なことである。

二十六日　晴れ　晝飯の後、友人阿策の處にて飲む。夜に入りて帰る。
二十七日　晝前雷雨、阿策を訪ふ。琴を孝び、夜に入りて帰る。
二十八日　晴れ　晝後又琴を孝びに往く。夜に至る。
二十九日　晝の後琴を孝ぶ。海鷗吟社に帰る。郷山の白雲裊なるを望む。忽ち昔日を憶ふ。昔日厳君に陪して此地に遊び、此亭に寓して、主人父子と、日々閒談を相忘れて、優遊し、詩を吟じ、酒を酌みて、花月の興曽て覇旅の愁ひ無く、宛も郷里に在りて、吟友と周旋するが如し。今日、隻身家を離れて、将に武昌に東遊せんとして復た吟社を過ぎる。主人秋水と談じて舊時に及ぶ。各々風樹之感有り、覚えず泫然として涙下る。趨り帰りて室に入り、悵然として賦して此れを主人に示す。

単身萍泛幾時休	単身萍泛　幾つの時にか休まん
吟社風光感昔遊	吟社の風光　昔遊に感ず
賓主当年猶有恨	賓主当年猶ほ恨み有るがごとし
忘機相共狎沙鷗	機を忘れ相共に　沙鷗に狎る
四方有志莫由還	四方に志有るも　還るに由莫し
日々思家未暫閒	日々家を思ひて　未だ暫も閒あらず
硯海西南山起處	硯海の西南　山起こるの處
遥天一髪是郷関	遥天一髪　是れ郷関

〇昔遊：かって訪れたことがあること。〇沙鷗：水辺で憩うカモメ。〇郷関：ふるさ

[228] 伊藤信『梁川星巌翁　附紅蘭女史』象山社、1980 年 7 月。この中に紅蘭の「買琴歌」という詩が見える。

と。生まれ故郷。

海鷗吟社の広江大聲は頼山陽の門人であり、かつて山陽が九州遊歴の途次、ここに滞在したところである[229]。また采蘋も十八歳の時、父に同行してしばらく滞在した経験があり、旧知の場所であることからここに十日間滞在している。采蘋はここに滞在しながら阿策の所に通い琴を孝ったのであろう。上記の詩は父を失ってまだ日が浅い采蘋にとって、主人秋水との父の思い出話はいまだ涙を誘うものであり、十三年前の幸せな状況とは打って変わった現在の身の上を詩に託して秋水に贈ったものである。

(3) 相思の詩

一日　朝飯の後寝る。晝飯の後、廣陵□の有るを聞く。直に策の處に到り告別し、帰て家書及び知友に與ふる書を認めて夜を徹す。

二日　朝友人に詩一首を賦して贈る。

與君離別後無日不相思対鏡慵梳髪弄毫狂写詩

君と離別の後、相思はざる日無し。鏡に対し慵く梳髪を弄し、毫に狂ひて詩を写す。

扁舟従此去　　扁舟此従り去る
千里向天涯　　千里の天涯に向ふ
墨和双行涙　　墨に和す双行の涙
親緘寄阿誰　　親しく緘じて阿誰に寄する

晝の後乗舩に乗る。八ッ時馬関を発し、夜田浦に泊る。

七月に入って広島に行く舟があるのを聞きつけ、すぐに阿策の所に駆けつけ、別れをつげる。その後、家書や友人にお礼として贈る書を夜を徹してしたためている。翌日には友人に贈ったとされる詩一首があり、その詩題には、一体下関で何が起きたのかと興味津津なことが書かれており、明らかに友人以上の情が表現されている。詩の転句にも離別の悲しさが詠われている。しかし、この土地でいったい何が起こったのか詳細については知るすべがない。

三日　未明　新月を拝す。　田浦を發し、暮に鳥之島に泊る。三日より五日に到る。三日の間姫島を見る。

四日　日向に到り、延岡領八子に泊る。

五日　築城に到る。伊美候（港）に暮に泊る。硫黄山に新月を看る。悵然として感有り。

[229] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、136 頁。

六日　未明發す。晝後、大埼瀬戸を溯る。潮汐は盤渦なり。風帆疾きこと破浪の聲有るが如し。両岸の青山走りて、逃ぐる如し。樹間の蝶聲猶耳に在り。百里一瞬にして忽ち水急にして石出に到る。―帆影處りて風に飽く。舟却退して進む能はず。良久しくして一前一却―良久しくしてまた進む。遂に大海に出づ。順風潮に乗りて、餔時、坊州岩国穴（阿那）口に達す。

〇潮汐（ちょうせき）；うしお。海水の干満。〇盤渦（ばんか）；ぐるぐると渦を巻く。〇餔時（ほじ）；夕方。

七夕　舟は厳島に到る。故人伊藤氏に投ず。此の日朝飯後より―不快且つ船中の疲れ、一時に發りて一晝夜前後覚えず。堅臥して坐す。
八日　病夜まで癒えず。
九日　同前。終日廣陵の蘭陵來りて、ともに飲む。
十日　晝の後より病少し癒ゆ。

七月二日、広島行きの舟に乗り、田浦、鳥の島、姫島を回り、日向、延岡領八子、築城を経て、漸く舟は九州を離れ、七日夕方に広島の厳島に到る。ここで伊藤氏に宿る。ここも十三年前、父母に同伴して訪れた場所であり、旧知の伊藤氏のもとで、まず船旅の疲れを癒す。それから「十月十日　廣陵を發し、廣村に到る。」と日記にあるように約三カ月の間広島の各地を往復し、依頼に応じて書を認め、旧知の情を温めながら詩酒を交わし、詩嚢を肥やした。十二日には廿日市に到り、櫻井四郎を訪ね、翌日には府中に到り、原田十兵衛のもとでしばらく滞在する。このほかにも広島には父の友人頼杏平や神辺の菅茶山がおり、父亡き後の後見人の役割を果たしている。残念ながら菅茶山は采蘋が広島滞在中に没し、尋ねた時には墓参となった。文政八年の東遊の際に滞在し、詩を交わしていたが、その再会は果たすことが出来なかった。

十一日　全快し、古詩の韻範を讀み、詩一首を賦す
十二日　廿日市に渡る
十三日　昼の後櫻井四郎を訪ふ。夜に入りて帰る。
十四日　快晴　早起し、府中に到る。原田十兵衞を訪ふ。偶たま不在、男庸兵衞出迎へ、夜に入りて主人帰り、小酌す。
十五日　晝後小酌し、十兵衛を訪ふ。夜に入り、嘗牀を外庭に移し、又酌す。少雨遽かに到る。
初夜、漸く晴れて、月色玲瓏たり。詩一首。

客乗投君如在郷　　客に乗じて君に投じ　郷に在るが如し

席無賓主座相忘　　席に賓主無く　座相忘る
假山遥控眞山媚　　假山遥かに控ふ真山の媚
詩興漸知佳境長　　詩興漸く知る　佳境の長きを
欲納新凉晩呼酒　　新凉を納めんと欲して　晩の酒を呼ぶ
還迎明月屢移牀　　明月を還り迎へて　屡し牀を移す
一家敬愛誰能似　　一家の敬愛　誰にか能く似ん
我口従來糊四方　　我が口　従来　四方に糊せり

〇假山：築山

　　中元の祝儀に翠挹、柏原山池来る。
十六日　晴　暮前小雨あり。　終日無事、暮前より醉翁と酌す。

七月既望、望瀛亭書感示主人醉翁。余曽従先人来遊。距今十三年、同月日也。
七月既望、望瀛亭にて書感あり、主人醉翁に示す。余曽て先人の来遊に従ふ。距今十三年、同月日也。

曽遊君記不　　曽遊の君に記すや不や
此來望瀛州　　此に来たって瀛州を望む
離別十餘歳　　離別十餘歳
光陰一転頭　　光陰一転頭
醉翁老益壯　　醉翁老いて益ます壮なり
氣寛□無憂　　気寛□無憂
誰識天涯客　　誰か識る天涯の客
重斟既望秋　　重斟　既に秋を望む

文化乙亥（十二年）七月十六日　予　先人に陪して望瀛亭に遊ぶ。主人原田翁は高陽の徒なり。自称醉翁、今茲に予将に東遊せんとす。江都にて便りして道ふ、重ねて醉翁を訪ぬ。醉翁年古稀方に過ぐ。一たび鯨飲すること舊に依りたり。余其の矍鑠として衰へざるを喜びて、聊か一篇を賦して以て宥と為し、且懐舊の情を申るに云う。

十四日、府中に到り、原田十兵衛を訪ねる。この地の割庄屋で資産家であり、自らを醉翁と称する十兵衛の望瀛亭には采蘋十八歳の時にも父と訪れた場所である。七月十六日は奇しくも十三年前の同じ日であり、その時の事を思い、感慨を詠った詩と文章が上記のものである。

十七日　晴　暮前に小雨あり。夜に入り、厳島の詩を敲す。

濛々暮潮涵廟廊　　濛々たる暮潮　廟廊を涵す
緑烟消盡夜初凉　　緑烟消え盡きて　夜初めて凉し
人如唇氣樓中座　　人は唇気楼中に座するが如く
月自鼇頭山上揚　　月は鼇頭山上自り揚る
爲客三看滿輪影　　客と為りて三たび看る満輪の影
聞猿寸斷九回腸　　猿を聞きて寸断す　九回の腸
唯恐阿母懐兒切　　唯恐る阿母児を懐ふこと切なるを
一夕秋風鬢作霜　　一夕の秋風に　鬢霜と作らん

十九日　暈　晴、終日蒸す。また書を認め、且つ詩を賦す。

相逢談往日　　相逢ひて　往日を談ず
感慨一何深　　感慨一に何ぞ深し
弾銕秋聲竹　　銕を弾く　秋聲の竹
彎環月下林　　彎を環る　月下の林
歸心來此息　　帰心此に来りて息む
留著對君斟　　留著し　君に対ひて斟まん
吾豈驚人語　　吾豈に人語に驚かん
平生酖苦吟　　平生　苦吟に酖ける

挹翠楞主人、先人の次韻を持す籟先生の什を示さる。吟誦一回、悵然として往日陪遊の時を追思す。悲感兼ねて至り、遂に自ら讀貂を量らず、畫して其の需めに應ず。

〇讀貂：拘尾続貂（クビゾクチョウ）＝他人の残した仕事を継ぐことを謙遜して云う言葉。優れたものの後に、粗悪なものが続くこと。

十七日には厳島の詩を賦す。「三たび看る」と詩中にあることから、厳島を訪れたのは三度目であることが分かる。前回は両親と見たであろう満月を見上げて、故郷で暮らす母に思いを馳せている。醉翁の家では詩を賦したり、求めに応じて書を認めて過ごし、「帰心来此息」とあるようにホームシックもようやくおさまった様子が上記の詩から読み取れる。十九日には原田醉翁の親族である原田挹翠が持つ、父古処の詩に頼山陽が次韻した詩を見せられ、それを吟誦するや、たちまちかつて父に同伴してこの地を訪れた時の事を思い出し、悲感同時に湧きおこり、自らの非力を顧みず、人々の求めに応じて書を認めた。

廿日　昨日予将に廿日市に還らんとするに前夜、挹翠主人に招かれて已むを得ずして留滞す。朝飯の後書を認む。七ッ比醉翁と酌す。離杯七ッ半より挹翠楞主人に到るも不在。十兵衛の妻及び翠挹の妻と飲む。夜に入りて主人、其の先生阪井百太郎帰り同飲し、席上坂井に贈る。

偶為折簡客　　偶たま折簡の客と為る
訪舊樂新知　　舊を訪ひ　新知を楽しむ
已列嘉賓席　　已に嘉賓席に列す
羞無幼婦辭　　羞づ　幼婦辞無きを
旦迎松梢月　　旦に迎ふ　松梢の月
同盡手中杯　　同じく盡す　手中の杯
心醉吾帰去　　心醉して　吾れ帰り去く
尋盟應有期　　尋盟　應に期有るべし

〇折簡：竹簡や紙などを半分に切って書いた失礼な手紙。

廿一日　暈　晴　蒸すこと甚だし。日出でて府中より歩きて、廿日市に還る。原田元唐、森野庄次郎送る。
廿二日　将に宮島に還らんとするに、予に書を乞ふ者有り。遂に留まりて書を認む。殆んど七十枚、高木同、堀田梅太郎。
廿三日　二百廿日舩發せず滞る。午後高木に到り離杯を酌す。夜に入りて妓を聞く。
廿四日　堀田に到る。沙汀を歩みて貝を拾ふ。晝後、福田氏來る。潮を候ちて網を下ろす。直ちに鱠を爲り酒を酌む。夜に入りて、福井眞宰に到りて飲む。此夜深けて歸る。此の夜大風怒濤岸に掀りて終宵夢恬らず。
廿五日　風尚息まず。暮景より小酌す、夜に到りて、某家にて酌す。
廿六日　夜、福田氏と飲む。
廿七日　舩に乗りて、厳島に歸る。堀田梅（太郎）、福田大藏送る。
廿八日　夕に、備前岡山の人守田厚治に會し、ともに小酌す。
廿九日　無事
卅日　　同前。暮より小酌し、夜に到る。

七月二十日に府中を離れて廿日市に帰ろうとするが、結局挹翠主人に引きとめられ、醉翁や藩儒である阪井百太郎（虎山）らとの酒宴に同席する羽目となる。翌日ようやく原田元唐、森野庄次郎に送られて廿日市に帰り、二十二日には宮島に帰ろうとするが、今度は書を乞う者あり、七十枚を書いたという。そうこうしているうちに風のため舟がなかなか出航しないので、高木、福田大蔵、堀田梅太郎等と交遊して二十七日にようやく厳島に帰

る。上記の府中と廿日市での采蘋の地元有力者との交流、采蘋に対する人々の待遇は、二十八歳の時に采蘋が長崎滞在で経験したことを想起させる。書を求められ、連日酒宴に招待される人気者の漢詩人の姿がこのころ既に出来上がっていた事実を上記の日記は示している。しかしこの旅の成功も父の布石によって成り立っていたことは采蘋も承知していた。

(4) 広島での二カ月

八月

四日　□□（座主）を訪ぬ。晝飯の後、石州の人と廣陵に渡り、室（屋）に宿る。

五日　早朝、細工町に到る。長門屋蘭陵を訪ひ、世話ニテ天神町香月（香川）氏に旅宿す。夜に入りて、藤屋市郎兵衛□□□、蘭陵の子研、吉村柳太郎、大塚□（昌）伯桂省、波屋（世並屋）八助と水樓にて飲む。

六日　夜、蘭門屋藤屋桂省と飲む。

七日　無事、夜、老妓と飲む。

八日　堀田梅太郎、山田庫介来る。遂に同伴シテ一丁目山縣屋に到りて酌す。

九日　夕、大野屋水亭、内藤屋、長門屋文叢堂（雲）聊太郎、米屋文次郎桂眉と飲む。また船を泛べて酌す。月落ちて歸る。此の夜、文次郎□到り詩□を賦す。

十日　終日寢る。

八月四日、広島市に到り、厳島で知り合った中西蘭陵を訪ね、彼の世話で天神町の外科医で長崎出身の香川旦斎に投宿する。中西蘭陵は通称吉左衛門といい、藩の銀札場元役を務めた有力な商人で、俳諧・画を善くする文人であった[230]。広島では中西蘭陵という有力者の人脈と思われる町年寄の波屋（世並屋）八助や米屋文次郎桂眉らとの交流や、老妓との交際の様子は、殆ど長崎での半年間を思わせる、地元有力者による斡旋によって優遇された采蘋の旅先での日常が見て取れる。

(5) 広瀬旭荘との再会と頼杏坪との会遇

十一日　暈、晴。廣瀬吉甫（旭荘）、内大助、岸井管吉來訪す。舊を談じ酒を酌みて旅宿に歸る。予夜に入りて寓居を訪ふ。

十二日　吉甫廣秀才に贈る。

身跡悠々雨斷篷　　身跡悠々として　雨篷を断つ
飄然相遇是何風　　飄然として相遇ふは　是れ何れの風ぞ
明朝吹到分襟處　　明朝吹き至りて　襟を分くる處
還送弧帆盡碧空　　送り還る　弧帆は碧空に盡く

230 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、139 頁。

○断篷：拠り所のないさま。ゆくえを定めぬ旅人のたとえ。

午時三人、酌酒に到り、談話し夜に入り帰る。

十三日　大塚昌伯予の詩に和韻し、寄せ示す。予即席に疊韻し和答す二首。
又次韻して贈らる。

得失寧關粧不粧　　得失寧んぞ　粧不粧に関らんや
鏡奩何必□□□　　鏡奩　何んぞ必ずしも□□□
風流到處通家足　　風流到る處　通家に足る
未向文場用劔芒　　未だ文場に向ひて劍芒を用ひず

○文場：文学者の社会。文学界。

其二、
丈夫應有丈夫儀　　丈夫應に丈夫の儀有るべし
兒女寧無児女姿　　児女寧んぞ児女の姿無らんや
若使臭聲在淫具　　若し臭聲をして淫具在らしめば
人間何地避嫌疑　　人間何れの地にか嫌疑を避けん

此夜、春曦楼にて月を賞す。杏坪先生に謁し、廣吉甫[231]に別る。
また主人に贈る。（十三夜従杏坪先生賞月於春曦楼）

蒼范烟霧望難分　　蒼范として烟霧を望めども分かち難し
月下關山笛裏聞　　月下の関山　笛裏に聞く
吾有剪刀磨未試　　吾に剪刀有りて　磨けども未だ試さず
爲君一割雨餘雲　　君が為に一つに割かん　雨餘の雲

○剪刀；はさみ

山陽曰；尖而不弱才氣逼人可知吾郷無数厁贏男子走且僵矣
星巖曰；奇想

十一日には、東遊の後帰郷する途次の廣瀬旭荘（1807 -1863）と偶然出会うこととなる。文政八年、采蘋の東遊の途次、亀井家の草江亭で別れて以来の再会であった。内（田）大

[231] 広瀬旭荘

介、岸井管吉とともに寸時を惜しんで語り合った様子が日記から読み取れる。十三日の夜には、この時たまたま帰省していた広島藩儒頼杏坪（1756～1834）が中島の小野氏を招いて賞月の会を催し、采蘋も旭荘とともに招かれて二人は初めて杏坪に面会する機会を得た。旭荘はこの夜采蘋とともに韻を分かって詩を賦したことが『梅墩詩集』に見える[232]。旭荘はこの日舟で広島を離れ帰郷の途に就いた。

十三日の昼には大塚昌伯の和韻に対し畳韻した二首がある。大塚昌伯の詩の内容が分からないのは残念であるが、采蘋のジェンダーに関する見解が読み取れる貴重な詩である。

十五日には藤屋市郎兵衛の臨瀦楼に杏坪その他諸人が招かれ采蘋も同席して、詩の応酬あり。十六日には茶人の淡堂という人に賞月の会に杏坪とともに招かれ、次の詩を賦す[233]。

十六夜　快晴。　杏坪先生と月を賞し、談ず。（淡堂同杏坪先生賞月）

笑看窓紙明　　笑ひて看る　窓紙の明らむを
啞々宿鴉驚　　啞々　宿鴉驚く
風未雲無跡　　風未　雲は跡無く
松間月有聲　　松間　月に聲有り
茶從陸翁品　　茶は陸翁の品するに従ひ
詩重謝公清　　詩は謝公の清きを重んず
酒渇寒泉影　　酒に渇く　寒泉の影
煎來欲解酲　　煎じ来たりて　酲を解かんと欲す

星巖曰；風末句所謂天来
山陽曰；風末句大佳松間句近俗然相救不害爲佳聯

この後、十月十日広島を離れるまで、蘭陵ほか広島の名氏らと交際し、また杏坪先生を訪い、その息子采真ともたびたび交遊している。采蘋は頼山陽の実家を何度か訪れたことが、山陽の母梅颸(1760-1844)が采蘋に宛てた十月九日付けの手紙によって知ることが出来る[234]。広島を離れるに当たり、頼杏平もまた十月九日付で旅先の紹介状を采蘋に書き与えている。この原本は秋月郷土館に保管されているが、小天地閣叢書所収の『東遊日記』の最初にはこの紹介状の写しがある。以下にその全文を揚げる。

此采蘋女史者故之原震平古處山人之息女にて才学一時之閨秀と見候。遺孤可憐候。其

[232] 廣瀬旭荘「梅墩詩鈔」富士川英郎他編『詩集日本漢詩十一巻』汲古書院、1987 年 10 月に「春曦樓席上同頼杏坪先生原女史賦、得韻虞、時余将登船」と題する詩がある。
[233] 春山氏によれば、この詩は兄の白圭に手紙で知らせその註に「此夜五律二首を作り申候。杏坪翁大に驚かれ申候」と報告しており、また「淡堂者茶人之家故後聯及之」とも記している。
[234] 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会、1958 年、143 頁。

御地被参候ハヽ御垂青所希ニ御座候。

丁亥十月九日

杏坪老人

尾道	元吉
	把翠園
今津	牡丹園
神辺	黄葉夕陽邨舎
備中笠岡	小寺君
鴨方	西山君
長尾	小野泉蔵君
倉敷	観龍寺上人
同	岡迂庵主人
岡山	萬波君
加古川	中谷諸子

以路次為次第

十月十日以降の道程はほぼこの紹介状の人物を辿ったことが日記から読み取れる。

(6)「□思唱和集」

日記は翌年の四月十四日の兵庫県明石までで終わり、そのあとに「□思唱和集」という詩集が続いている。東遊中に詠んだ詩をまとめて「唱和集」としたもののように見える。後に京都に立ち寄った時に頼山陽・梁川星巌に添削を請うた詩集は、秋月郷土館には見当たらないが、写本で伝わる渡邊虚舟選『采蘋先生詩集』[235]に「此四十餘首係于大家批評故不分古律絶之體也」と前書きされているように、頼山陽と梁川星巌の批評が書きこまれた「采蘋詩集」が挿入されており、この詩集が京都において采蘋が両詩人に批評を請うた詩集ではないかと思われる。この詩集に採録されている詩は『東遊日記』中に詠まれた詩の中から抜粋したものである。この他にも、頼山陽と梁川星巌の批評が書きこまれた詩は『有煒樓草稿抜粋』[236]にも見られ、上記の「采蘋詩集」のものと同様であることから、頼山陽と梁川星巌の批評を請うた采蘋の詩集は『有煒樓草稿』であった可能性があるが、原本が確認できていないため確かな事は分からない。

采蘋が日記を途中でやめた理由は定かではなく、従って日記が途切れた兵庫の後の道程は辿る事が出来ない。「唱和集」は重陽の後、つまり九月九日後の詩から始まり、翌年四月七日の中谷真作招飲の席上賦した詩まで、約七カ月間に詠まれた百首程の詩が収められて

[235] 大正初期に渡邊虚舟が編集した詩集で四百四十三首の詩を詩形別に編集したもの。秋月郷土館蔵。
[236] 秋月郷土館蔵

いる。
ここからは日記には書かれていないが、「唱和集」に書かれた詩を日記と対応させて見て行くこととする。

餞十月九

蘭山芳野鴨水湄　　蘭山芳野　鴨は水湄にあり
棹月吟花空相思　　月に棹さし　花を吟じて　空しく相思ふ
苒土三千東下日　　苒土三千　東下の日
孤燈或有把杯時　　孤燈或ひと有り　杯を把る時

留別十日朝

客久他郷似出郷　　客久しく他郷にありて　郷を出るに似たり
高楼同酌別離觴　　高楼にて同に酌す　別離の觴
請看日夜東流水　　請ふて看る　日夜東のかた水の流るるを
別意與之孰短長　　別意は之れと孰れか短長ならん

十日夜雨

暗風吹雨四檐鳴　　暗風吹きて　雨四檐に鳴く
文枕幽齋無限情　　文枕幽斎して　無限の情
昨夜江楼同一酔　　昨夜江楼にて同に一酔す
豈知各地聴斯聲　　豈知るや　各地　斯の聲を聴くを

十一日過本安楼

風景依稀水竹郷　　風景は依稀たり　水竹の郷
斯亭斯閣共杯觴　　斯の亭　斯の閣　杯觴を共にす
一朝夢覺人相遠　　一朝夢覚て　人は相遠し
無盡江流惹恨長　　江流は盡くること無く　恨みを惹きて長し

上記の四首は「唱和集」に見える詩で、広島を離れるにあたって詠んだ詩である。

十一月
八日　御堂[237]に到る。
十九日　尾道に達す。
廿九日　今津駅に到る。

[237] 御堂は広島市中区恵美須町

今津牡丹園

春風吹綻牡丹芽　　春風吹きて綻ぶ　牡丹の芽
元是沈香違愛花　　元是れ沈香　違愛の花
妖艶從來傾國賞　　妖艶　従来　傾国の賞
栽培自耐向人誇　　栽培自ら向人に向ひて誇るるに耐る
倚粧飛燕無容色　　粧に倚れば　飛燕は容色無し
解語揚妃獨麗華　　解語の揚妃　獨り麗華
似調清平出新曲　　清平を調ふるに似て　新曲出づ
併將太白屬君家　　太白を将つて　君が家に属す

十一月に入って頼杏坪の紹介状を頼りに御堂、尾道、今津に到る。尾道では橋本吉（鍋屋吉右衛門）や金屋茂右衛門の把翠園を訪ねたものと思われる。今津では二首の詩を詠んでいることが「唱和集」に見える。その一首は河本宮太の牡丹園を訪れて詠んだものと思われる。楊貴妃の古事に依拠した興味深い詩である。

十二月
三日～七日　神邊に滞留

廉塾邂逅中村鷦鷯嵒洲及添川
席上此を贈る

萍蹤相遇豈尋常　　萍蹤相遇ふは　豈に尋常ならんや
賓主一堂皆異郷　　賓主一堂　皆異郷
梅着寒花點白雪　　梅は寒花を着け　白雪を點ず
客藏遺墨在青囊　　客は遺墨を蔵して　青嚢に在り
尋盟難奈山河邈　　尋ね盟ること難しきは　奈んせん　山河の邈かなるを
話舊還牽風樹傷　　話は舊に還り、牽き風　樹傷む
此夕若非期群會　　此の夕べ　若し群會を期するに非ざれば
愁中爭得把杯觴　　愁中　争か　杯觴を把ること得んや

茶山先生を悼む

曽陪吟坐得相親　　曽て吟坐に陪して　相親むことを得たり
正是閑園花柳春　　正に是れ　閑園花柳の春
識生難爲死□□　　識生難為死□□
空理玉樹委黄塵　　空しく玉樹を理めて　黄塵に委す
梅開窓外倶含笑　　梅開く窓外　猶ほ笑みを含む
人坐帷前更愴神　　人は帷前に坐して　更に神を愴む

記得當年送我日　　記し得たり　當年　我を送る日
倚門雙髩白於銀　　倚門　双髩　銀より白し

十二月に入り、三日から七日まで神辺の黄葉夕陽村舎を訪ねたが、菅茶山は采蘋が広島滞在中、八十歳をもってこの世を去り、訪問は墓参となった。廉塾には塾生の中村鷦鷯嵒洲や添川らが集まり、采蘋のために一席を設けてくれた。その席上で賦した詩と茶山を悼む詩を残している。霊前では、二年前の訪問の際、茶山から贈られた送別の詩を思い出し、また旅立つ自分を門のところで見送ってくれた生前の茶山の白髪姿が懐かしく思い出されて、しばし感慨にふけった様子が詩から読み取れる。

八日　笠岡に到る

備中笠岡小野李山翁八十の賀
黄薇海上有仙神　　黄薇　海上　仙神有り
髪載秋霜心居春　　髪は秋霜を載し　心は春に居る
骨緑髄青長得々　　骨緑髄青　長く得々たり
階蘭庭玉又振々　　階蘭庭玉　又振々たり
性同函谷遺徑老　　性は函谷に同じく　徑に遺りて老ゆ
年似渭陽垂釣人　　年は渭陽に似て　垂釣の人
瞿鑠如翁何以是　　瞿鑠として翁の如し　何を以てか是ならん
知他孝養更娛親　　他の孝養を知りて　更に娛み親しむ

十一日　暢方に到り、西山復軒を訪ふ。
十三日　中山の姫井省叔宅に遊ぶ。

姫井省叔書斎壁上に題す
聚頭一室中　　頭を一室中に聚めて
強半斷根蓬　　強ひて半ば　根を断つ蓬
坐自無賓主　　坐して自づから　賓主無し
心寧有異同　　心は寧ろ　異同有り

黄葉夕陽村舎を早々に辞して、八日には笠岡に到り、小野李山翁八十の賀に招かれ、七律を賦した。十三日には中山の姫井省叔宅に遊び、五絶を賦している。

十六日　西山に帰る。
十七日　暢方を發し、長尾に到る。尾（小）野泉蔵に答宿。

十九日　節分

十九日　立春。長尾より宮内に到る。途中鷦鷯翁に邂逅す。遂に西河（阿）知を過ぎ、丸河（丸川松隠）氏に宿る。

和鷦鷯翁より贈らるに和す

屋雪玲瓏映落暉　　屋雪玲瓏　落暉に映える
遊方重叩碩人扉　　遊方　重ねて叩く　碩人の扉
欲知牝馬利貞處　　知らんと欲す　牝馬　利貞の處
看取驚鴻避徵飛　　看取す　驚きたる鴻は　徵くを避けて飛ぶ
投宿通家多厚意　　通家に投宿して　厚意多く
憐春芳樹有餘□　　春の芳樹を憐み　餘□有り
悠々身跡東流水　　悠々たり　身の跡　水は東に流る
不識向西何日帰　　識らず　西に向ひて何つの日か帰るを

星巖曰；次聯瀉對活動如竜如鬼

松隠翁に次韻す

任重三千道杳然　　任は重く　三千の道は杳然たり
人言遠覓伯鸞賢　　人言は遠く覓む　伯鸞の賢
月中折桂知何日　　月中桂を折るは　知る何れの日か
自笑無階欲上天　　自笑す　階無くして天上を欲す

此行此意使誰知　　此の行　此の意　誰にか知らしめん
不是浪遊好怪寄　　浪遊を是とせず　好みて寄するを怪しむ
常恐招來所生辱　　常に招来を恐れて　辱を生ずる所
遊方幸然老來規　　遊方　幸然たり　老来の規

松下清斎席上主人翁の需に應じて此を賦す

萍蹤何幸得相尋　　萍蹤　何の幸ひを得て　相尋ぬ
秉燭清斎坐夜深　　燭を秉りて　清斎に坐して　夜深し
致仕年同大夫樹　　致仕の年　同じく　大夫の樹
知君長護歳寒心　　君を知り　長く護る　歳寒の心

歳晩即時

歳聿其暮事忽忙　　歳聿に其れ暮れんとして　事忽ち忙し
閑客心頭豈敢遑　　閑客の心頭に　豈に敢て遑あらんや

牀上讀殘書未斂　　牀上に讀み残して　書未だ斂めず
窓間手補舊征衣　　窓間　手づから補ふ　舊き征衣

山陽曰；女子詩自有所宜他篇往々類丈夫語如此詩不然

傍人如在笑吾痴　　傍人　如し在らば　吾が痴を笑はん
猶自衣縫依舊時　　猶自ら衣を縫ふは　舊時に依る
身上着來效寛緩　　身上　着け来れば　寛緩に效ふ
初知久客減容姿　　初めて知る　久客　容姿を減ずるを

十七日には長尾の招月亭主人小野泉蔵宅に投宿、十九日には長尾より宮内に到り、丸川松隠氏に宿る。松隠はかつて大阪の懐徳堂で書を講じ、また備中関藩の参与となった人で、この時は郷里に隠退していた。采蘋の詩には旅先で衣類を繕い、また容姿の減じたことに氣づいたことなど、長旅の苦労が詠みこまれている。

廿日　立春。宮内に到り、真野竹堂翁の苦見停、此に将に歳を迎ふ。

元旦口号
寅賓紅日物皆揚　　寅みて　紅日を賓く　物皆揚がる
椒酒相迎戸々慶　　椒酒相迎ふ　戸々の慶
聚首幾時慰親膝　　聚首するは幾時ぞ　親しく膝を慰む
同根三子各他郷　　同根の三子　各おの他郷
帰鴻漸渚青蘋轉　　鴻は漸く渚に帰り　青蘋は轉ず
啼鳥出幽嫩柳長　　啼鳥は幽を出て　嫩柳は長し
過暖関心花信早　　過ちて関心を暖むるも　花信は早し
春遊恐後洛山芳　　春遊後るを恐るるも　洛山は芳し

又
吉備山雲欲暁光　　吉備山の雲　暁光せんと欲す
四五聲高野梅香　　四五の聲高く　野梅香し
今朝阿母思兒處　　今朝　阿母　児を思ふ処
知否遅留滞此郷　　知るや否や　遅留し　此郷に滞るを

二日同竹堂翁飲席上此を賦す
僑居為主々爲賓　　僑居　主と為り　主は賓と為る
同是舞平二百民　　同じくは是れ　舞平　二百の民

罷女去家遊自在　　女家に去くを罷めて　自在に遊ぶ
相迎一笑賀新年　　相迎へ一笑して　新年を賀す

三日吉備祠前
幾群賓客踏春行　　幾群の賓客　春を踏んで行く
感應曾聞鑊有聲　　感應して　曽て聞く　鑊に聲有り
吾亦相随羅拝去　　吾亦相随ひ　羅拝して去る
虔祈工作迅雷鳴　　虔んで工作を祈れば　迅雷鳴る

眞野翁に寄す
倦鳥投君借一枝　　倦鳥君に投じて　一枝を借る
羽毛養得漸披々　　羽毛養ひ得て　漸く披々たり
好晴日々春風暖　　好晴の日々　春風暖かし
鳴謝低回欲去遅　　鳴謝　低回して　遅れて去んことを欲す
過了一年成底事　　一年過ぎ了りて　底事成る
勝興屢停得意地　　興勝りて　屡し停る　意を得るの地
燈前屈指計前程　　燈前に指を屈して　前程を計る
道路三分猶贏二　　道路三分　猶ほ二に贏つ

留別十六日（備中宮内の真野翁に寄せる）
客久他郷似出郷　　客他郷に久しく　郷を出るに似たり
高樓置酒把離觴　　高楼に酒を置き　離觴を把る
千絲萬緌歡園柳　　千絲萬緌　園柳を歓ぶ
別恨與之孰短長　　別恨　之と孰れか短長ならん

備中宮内の真野竹堂翁の苦見停で正月を迎え、吉備神社に参拝したりしてゆったりと新年を祝った様子が詩から窺われる。ここに十六日まで滞在した。留別の詩には「客久他郷似出郷」とあり、真野竹堂の苦見停での滞在が居心地の良いものであったことを物語っている。

戊子孟春　（文政十一年正月）
十六日　宮内駅を發し、岡山に到る。
旅宿　十六夜

偶成
丁頭明滅一燈残　　丁頭　明滅す　一燈の残

風雪歸來夜正蘭　　風雪帰り来って　夜正に蘭く
蠖屈自憐多病客　　蠖屈自ら憐む　多病の客
木綿衾薄不耐寒　　木綿の衾薄く　寒に耐えず

吾行何處不同盟　　吾何處にか行かん　盟を同じくせず
楽地優遊千里程　　楽地に優遊す　千里の程
此行獨少風流主　　此の行獨り少なし　風流の主
夜雨弧燈有旅情　　夜雨の弧燈　旅情有り

文政十一年一月十六日、宮内駅を發し、岡山に到る。その夜は旅宿であったらしく、その侘しさを二首の絶句に表している。岡山では萬波醒盧、水田君享等に会ったと思われる。

十九日　岡城より深本宿の酒店に到る。
廿日　和気に到り、長谷川文右衛門宅に宿る。

廿日
一路春風入和気　　一路の春風　和気に入る
大江□群棹聲聞　　大江□群　棹の聲を聞く
遠人倦脚貧程罷　　遠人の倦脚　貧しき程に罷る
來宿臨清閣上雲　　宿に来りて臨めば　清し閣上の雲

翌廿一日　北方に到り、明石退蔵宅に宿る。

廿一日　清閣に臨み即事
山秀水奔両絶寄　　山秀水奔　両絶寄る
山春融雪入溪聲　　山春　雪を融かして　渓に入る聲
碧流不□舟多少　　碧流不□　舟多少
五々三々鼓棹行　　五々三々　棹を鼓して行く

廿三日　　題披雲閣擇薬帖　　披雲閣擇薬帖に題す
借問師何去　　借問す　師何くにか去く
方書狀上間　　方に書状を上る間に
偶來留浪跡　　偶たま来つて　浪跡を留む
信宿亦強顔　　信宿　亦た強顔
連日生雲處　　連日　雲を生ずる處
認君採薬山　　君に認む　採薬の山

久辞秋月府　　久しく辞す　秋月の府
幸欲竊丹還　　幸ひ丹を竊みて還らんと欲す

二十日和気に入り、翌日明石退蔵宅を訪問。明石退蔵（希範）は古処の知人の武元景文の一族で、医者であり、屋号を披雲閣と称した。二十一日と二十三日に賦した詩がある。

廿五日　緒方に到り、小田謙蔵（盤石）に投ず。

三月朔　同盤谷主人残樽を携え山花を賞す
落花如霰月如烟　　落花は霰の如く　月は烟の如し
四野寥々午夜風　　四野　寥々たり　午夜の風
獨有愁人眠不着　　獨り愁人　眠りに着かざる有り
垂楊枝上聴新鵑　　楊枝を垂る上に　新鵑を聴く

雲想山花々想雲　　雲に山花を想ひ　花に雲を想ふ
雲裝花綴更難分　　雲裝花綴　更に分ち難し
東方二十四番外　　東方　二十四番外
暘谷春風産異芬　　暘谷の春風　異芬を産む

別盤谷山人　　盤谷山人に別す
一家敬愛話情親　　一家敬愛し　話情親たり
閑却羈旅度幾旬　　羈旅を閑却して　幾旬に度る
欲具行裝光候霄　　行装を具せんと欲して　光霄に候す
因悲生別轉傷春　　生別を悲しむに因りて　轉た春を傷む
落花芳草長亭暁　　落花の芳草　長亭の暁
積水遥天獨住身　　積水天に遥かなり　獨り身に住む
萍梗合離雖有約　　萍梗と合ひ離れ　約有りと雖ども
空臨岐路嘆清塵　　空しく岐路に臨み　清塵を嘆く

一月二十五日、播州赤穂（兵庫県）に到り、小田謙蔵（盤石）に投じた。盤石は古処の旧知の友人で、名は攸好、字は徳郷、盤石は号である。采蘋は盤石の家を拠点として赤穂近郊の知人友人を訪ね、或は書を講じて二カ月の長逗留となった。別離の詩にはその辛さが表現されている。ここより「金蘭簿」を付け始める。

廿七日　赤城に到り、橋本甚右衛門。
廿八日　中島採珠楼にて紅梅を看る。夜に入り三木元一に宿る。

採珠楼賞紅梅分韻

東皇近似愛容華　　東皇は容華を愛しむに近似す
先使梅妃試妝靚　　先づ　梅妃をして　妝靚を試さしむ
舞袖賜緋寵正新　　舞袖　緋を賜り　寵正に新たなり
醉顔暈酒霞相映　　酔顔暈酒　霞みて相映ゆ
春寒不厭卷珠簾　　春寒　厭はず　珠簾を卷く
吟客多情秉短檠　　吟客は多情　短檠を秉る
午夜樓頭一陣風　　午夜　楼頭　一陣の風
暗香時繞衣襟淨　　暗香時に繞りて　衣襟淨し

廿九日　雨中□□に到り、復た緒方に帰る。
二月十六日より十八日に到る。大霾。
十九廿日□□□
三月廿五日　程を發し、瀧城に到る。是日雨にて圓尾文叔に宿る。春盡きて姫府宿学校に到り、深澤輿平主人に会す。

三月二十五日、小田盤石に別れを告げ、まず圓尾文叔に宿る。ここより姫路に入り、深澤輿平主人、名は維剛、字は到大に会す。

夏（四月）
朔日　同所
二日　鹿浦に遊び、帰路本荘に宿る。
四五　内山整葺に宿る。
六日　加古川に到り、高橋氏に投ず。

畳韻和高橋蒼山　　畳韻して高橋蒼山に和す
此去悠々又向東　　此より去りて　悠々として又東に向かふ
神交千里夢相通　　神交　千里　夢に相通ず
家元天末歸何日　　家元より天末　帰るは何れの日ぞ
跡似楊花飛倚風　　跡は楊花に似て　飛びて風に倚る
同調最親唯有子　　同調最も親しきは唯だ子有るのみ
再期願及未成翁　　再期　願ひ及びて　未だ翁と成らず
高樓別後如相思　　高楼の別後　相思ふが如し
一々書来尺素中　　一々書き来たる　尺素の中

采蘋の金蘭簿によれば、高橋蒼山は恕介といい加古川の人。上記の詩は高橋蒼山の詩に畳韻して和したものであるが、後半の句は明らかに心を通わした情感が表現されている。この詩は采蘋詩稿の中でも代表作とされており、故郷の秋月に詩碑が建てられている。高橋蒼山が金蘭簿にある通り加古川の人であれば、秋月城祉に建てる詩碑の内容としては相応しくないように思われる。この理由からか、この詩は甘木詩社の門人に宛てたものとする説もあるが、確かな資料がない今、今後の研究を待つほかはない。

七日　中谷真作招飲す。

中谷氏招飲席上主人に次韻す

經歳飄遊西復東	歳を経て飄遊し　西復た東
至今家書祭難通	今に至りて　家書祭るも通じ難し
歸寧夢斷雲山路	帰りて寧ろ夢を断たん　雲山の路
反哺鴉噪日夕風	反哺　鴉は噪ぐ　日夕の風
且看尋盟逢韵士	且く看よ　尋盟して　韵士に逢ふを
何知話舊及家翁	何んぞ知らん　話舊く　家翁に及ぶを
回思十六年前事	思ひを回すは　十六年前の事
遊者如此弾指中	遊者は此の如く　弾指の中

山陽曰；首聯固可然一正一喩徴近偏枯

星巖曰；何偏枯之有我次爲古人復出

八日　尾上に遊ぶ。

九日　本郷招飲し、晩、鹿子川に舟を泛ぶ。

十日　夜伯洗来呉、中や散助宅に投宿す。

十三日　明石に到り、前田氏を訪ふ。故あり旅宿す。

十四日　兵庫にて小田（伊織）氏を訪ふ。遂に藤田（万年）氏に到り、同人の世話にて旅宿す。

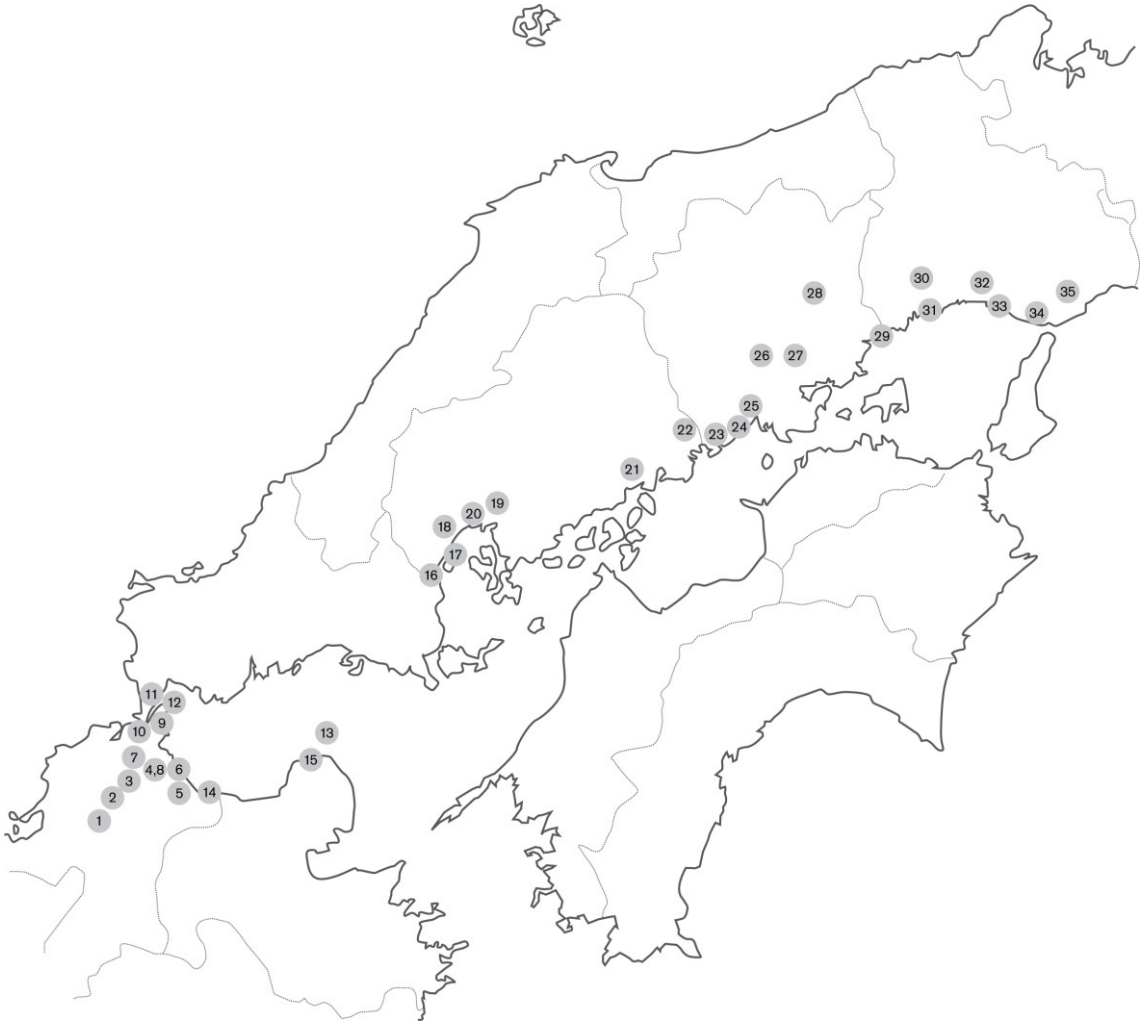
十五日（記録なし）

十六日（記録なし）

四月七日には中谷真作に招待されて席上主人の詩に次韻した。その中で「帰りて寧ろ夢を断たん　雲山の路」と見えるように、父の遺命に従って旅を続けることに心の揺らぎも見える。しかし、話は父のことに及び、十六年前父が致仕した時のことを思い出し、また心を新たにしたのである。この後、十三日には明石に至り、十四日には兵庫に到着。日記はこの日を最後に終わっている。

2-3『東遊日記』の旅程図

『東遊日記』の旅程図を以下に示す。地図上の番号に従って、訪問地、訪問諸氏、滞在期間等を表に示した。



図：筆者作成

訪問先	訪問した人物	滞在日及び期間
①秋月		文政 10／6／3 出発
②猪騰		6／3
③香春	平森宅	6／4
④稗田	村上彦甲宅	6／5・6／19
⑤弓師	医師鳥野玄珉	6／6
⑥築城		6／7
⑦岩熊	藤本寛蔵	6／8～閏 6／18
⑧稗田	村上彦甲宅	6／19

⑨門司	旅館	6／20
⑩小倉		6／22
⑪下関	西細江の廣江大聲	6／22～7／2
⑫田の浦		7／2
⑬姫島		7／3 に見る
⑭宇島		7／4
⑮伊美		7／5
⑯玖波港		7／6
⑰宮島	故人伊藤氏	7／7・7／27
⑱廿日市	櫻井四郎	7／12・7／21
⑲府中	原田十兵衛	7／14・7／21
⑳広島	中西蘭陵・堀田梅太郎・山田庫介・広瀬旭荘・頼杏坪・頼采眞・大塚昌伯	8／4～10／10
㉑尾道		10／19
㉒神辺		12／3～12／7
㉓笠岡	小野李山	12／8
㉔鴨方	西山復軒	12／11～12／17
㉕長尾	小野泉蔵・松下清斎・丸河松陰	12／17～12／19
㉖備中宮内	真野竹堂	文政 11／12／20～1／16
㉗岡山		1／16
㉘和気	赤石希範・長谷川文右衛門・北方宅・赤石退蔵宅	1／20～1／24
㉙赤穂	小田謙蔵	1／25～3／25
㉚姫路	深沢主人	3／末～4／1
㉛飾磨	内山整莽	4／2～5
㉜加古川	高橋氏・中谷真作・中谷三助宅	4／6～7・4／10
㉝尾上		4／8
㉞明石	前田氏	4／13
㉟兵庫	小田伊織・藤田萬年	4／14

三節　京都の再遊

最初の京都滞在は一年半を費やしたにも関わらず、その成果は得られなかったが、今回

の旅の事情は異なっていた。父の遺言を果たすべく、周到に計画した様子が上記の『東遊日記』からも窺われる。前回の旅の記録は殆ど残らず、詩稿も見当たらないが、今回の旅は初めから日記をつけ、百首以上の詩を残している。さらにこれらの詩稿中から自選の作を頼山陽、梁川星巌に添削を依頼し、漢詩人として生計を立てるため江戸での生活に備えた意気込みが窺える。両氏の評の付いた詩稿の原本は見いだせないが、秋月郷土館には『有煒樓草稿抜萃』と題した写本があり、この中に頼山陽、梁川星巌の評が書かれた詩が多く見られる。この写本は西村天囚によって書かれたということであるが、東遊中に詠まれた詩の多くに両氏の評が付されている。添削を依頼された山陽は、采蘋の詩稿の末尾に次のように記している。

…何圖織々玉指、具此鵬龍之力、可見家庭鍾愛、教訓有素也、女兒身可重、況非尋常女兒、願自珍惜、以副罔極之意耳。

（…何ぞ圖らん纖纖たる玉指、此れ鵬龍の力を具ふ、家庭鐘愛せらるる可し、教訓素より有り、女児身重かる可し、況んや尋常の女兒に非んや、自ら珍惜することを願ひ、福祉局の意を以てするのみ。）

梁川星巌には今回が初めての対面である。しかし、星巌とはすでに長崎からの手紙によって書面での交流はあった。星巌の采蘋の詩に対する総評は以下のようであった。

當今作律詩者、率皆委弱支離、女史何従而得此骨力雄勁氣脈連絡来、想家岩嚴所教乎、將天授乎、但恨未免笨手粗脚耳、向後益専力於讀書、且精熟唐人詩集、則優柔漸妙之味自出焉。

（當今の律詩を作る者、率ね皆委弱支離、女史何に従りて得るか、此の骨力雄勁にして氣脈連絡来る、想ふに家は厳所の教か、将に天授か、但し恨むらくは未だ笨手粗脚を免れずのみ、向後は益ます讀書に専力し、旦つ唐人詩集を精熟すべし、則ち優柔漸妙の味自ら出ずるならん。）

この中で星巌は讀書に精を出し、唐人の詩集を読んで勉強に励めば「優柔漸妙之味自出」と助言をしている。また下記の紹介状を書き与えて、旅の便宜を図っている。

各位吟長兄益御多福之由。諸文人来往傳話ニ承リ候。先以欣喜々々。小生事碌々無事に而京師寓居仕候間。乍憚御安堵可被下候。扨而筑前秋月原君震平之令愛采蘋女史。今般東下。必以諸貴境遍歴。何卒宜敷御欵待之程奉頑上候。小生近況ハ女史より御承知可被下候。草々頓首。

八月四日

詩禅事

梁川新十郎

遠州掛川　　大庭代助様
勢州四日市　　伊達多右衛門様
同　　原　文甫様
島田　　桑原古作様
藤枝　　藤屋金平様
岩淵　　大村圭蔵様
原　　植松治郎右門様
沼津　　鈴木儀三郎様
三島　　朝日與右衛門様

各位文几下

この外、京都では中島棕隠にも面会したことが棕隠の『金帚集』に送別の詩があることによって知ることが出来る。

送采蘋女史赴江戸　二首
爲弘家學越疆行、粉氣脂春帯字清、一劒霜寒當大嶽、(采蘋常佩一口太刀)、雙肩緑秀照滄瀛、聞鴻互訢離群恨、仰月高抒攀桂情、關吏他年能認否、女中又有棄繻生。

(送采蘋女史の江戸に赴くを送る　二首
家学を弘めんが為に彊を越へて行く、粉気脂香字に帯びて清し、一劒霜寒にして大獄に當る、雙眉の緑秀て滄瀛を照す、鴻を聞きて互に訢ふ離群の恨、月を仰ぎて高く抒る攀桂の情、關吏他年能く認んや否や、女中にも又棄繻の生有り。)

嘗愧嬌柔無所爲、獨行奮志向天涯、風鬟霧鬢秋千刷、銀筆玉叙花兩枝、顧影暗揮懐母涙、燐才誰贈代媒詩、縦諳先籍能相授、情事應須異蔡姫。

(嘗て嬌柔爲す所無きを愧づ、獨行志を奮ひて天涯に向ふ、風鬟霧鬢秋千刷く、銀筆玉叙花両枝、影を顧て暗に母を懐ふ涙を揮ふ、才を憐みて誰か媒に代ふ詩を贈らん、縦ひ先籍を諳んじて能く相授るも、情事應に須らく蔡姫[238]に異らん。)

[238] 蔡文姫：後漢時代末期の大学者蔡邕（さいよう）の娘で文学・楽曲に優れた才媛として有名。詩集に『悲憤詩』がある。

采蘋は後にこの東遊の旅路を振り返って次の様に記している。

…悲哉生世爲女、千里獨行、豈容易乎、始蘋東遊也、間者皆冷笑以爲學女侠之流。蘋獨斷然不顧、單身越疆、以有所恃也、防長之間、嘗従先人遊磨、素多相識、出于藝備、有賴杏坪、菅茶山之二老、入京則賴山陽、皆一代碩儒而執友也。故得其先容、路次不絶送迎、到處如歸、東海道叩豪潮律師、謁羽倉君、是以關史不誰何、千里如咫尺、實賴先人餘慶也…[239]

（…悲しいかな。世に生れて女と爲る。千里獨行、豈に容易ならんや。始めて蘋東遊するや、聞く者皆令笑す。女侠の流を學ぶを以て爲すと。蘋獨り断然として顧みず。單身疆を越ゆる、以て恃む所有るなり。長するを防ぐの間、嘗て先人の遊歴に從ふ。素より相識多し。ここより藝備に出でば、賴杏坪、菅茶山の二老有り。京に入れば則ち賴山陽あり。皆一代の碩儒にして執友なり。故に其の先客を得て、路次絶へず送迎す。到る處歸るが如し。東海道にては豪潮律師を叩き、羽倉君に謁す。是れを以て關吏誰何せず。千里咫尺の如し。實に先人の餘慶に賴るなり。）

第Ⅴ章　江戸での二十年間

一節　江戸における交友関係

李白が大志を抱いて長安を目指したように、采蘋もまた江戸で詩人として成功することを夢見て一人故郷の秋月を出発した。李白が故郷とされる四川を離れたのは二十五歳の時と言われる。采蘋の場合は、一回目の出郷は二十八歳であったが、この旅は父の病気により一年半後に帰郷している。第二回目の出郷は三十歳、諸葛亮孔明に後れを取ったことを愧じた出発であった。三十歳という遅い旅立ちであったが、その後は二十年もの間江戸に拠点を置いて、関東各地を遊歴している。しかしながら、江戸の二十年間を知る史料はほとんど残されておらず、わずかに二十八首の詩[240]と五カ月間の日記があるのみである。そのほかに、詩を含む書簡が三通程あり[241]、この書簡によって采蘋の江戸到着時の状況が垣間見られるのは幸いである。二十年という長い期間に比してあまりにも少ない史料であるが、この理由として、采蘋が拠点としていた浅草の称念寺は震災と空襲で二度火災に逢っていることが考えられる[242]。旅に出かけることの多かった采蘋の荷物はここに保管されていたはずであるが、母の病気のためにいったん帰郷し、再び江戸に戻る予定にしていた采蘋の計画は、萩で終焉を迎えたためそのままとなったと考えられる。江戸に来て遂に詩人として名声を博し、当時の人名録や詩話にも名前が挙げられる程になっていた采蘋であっ

[239] 「呈井参政」江戸滞在中、母を江戸に呼び寄せるため井上庄左衛門に嘆願書を提出した。その中の文章の一部。
[240] 山田新一郎『原古処・白圭・采蘋小伝及詩鈔』秋月公民館、1951 年。
[241] 石上東藁「原采蘋の書束と詩草」『本道楽』第十三巻第一号、1932 年。
[242] 志村緑「江戸末期知識人女性における自立と葛藤」『藝林　第四〇巻第二号』1991 年。

たが、残念ながらその時代の作品はわずかしか見る事が出来ない。

下記に示した史料は采蘋の江戸での生活を知る上で貴重なものである。これらの史料を丹念に検証することで、これまで解明されなかった江戸での文人との交流の実態や采蘋の素顔が少しずつ見えてくるはずであるので、あえて全文を掲載することとした。

1-1「原采蘋女子秘柬」にみる江戸到着時の状況

采蘋は文政十一年八月に京都を去り、梁川星巌の紹介状を頼りに、或は父の友人・知人を訪ねて東海道を東に歩を進め、多くの文人や地元有力者と交流したことは「金蘭簿」によって知ることが出来る。しかしこの間の記録は残さず、詳細は分からない。江戸到着は文政十一年冬ごろと推測されているが、秋月郷土館に蔵される「原采蘋女子秘柬」によれば、この間の采蘋の消息をわずかながら伝えており、また、江戸到着時の経済的状況などを知ることが出来る。「原采蘋女子秘柬」は『本道樂』第十三巻第一号[243]に掲載された石上東藁の「原采蘋の書柬と詩草」を、関儀一郎氏が書写し、昭和十八年に山田新一郎氏に贈ったものを山田氏が解説を加えたものである。それによれば「原采蘋の書柬と詩草」の執筆者石上東藁（貫之）は、采蘋の「金蘭簿」にみえる、駿府の石上玖左衛門、名は玖、字君輝、号竹隠の子か孫ではないかと推測される。この書柬は石上家に所蔵されたもので、筆者の石上東藁は記事の「附記」に「以上の断簡零墨は、女史がその當時江戸に往復したる嶽南の某先生に寄せしものたり。」と記していることから、采蘋は、駿府で石上玖左衛門と知り合った後、江戸と駿府を行き来する玖左衛門との交際を続けたものか、あるいは江戸で知り合ったのかは定かではない。石上玖左衛門は田中藩士で氷川台にある田中藩中屋敷に勤務していたようである。采蘋の書柬は三通あり、詩も多く挿入されている。以下にその全文を掲げ、内容を検討することで江戸在住初期の采蘋の心情を知ることが出来ると考える。

書柬一

寒暄不必言、御約束之莊子、奉多謝候。篠田樓にて別後文通御断申候時御一言、も早御忘却被遊候哉。何故此節は無一字、寄遠人可恨々々、西鄙々人情義如山、不可移以此心眷々難測彼之薄情候。

（寒暄は必ずしも言はず、御約束の莊子、多謝奉り候ふ。篠田樓にて別後文通御断り申し候ふ時御一言、も早御忘却遊ばされ候ふ哉。何故此の節は一字も無きや、寄遠の人恨むべし々（恨む）べし、西鄙々人の情義山の如し、此心眷々たるを以て移すべからず　彼の薄情測り難く候。）

〇寒暄：寒暖の意

[243] 昭和七年五月十日発行

謝化蝶道人　　化蝶道人に謝す
脚底無繩安有家　　脚底に繩なく　安くにか家は有る
思人須讀是南華　　人を思ひ　須く讀むべきは　是れ南華
他生願作双飛蝶　　他生願ひと作すは　双飛の蝶
遊戯荘周園裏花　　遊戯の荘周　園裏の花

臥病蕭然已送秋　　臥病　蕭然として　已に秋を送る
孤燈遙夜伴牀頭　　孤燈　遙夜　牀頭に伴ふ
此来止飲空如醉　　此に来て飲むを止むれば　空しく酔ふ如し
百計無媒嫁客愁　　百計媒無く　客愁に嫁す

〇遙夜：長夜のこと

先月季旬より風邪、漸二三日前全快仕候。

力疾遠尋横木門　　疾を力めて　遠く尋ぬる　横木門
門前新月欲黄昏　　門前の新月　黄昏れんと欲す
計程遊子當歸日　　程を計ふ　遊子　當に帰らんとする日
空有情人屬一言　　空しく情人に一言を属する有り

〇横木門：毛传：“衡門，横木爲門，言淺陋也。”

落葉紛々聚復飛　　落葉紛々として　聚めて復た飛ぶ
誰歟棄我故郷帰　　誰か我を棄てて　故郷に帰る
別時好語今何在　　別時の好語　今何に在らん
輕薄人間飜手非　　輕薄の人間　飜手非なり

〇翻手作雲覆手雨：天候の変わりやすいことから人情の軽薄で変わりやすい事を言う。（杜甫の「貧交行」）

十月初九
半五君えの書状、御届被下候や、是又承度候。

書柬二
寒威難凌如何御消遣被成候哉。朝夕奉杳想候。偖先此馬淵君帰、紙包斗にて、御手書

は無之由申され候故、深御怨望申上、三田え参、披莊子薫讀仕候処、間より御手書之小箋出、始て心釈然と相成、怨望の段後悔仕候。昨暮三田行かけ馬淵君え投宿仕候處、先日は御託の賜書、御忘却之由にて、今日落掌、捧讀數回縷々御深情感刻々々。乍然半五君えの書状、馬淵君え御頼被遊候様、被仰古越候へ共、君一向覺なき由に御座候。筆頭の語、半信半疑此儀は少々御恨に奉存候。其後無一字御近況如何、不堪杳想候。も早細君も御歸嘸々御樂可妬、可憎、鄙人近來ハ所見所聞快々不樂、先日野本大次郎、北條道之進（茶山の孫也）兩人來訪、一杯を傾候處、後にて鐵扉道人甚立腹申分は相すみ何事も無之候へ共、鄙人と先生〇〇之交故、何事に付始終あやまり入申候、爾來篠田にては禁杯、かへって轉禍爲福かと存申候。近日下總邊え遊歴之心期御座候。某人に留別之一聯、維年爲客吟都下、窮鬼驅人向總南、自笑自憐申候。乍御面倒折々御左右承度、馬淵君迄御届可被下、何れ歸は極月廿日過、も様次第にて早春にも相成可申候。序に房州邊えも参可申候。粮道絶へては、孤城難守心事御憐察可被下候草々不一。

（寒威凌ぎ難く如何御消遣成られ候ふ哉。朝夕杳想奉り候。偖て先此馬淵君帰り、紙包斗にて、御手書はこれ無き由申され候故、深く御怨望申し上げ、三田え参り、莊子を披き薫讀仕り候処、間より御手書の小箋出て、始て心は釈然と相成り、怨望の段後悔仕り候。昨暮三田へ行かけ馬淵君え投宿仕り候ふ處、先日は御託の書を賜り、御忘却の由にて、今日落掌、數回讀み捧げ縷々御深情感刻々々。然し乍ら半五君えの書状、馬淵君え御頼み遊ばされ候ふ様、仰せられ古越候へ共、君一向覺なき由に御座候。筆頭の語、半信半疑此の儀は少々御恨みに存じ奉り候。其後無一字御近況如何ん、杳想堪へざり候ふ。も早細君も御歸り嘸々御樂妬む可し、憎む可し、鄙人近來ハ所見所聞快々不樂、先日野本大次郎、北條道之進（茶山の孫也）兩人來訪し、一杯を傾け候處、後にて鐵扉道人甚だ立腹申分は相すみ何事も之れ無く候へ共、鄙人と先生〇〇の交り故、何事に付始終あやまり入申候ふ、爾來篠田にては禁杯、かへって禍ひ轉じて福と爲るかと存じ申し候ふ。近日下總邊え遊歴の心期御座候ふ。某人に留別の一聯、維年客と爲りて都下に吟ずれども、窮鬼驅人總南に向ふ、自笑自憐申し候。御面倒乍ら折々御左右承り度く、馬淵君迄御届け下さるべく、何れ歸は極月廿日過、も様次第にて早春にも相成る可く申し候。序に房州邊えも参る可く申し候。粮道絶へては、孤城は守り難き心事御憐み察し下さるべく候　草々不一。）

この手紙の内容から馬淵君という人物を介して文通がなされていたことが分かる。さらに「も早細君も御歸嘸々御樂可妬」という節からは相手の人物は妻帯者であることも判明する。また野本大次郎、北條道之進（菅茶山の孫）の訪問を受け、酒杯を傾けたことに対し、師である鐵扉道人から注意され、以後篠田楼にては禁杯であったことも知られる。手紙の後半には、近日下総・房州への遊歴の心積もりのあることを記し、留別の一聯として

「維年爲客吟都下、窮鬼驅人向總南」と　自笑自憐しているとある。帰りは十二月二十日過ぎを予定しているが場合によっては早春になるかもしれないとも記している。房州への遊歴の理由は「粮道絶へては、孤城難守心事御憐察可被下候」と言う言葉から明らかである。書かれた年が明記されていないが、江戸に到着した文政十一年と推測する。十月より十一月にかけての記録であることから江戸到着後、生活費の工面が必要であったことが察しられ、また記録が残されていない第一回目の房総遊歴の日程もこれによって知ることが出来る。

　贈野本北條二子　　野本北條二子に贈る
襟懐久森寂　　襟懐　久しく森寂として
半日對君披　　半日　君に對して披く
客舎情難盡　　客舎　情盡し難し
王孫去後思　　王孫　去りて後思ふ
琴書負期約　　琴書　期約に負く
瓜李恐嫌疑　　瓜李　嫌疑を恐る
回首人間世　　首を回せば　人間の世
風波到處隨　　風波　到る處に隨ふ

〇琴書：琴と書、ともに文人の身につけるべき教養。〇瓜李：李下に冠を正さず（君子行）。〇風波：潮流。

霜月十日（十一月十日）
氷川えは月に一度は是非参申候。毎過訪必一宿、いつも多感悽如在神前覺申候。
先達而某人來談、及君之事言…（中略）…能々化の皮、御かぶり被成候めで度かしく。
知名不具

書柬三
別思
臺上愁雲欝不晴　　臺上の愁雲　欝として晴れず
強將満酌忍離情　　強ひて將に満酌せんとして　離情を忍ぶ
依々耿々無聊頼　　依々耿々として　聊かも頼むなし
一片心魂與雨行　　一片の心魂　雨とともに行く
想君亦足往神駐　　君を想ひ　亦た神駐に往くに足らん

　別後聴雨　　別後雨を聴く
雨蕭々兮四簷鳴　　雨は蕭々として　四簷鳴く

燈耿々兮夢不成　　燈は耿々として　夢成らず
身在天涯別知己　　身は天涯に在り　知己と別る
千廻百轉難爲情　　千廻百轉　情と爲し難し
袖邊香残人更遠　　袖邊の香残　人は更に遠く
不知何處聴斯聲　　知らず何處に斯の聲を聴くを　　（君能眠恐不聞斯聲）原文のママ

一聲々々和涙落　　一聲々々　涙和して落つ
魂断腸断欲三更　　魂断腸断　三更ならんことを欲す
天意自有似人意　　天意自ら有りて人意に似たり
雲行雨行随君行　　雲行雨行　君に随ひて行く
々々泥濘已厭雨　　々々泥濘　已に雨に厭く
吾心陰欝不放晴　　吾心陰欝として　晴を放たず

相對不話情、臨別難牽衣、心腸爲之破碎、涙承睫而下畏倒観走入、就枕欲得一睡二郎爲妨、起座茫然如有□□忽得掃愁之賜、留鳴瀬□□□子痛飲移時、漸入醉郷眠神熟醒時。昏黄、閑話少時、各就寝獨不能眠、□頭拈此奉寄已隔、着雲山□□補天縮地之術、安能聚首話情、吾輩事業幸属文章尺書、有脚詩豈翼哉、向後所呈願賜高和、迭和迭鳴行將成卷、或閑宵獨處、披卷低聲吟之□慰寂寥、猶如相見之は君以爲如何。□□命（？）實天地間之一棄物、未知生□焉知死悲、雖然老親在、兒何敢。死、從今低眉乞憐、務求容於世耳、幸勿爲深念、唯願臥花眠柳之人、珍重千萬々々珍重書不盡言、謹待明年之祗役頓首。

（相對し情を話さず、別れに臨みて衣を牽き難し、心腸は之が爲に破碎す、涙は睫に承けて而下る畏倒観走入、枕に就かんと欲して一睡を得るも二郎妨げを爲す、起座茫然として□□有るが如し忽ち掃愁の賜を得、鳴瀬に留まりて□□□子痛飲時を移す、漸く入る醉郷眠神熟醒の時。昏黄、閑話少時、各就寝獨り眠る能はず、□頭拈此奉寄已隔、着雲山□□補天縮地之術、安能聚首話情、吾輩事業幸属文章尺書、有脚の詩豈翼哉、向後呈する所高和を賜はらんことを願ひ、迭和迭鳴行將に巻成らんとす、或ひは閑宵獨處、巻を披き低聲吟の□慰寂寥、猶ほ相見の如く之は君以て如何にせん。□□命（？）實に天地の間の一棄物、未だ生□を知らず死悲を知る、然りと雖も老親在り、兒何をか敢へてせん。死、今より低眉憐を乞ふ、容に世耳を務め求む、幸にも深念を爲す勿れ、唯願ふ臥して花眠柳の人、珍重千萬々々珍重書　言盡きず、謹んで待つ明年の祗役、頓首。）

季秋初七夕
心中幽悶懶改寫、失敬之段御海涵〇妄絶不解文、書中有不可解者照亮、ツマラヌ所は

御教諭奉願候〇題巻爲銷魂集如何。ケトヲジン情人ノ事ヲ銷魂種トス、何も思召次第也。
今日之賜例之鰻にて、人々酣暢厚情之至、感々刻々。（以下略）
× × × × × × ×

子規
維昔西蜀天子魂　　維昔西蜀　天子の魂
化生羽翼冲天昏　　化して羽翼生じ　天昏に冲ぶ
年々楊花落盡後　　年々の楊花　落ち盡しての後
啼血促帰愁遠人　　啼血　帰るを促し　遠人を愁ふ
一聲々添一聲怨　　一声々添ひて　一声怨む
呼雲啼月無晨昏　　雲を呼び　月に啼き　晨昏なし
客有失時自傷者　　客は時を失ひ自傷する者有り
聽之一夕涙濕巾　　之を一夕聴けば　涙は巾を濕す
家元天末無由到　　家は元と天末　到る由なし
願借羽毛省滋親　　願はくば羽毛を借りて滋親を省みん

初夏午睡得咸韻　　初夏午睡して　咸韻を得る
南華維懶讀　　南華　維だ讀むに懶し
抛卷倚空函　　巻を抛ちて　空函に倚る
日永魔牽夢　　日永く　魔夢を牽く
峯頽雲壓巖　　峯頽　雲巖を壓す
愛此黒甜妙　　此を愛す　黒甜の妙
都忘塵世凡　　都て忘る　塵世の凡

十三夜望月有感　　十三夜望月感有り
自辭秋月府　　自ら秋月府を辞す
月色四回秋　　月色　四回の秋
良夜無人間　　良夜　人間になし
孤樽對影酬　　孤樽　影に對して酬ゆ
當此清賞地　　此に當る　清賞の地
増我寂寥愁　　我が寂寥の愁は増す
心中多少事　　心中多少の事は
併来附筆頭　　併せ来つて　筆頭に附せん

到氷川臺幽賞不可言詩以記之　　氷川臺に到り幽賞言ふべからず詩を以って之を記す

幾日相思相見難　　幾日か相思ひ　相見難し
低頭暗涙灑輕紈　　低頭暗涙　輕紈を灑ふ
不知今夕眞何夕　　知らず　今夕は眞に何の夕か
月色滿樓聯榻看　　月色の滿樓　聯榻を看る

欲乘餘興買蘭撓　　餘興に乘じんと欲して　蘭撓を買ふ
踏月無端過柳橋　　月を踏みて　端なく　柳橋を過ぐ
不管篙師眠不醒　　篙師に管らず　眠りて醒まさず
吟行恰好可憐宵　　吟行恰も好し　可憐の宵

〇篙師：船頭。舟を棹さす人。

可憐宵伴可憐人　　可憐の宵に　可憐の人を伴ふ
羈客情同羈客親　　羈客情は同じ　羈客の親
莫道羅衣早寒徹　　羅衣を道ふなかれ　早寒に徹す
對君何地不回春　　君に對ふに何れの地か　春は回らず

鴛央被底夢円時　　鴛央底を被ふ　夢円き時
山誓海盟情轉癡　　山誓海盟　情轉の癡
驚破五更三點後　　驚破す　五更　三點の後
月臨戸外似相窺　　月は戸外に臨み　相窺ふに似る

ここまでの手紙と詩は、石上玖左衛門に宛てた恋文と恋愛或は失恋の詩である。文面によれば石上玖左衛門には妻がいて、結局この恋は失恋に終わったようである。采蘋の恋愛を綴った詩は『東遊日記』中にも見られ、広島ではある儒者の息子に恋愛の情を示し、その経験を日記中に書いているが、この男性も妻がいる年齢であるとの指摘がある[244]。この時の恋愛事件は広島を立つことによって終わりを告げたようである。この時の恋愛に比較すれば、今回の石上氏との恋愛は采蘋の人生の中でも最も真剣であり、女性として生まれた采蘋が、女性としての素直な自分に向き合った一時期であったと言えるのではないだろうか。

次□詩盟韻　　（渡邊）詩盟の韻に次す
相遇何能不嘆嗟　　相遇　何んぞ嘆嗟する能はず
浪遊過了半生涯　　浪遊過ぎ了んぬ　半生涯
三年苴枝三千路　　三年苴枝　三千路

[244] 春山育次郎前掲書

兩度愁吟兩處花　　両度愁吟　両處の花
露冷鶺鴒原上草　　露は冷し　鶺鴒　原上の草
魂飛桑梓夢中家　　魂は飛ぶ　桑梓　夢中の家
誰知天末同爲客　　誰か知る　天末同じく客と爲るを
重把盃觴坐落霞　　重ねて盃觴を把み　落霞に坐す

清末藩（下関市）の儒者渡邊東里（詩盟）の詩に次韻したもの。渡邊東里とはかつて父古処と下関を遊歴した時以来の知り合いであると思われる。江戸藩邸に召抱えられた渡邊東里とは頻繁に交流していたことが、後述する采蘋の日記『有煒楼日記』にも見える。この詩は江戸に着いた初期のころ渡邊東里に再会した喜びを詠ったものと思われる。

東遊小稿　百首之三
載筆十年未博官　　筆に載せて十年　未だ官に博さず
芒鞋遊遍幾山川　　芒鞋遊遍　幾く山川
清時有舌終何兼　　清時舌有り　終に何をか兼ねん
枉棄家郷二頃田　　枉らに家郷を棄てて　二頃の田

○芒鞋：わら靴。○二頃の田：頃田は百畝の田

月落蓬窓夜幾更　　月落ちて蓬窓 夜幾更く
寒衾如鐵夢頻驚　　寒衾鐵の如く　夢に頻に驚く
枕邊風萩蕭々響　　枕邊の風萩　蕭々として響く
半作濤聲半雨聲　　半ばは濤聲　半ばは雨聲と作る

幽禽鳴斷水斜々　　幽禽　鳴断して　水斜々なり
枯柳蕭疎三兩家　　枯柳　蕭疎なり　三両の家
恰是風清星少夜　　恰も是れ　風清く　星少き夜
扁舟載月宿蘆花　　扁舟は月を載せて　蘆花に宿る

× × × × × × ×

上記の三首は「東遊小稿」と称する百首の詩稿の内の三首であるとしているが、残念ながら采蘋遺稿の中には「東遊小稿」は見いだせない。『東遊日記』には百首程の詩が挿入されているが、「東遊小稿」はまた別の詩稿であった可能性もあるが、秋月郷土館には、宮内省より送られた山田新一郎氏旧蔵の原氏遺稿の送付目録というものがあり、これは昭和六年に山田氏が宮内省に送付した「原氏遺稿」を、宮内省が秋月の吉田氏に渡した「送付目録」である。これによると『東行詩集』（新写、東遊日記中の詩）一冊が含まれている。管見にはないが、おそらくこれが「東遊小稿」と同じものではないかと推測している。またこの目録中には「山田氏残留書目」と

書かれた四冊の書物があるがこの中に采蘋自筆の『東遊日記』『漫遊日歴』が含まれている。昭和初期の段階ではこれらの二冊は山田氏の手元にあったことがわかるが、現在は秋月郷土館が所蔵しているかは未調査である。

1-2『金蘭簿』にみる交友関係

美濃各務郡		
	朝川鼎	名は鼎。字五鼎、号善菴
	佐藤捨蔵	名坦、字大道、号一斎
	松崎退蔵	名復、号慊堂
肥前鍋島藩	古賀脩里	号穀堂
	同　小太郎	号洞庵
阿波藩	柴野平次郎	号碧悔
神田橋前 本多伊豫侯藩	澤　三郎	
数寄屋橋 松平主殿侯藩	川北喜右エ門	
龍之口上邸 細川侯藩	野坂源助	
池之端 柳原式部大夫	大久保長之進	
松平紀伊侯藩	西脇物右エ門	号索陰
伊達遠江侯藩	安藤新助	号観生
同藩	金子春太郎	字士紘、号篁里
茅場丁	古畑文左エ門	号玉丞
同	中嶌嘉右エ門	号雲庄
神田明神下	八□太郎	号臨池
田町三丁目	香山元三郎	
赤羽根松本町	本田昌元	号秀雪
ひの木屋しき白	壺内茂次郎	
霊坂	海津傳左エ門	字子逸、号武野
久留米藩	本□□□	号忘筌
同藩	今井七郎	
同藩	吉見喜郎	
□□藩	與田伊三郎内	益田三□太郎
駿田中	石井□吉	名耕、字子耕、号□□

本田豊前侯藩		
麻布氷川□中邸 同藩	遠藤十郎左エ門	
久留米藩	高田久太郎	名通
同藩	若林槌三郎	名氏照、字子憲
龍之口 大久保加賀侯藩	岡田左太夫	名雄、号龍渡
中邸 同藩	日治大治郎	名球
安部川丁	稱念寺	
唯念寺	唯念寺	
伊豆下田	泰平寺	号壺龍
	熊澤静	号□□
	荻生惣エ門	
長州侯藩	山縣半七	
伊豆三島驛	福井東飛	
米沢藩	木村一	
同	戸川太郎	
出石藩	高橋多蔵	
同	木下三平	

上に示した表は、『金蘭簿』中に書かれた江戸在住時の交友録と思われる部分を抜き書きしたものである。この表からは、采蘋が多くの藩の儒者と交流をしていたことが分かる。浅川善庵は折衷学派山本北山の門人で、学才を認められた人物であり、安房の君津郡でも教授した経験を持つ。また佐藤一斎は、美濃国岩村藩出身で昌平坂学問所の儒官となった人で、秋月藩の藩士も何人か門人となっており、原古処の門人も入門している。松崎慊堂は肥後国益城郡北木倉村（熊本県御船町）の農家に生まれ、十五歳のとき儒学者になるために出奔し、江戸に出て、浅草の稱念寺の玄門和尚に援けられた。采蘋が稱念寺に寓居を定めたのは慊堂の世話によるものと考えられる。松崎慊堂の日記『慊堂日歴』には采蘋に関する記事がたびたび見られる。肥前鍋島藩の古賀精里・穀堂は古処の友人であり、采蘋は江戸で穀堂、その子洞庵との交流があった。采蘋の江戸日記[245]の天保二年二月九日の条には「賦七古一首贈古賀先生」とあり、また二十一日の条には「作書贈穀堂先生」等が見えることからその交際の様子が窺われる。古賀精里は昌平坂学問所教授を務め「寛政の三博士」と

[245] 『有煒樓詩稿』の後部に記された天保二年と十三年のわずかな日録がある。本稿では『有煒楼日記』として取り扱う。

言われた一人であり、朱子学者であった。江戸での采蘋は、学派にこだわらず広範囲の学者と交流していたことが上記の交友録から知ることが出来る。またこれらの人々は、当時の江戸でも最も優秀と認められた学者たちであったことを考慮に入れれば、采蘋の江戸での行動範囲も自ずと想像がつく。

このほかにも『金蘭簿』には書かれていないが、羽倉簡堂、松本寒緑、広瀬旭荘、渡邊東里、本荘星川、大沼枕山、大槻磐渓、細川林谷等との交流が『有煒楼日記』によって知られる。

1-3『有煒楼日記』にみる交友関係

采蘋の二十年間に及ぶ江戸生活を知る唯一の手掛かりともいえる貴重な日記が『有煒楼詩稿』と書かれた自筆の詩稿の後半に付されている。本稿では便宜上この日記を『有煒楼日記』と呼ぶこととする。この日記は天保二年（1831）正月から四月までと天保十三年正月のみのわずかな期間に限られたものであるが、天保期の江戸における采蘋の日常を垣間見ることが出来る。この日記の翻刻は片倉比佐子氏がすでに発表されている[246]ので、本稿ではその翻刻に従い、日記の全容を見てみることとする。（その際、部分的に訂正し、読み下しを付した。）

天保二壬辰（天保二年）

春正月

元旦　讀孝経一巻寫一章　賦七律一首　亭午小酌　在夫人病辱牀傍酔臥　起時已黄昏　又與晁水尊者酌

（孝経一巻を讀み、一章を寫す　七律一首を賦す　亭午小酌す　夫人病辱の牀に在り、傍に酔臥す。　起る時已に黄昏。　又晁水尊者[247]と酌す。）

二日　晴　讀詩関雎至麟之趾

（晴。詩を讀みて関雎から麟之趾[248]に到る）

三日　雨雪　同鵲巣至江有氾

（雨雪。同じく鵲巣から江有氾に到る）

四日　晴　節分　賦七律一首

（晴。　節分。七律一首を賦す）

五日　挙晴　立春　漸七律一首

（挙晴。立春。漸く七律一首を賦す）

六日　陰

人日　快晴　午後　海子逸在両国舟□□□□泛墨水至三田　舟中賦一律

（快晴。午後、海子逸両国に在り、舟□□□□墨水に泛べ三田に至る　舟中一律を賦す）

---

[246] 片倉比佐子「江戸の女性文芸家たち」『江戸期おんな考』第六号、桂文庫、1995 年 9 月、85-86 頁。

[247] 稱念寺の住職。浅草阿部川町にある寺で采蘋の寄寓先。

[248] 詩経

八日　晴　訪邊詩盟□鶯花吟社之主為賦五律七律各一首　晚宿大久保夫人

（晴。邊詩盟[249]を訪ふ、□鶯花吟社之主、為に五律七律各一首を賦す　晚に大久保夫人に宿る）

九日　講釈

十日　夜雨

十一日　晴　訪邊詩盟　晚宿海子逸

（晴。邊詩盟を訪ふ　晚に海子逸に宿る）

十二日　晴　朝飯後認書数紙　潑水軒爐邊煮淮南作田舎之趣　一酌酔後訪会津藩渋谷国手又一酌帰訪春光女史同飲遂宿話長崎之遊及兵庫遊□□良人吉尾氏之事絮々至夜半

（晴。朝飯の後、書数紙を認む。　潑水軒の爐邊煮は淮南[250]の田舎の趣を作す　一酌酔ひて後、会津藩渋谷国手を訪ふ、又一酌し、帰りて春光女史を訪ふ。同じく飲む。遂に宿り、話は長崎の遊、兵庫の遊に及び、□□良人吉尾氏の事、絮々として夜半に至る。）

十三日　帰浅草寓居

（浅草寓居に帰る）

十四日　午後寫新年詩

（午後新年の詩を寫す）

十五日　□□　紡績

十六日　暖和　同

十七日　雨上風□□　午後邊詩盟来對酌

（雨上風□□　午後邊詩盟来り、對酌す）

十八日　同　□□

十九日　□雪　終日績　夜詩

廿日　□　紡績　讀詩経一巻

（□　紡績　詩経一巻を讀む）

廿一日　紡績　午寫孝経夜讀鎌倉志一巻

（紡績　午、孝経を寫し、夜、鎌倉志一巻を讀む）

廿二日　□　寫孝経畢　入夜小酌

（□　孝経寫し畢り、夜に入りて小酌す。）

廿三日　風雨　持病　□□

廿四日　晴　□□

廿五日　雨

廿六日　讀夷険志

（夷険志を讀む）

廿七日　雨　夜雪

---

249 長州清末藩儒者渡邊東里。

250 長江以北の地方

廿八日　終日風　賦詩

廿九日　賦詩一律

（詩一律を賦す）

卅日　爲晁水上人寫霊芝譜一巻

（晁水上人の爲に霊芝譜一巻を寫す）

二月

□□　陰晴風□　午前梳洗　午後賦詩

（陰晴風□　午前梳を洗ふ、午後詩を賦す。）

二日　属文

三日　晴　属文

四日　快晴　遊日暮里

五日　雨　文　夜□□及詩

六日　微雨　午後晴　讀夷堅志作書賦詩

（微雨。午後晴　夷堅志を讀み、書を作し、詩を賦す。）

七日　晴　将趨三田暴風雨不可行

（晴。将に三田に趨かんとするに暴風雨にて行くこと可ならず。）

八日　好晴　午後趨三田

（好晴。午後三田に趨く）

九日　賦七古一首贈古賀先生

（七古一首を賦して古賀先生に贈る）

十日　雨雲　授讀　認物

十一日　訪實甫小酌（会津人　松本實甫）

（實甫を訪ひ、小酌す。）

十二日　□□書投宿米藩

十三日　晴　自米藩過本田昌元　夜投番町

（晴。米藩より本田昌元を過ぐ。夜番町に投ず）

十四日　自番町帰三田賦七律午後帰三田途中遇雨

（番町より三田に帰りて、七律を賦す。午後三田に帰り、途中雨に遇ふ。）

十五日　雨午後訪與安本邊東里本田円□　海津宅

（雨。午後安本と邊東里、本田円□を海津宅に訪ふ。）

十六日　□□　終日授讀

十七日　微雨　午後與邊詩盟唱酬　投宿昌元

（微雨。　午後邊詩盟と唱酬し、昌元に投宿す。）

十八日　晴　與米藩諸彦及邊詩盟自汐溜泛舟梅荘見梅

（晴。米藩諸彦及び邊詩盟と汐溜より舟を泛べて梅荘にて梅を見る。）

十九日　雨　宿酔起時已亭午　講釈　賦詩訪邊東里作墨水泛舟之図同題其上

（雨。宿酔し起る時已に亭午なり。講釈。詩を賦し、邊東里を訪ふ。墨水泛舟の図を作り、其上に同じく題す。）

廿日　微雨　訪邊詩盟　求題泛舟之図　午後投米藩宿吉見氏宅

（微雨。邊詩盟を訪ふ。　泛舟の図に題するを求む。午後、米藩に投じて吉見氏宅に宿る。）

廿一日　晴　作書贈穀堂先生　将帰浅草道過春香女史遂宿

（晴。書を作り、穀堂先生に贈る。将に浅草に帰らんとするに、道を過ぎりて春香女史に遂に宿る。）

廿二日　帰浅草疲甚

（浅草に帰る。甚だ疲れる。）

廿三日　同夫人観入谷梅　邂逅津藩諸彦及肥後藩人上酒楼投藤堂侯中邸　宿寺田清三郎宅

（同じく夫人入谷にて梅を観る。津藩諸彦及び肥後藩人と邂逅す。酒楼に上り、藤堂侯中邸に投ず。寺田清三郎宅に宿る。）

廿四日　帰浅草録及書

（浅草に帰り、録及び書す）

廿五日　晴　賦三首

廿六日　晴　訪澤三郎　遂投宿□□

（晴。澤三郎を訪ひ、遂に投宿□□）

廿七日　自□馬丁帰遇雲鳳晩帰

（□馬丁より帰り遇雲鳳[251]に遇ふ。晩に帰る。）

廿八日　□日

廿九日　帰浅草録及書

（浅草に帰り、録及び書す）

三月

朔　宿酔

二日　帰路投雲鳳

（帰路、雲鳳に投ず。）

三日　帰浅草

四日　宿酔　遊向島小梅別荘飲

（宿酔　向島小梅別荘に遊びて飲む。）

五日　認者穀堂翁書至返□未歸雷雨

（穀堂翁に書を認む、至返□、未だ帰らざるに雷雨あり。）

六日　臨池翁小笠原侯及　　至

[251] 女儒の篠田雲鳳、名は儀、浅草平右衛門町住。

（臨池翁小笠原侯及び　　至）
七日　快晴　與夫人遊上野
（快晴　夫人と上野に遊ぶ）
九日　将遊上野雨至止
（将に上野に遊ばんとするに雨止むに至る。）
十日　晴　遊東山桜花□開雨至る遇小田きり酌入夜
（晴　東山桜花□開に遊ぶ、雨至る。小田きりに遇ひて酌して夜に入る。）
十一日　女工　晴
十二日　三田
十三日
十四日　快晴　遊殿山秀花同遊米藩諸彦及米澤藩人□□□邊詩盟也大酔抱倒帰
（快晴　殿山秀花と遊ぶ、同じく遊ぶ米藩諸彦及び米澤藩人□□□邊詩盟と遊ぶ。大いに酔ひて抱倒して帰る。）
十五日　快晴　足痛
十六日　晴
十七日　午後春陰　痛甚
十八日　駃雨　終日悶甚
十九日
廿日　　□晴
廿一日　晴　讀文□□
廿二日　風　暗紀文章消遺
廿三日　春□遊海子逸惜春□□上田□□□邊東里□本八郎　及三詩贈之
（春□遊海子逸と春を惜む□□上田□□□邊東里□本八郎　三詩に及び之を贈る）

四月
朔　出海津　投米藩□□
（海津を出でて　米藩□□に投ず）
二日　出米藩投会津中邸　渋谷氏
（米藩を出て会津中邸に投ず　渋谷氏）
三日　□　足痛又發
四日

天保十三壬寅（天保十三年）
春王正月
元日　晴　讀孝経栽詩寓居迎竹夫人同斟午後山内来□時賀新年予亦往飲入夜又遊晁公同斟
（晴　孝経を讀み、詩を栽す。寓居に竹夫人を迎へて、同斟す。午後山内来りて□時に新

年を賀す。予亦飲みに往く、夜に入りて、又晁公と遊び同斟す。）

（□□□之女来遊）

二日　竹夫人携一□来三昨迎飲□□□□又□□□□　　此日又迎飲晁公及夫人

（竹夫人携一□来る三昨迎飲□□□□又□□□□　此の日又晁公及び夫人を迎へ飲む。）

三日　□□　紡績

四日　女工

五日　能勢□□東岩氏一時来予代主人酌東岩

（能勢□□東岩氏一時来る。予主人に代りて東岩と酌す）

六日　雨　女工晩過飲観名寺

（雨　女工、晩過に観名寺にて飲す）

人日　雨　迎飲観名寺晁公及夫来同入夜休

（雨　観名寺の晁公及び夫来同し、迎飲す。夜に入りて休む）

八日　陰　寫書□□□　午後又雨

九日　雨　書□□□　午後晴

十日　晴　□□

僅か四ヶ月余りの日記であるが、この中に出てくる人名は采蘋の江戸での交友を知る上で貴重な人物たちである。たとえば古賀穀堂、邊詩盟、海子逸、臨池翁小笠原侯、春光女史、会津藩渋谷氏、雲鳳女史、会津藩渋谷国手、本田昌元等など。また数々の藩邸にも出入りしていた様子は、「津藩諸彦及び肥後藩人と邂逅す。酒楼に上り、藤堂侯中邸に投ず。」「米藩を出て会津中邸に投ず。」などの記述から知ることが出来る。春光女史とは「話は長崎の遊、兵庫の遊に及び、□□良人吉尾氏の事、絮々として夜半に至る。」とあることから長崎で知り合った女性である可能性もあり、通詞の吉尾氏の妻であることなど興味深い。また浅草には儒者として江戸文人人名録にも登場した篠田雲鳳が住んでおり、江戸で活躍する女性文人の中で、一・二を争う二人が親密に交際していた事実は采蘋の日記から知る以外にはないと思われる。また多くの藩邸に知友がおり、そこでは講釈をしていたことも日記に見える。このような人脈は勿論父親の古処の人脈によるものであると同時に、羽倉簡堂、松崎慊堂らの援助があってのことと思われる。日記には相変わらず、人に会えば酒を飲み交わし、宿酔し、或は友人宅に投宿している様子が書かれている。四ヶ月余りの日記から受ける印象は、決して「孤独な人生を送った不幸な漢詩人」という采蘋像ではなく、旧知の人々と江戸で再会し、彼らとの交遊を楽しみ、また新しい人々との出会いを享受している様子が窺われるのである。この日記を書いた時点ではすでに采蘋の江戸での基盤は出来上がり、一流の文人たちとの交流が成り立っていたことが窺われる。『東遊日記』からも見られるように、采蘋の行く先々には常に人が集まり、彼女を尊敬する若者が後を追ってついてくるという現象がどの日記にも見られる。江戸での生活もおそらく同じように多くの人々に慕われて暮らしていたことが上記の日記か

ら垣間見えるのである。

また上記の日記には女工、紡績という記述も見られ、儒者・漢詩人という職業の他に女工、紡績の内職もしていたのか、或は自らの衣服のためであったのか、その内情は定かではない。

1-4『 日間瑣事備忘』にみる広瀬旭荘との交流

広瀬旭荘は日田の咸宜園の塾首広瀬淡窓の弟である。采蘋との出会いは采蘋が二十代の頃、父に連れられて日田の淡窓を訪れた時に始まる。以来、福岡の亀井昭陽の塾での邂逅、また文政八年の旭荘の江戸訪問など、二人の出会いは旅を通して繰り返されている。江戸における二人の交際は、旭荘が大阪から江戸に来た文政八年（1825）からの『日間瑣事備忘』[252]に記録されている。以下采蘋との交流のみ日記中より抜き書きして以下に示す。

三月朔　戊寅

…阿玉池訪梁川詩禅不在過一心寺門前龍信曰原氏采蘋在此乃入見采蘋曰大坂既平城代發兵捕亂者三十餘人而其渠侖皆甯不知所在…

（阿玉池に梁川詩禅を訪ふ、不在にて一心寺門前を過ぎりて、龍信曰く、原氏采蘋此に在り。乃りて入りて見る。采蘋曰く大坂既に平城代兵を發し、捕ふる亂者三十餘人、而して其渠の侖皆甯んぞ所在知らざらんや…）

二日　巳卯

…原采蘋率長州清末人渡邊亥輔来見…

（原采蘋、長州清末の人渡邊亥輔を率ゐて来見す…）

四日　辛巳

…采蘋亥輔来訪余不在…

（采蘋、亥輔来訪すれども、余は不在）

十三日　庚寅

采蘋与渡邊亥輔来訪乃与散歩過東槁上墨田堤夾堤櫻花如雪遊人数千繁喧之状不似向与龍信遊時至木母寺観梅若墳又北行至堤觜曲處返於故道渡川入街中過観音門前南行醵飲於酒店二子送至證願寺門前而別…

（采蘋と渡邊亥輔来訪す、乃ち与に散歩す、東槁上を過ぐ。墨田堤に夾る堤の櫻花雪の如し。遊人は数千、繁喧の状向ふに似ず。龍信と遊びし時木母寺に至り、観梅若墳を観る。又北行し、堤は觜曲の處に至り、故道に返して、川を渡り、街中に入り、観音門前を過ぎりて南行し、酒店にて醵飲す。二子送り至り、證願寺門前にて別る。…）

二十三日　庚子

…亥輔亦携采蘋至黒田慎吾来訪聞余在舟跡至溯於墨水至三圍祠徘徊堤上櫻花猶盛

[252] 廣瀬旭荘全集編集委員會編『廣広瀬旭荘全集』日記篇一、思文閣出版、1982 年 6 月。

申上牌帰亥輔慎吾采蘋従至…

（…亥輔また采蘋を携へて至る。黒田慎吾来訪し、余に聞く舟跡在りて、墨水に至り溯り、三圍祠に至り、堤上を徘徊し、櫻花猶ほ盛んなり。申上牌して帰る。亥輔慎吾采蘋従ひ至る。…）

二十六日　發卯

二十七日　甲辰

至下谷訪羽倉明府約以四月朔移於其邸而帰帰路訪采蘋於正念寺采蘋供酒午下牌帰…

（下谷に至り羽倉明府を訪ふ。四月朔を以て其邸に移るを約す。而して帰る。帰路采蘋を正念寺に訪ふ。采蘋酒を供す。午に下牌て帰る…）

二十八日　乙巳

始講詩経　副以張詩　采蘋来訪携之至酒亭供酒元可従午出申帰

（始て詩経を講ず。　張詩を副える　采蘋来訪す。之を携へて酒亭に至り、酒を供して元午より出で申すべく帰る）

このように文政八年三月の日記には、采蘋が渡邊亥輔（東里）、黒田慎吾を引き連れて頻繁に旭荘を訪問し、また旭荘も采蘋を正念時に訪ねていることが書かれている。さらに日記からは梁川星巌や羽倉簡堂との交流が頻繁に行われていたことも明らかにされている。采蘋の江戸での生活はこうしたネットワークの中に身を置いていたことが旭荘の日記から知ることが出来る。

二節　羽倉簡堂との交流

2-1『南汎録』を読む

天保九年、下総・両野・伊豆諸島の代官であった羽倉簡堂（1790-1862）は、幕命により伊豆諸島を巡視した。『南汎録』はその時の日記である。羽倉簡堂、名は用九、字は士乾、通称外記。古賀精里の門に学ぶ。幕府の代官であった父に従い、幼いころから日田に住み、原家との親交があった。その関係から羽倉簡堂は采蘋の東遊途次、また江戸においても采蘋のために便宜を図り、庇護役でもあったようである。采蘋はこの日記を羽倉簡堂より借りて読み、その感想を次のように記している[253]。

讀南汎録

去歳三月五日。向島白鬚祠官家。邂逅松本實甫[254]。談及明府巡視之事。特恨身非男子。陪縱無由。今承示南汎録。記載之審。造語之妙。若引人著其地。遊目諸勝。曰。

（去歳三月五日、向島白鬚祠官の家にて松本實甫に邂逅す。談は明府巡視の事に及ぶ。

[253] 山田新一郎『第三巻　原采蘋詩鈔』65 頁

[254]「 松本重信、字實甫、一字來蔵、号寒緑、會津人、學古賀精里、勇壮義烈、常以邊妨爲念、女史交友也」と山田氏の註あり。

特だ、身は男子に非ずして、陪縱の由無きを恨む。今南汎録を承示す。記載審かにして、造語の妙、人を引きて其の地に著け、目を諸勝に遊ばしむるがごとし。曰く。）

舟過伊麻岬。颶風擘海。實甫漂没。悲往日生離即爲死別。爾後倏忽風變、忽北忽南、已望八丈。且至。狂飈引船而去。如有鬼物使然。流轉無恒其存其没。其間不容髪。

（舟伊麻岬を過ぎ、颶風海を擘き、實甫漂没す。往日の生離即ち死別となるが如きを悲しむ。爾後倏忽として風變じ、忽ち北忽ち南、已に八丈を望む。且くして至る。狂飈船を引きて去く。鬼物有るが如く然らしむ。流轉恒無く其れ存し其れ没す。其れ間髪を容れず。）

使讀者魂悸魄驚。如親嘗苦難。伏惟明府當是時。氣愈増。神愈王。得無與造化者爭工乎。羈旅之身。天涯依人。人情至險。風波易動。反覆之患。夙夜無休。間頗有類海路之險者。故及。抽作一首。聊塞葑菲之命。

（讀者をして魂悸き魄驚かしむ。親しく苦難を嘗むる如し。伏して惟ふ明府是の時に當る。氣愈いよ増す。神愈いよ王なり。造化者と爭か工を得るなきや。羈旅の身。天涯は人に依る。人情は至險。風波は動き易し。反覆の患。夙夜休みなし。間頗る海路の險に類する者有り。故に及ぶ。一首を抽きて作る。聊か葑菲の命を塞ぐ。）

豆南絶島是瀛州　　豆南の絶島　是れ瀛州
巡視遥飛晝鷁舟　　巡視遥に飛ぶ　晝鷁舟
潮路艱難驕海若　　潮路の艱難　海若を驕り
文章波浪壓陽候　　文章の波浪　陽候を壓ふ
聖明餘澤窮身沐　　聖明し　餘澤　窮身沐す
蕃船要衝武備修　　蕃船の要衝　武備修む
應見遐方生氣色　　應に見るべし　遐方　氣色生ずを
許多好景筆頭収　　許多の好景　筆頭に収む

向島白鬚祠官家で松本實甫から明府の巡視の事を聞き、實甫は同行することとなっていたが、自分は「特に恨む、身は男子に非ずして、陪縱由無きを」と残念がる采蘋の姿からは、これまでたびたび采蘋の詩に表れているように「心は男子と同等であるが身体は女子として生まれた」ことに対する恨みの気持が表れている。采蘋の行動は漢詩人という職業柄もあるとはいえ、ほとんどが男性と行動を共にしている。

松本實甫は寒緑と号し、会津の人で古賀精里の門人。幕末の会津藩は房総の海防の任に当たっていた関係で、同じく古賀精里の門人羽倉簡堂との交流も深かったと思われる。ま

た古賀精里の門人とあれば采蘋との交流は自ずと理解できる。天保二年二月の「有煒楼日記」に「十一日　訪實甫小酌」とあり、江戸での交友を知ることが出来る。

采蘋は同行こそ出来なかったが一年後に『南汎録』を借りて読むことが出来た。その日記は「記載の審なる、造語の妙なる、人を引きて其地に著け、目を諸勝に遊ばしむる」と、まさに同行しているが如くに生き生きと書かれていると采蘋は表現している。おそらく興奮状態でよんだことであろう。しかし、この旅は風雨に見舞われ、明府巡視に陪従した松本實甫は漂没して帰らぬ人となった。一年前、向島白鬚祠官家で出会って、伊豆諸島巡視について熱く語った松本實甫との死別は、采蘋にいかなる感慨をもたらしたことであろうか。

2-2 羽倉簡堂の側室佐野氏の碑文を読む

この文章及び詩は『羽倉簡堂　南汎録―伊豆諸島巡見日記―』に見える関連資料の一文である。直接『南汎録』とは関係していないが、采蘋と羽倉簡堂及びその側室との交遊を知る上で興味深い資料である。出典も日付も不明であるが、松崎慊堂の『慊堂日歴』と照らし合わせてみると、天保十年三月から六月の間の日記に佐野氏の墓銘についての記事が見えることから、采蘋が羽倉簡堂と慶雲楼で会ったのもこの前後のことと思われる。

慶雲楼謁羽倉使君、下示其所撰側室佐野君碑文。蓋以余与君旧相識也。君以去年葉月逝矣。事之始末、明府具表之、始知其為天童之客也、不覚為之惘然。既而念之、人生誰無死、唯疾死而無名耳。死得其所、亦何足恨乎。君生既得所託、死亦代其主。而明府親為製文。文照千秋、則名亦千秋矣。死何足恨乎。則余哀愈甚、乃顧哭之杯觴之間、非所宜也。顧泣亦悪涕之無従也。帰後賦一律歌、以当哭云爾。　　采蘋[255]

（慶雲楼にて羽倉使君に謁す、其の撰ぶ所の側室佐野君の碑文を下し示さる。蓋し余と君と旧き相識を以てなり。君は去年の、葉月を以て逝けり。事の始末、明府具に之を表し、始て其の天童の客と為るを知る、覚えず之が為に惘然たり。既にして之を念ふに、人生誰か死なからんや、唯疾く死して名なきのみ。其の所に死を得ば、また何んぞ恨むるに足らんや。君は生れて既に託する所を得、死してまた其の主に代る。しかして明府は親から文を製するを為せり。文千秋を照せば、則ち名もまた千秋なり。死何んぞ恨むるに足らんや。則ち余哀むこと愈いよ甚し、乃ち之を顧み哭する杯觴の間も、宜しき所に非ざるなり。顧み泣くもまた涕の従ふ無きを悪むなり。帰りて後、一律の歌を賦して、以つて哭に当つると云ふのみ。　　采蘋）

---

[255] 金山正好校訂・訳・解説『羽倉簡堂　南汎録―伊豆諸島巡見日記―』緑地社、1984 年 11 月、89 頁。

行舟四俗海中垠　　行舟四俗　海中の垠なり
適會幕延治世新　　適ま会ふ　幕延の治世新たなるに
彩纜何曾繁離別　　纜を彩るは何んぞ　曾ての離別に繁らん
紅罣只管帶愁顰　　紅罣　只管　愁顰を帯ぶ
忽傳波浪卷舟楫　　忽ち伝ふ　波浪舟楫を巻くを
獨抱精誠盛鬼神　　独り抱く　精誠は鬼神に盛さる
身代主君甘一死　　身は主君に代りて一死に甘んず
香魂千歳不爲塵　　香魂は千歳も塵とは為らざらん

三節　江戸における采蘋の名声

3-1 天保期の『人名録』に見る采蘋の名声

采蘋が江戸で活躍した期間は文政十年(1827)から嘉永元年(1848)までの二十年間であるが、その期間の江戸は周知のように文化の爛熟期に当たり、多くの文人を輩出した。それに伴い女性の自立意識が芽生え、画や商業あるいは寺子屋の師匠など自立する人たちが出始めていた。大名家や幕府の奥で働く女中はれっきとした職業婦人で、老女格ともなれば一家を興すことが出来たほどである。天保期になると江戸で活躍する文芸人の人名録が盛んに出版された。その目的は、

> 都下ノ人ノ為ニスルニ非シテ他国ノ人江戸ニ遊学シテ諸名家へ投刺セントシ又ハ書画ニ揮毫ヲ請求ル時ニ斯書一巻ヲ懐中セハ道程ノ遠近ニ依テ東西南北ヲ捜シ尋ルノ労ナカルベシ[256]

として出版されたとあることから、全国から師匠を求めて江戸に人が集まってきていたことを物語っている。地方から遊学する場合や或は地方の富裕な商人たちが書画の揮毫を求める場合のガイドブックとなることを念頭に置いて作られたものであることが分かる。

江戸の文人紹介のための人名録は文化十二年(1815)に刊行された『江戸当時　諸家人名録』が最初で、二編は文政元年に刊行されている。さらには『江戸現在　広益諸家人名録』が天保七年(1836)、『安政文雅人名録』が安政七年(1860)、『文久文雅人名録』が文久三年(1863)に刊行された[257]。これらの人名録の中で采蘋の名前が見られるのは『江戸現在　広益諸家人名録』においてである。それには「采蘋／儒古学／浅草阿部川町／原采蘋」とあり四十三名の女性に交じって紹介されている。采蘋は儒古学というジャンルで紹介されているが、他には書、画、書画、和歌、詩、小説、儒、儒書、活花、歌琴等のジャンル分けがされている。采蘋のほかに儒古学者として紹介されている女性は松本英外、名は順。幕府御家人松本嘉右衛門の娘で、老中安部正弘の娘に教授していた古学派の儒者。儒者としては篠田

[256] 西村宗七編『江戸現在　広益諸家人名録』二編凡例、天保七年（1836 年）刊。
[257] 片倉比佐子前掲論文

雲鳳(1810－1883)、高嶋文鳳(1792-1857)、高橋玉蕉(1802-1868)、石井九皐が挙げられている。

これと並行して、菊池五山の『五山堂詩話』補遺巻四には、閨秀詩人として篠田雲鳳、高島文鳳に次いで采蘋を挙げ、次のように評している。「原采蘋亦不失為秦穆婺精爛煥足以徵文明矣」。五山によるこの評価は江戸で活躍する女性詩人の中でも高い評価を与えている。采蘋の名が挙げられているもう一冊は、天保八年(1837）に刊行された『現存雷名　江戸文人寿命附』である。この人名録は狂歌壇の奇才と言われた畑銀鶏の編によるもので、その趣旨は「年々歳々たはひもなきことを作りて人の笑を求ることを好めり」[258]とある如く他の人名録とは趣を異にしている。その内容は各文芸人の評価を年齢で現し、最後には褒め言葉として和歌一首を載せている。その中で采蘋は、

> 原　采蘋　儒　浅草平右衛門町　一〇〇〇年／經学はいふこともなし詩文章眼を驚かす筆の見ことさ。

とあり、千点の最高点を付けられている。最高点を付けられたのは男性三十四名があるが、女性では采蘋ただ一人である。高島文鳳が九百九十点でわずかに劣っている。篠田雲鳳は九百点であった。編者の主観も多分に含まれるとはいえ、江戸在住の文人の中で女性ではトップ、男性と比較しても三十四人の中に含まれるのは、かなりの実力者であるとの評価が得られたことになる。これらの女性儒者たちは、幕府御家人、或は医者や豪商の娘で、漢学の師について学び、大名家の奥に仕え、藩主の奥方や娘たちに漢学や書を教え、ある程度地位や名声が安定していた女性たちである。こうした江戸の状況について、文化年間に古処が江戸に滞在した時、奥に仕える女性たちの教養の高さに驚いたが、天保期に至ってはさらにその能力は向上し、師匠として独立する女性を輩出していた。古処が江戸から采蘋に送った手紙に、盛んに手習いを奨励していたことは、こうした藩邸の奥での仕事や師匠として独立する可能性を見据えていたからであったとも考えられる。

上記の人名録からは江戸の文人たちの多彩な活躍ぶりとその繁栄の様子を見る事が出来る。このような文化の爛熟期の江戸に身を置くことは、采蘋にとって満足のいくものではなかったか。

このように、采蘋が滞在した時期の江戸は、様々な「人名録」によって文人の宣伝が成され、その評判によっては収入も増えたであろうと想像出来る。采蘋が母親を江戸に呼び寄せる決心をしたのも、収入の安定が見込まれたからに他ならない。二冊の人名録の評価と、『五山堂詩話』の評価を見ても、采蘋は儒者として立派に成功し、父の遺命を十分に果たしたのではないかと考えられる。

3-2 文人間における采蘋の名声

采蘋が江戸で交流した人物を見てみると、羽倉簡堂、梁川星巌、大沼枕山、渡邊東里、

[258] 片倉比佐子前掲論文

広瀬旭荘、古賀穀堂、古賀侗庵、佐藤一斎、大槻磐渓、松崎慊堂、朝川善庵、山縣大華、柴野碧悔、細川林谷、等など、当時江戸で活躍した一流の儒者たちである。これらの多くは父を介しての人脈である。これらの人々との交流から采蘋の江戸での評判を示すものを下記に見て行きたい。まず、伊勢の久居藩主藤堂佐渡守が江戸藩邸に采蘋を請じた時に采蘋が賦した詩を、贅山居士なる人物から見せられた久居藩の僧が、采蘋の詩に和韻して、はるばる江戸に住む采蘋に贈ったという詩がある。

馨山居士見示采蘋女学士、三日陪久居侯燕作。因次馨韻。　　不言小隠□□謹艸

（馨山居士、采蘋女学士の三日久居侯の燕に陪し作を見示す。因って馨韻に次す。
不言小隠□□謹艸）

聞説名聲一世酣。公侯迎送日馳驂。講経重席知多少。栽賦警人不五三。天隔無由窺絳帳。道殊敢望訪雲藍。但因桑梓相隣接。謾覺餘榮老衲覃。[259]

（聞説らく名聲は一世の酣なり。公侯迎送の日馳せ驂ず。経を講じて席を重ぬること多少を知る。賦を栽して人を警すこと五三ならず。天を隔つるに由無く絳帳を窺ふ。道殊に敢へて望みて雲藍を訪ぬ。但桑梓に因りて相隣接す。餘榮を謾り覺ゆるも老衲に覃ぶ。）

○桑梓：故郷、または郷里の長老。昔、将来の子孫の生活の助けとなるように、家にクワとアズキの木を植える習慣があった。子孫はこれを見て父祖の思いやりを感じたことから。（詩・雅・小弁）　○老衲：老僧のこと。

不言小隠は馨山居士から示された采蘋の詩を読んで感動し、この詩を賦して江戸の采蘋に贈ったとの事である。この詩によれば、采蘋の日常は極めて多忙であった様子が書かれている。それも諸公の招聘に応じ、藩邸での講義や詩の添削に暇なく、その名声は甚だ高かったということである。

また大沼枕山（1818-1891）との交流は、父の古処が枕山の父竹渓と交流があったことに始まると考えられる。また枕山は若くしてその才覚を現し、梁川星巌の門に入り、後に下谷吟社を開いた。星巌が玉池吟社を閉じて京都に移った後は、下谷吟社が詩壇の中心となった。大沼枕山は明治期を代表する詩人になったが、二十歳も年の離れた枕山は采蘋を姉のように慕っていたのではないだろうか。江戸での二人の交友が親密であったことは、後述する房総遊歴の際に枕山の人脈が采蘋の旅程に有利に働いていることからも窺われる。嘉永元年(1848)、采蘋は母の病気を聞き、とりあえず帰郷を決心する。枕山は送別の雅会を開いてくれた。その時の枕山の送別の詩には、采蘋の江戸での二十年間の活躍の様子が記されている。

[259] 山田新一郎編『第三巻　原采蘋詩鈔』76 頁

贈原氏采蘋

近来藝苑多閨秀、丹青往々競才奇、就中一二稱領袖、彼工草字此小詩、別有女中眞豪傑、原氏采蘋出西陲、文章經史盡通暁、班女蔡姫兼有之、漫遊幾歳観上国、遍扣名流無定師、弓鞋踏破三千里、彤管慣裁絶妙詞、枕生一見驚且嘆、相識已恨十年遅、不櫛進士何足説、丈夫之膽丈夫姿、慨燃忽起寧親志、手理行篋望天涯、新篇今日試折簡、會客河樓薦別巵、滿樓人士齋張陣、詩城酒壘酣戰時、原氏大呼衆解甲、無復一個是男兒。[260]

（近来の芸苑閨秀多く、丹青往々にして才奇を競ふ。就中一二領袖と稱す。彼の草字に工なるは此の小詩なり。別に女中に真の豪傑有り。原氏采蘋西陲に出づ。文章経史盡く通暁す。班女蔡姫之れを兼ぬる有り。漫遊すること幾歳上国を観る。遍く名流を扣くも定師無し。弓鞋踏破すること三千里。彤管裁つに慣るる絶妙の詞。枕生一見して

驚き且つ嘆く。相識ること已に十年の遅を恨む。進士に櫛せずも何ぞ説くに足らん。丈夫の膽、丈夫の姿。慨燃として忽ちに親寧の志を起こす。手づから行篋を理めて天涯を望む。新篇今日折簡を試む。客の河樓に會し別巵を薦む。滿樓の人士斎しく陣を張る。詩城酒壘戦酣の時、原氏大いに呼せば、衆甲を解く。復た一個の是れ男児なるは無し。）

この詩からは江戸の詩壇の状況や采蘋の活躍ぶりを知ることが出来る。満場の男性詩人を前に、「原氏大呼衆解甲、無復一個是男児」と表現されるように、男児もたじたじの様子を枕山は書きとめている。これまでの采蘋の遊歴の先々でも「衆解甲、無復一個是男児」という状況は常にあった。二十年に及ぶ関東遊歴によって益々その傾向は強まったであろう。この様な江戸詩壇での采蘋の活躍ぶりを見ると、父の遺稿の上木という大義名分の他にも采蘋を引き留めておく十分な魅力が江戸にはあったことが理解できる。

3-3 江戸在住の本当の目的

江戸に出る目的は父の遺命であった「不許無名入故城」を遂行することであった。そうであれば上記の人名録に見える名声で十分であったと考えられるのだが、この後も采蘋は父の遺命を常に意識し、事あるごとに詩に賦し、肝に銘じている。それは采蘋の死去する時に身に着けていた詩片にも書かれていた。この事は一体何を意味しているのだろうか。采蘋の人生の本当の目的とは一体何であったのか。采蘋が江戸に暮らし始めたころの文政十二年（1829）十一月の松崎慊堂の日記に、当時の采蘋の意向を示す記録がある。

[260] 山田新一郎前掲書、77 頁。

二十五日　晴、暁起進粥、天明、與蘋語女子立身之道、彼意在以女儒発跡、余誨之曰、以女子単行三千里、且僑食於人、假能貞潔脩束、安能免人議乎、不如謝去雑交以從良也、或宮仕五六年、積脂粉俸奉迎母親以侍養、身本始立、而今日浮名始轉為才名、於是達志可也、渠猶似未肯者、主人命酒數酌而去。[261]

（二十五日　晴。暁起して粥を進む。天明、蘋と女子の立身の道を語る。彼の意は、女儒を以て発跡するに在り。余はこれに誨へて曰く、女子を以て単行すること三千里、且つ人に僑食す、假りに能く貞潔脩束するも、安んぞ能く人の議することを免れんや、雑交を謝去して以て良に從ふに如かず。或いは宮仕すること五六年、脂粉の俸を積み母親を奉迎して以て侍養せば、身本始めて立つて、而して今日の浮名は始めて轉じて才名と為らん、是に於て志を達して可なりと。渠は猶未だ肯ぜざるものに似たり。主人は酒を命ずるも數酌にして去る。）

松崎慊堂は十五歳で江戸に出て、浅草称念寺の玄門和尚に援けられた。昌平校で朱子学を学び、後、林述斎の塾で佐藤一斎とともに学んだ。采蘋と慊堂との関係はおそらく佐藤一斎や羽倉簡堂を介してのものと考えられる。『慊堂日歴』には羽倉簡堂との交流が散見するからである。采蘋が称念寺に寓居出来たのもこの人脈を通じてのことと思われる。慊堂は采蘋の江戸での目的が女儒として立身出世を願うことであると聞き、そのための助言をした。しかし、慊堂の助言は、これまでも父の友人から受けた様々な助言と変わらない保守的なものであり、采蘋を納得させるものではなかったようだ。ただこの中の助言にある「母親を奉迎して以て侍養せば」とあることは、采蘋の「孝」の意識を刺激したのか、後に秋月藩の参政に上書を提出し、母を江戸に迎えることを願い出ている。
この日記の中で「今日の浮名」とあるのは、一節で取り上げた手紙の相手とのことを指すのか、あるいは広島でのことを指しているのかは分からない。采蘋が慊堂の助言をどの程度聞き入れたかは「渠猶似未肯者」という慊堂の言葉から察して、当然結婚も奥奉公も采蘋の念頭にはなかったようである。采蘋の性格は、「磊々落々」[262]「おうよう」[263]などと形容されるごとく、むしろ男性の様な細部にこだわらないおおらかな性格であったようである。さらに酒豪であったため、たびたび深酒をして、翌日は一日中寝ることもたびたびであった。このライフスタイルは、父の死後の東遊の記録『東遊日記』によく表れている。もっとも『東遊日記』が現存する采蘋の最初の日記であるため、それ以前の状況は分からないが、おそらく父と同伴した遊歴についても同様であったと思われる。采蘋が采蘋らしく生きる方法を遊歴を通して父も納得していたのではないだろうか。

采蘋は慊堂の助言を聞き入れず、これまで通りの生き方を貫いたが、結果的に女儒とし

[261] 松崎慊堂『慊堂日歴』『日本藝林叢書　第 11 巻』六合館、1927 年。
[262] 広瀬淡窓『懐旧楼筆記』
[263] 母雪の手紙

て篠田雲鳳や高嶋文鳳をも上回る評価を得る事が出来たのである。それにも関わらず、采蘋の詩からは達成感は伝わってこない。采蘋にとって江戸におけるこのような名声は「何料虚名達久聞」[264]「笑我顔強噉名客」[265]などの詩句に現れているように「虚名」としか感じられなかったのか、あるいは単なる謙遜の言葉なのか。采蘋の意図する「在以女儒発跡」とは一体どのような状況を指すのか。この人名録が出版された八年後の天保八年(1837）の正月に詠まれた「新年書懐」には「十年孤客遺言在、豈敢無名入故城」とあり、まだ父の遺言にこだわっているのである。その年には『江戸文人寿命附』が出版され、女儒の中でも最高点を付けられたのだが、采蘋の江戸滞在はこの後さらに十年間続くこととなる。

采蘋の江戸滞在の本当の目的は何であったのか。一つには父の遺稿を上木することがあっが、結果的に二十年間のうちにそれは叶わなかった。父の遺稿の上木は采蘋にとっての父に対する「孝」に他ならなく、これを成し遂げるまでは江戸を離れるわけにはいかなかったと考えられる。本来ならば人名録の名声によって収入も増えると考えられるが、「何料虚名達久聞」「笑我顔強噉名客」などの言葉から、名声と収入は直接結びつかなかったと考えられる。また采蘋の性格は父親譲りの偏狭さを持ち合わせていたと考えられ、菊池五山のような商業的な才覚は持ち合わせていなかったと思われる。

江戸滞在のもうひとつの理由として考えられるのは、江戸の魅力を父古処から十五・六歳のころから聞かされていた多感な文学少女は、書画会に沸き立つ華やかな江戸の文人たちの様子を、古処から送られてくる手紙を通して想像を膨らませていったに違いない。その後、二十代後半の長崎での経験は自信を養うには十分であり、更に京都に上っても「采蘋様は京攝不面白直様江戸へ出ると被申候」[266]と、京都の感想を弟子に漏らしていることから推測して、江戸こそが自分の才能を発揮する場所であるという確信を持っていたと考えられる。こうした信念もさることながら、采蘋の日記や広瀬旭荘、松崎慊堂の日記からも読み取れるように、江戸における一流文人との交流が頻繁に行われていたこと等から、江戸滞在は漢詩人原采蘋にとって理想的な場所であると実感していたと思われる。詩人として活躍するためには江戸が最適であると考えたのはほかならぬ父古処であった。采蘋も父古処の意向を十分くみ取っていたのである。

四節　江戸客中の詩と秋月藩への上書

4-1 江戸客中の詩

采蘋の江戸滞在は二十年にも及んだが、その間関東近郊から東北地方にまで足を伸ばして遊歴していることが残された詩から推測される。残念ながら江戸滞在時の詩はわずかしか残されていないのが現状である。滞在先の称念寺に遺留品を預けて帰郷したと考えられており、この寺の火災によって焼失した可能性が考えられることなど、様々な憶測がなさ

[264]「和田朴齋」（『東遊漫草』）に見える。
[265]「蓑丘招隠」（『東遊漫草』）に見える。
[266] 文政八年、兄白圭が采蘋に宛てた手紙中にある。（春山育次郎『日本唯一閨秀詩人　原采蘋女史』原采蘋先生顕彰会、1858）

れるが、確かなことを示す資料は見つかっていない。采蘋の遺稿の断片から江戸客中の詩と思われるものを拾い集めたものに、山田新一郎氏の「江戸客中諸詩」(『原采蘋詩鈔』)がある。これには二十九首の詩が収められているが、必ずしも江戸在中に詠まれたものと思われない詩も混入している。ここではその中から明らかに江戸在住時に詠んだと思われる詩を抽出し、江戸滞在時における采蘋の心情を読み取っていきたいと思う。

次の詩は、山田氏の『原采蘋詩鈔』には江戸客中の詩となっており、福島理子氏は東遊途次に詠んだものとの解釈を示しているが、秀逸な詩であるため、あえてここに紹介したいと思う。

櫻花

日出之邦産奇芳　　日出づる邦　奇芳産む
百花壇頭獨擅場　　百花壇頭　獨り場を擅す
風韻與梅難爲弟　　風韻　梅と弟に爲り難し
牡丹辟易不稱王　　牡丹も辟易して　王と稱せず
暘谷烟霞春三月　　暘谷の烟霞　春三月
吐芳弄色媚艶陽　　吐芳　弄色　艶陽に媚ぶ
折枝罪當一枝指　　枝を折らば　罪は一枝の指に當たる
赳赳武夫猶憐香　　赳赳たる武夫も　猶ほ香を憐れむべし
海外商船辮髪客　　海外の商船　辮髪の客
往往載春歸殊方　　往往　春を載せ　殊方に歸るも
僅入唐山便憔悴　　僅かに唐山に入れば　便ち憔悴す
應恥爲渠助杯觴　　應に渠が爲に杯觴を助くるを恥づるなるべし
尤質未免神女妬　　尤質　未だ神女の妬むを免れず
翻雲覆雨啼紅粧　　翻雲　覆雨　紅粧啼く
封家有姨頗厚意　　封家に姨有り　頗る厚意
嫁與東風入玉堂　　東風に嫁與して　玉堂に入らしむ

櫻花の春を詠んだ秀作である。自らも自信作としていたと思われ、書巻にしたためたものが『郷土先賢詩書画集』に見える。

新年書懐　　新年に懐ひを書す

撞破樓鐘百八聲　　撞破す　楼鐘　百八声
還郷夢斷已天明　　還郷の夢断ゆれば　已に天明
清晨照影憐多病　　清晨　影を照らして　多病を憐れむ
白髪形愁生數茎　　白髪　愁ひを形りて　数茎を生ず
詩興久因醫藥癈　　詩興　久しく医薬に因りて廃し

歸心空遂夕陽傾　　帰心　空しく夕陽を遂ひて傾く
十年孤客遺言在　　十年　孤客　遺言在り
豈敢無名入故城　　豈に敢て名無くして故城に入らんや

この詩は天保八年(1837）ごろの詩で、江戸に来てからすでに十年が過ぎたころの作である。新年の書懐はおそらく毎年行われたと思うが、故郷を出てから十年後の新年にあたって、父の遺言に新たな誓いを立てたことが知られる。これまでの十年間の消息はすでに紹介した天保二年(1831）の正月から四月までの日記『有煒楼日記』によってその日常が垣間見られるが、この詩からは夢を抱いてはるばる江戸の地に来て、多病に悩まされ、医薬に因って詩興も廃するという、憂いに満ちた十年後の心情を吐露している。気丈な采蘋も新年を孤独に迎える寂しさを素直に表している。しかし結句ではその気持ちを払拭し、父の遺言に対して気持ちを新たにする決意が見える。

與邊東里、廣瀬梅墩二子同遊向島　　邊東里、廣瀬梅墩二子と同に向島に遊ぶ
毎逢西州人　　西州の人に逢ふ毎に
戀戀情無窮　　戀戀として情窮まり無し
何況舊來交　　何んぞ況んや舊來の交
宛如對春風　　宛如として春風に對するをや
爲客他日恨　　客と爲る　他日の恨み
氷釋意融融　　氷釋して　意融融たり
出遊墨水濱　　出遊す　墨水の濱
緩歩萬花中　　緩歩す　萬花の中
木母寺梅兒塚　　木母寺　梅兒塚
母兒自傷路不通　　母兒　自ら傷む　路の通ぜざるを
二男子　一女伴　　二男子　一女伴
男女相忘趣却同　　男女相忘れて　趣却て同じ
風景何地非吾有　　風景　何れの地か　吾が有に非ざらん
共笑身爲寄居蟲　　共に笑ふ　身の寄居蟲と爲るを
身外曽無營求累　　身外　曽て營求の累無く
羈遊晏然任西東　　羈遊　晏然として　西東に任す
試將斯事問眞宰　　試みに斯の事を将つて　眞宰に問はん
天地無物不寓公　　天地　物として寓公ならざるは無からん

この詩も同じ天保八年(1837）の詩で、三月十三日、渡邊東里、広瀬旭荘と向島に遊んだ時の詩である。この事は広瀬旭荘の『日間瑣事備忘』にも書かれている。この詩にも見えるように、采蘋は異郷にあって同郷の人と出逢うことを大きな喜びと感じている詩が多く

見られる。特に渡邊東里は長州清末藩の儒者で、かつて父とともに遊歴した長州で知り合って以来の友であり、『有煒楼日記』にもたびたび登場している江戸藩邸勤番の儒者である。広瀬旭荘は日田の広瀬淡窓の弟であり、この時江戸を訪問中であった。二人とも旧知の間柄で、采蘋を姉のように慕う秀才の二子である。旭荘の『日間瑣事備忘』には三人の交流の様子が詳述されている。「新年書懐」の詩には江戸の一人住まいの寂しさが詠まれていたが、この詩では一転して郷里の若者と隅田川べりを散策し、満開の桜を満喫している楽しげな采蘋の姿がある。江戸到着の当初、恋愛も経験した采蘋であったが、その恋愛も実ることはなかった。才能あふれる青年と過ごす采蘋は、最も生き生きとしてその時を楽しんでいる。それは『東遊日記』の中にもたびたび見受けられる光景である。さらにこの後に向かう房総の遊歴中の日記にも、采蘋を慕う優秀な青年たちとの交流が生き生きと書かれている。この詩からは江戸在住の最も幸せなひと時を渡邊東里、広瀬旭荘とともに過ごした様子が伝わってくる。

奉送村井國手西帰　　村井國手の西帰を送り奉る
同是西州客　　同じく是れ　西州の客
君今向西帰　　君は今　西に向ひて帰る
浮萍難離合　　浮萍　離合は難し
落葉易分飛　　落葉　分飛し易し
世路遊方倦　　世路　遊方に倦む
風波事総非　　風波　事総て非なり
悲秋兼遠別　　悲秋　遠別を兼ね
心緒故依依　　心緒　故に依依たり

村井國手は洞雲といい、熊本藩医である。この詩の作られた時期は不明であるが、江戸で知り合った人であろう。例によって西国の人に出会う喜びとともに、その別れを悲しむ詩も采蘋の詩には多い。

三月五日、古賀鬟峰先生、會客于白髭祠官家、故穀堂先生嘗以此日開燕于此地、先生之意、蓋尋前盟也。
（三月五日、古賀鬟峰先生、白髭祠官家にて客と會す。故穀堂先生嘗て此の日此の地にて開燕す。先生の意、蓋し前盟を尋ぬ。）
四海會同曽送君　　四海會同　曽て君を送る
寧知起滅似浮雲　　寧んぞ知らん　起滅　浮雲に似るを
三歳光陰同片夢　　三歳の光陰　片夢に同じ
千秋志業感斯文　　千秋の志業　斯文を感ず
佳城欝欝人如玉　　佳城欝欝として　人は玉の如し

吟社寥寥誰運斤　　吟社寥寥として　誰か斤を運ぶ
相逢共是鐘情客　　相逢ふは共に是れ　情を鐘むる客
兜率天遥西日曛　　兜率天遥かに　西日曛し

この詩が作られたのは天保十年頃とされている。古賀穀堂が没したのが天保七年であるから、「三歳光陰同片夢」と言う句から判断してのことである。古賀穀堂は古賀精里の長男で、昌平校の教授となった父の後を継ぎ、佐賀鍋島藩の藩儒となったが、江戸詰などの経験、また参勤交代で江戸に滞在することがあった。采蘋との交際は『有煒楼日記』の天保二年二月九日の条に「賦七古一首贈古賀先生」とあり、また二十一日の条には「作書贈穀堂先生」等と見えていることから江戸での交際の深さが忍ばれる。鬢峰先生とは穀堂の子のことであろうか。采蘋の「讀南汎録」には、この日ここで古賀精里の門人であった松本實甫と邂逅したとある。

『原采蘋詩鈔』には新年にあたっての詩がもう一首ある。弘化三年（1846)、四十九歳の時の詩である。

丙午新年　　弘化三年新年
一逆旅中寄此身　　一逆旅中　此身を寄す
忽迎四十九年春　　忽ちに迎ふ　四十九年の春
他郷久住歌詩友　　他郷に久しく住み　歌詩友たり
随所渾同骨肉親　　随所に渾同して　骨肉の親
池水氷融魚隊見　　池水は氷融けて　魚隊を見る
梅梢花発鳥聲新　　梅の梢に花は発して　鳥聲新なり
是非何必関心意　　是れ何んぞ必しも心意に関はらんや
欲報慈恩願及辰　　慈恩に報ひんと欲して　願は辰に及ぶ

江戸に在ってすでに二十年近くが過ぎた新年の述懐である。詩人としての名声も上がり、生活に余裕が出来たころである。結句の「欲報慈恩願及辰」に表れているように、この時点ではすでに帰郷を決心していたのであろう。旅の資金を得るための房総遊歴は翌年に開始しているからである。これ以前、采蘋は松崎慊堂が助言したように、母に孝養を尽くすため、江戸に呼び寄せることを秋月藩に願い出たが、二度にわたって却下された。以下はその上書の内容である。

4-2 秋月藩への上書

松崎慊堂の文政十二年十一月二十五日の日記についてはすでに述べたように、采蘋の江戸での生活態度に関する助言をしているが、その中で、「積脂粉俸奉迎母親以侍養、身本始立、而今日浮名始轉為才名」と母を江戸に迎えることを提言している。しかし、次の井上

参政に対しての上書は天保十二年に書かれている。「蘋辭家于茲十五年矣」と文中に見えることから松崎慊堂の助言からはすでに十年以上の年月が流れている。文政十二年の段階では漢詩人としての名声を得るために必死で、母親を迎える程の餘裕はなかったことが推測される。江戸在住十五年の後、漸く名声も高まり、収入の道も安定したことで、母を迎える決心をしたものと思われる。

以下の上書には、女性一人で遥か江戸まで旅をして、独立して生計の道を選んだいきさつや、出郷にあたっての経緯、風評などを綿綿と記している。また、江戸までの道中で出会った当代の碩儒について述べ、これらはすべて父の余慶によるものと、父の恩に感謝している。後半には、独身で、母に孝養を尽くさず故郷から遠く離れて暮らす自分は「孝」の呵責に悩んでいると藩に訴え、母を江戸に呼び寄せることを請願している。采蘋が選択した道は女性だから非難の対象となるものであり、男性であれば称賛の的となるものであった。文中の「悲しい哉。世に生れて女と爲る」という述懐は、漢詩人という職業を選択した采蘋の、生涯を通じての述懐となってたびたび詩中に表れている。

(1) 井上参政への上書

呈井参政[267]　(天保十二年)

敬奉手啓。仰瀆清聽。傳曰。書不盡言。言不盡意。况不肖才力。安能盡區區之意乎。諸所言。幸爲意逆焉。蘋辭家于茲十五年矣。遭家之多難。天涯懸隔。煢煢孑立。相須爲命者唯母子。而母子生逢之願。未嘗能一日忘于懷。此君之所知也。昨得家書云。不獲報可。執政持法。理當然也。蘋獨託異鄉。望風懷想。况孀親年高。其情云何。一念之至。若無所主。所謂欲死不能得。欲生無一可者也。或云。一旦歸省。事儻可諧。悲哉。生世爲女。千里獨行。豈容易乎。始蘋東遊也。聞者皆令笑。以爲學女侠之流。蘋獨斷然不顧。單身越疆。以有所恃也。妨長之間。嘗從先人遊歷。素多相識。出于藝備。有賴杏坪。菅茶山之二老。入京則賴山陽。皆一代碩儒。而執友也。故得其先客。路次不絶送迎。到處如歸。東海道叩豪潮律師。謁羽倉君。是以關吏不誰何。千里如咫尺。實賴先人餘慶也。日月不居。前所應接。多爲隔世之人矣。千里獨行。豈容易乎。蘋區區之意。誠一己之私。而固公論之所不容。然亦母子之情。出于不忍之心。古人有云。爲客千秋恨。依人萬里身。若欲待獨立作一家之後。而後致其養。安能保其無風樹之恨乎。是蘋所以晨夕惚悩。幾欲發狂也。擧一不當。徒爲不孝之人己矣。如何則可。君嘗哀蘋志。又從慫慂之。是以敢恃厚愛。重陳固陋。伏冀體老吾老而及人之老之心。轉不孝爲純孝。使我母子得聚首開口。乃是所謂吹死灰。肉腐骨也。再生之恩。豈唯錫類而已耶。以筆代口。縷縷説不得。説亦不盡也。冀君能忖度之。[268]

[267] 参政井上庄左衛門
[268]『原采蘋文鈔』慶應義塾大学斯道文庫蔵

（敬ひて手啓を奉る。仰ぎて清聴を瀆す。傳に曰く、書は言を盡くさず、言は意を盡くさずと。況や不肖の才力においてをや。安んぞ能く區區の意を盡くさんや。諸に言ふ所、幸ひにも意と逆らふならん。蘋家を辭して、茲に十五年、家の多難に遭ふ。天涯懸隔、煢煢として孑立す。相須く命を爲す者は唯母子のみ。而て母子の生きて逢ふの願ひ、未だ嘗て一日も懐ひを忘るる能はず。此れ君の知れる所なり。昨家書を得るに云ふ。報可を獲ずと。執政法を持するは理の當然なり。蘋獨り異郷に託し、望風懐想す。況て孀親年高し。其の情何をか云はん。一念の至り、主とする所無きがごとし。所謂死を欲して得る能はず。生まれて一つとして可無からん者を欲するなり。或は云ふ、一旦歸省すれば、事儻しくは諧ふべしと。悲しいかな。世に生れて女と爲る。千里獨行、豈に容易ならんや。始めて蘋東遊するや、聞く者皆令笑す。女侠の流を學ぶを以て爲すと。蘋獨り断然として顧みず。單身疆を越ゆる、以て恃む所有るなり。長するを防ぐの間、嘗て先人の遊歴に從ふ。素より相識多し。ここより藝備に出でば、頼杏坪、菅茶山の二老有り。京に入れば則ち頼山陽あり。皆一代の碩儒にして執友なり。故に其の先客を得て、路次絶へず送迎す。到る處歸るが如し。東海道にては豪潮律師を叩き、羽倉君に謁す。是れを以て關吏誰何せず。千里咫尺の如し。實に先人の餘慶に頼るなり。日月居ならず、前に應接する所、多くは隔世の人と爲る。千里獨行、豈に容易ならんや。蘋の區區たる意、誠に一己の私なり。而して固より公論の容れざる所なり。然れども亦た母子の情、忍びざるの心に出づ。古人云ふ有り、客と爲れば千秋の恨み、人に依れば萬里の身と。若し獨立して一家と作らんの後を待たんと欲せば、後に其の養を致すならんと。安んぞ能く其の風樹の恨み無きを保つ能はんや。是れ蘋の晨夕惚悩する所以なり。幾たびか狂を發せんと欲す。擧げて一つとして當たらず。徒らに不孝の人と爲りてやむなり。如何ぞ則ち可ならんや。君は嘗て蘋の志を哀れむ。又之を慫慂するに從ふ。是れを以て敢て厚愛に恃む。重ねて固陋を陳ぶ。伏して冀ふは、體老い吾も老い、人の老に及ぶの心、不孝轉じて純孝と爲さんことを。我母子をして首を聚め、口を開くことを得せしめば、乃ち是れ謂ふ所の死灰を吹くなり。腐骨の肉なり。再生の恩、豈に唯だ錫類するのみ。筆を以て口に代ふ。縷縷説き得ず。説きて亦た盡くさざるなり。冀くは君能く之を忖度せよ。）

〇執友：父の友人。　〇風樹の恨：風樹の嘆は親が死んで孝行出来ないことを嘆くこと（韓詩外伝・九）。

上記の参政井上庄左衛門に宛てた上書の内容は、これまでの采蘋の半生期の履歴書のような様相を呈している。これらの内容は采蘋詩の中でも繰り返し語られている内容であるが、この上書は、四十五歳までの采蘋の人生がいかなるものであり、いかなる思いで生きて来たのかをコンパクトに詳述している。要するに采蘋の苦悩は、父の遺言である家名再興を実現することと、江戸時代に課せられた女性の婦徳との板挟みに翻弄され続けた結果によるものであった。「孝」を最も重視した采蘋の苦悩は「若し獨立して一家と作らんの後

を待たんと欲せば、後に其の養を致すと。安んぞ能く其の風樹の恨無きを保つあらんや。是れ蘋の晨夕惚悩する所以なり。幾たびか狂を發せんと欲す。」という言葉によく表れている。江戸在住十五年後、漸く名声を得た采蘋は、母に孝を尽くそうとする餘裕が出来たのであろう。井上庄左衛門に対して我身の不幸を訴えたが聞き入れてもらえなかった。そのため天保十四年、今度は藩主に宛てて上書したものと思われる。

(2) 藩主への上書

上書（天保十四年）　上書藩公請迎母於江戸也

君侯閣下。妾聞凡拾人遺編斷句。而代爲存者。比葬暴露之白骨。哺路棄之嬰児。而況於父兄遺業乎。先臣震蒙。先朝特擢。吏務煩劇。自公之暇。吟詠自悞。所著詞章膾炙人口者。頗亦多矣。家本寒素。兄弟多病。未有隻字繡梓。妾亦不得生爲男子。曽無毫髪之能。常懼遺業泯没無傳。是乃妾之所以憤積胸懐。而遠父母兄弟。闕定省而不顧者也。出郷之後。兄弟相継亡没。所存唯孀親爾。乃在孀親。既悲生離。又傷死別。孑然孤危。猶有生意者。獨以有妾之在也。妾亦私願未果。日月電逝。参商不相見。于今十七年矣。孀親年已迫古稀。性命無情。喜懼之情。所懐萬端。反覆計慮。至乃終夜不瞑。死者猶可緩。生者固有涯。庶及其生之日。得就邸中一小舎。而聚首對膝。破多年之積愁。承遅暮之歓顔。則妾私願足矣。是以陳區區之苦。以訴于執事。執事難之。朝夕養有義子在。以養家一老母。付於天涯之窮獨。於義未爲得矣。是固常義。政府之議。不得不然。唯妾少讀書。略識義理。而所妄犯常義。瀆請不己者。抑亦有故焉。妾固不嫁人。獨立経營。欲有所爲。亦唯爲父母也。則其養母者。義子親子夐別。乃在母之情。則安親子耶。安義子耶。故妾之所請。以義子爲不能養母哉。亦唯以情爾。唯明主能體人之情。翼破常格。憐其私情。情之所在。聖人不之非。故曰。骨肉之間。以恩掩義。又云。親莫親於父子親。樂莫樂於父子樂。些些一己之私。而兒女之情。唯知其一．而不知其二．情發於中。言無所擇。既己不獲命。他無所告訴。苟非號泣求哀於君父之前。唯肯憐窮獨者。伏希閣下少加憐察。幸體保赤子之心。使妾及其生之日。得終養焉。于瀆尊嚴。萬死是甘。誠惶誠恐。叩首叩首。謹言。

天保十四年發卯六月朔　　原氏采蘋斂衽上書[269]

（君侯閣下。妾聞くに凡そ人の遺編断句を拾ひて、代つて存と爲す者は、暴露の白骨を葬り、路棄の嬰児を哺むに比せん。況んや父兄の遺業においてをや。先臣震　先朝特に擢じて蒙る。吏務煩劇なり。公よりの暇あり。吟詠して自ら悞む。著す所の詞章、人口に膾炙する者、頗るまた多し。家本寒素にして、兄弟多病なり。未だ隻字梓繡有らず。妾また男子と爲りて生まるるを得ず。曽て毫髪の能無し。常に遺業の泯没して傳るる無きを懼る。是れ乃ち妾の憤りの胸懐に積り、父母兄弟より遠くにありて、定省を闕きて顧みざる所以なり。出郷の後、兄弟相継ぎて亡没す。存する所は唯孀親のみ。乃ち孀親在るも、

[269] 『原采蘋文鈔』慶應義塾大学斯道文庫蔵

既に生離を悲しむ。又死別を傷む。孑然として孤り危うし。猶ほ生意有る者、獨り妾の在りて有るを以てなり。妾亦私願未だ果たさず。日月は電逝す。参商相見ず。于に今十七年なり。孀親年已に古稀に迫る。性命は無情なり。喜懼の情、懐しむ所は萬端なり。反覆して計慮す。至乃は終夜瞑られず。死者は猶ほ緩むべし。生者は固より涯有り。庶ふは其の生まるる日に及びて、邸中に就きて一小舎を得て、首を聚め膝を對して、多年の積愁を破り、遲暮の歓顔を承るを得えんことを。則ち妾の私願は足れり。是を以て區區の苦を陳べて以て執事に訴ふ。執事之を難とす。朝夕養ふ義子有りて在り。養家の一老母を以て、天涯の窮獨に付す。義において未だ得るを為さず。是れ固より常義なり。政府の議なり。然らざるを得ず。唯妾少しく讀書す。略ぼ義理を識る。而して妄りに常義を犯し、瀆を請ひて已まざる所の者なり。抑そも亦故有るなり。妾固より人に嫁さず。獨立経営す。爲す所有らんと欲す。亦唯だ父母の爲なり。則ち其の母を養ふは、義子と親子は夐かに別なり。乃ち母の情在り。則ち親子を安んずるや、義子を安んずるや。故に妾の請ふ所なり。義子を以て母を養ふ能はざると爲すか。亦唯だ情を以てするのみ。唯だ明主の能く人の情を體するは、常格を冀破し、其私情を憐むなり。情の在る所、聖人も之を非とせず。故に曰く、骨肉の間、恩を以て義を掩ふと。又云ふ、親しむに父子の親に親しむ莫れ。樂しむに父子の樂しみを樂しむ莫れと。些些たる一己の私にして、兒女の情、唯だ其れ一なるを知る。而して其二なるを知らず。情は中に發し、言は擇ぶ所無し。既に命を獲ず。他に告訴する所なし。苟くも君父の前にて求哀し號泣するにあらず。唯肯へて窮獨を憐む者。伏して希ふ閣下少しく憐察を加へんことを。幸ひ赤子の心を體保す。妾は其生の日に及びて、養ひ終へるを得せしめんや。尊嚴を瀆し、萬死是に甘んず。誠惶誠恐。叩首叩首。謹言。

天保十四年發卯六月朔　　原氏采蘋斂衽上書）

〇定省：親に孝養を尽くす礼。（礼・曲礼上）　〇参商：常にすれ違いで、互いに出あうことがないたとえ。（曹植・与呉李重書）

二つ目の上書は、先の井上参政に呈した上書が聞き入れてもらえなかったため、今度は直接藩主黒田長元に上書したものである。山田氏の伝記によれば采蘋は「此文を読んで泣かざる者は人に非ず」と豪語したと傳えられている[270]とあるように、名文をもって藩主の好情に訴えたが、これも功を奏することはなかった。天保十四年といえば采蘋四十六歳、江戸での名声も高まり、漢詩人としての地位も確立して、まさに円熟期を迎えていた時期である。それなりの自信があったことは上書の文面からも窺い知れる。原家は養子が家督相続し、義母を養うには十分であるというのが秋月藩の回答であったが、養子は十分にその義務を果たしていないのが現状であった。この上書には采蘋の「孝」に対する考えがはっきりと示されている。「妾固く人に嫁さず。獨立経営す。爲す所有らんと欲す。亦唯父母の爲なり。」という言葉は、采蘋の選択した人生が父母に対する孝道によるものであること

[270] 山田新一郎『第三巻　原采蘋先生小伝』1 頁。

を明言している。父の遺言を全うし、遺稿の上木を果たすのは父への「孝」であったが、母に対する「孝」はまだ存命である母に孝養を尽くすことである。藩主に対してその孝道の理念を連綿と綴っている。しかし、この願いも聞き入れられることはなかった。この上書から数年後に、采蘋は母親の病気の知らせを受けた。詩人としての活躍場所を江戸に定めた采蘋にとって、途中で帰郷することは不本意であったが、「孝」を尊守する采蘋にとっては母への孝養を優先せざるを得なかった。采蘋は弘化三年（1846)、四十九歳の時に詠んだ「丙午新年」と題する新年の詩に「慈恩に報ゆるを欲して　願は辰に及ぶ」と詠っていることから、すでに帰郷の決心を固めていたことが分かる。翌年、帰郷のための費用も必要であったと思われ、また房総に向けて一年近くの旅に出た。

第VI章　房総遊歴

一節　幕末房総地方の文化的状況

十八世紀後半ごろから始まった地方文人の台頭は、房総においては近世後期から幕末に到って盛んになった。房総は江戸と近接していることと、豊かな経済力を有していたことが文人たちの交流を盛んにした要因である。ここでは幕末に活躍した漢詩人を中心に概観し、特に原采蘋が交流した人物に焦点を当てて考察を進める。

独立した漢詩人として成功するために、文政十年、単身江戸に出た采蘋は文政十一年から十二年と弘化四年から五年の二度にわたって房総各地を遊歴した。この時代は柏木如亭に代表される遊歴詩人が各地を歴遊し、地方の知識階級や富豪相手に詩の添削や漢学の講義をして生計を立てていた。梁川星巌も柏木如亭に心酔し、妻の紅蘭同伴で各地を遊歴して回ったことで知られている。頼山陽も長崎・九州・山陽地方を遊歴したことはすでに述べたことである。幕臣であった大沼枕山は、天保八年以来毎年、梁川星巌と紅蘭は天保十二年の三月から七月まで房総を遊歴した。また大沼枕山を含めた星門四傑とうたわれた遠山雲如、嶺田楓江、小野湖山等も天保八から十年あたりにそれぞれ房総を訪れている。遠山雲如に至っては、九十九里に十年間住んで塾を開いて子弟を教授したという。このように江戸に近い房総には江戸に拠点を置く文人が多く訪れていた。

幕末房総地方の漢学塾として知られているものは、安房館山の新井文山、鈴木東海・抱山兄弟、保田の岩崎樫斎、東条の堀江顕斎などの塾が有名である。新井文山は江戸に遊学し、まず昌平坂学問所で佐藤一斎、松崎慊堂に師事し、文化三年(1806)に館山に帰り開塾した。後に館山藩主の稲葉正巳に召しだされ藩儒となった。その他、幕末に房総地方で漢詩人として名が知られているのは鱸（鈴木）松塘、鈴木東海・抱山兄弟、加藤霞石、東山雲如などである。この中で鈴木東海・抱山兄弟、加藤霞石は医者であったが、鈴木東海は安積艮斎に漢学を学び、帰郷してからは母の郷里白浜で開業し、傍ら塾を開いて近隣の子弟を教授した。加藤霞石は書を善くし、梁川星巌に詩を学び『掬靄山房詩』一巻を残している。また眼科医鈴木道順の息子である鈴木（鱸）松塘も同じく梁川星巌に詩を学び、後に江戸の浅草で「七曲吟社」を開き、女弟子を多く教授したことでも知られ、明治の漢詩壇

で活躍した人である。加藤霞石とは親戚関係にあたる。東山雲如も梁川星巌の門人で、母が長生郡東郷村の人である関係から後に上総に住んで塾を開いたが、師星巌が京都に移るや自らも京都に移り、恩師の遺業を継いで京都で没している。

1-1 采蘋の人脈

采蘋は二十年間の江戸滞在中に二回の房総遊歴を経験している。第一回目の遊歴の記録は残されていないが、第Ⅴ章一節で取り上げた「原采蘋の書柬と詩草」によれば江戸到着時の文政十一年（1828）の年末に出発し、帰りは十二月もしくは越年する予定であることが記されている。手紙の文面には「御面倒乍ら折々御左右承り度く」と見えることから、房総遊歴に関して、交際相手に何らかの手助けを求めたとも考えられる。江戸に着いて間もないため、生活の工面をつけるためであった。二回目の旅は一回目の旅から十九年後の弘化四年（1847)、母の病気の知らせを受けて帰郷を決心し、そのための旅費を得るための遊歴であったと思われる。一回目の房総遊歴は江戸に来て間もないころであり、房総についての知識もなかったと思われるが、いかなる人脈によって長期に亘る滞在先を確保したのか。采蘋の東遊については父の人脈、また頼杏坪、梁川星巌の紹介状があり、また江戸についても父の人脈が采蘋の生活を支えていたことはすでに見てきたが、ここでは二度に亘る房総遊歴を可能にした采蘋の人脈について考えてみたい。

采蘋の人脈を辿る史料としては、文政十年(1827) 六月、江戸に向けて出郷し、文政十一年正月に岡山に到着した時から付け始めた人名録『金蘭簿』[271]と房総遊歴の記録『東遊漫草』の後ろにつけられた人名録が自筆本で残されており、また第Ⅳ章で取り上げた江戸までの遊歴の記録『東遊日記』には山陽地方の文人が多く名を連ねている。

さて、一回目の房総遊歴はどのような人脈を辿ったのだろうか。星巌は、天保三年(1832)に京都から江戸に居を移し、天保五年に神田お玉ヶ池に詩社「玉池吟社」を開いたが、この時点ではまだ京都に住んでいた。二回目の遊歴は江戸での生活がすでに二十年近くに及び、また梁川星巌の「玉池吟社」には、房総文人の子弟が多く集まってきていたため、これらの弟子を頼って滞在拠点は確保されたようである。玉池吟社の門人は武士の子弟のほかにも関東周辺から集まってきた医者や名主の子息たちであった。これらの門人は一定の期間が過ぎると郷里に帰り、そこで私塾を開き、地元の子弟の教育に当たっていた。采蘋が二回目の房総遊歴で長期滞在を許され、詩酒を以て歓待されたのは星巌の弟子たちの家であり、またその親戚関係の家々があったからである。大沼枕山は星門四傑の一人で、他の四傑である遠山雲如、嶺田楓江、小野湖山らに先駆けて天保八年(1838)には房総半島を訪れている。遠山雲如は母の郷里である九十九里に十年間も住んで、子弟の教育にあたった。下総には佐原の清宮秀堅を中心とした文人ネットワークが形成されており、久保木清淵や伊能穎則らの漢詩人の存在が知られている。このネットワークは江戸で活躍する昌平校教授安井息軒、佐藤一斎の門人である大橋訥庵、幕臣であった大沼枕山・塩谷宕陰、吉田藩

[271] 秋月郷土館所蔵

儒の小野湖山、土浦藩儒の藤森天山、安房の鱸松塘らがそのメンバーとして挙げられている。この中で久保木清淵は佐原の伊能忠敬と親しく、忠敬の第七次測量の際、備後神辺の菅茶山に清淵の『補訂鄭註孝経』を贈っており、茶山の礼文は、増刷された『補訂鄭註孝経』の奥書に収められているという[272]。

采蘋の文政十一年の房総遊歴は、采蘋の手紙にもあるように下総からスタートし、房州に廻って江戸に帰るコースをたどっている。上記の下総の文人ネットワークを頼りに遊歴を開始したことは十分に考えられる。梁川星巌と紅蘭は天保三年（1832）に江戸に居を構えて以来、天保十二年になってようやく房総遊歴を開始している。采蘋の一回目の房総遊歴の文政十一年の時点では、まだ星巌も京都に在り、采蘋がどのようにして房総の情報を手にしたのかは推測の域を出ないのが現状である。山田新一郎氏によれば、天保年間に松島に遊んだことを久留米藩の儒者本荘星川の備忘録に「望瀛亭集會痛飲。子逸采蘋共将遊東奥。兼留別。」[273]とあることから推測されているが、それを証明する詩は残されていない。東奥に共に遊んだと思われる子逸とは、『金蘭簿』に海津傳左エ門と書かれており、采蘋の江戸日記[274]にもたびたび登場する人物である。松崎慊堂の『慊堂遺文上』にも「望瀛亭集送海津子逸詩序」という一文が見えており、本荘星川の備忘録の記述と一致する。松崎慊堂の序文は癸巳（天保四年）四月十三日の日付になっている。このことから、もし采蘋が実際に東奥の遊歴を実行しているとしたら上記の日付以後に出発したものと考えられる。

采蘋は久留米藩士の養女としての立場から、久留米藩の藩邸には頻繁に出入りしていることが天保二年の日記[275]にあり、また会津藩や津藩などの藩士との交流についての記述も見られることから、各藩士から得た情報も多くあったであろうと考えられる。幕末の房総半島は海岸防備を担う各藩の藩士が数百人単位で陣屋に暮らしていた[276]。さらに『金蘭簿』に見られる人脈も房総文人のネットワークともかかわりがあった人物が含まれていることからも有力な人脈であったことが分かる。このように様々なネットワークを頼りに房総遊歴を実現させたと考えられる。

二節『東遊漫草』に見る房総文人との交流

2-1　江戸文人と房総文人との交流

采蘋の房総遊歴は江戸に着いた直後の文政十一年（1828）から十二年にかけて上総から東回りで房総を経由して江戸に帰るという一回目の遊歴を果たし、二回目は弘化四年（1847）から五年にかけて木更津から南下し、反対周りで房総を一周し、江戸に帰っている。一回目の旅の記録は、焼失した可能性が高く、残されていないが、『東遊漫草』中の詩の中に十

---

272 『千葉県の歴史　通史編　近世２』千葉県、2008 年 3 月、931 頁。『黄葉夕陽村舎に憩う－菅茶山とその世界Ⅲ―』広島県立歴史博物館図録、2005 年、10 月、88 頁。

273 春山育次郎前掲書

274 『有煒楼日記』秋月郷土館蔵

275 『有煒楼日記』秋月郷土館蔵

276 池田和弘『北条村史』宮澤書店、2001 年 4 月。

八年前の追憶が散見されることから一回目の旅の旅程も推測できる。采蘋が江戸に着いてすぐに房総の旅を思い立ち、実行に移すことが出来た経緯については今だその手がかりはつかめていないが、江戸での交友録を丹念に検証すれば今後は解明できるものと思う。二回目の旅についてはすでに江戸在住二十年に及び、多くの友人・知人からの情報や、また一回目の遊歴によって采蘋自身の人脈も出来上がっていた。

『東遊漫草』に見える訪問先は大沼枕山や梁川星巌の房総旅行の宿泊先とほぼ重っている[277]。この理由は采蘋と星巌との交友がいかに密接であったかを示している。両者の交流は采蘋父子が長崎遊歴から帰郷後、同じく長崎を訪れた星巌が、柳簣池館で目にした采蘋の詩に驚いて、「讀采蘋女史閨詠却奇。采蘋向在長崎。開講肆。延生員。故詩尾及之。」の詞とともに七言律詩を采蘋に送ったことから始まっている[278]。それ以来采蘋は、東遊の度に京都時代の星巌を二度訪問し、詩の添削を依頼している。また星巌は江戸に向かう采蘋に紹介状を書き、旅の便宜も図っている。その後星巌は江戸に出て、神田お玉ヶ池に詩社を開き、弘化二年まで江戸で門人を育成したが、その間の采蘋との交流は采蘋自身の記録には残されていないものの、廣瀬旭莊の日記などによって知ることが出来る。

大沼枕山との交流は、枕山の父竹渓と采蘋の父古処が知人ということもあり、又枕山は星巌の弟子でもあり、天保八年と九年に房総を訪れ、九年には房総の漢詩人鱸松塘がまだ十五歳の少年で、彦之と呼ばれている頃に出会い、お互い意気投合し富士登山を果たしたということである。この後、彦之は枕山の勧めで星巌の門人となった。このように師弟関係を軸にした交流が江戸と房総をつないでいたことが知れるのである。

2-2 『東遊漫草』について

采蘋の二回目の房総遊歴の記録は『東遊漫草』として自筆本が秋月郷土館に所蔵されている。これまで山田新一郎氏や前田淑氏[279]らの研究によってこの日記の紹介がされているが、自筆本と照らし合わせてみると、詩の題名が異なっていたり、掲載されている詩には原本との異同が見られる。このことは他の写本が伝わっていたことを意味するのかも知れないが、秋月郷土館蔵の自筆本以外の『東遊漫草』はいまだ管見に及ばない。事実秋月郷土館蔵の『東遊漫草』には山田氏のメモの張り紙が付されていることから、やはり自筆本からの筆写であることは間違いがないと考えられる。『日本儒林叢書』に収まる「采蘋詩集」は渡邊虚舟氏選『采蘋先生詩集』（写本）をもとに、関儀一郎氏が編集したものと考えられるが、『東遊漫草』中のほとんどの詩を収録しているものの、詩の題が自筆本と異なっているものがあり、また間違いも指摘されている[280]。本稿ではなるべく采蘋自筆の『東遊漫草』

---

[277] 大沼枕山の『房山集』や梁川星巌の『浪淘集』には同じ場所で詠まれたと思われる同題の詩が見える。星巌の房総遊歴は采蘋とは逆のコースを辿っている。
[278] 第三章第三節を参照。
[279] 前田淑氏の論文「閨秀詩人　原采蘋と『東遊漫草』」（『江戸時代女流文芸史』笠間書院、1999）によれば、原本の『東遊漫草』はその時点では秋月郷土館に所蔵されていなかったようである。
[280] 福島理子『江戸漢詩選　第三巻「女流」』岩波書店、1995 参照。

により忠実に詩の全貌を紹介するとともに、采蘋と房総の文人たちとの交流を通して、江戸末期の房総詩壇の様相と漢詩人としての晩年の采蘋像を明らかにしたいと考える。

『東遊漫草』は日記代わりに記録した詩集である。このスタイルは父親の古処が守り通したスタイルで、散文は一切含まれていない。このあたりも父親の詩集を見習ったものと思われる。従って旅の行程は詩の内容から推測するほか方法はない。しかし、日記の最後には人名録が付記されており、どの地で誰に会ったかが記録されている。また詩には現れない人物も多く記録されている。『東遊漫草』には全部で九十四首の詩が盛り込まれている[281]が、山田新一郎編『原采蘋詩鈔』は房総遊諸詩として六十二首のみを採録している。この中の詩にも原本とは字の異同が見られる。以下、詩と人名録を頼りに采蘋の辿った旅路を検証してみたいと思う。

2-3『東遊漫草』の詩と訪問先

『東遊漫草』には九十四首の詩が書かれているが、完全ではないものも僅かに含まれる。煩雑ではあるが日記代わりに書かれた詩であるため、あえて全詩を紹介することで旅の全貌を見て行きたい。今回は二度目の房総訪問であるため、十九年ぶりに再会した人たちや訪れた場所も多く、長期に亘る異郷での生活を慰めてくれる人々や場所にも巡り合っている。しかし、采蘋はこの時すでに帰郷を決心していたこともあり、病気の母を案じながらの旅であった。そのため旅の後半は郷愁が色濃く詩に反映されている。二十年間の江戸での厳しい生活を経て采蘋はすでに五十歳になっていた。『東遊漫草』の詩中には自らの境遇を嘆く気弱な采蘋像が見える。一方、房総の将来を担う有能な若者を相手に詩酒を交わし、詩を教授している時の采蘋は悩みも忘れ、若者たちの相談に乗る、よき母親であり、よき師でもある采蘋の一面が覗かれる。このような采蘋の一面は房総でのみ覗かれるものではなく帰郷してから山家で塾を開いた時にも発揮されるのである。

□□[282]

海岸湾環數十程　　海岸は湾環りて　数十の程
狂濤激怒奔雷鳴　　狂濤は激怒して　雷鳴を奔らす
不防迂路紅楓逕　　迂路を防げず　紅楓の逕
恰似山陰道上行　　恰も山陰道の上行するに似たり

弘化四年の秋、江戸を出発し、木更津あたりから陸路を南下。木更津からの記録がある二回目の房総の旅はこの詩から始まっている。采蘋のメモによれば、木更津では浅川門[283]の

[281] 吉木幸子『幕末閨秀　原采蘋の生涯と詩』甘木市教育委員会、1993 年には「東遊漫草」の全編を掲げたとして19首の詩を載せているが、秋月郷土館蔵の自筆本には94首の詩が確認できる。
[282] 自筆本は墨で消した跡があり解読不可。山田新一郎本は「赴房州途上」、また関儀一郎編「采蘋詩集」では「失題」となっている。
[283] 浅川善庵か

遠山元水、字は貞伯と岡部藩士の近藤兼吉の二人と医者の生澤良仙に会っている。この詩は木更津～富津に至る海岸線と思われる場所が、山陰道に似ていると詠じている。人名録によれば富津では織本嘉右衛門、糟谷直輔、磯崎永助、小松貞吉(江戸人)、稲次作左衛門に会っている。織本家は代々名主で、小林一茶などとも交流があった。織本花嬌は俳人として名を成した。富津から天神山湊に出て、医者の井上宗旦を訪ねている。

百ケ岡[284]

巖邑水郷觸眼清　　巖邑の水郷　眼に觸れて清し
如何勝地欠詩盟　　勝地　詩盟を欠くは如何せん
燈窓寂寂唯要睡　　燈窓寂寂として　唯だ睡るるを要す
辜負風流百首名　　辜負す　風流　百首の名[285]

百首岡は現在の竹岡[286]。ここには竹ヶ岡陣屋がおかれ、羽倉簡堂が海防の任にあたっていた。天保十二年に梁川星巖はここに羽倉簡堂を訪ね、七言絶句を贈っている[287]。采蘋はここで医者の乃木文廸を訪ねている。

贈岩崎樫齋　　岩崎樫齋に贈る

山色依然似往時　　山色　依然として往時に似る
遠人不復舊容姿　　遠人　舊容姿に復さず
曾経比境來遊處　　曾て比境す　来遊の處
只恨與君相識遲　　只だ恨む　君と相識ること遲きを
數日留連心莫逆　　数日留連して　心は逆ふこと莫し
一家傾倒楽難支　　一家傾倒して　楽しみ支え難し
樂難支底哀随至　　楽しみ底を支え難く　哀み至るに随ふ
其奈萍蹤多別離　　其れ萍蹤して　別離多きを奈せん

又

老松歳寒質　　老松　歳寒の質
落落蔭園庭　　落落として　園庭を蔭ふ
雨至濤聲湧　　雨は至りて　濤声湧き
風収龍影青　　風は収りて　龍影青し
知君因積善　　君を知ること　積善に因り

---

[284] 山田新一郎本では「百首岡」となっている。
[285] 文明三年、里見義成が造海城を攻めた時に百首の和歌を作って城将に贈ったところ、城将は即座に開城をしたことから造海城を改め百首城となった。
[286] 中世の百首城跡
[287] 鶴岡節雄『房総文人散歩・梁川星巖篇』千秋社、1977 参照。

生子有寧馨　　生子は寧馨に有る
若會千秋節　　若し千秋節に會へば
重來罄數瓶　　重ねて来りて数瓶を罄く

○「積善に因り」：易・坤・文言に「積善之家必有余慶」とある。○「生子は寧馨に有る」：寧馨は六朝時代の口語で「このような」という意味。寧馨兒は幼少の時から優れている子のこと。

岩崎樫齋（1790～1881）は元名（鋸南町）の名主で、名を泰助といった。医師でもあり漢学や書にも造詣が深く、自宅に塾を開き、「蘭園書屋」と称した。采蘋は一回目の房総遊歴でもここを訪ねたことが一首目の詩から知られる。二首目からは名主である岩崎樫齋の家の情景や、家柄を忍ぶことが出来る。旧知の場所・詩人との再会を懐かしむ心情が詠まれている。鱸松塘は十二歳の時ここで学んでおり、亀田鵬斎や梁川星巌夫妻もここを訪れていることから江戸からの文人を受け入れる拠点であったと思われる。

垂釣
閑坐釣磯伴老漁　　閑坐して　磯に釣りて　老漁を伴ふ
細鱗潑潑上竿初　　細鱗　潑潑として　竿初に上る
人生有欲爭知足　　人生　争でか知足を欲すること有らん
纔得一魚又一魚　　纔に得る　一魚又一魚

元名から保田に出て、川崎温平、俗称善兵衛、に会う。ここで釣りを楽しんだものと思われる。

訪平井又右衛門稱病不偶使予旅宿入夜有人稱平氏門人来話乞予詩文持去示主人予於枕上儀賦一絶（訪平井又右衛門を訪ふ。稱病不偶にして予を旅宿さしむ。夜に入りて、平氏門人と稱す人来つて話を乞ふ有り。予の詩文を持去りて主人に示す。予枕上にて一絶を儀賦す。）
三千里外重行々　　三千里の外　重ねて行き々
到處山川幾送迎　　到る処　山川　幾くの送迎
経歴方知聞見博　　経歴方に知る　聞見の博きを
世間自有贋生書　　世間自ら贋生書有り

平井家は勝山村（現鋸南町）の大名主で八代目世雄は中興の主と言われ、太田金城に学んだ。采蘋や星巌が訪ねたのは九代目行謹（1811～1867）で、名は鼎、字は言信、九代目又右衛門を継いだ。星巌夫妻がここを訪れたのは天保十二年（1841）六月であった。平井家は三男六女皆書を好み、女子までも文学を好んだ家柄であり、采蘋や星巌の訪問はこれら

の子女にとってまたとない好機であったろう。勝山では旅宿もしたようである。次に市部では小澤政右衛門に宿泊している。

　蓑丘招隠

居元爽塏事咸宜　　元に居るれば　爽塏として　事咸宜し
四面山環怪石欹　　四面の山環　怪石欹つ
笑我顔強噉名客　　我が顔の強きを笑ふ　名を噉ふ客
對君心醉解頤詩　　君に対し　心酔して　頤を解く詩あり
雲烟變滅乾坤別　　雲烟　変滅して　乾坤の別れ
松竹幽深日月遲　　松竹　幽深　日月遲し
自有清音洋滿耳　　自ら清音有り　洋として耳に満つ
何煩急管与繁絲　　何んぞ急管と繁絲に煩はされん

○頤を解く：漢・匡衛伝に「解頤」とあり、口を開いて大笑いすること。

「蓑丘僊隠」という星巌の書いた額書があるという[288]。蓑丘は平群村（現南房総市）の医者、加藤霞石[289]の号である。霞石は名を済、字は世美と言い、蓑丘山人、掬靄山人とも号した。霞石は後の号である。本業よりも詩や書に憧憬が深く、長崎に遊学しているが、医業より文芸の方の収穫が多かったという。しかし長崎行きは功を奏した様で医業は繁盛し、文人の逗留を可能にした。『掬靄山房詩』一冊が残る。ここにも又星巌夫妻が十日ほど滞在し、先の額書や「掬靄山房詩碑」という書を残している。采蘋は弘化四年十月に数日滞在したようであり、長崎の話題に花が咲いたことであろう。この時霞石四十六歳。しかし掬靄山房の最初の訪問者は大沼枕山であり、その後多くの文人が霞石を訪ねている。

　懐人詩屋席上呈主人　三首

三萬六千日　　三萬六千日
蹉跎過半生　　蹉跎として　半生を過ぐ
與君連夜話　　君と連夜の話
慰我暮年情　　我が暮年の情を慰む
盃杓添風致　　盃杓　風致を添へて
燈窓憐雨聲　　燈窓　雨声を憐む
安克永今夕　　安んぞ今夕の永きに克たん
不使野鶏鳴　　野鶏をして鳴かしめず

[288] 鶴岡氏による。采蘋のメモには号「蓑丘招隠」とある。
[289] 加藤霞石については安房先賢偉人顕彰会編『安房先賢偉人伝』国書刊行会、1981 参照。

又

懐人情若海　　人を懐ひて　情海の若し
留客孰如君　　客留ること　孰か君に如からん
韶秀纔過弱　　韶秀　纔かに弱きに過ぐ
天才元絶群　　天才　元　群を絶す
心頭不平事　　心頭　不平の事
風水自然文　　風水　自然の文
筆陣真難敵　　筆陣　真に敵し難し
済河舟既焚　　済河の舟　既に焚く

五十我無聞　　五十　我れ　聞く無し
青年独羨君　　青年　独り君を羨むのみ
詩篇衆人口　　詩篇　衆人の口
變化半天雲　　変化　半天の雲
淡水論交道　　淡水　交道を論じて
清斎避俗気　　清斎　俗気を避く
吟成相顧笑　　吟成りて　相顧みて笑ひ
不時需酒醺　　時ならず　酒を需めて醺ふ

懐人詩屋は鱸（鈴木）松塘（1823～1898）[290]の書斎名。松塘は国府村谷向の眼科医の家に生まれたが、詩の才能に恵まれ、大沼枕山との出会いによって梁川星巌に弟子入りし、明治期の漢詩人として名を馳せるようになる。松塘が東京で結んだ詩社は「七曲吟社」と言い、娘の采蘭や蕙畹を含めた女弟子が多く集まったことから、清の鴻儒兪曲園に「松塘の門下には女弟子が甚だ多く、隋園の風あり」[291]と言わしめたように、松塘の詩社はあたかも清の袁枚の詩社のようであった。采蘋が谷向を訪れた時は松塘二十五歳で、母子ほどの年齢差があった。

留別[292]

累日將行雨意濃　　累日　将に行んとして　雨意濃し
遅留却是豁心胸　　遅留　却て是れ　心胸を豁く
新知得子歓何限　　新たに知る　子を得て　歓び　何んぞ限あらん
遠別如吾情所鐘　　遠別　吾情　鐘る所の如し

---

290 『安房先賢偉人伝』参照。
291 兪樾撰　佐野正己編『東瀛詩選』汲古書院、1981 年 6 月、555 頁。
292 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』では「留別鈴木松塘」となっている。

落月屋梁應有夢　　落月　屋梁　応に夢有るべし
孤雲野雀本無蹤　　孤雲　野雀　本より蹤無し
今朝卜霽杳然逝　　今朝　霽を卜ひて　杳然として逝く
面顧空労山幾重　　面顧みて　空しく労く　山幾つも重ぬ

鈴木松塘に対する留別の詩である。山に囲まれた谷向を離れる時が来た。鈴木松塘は後に鱸と名字の字を変えている。江戸で詩社を開くが、娘の采蘭が手伝い女弟子が多かった。采蘭という名も采蘋の影響が考えられる。

十一月初四風雨訪景山氏　　十一月初四　風雨景山氏を訪ふ
飄然蹤跡興何孤　　飄然たる　蹤跡　興何ぞ孤ならん
不是詩盟是酒徒　　是れ詩盟ならず　是れ　酒の徒なり
家在西天天盡処　　家は　西天に在り　天盡くる処
身遊東海海窮隅　　身は　東海に遊ぶ　海窮る隅
時衝風雨求吟侶　　時に風雨を衝きて　吟侶を求め
或向燈窓評畫圖　　或ひは燈窓に向ひて　畫図を評す
會意安能得不飲　　会意　安んぞ能く飲まざるを得んや
玉山若倒情人扶　　玉山　倒るがごとく　情人扶く

鈴木松塘に別れを告げて、十一月四日園村（現館山市）の名主景山氏を訪う。景山与左衛門の書斎は含翠書屋といい、星巌の詩に「景山氏の含翠書屋を訪う」があり、大沼枕山の『房山集』にも「宿景山氏宅対酒無聊回作歌」という詩が見える。ここでの詩は自分の境遇を詠じている。景山氏を辞した後、采蘋のメモには片岡村の名主小柴新右衛門を訪い、寶貝村では本橋次右衛門、号、文溟、名を名璞という人を訪ね、安東村では相川十左衛門、号を義長という人を訪ねている。また、ここでは丹波藩の宮澤胖、字は廣甫、号を竹堂という人に会っている。丹波藩の陣屋が安藤村にあったのであろうか。上記の詩は景山氏を訪れた時に詠んだ詩であろう。豪放磊落と言われた采蘋の性格をよく現した豪快な詩である。

栗園招飲
獨往煢然萬里身　　独往　煢然たり　萬里の身
浮遊何地不依人　　浮遊　何の地か　人に依らざらん
前宵幸列佳賓席　　前宵　幸ひに列す　佳賓の席
今日來斟新釀醇　　今日　来だ斟まず　新釀の醇
蕎麵多君經手製　　蕎麵　多に　君が手を経て製す
毛錐代我謝情眞　　毛錐　我に代りて謝す　情の真なるに

相忘不厭盃行急　　相忘る　厭かず　盃行の急なるを
也是明朝清路塵　　也是れ　明朝　清路の塵

〇毛錐：筆の別称

二子村（現館山市）の谷崎栗園は名を元良という医者であった。詩によれば栗園は自ら手打ちそばを作り、新酒をふるまったという。又谷崎家には星巌の詩書が残されているという[293]。栗園は安政五年十月十五日没、星巌の没年と同じである。

贈琴嶺　　琴嶺に贈る
江湖汗漫自由身　　江湖　汗漫にして　自由の身
詩酒相忘情更親　　詩酒　相忘れて　情は更に親し
天地與吾齋逆旅　　天地　吾と　逆旅を斎す
他郷何事恨離人　　他郷　何事か　人の離るるを恨む
樽前秉燭憐良夜　　樽前　燭を秉りて　良夜を憐む
客裏聯吟縁宿因　　客裏　聯吟　宿因に縁る
鷗社尋盟元有意　　鷗社　尋盟して　元　意有り
殿山花月墨沱春　　殿山　花月　墨沱の春

琴嶺は号で、池田屋と称した。名は簡、字は廉卿、通称金七。池田屋は代々金七を名乗り琴嶺は四代目であった。長須賀（館山市）の名主で、詩歌を嗜み能筆であったため文人墨客の来訪者が多く、鈴木松塘とも交流があった。来訪者は梁川星巌、藤森弘庵、大沼枕山、春木南溟（画家）、大嶋堯田（書家）らが挙げられる。　池田屋は現在も子孫が継承している。

鏡浦
十八年来夢一場　　十八年来　夢一場
曾臨鏡面照容光　　曾て鏡面に臨みて　容光を照らす
如今憔悴猶淪落　　如今　憔悴し　猶ほ淪落す
可耐髟鬆鬢作霜　　耐ふ可けんや　髟鬆　鬢　霜と作るに

鏡浦は館山湾を指し、長須賀からすぐの場所にある。采蘋は十八年前にもここを訪れ、若かった昔の自分の姿を懐かしみ、既に白髪の混じった今との差を詩に詠じている。館山では宗真寺というお寺にも泊まっている。

---

293 鶴岡節雄『房総文人散歩・梁川星巌篇』千秋社、1977 年 5 月、210 頁。

次韻加藤玄章　　加藤玄章の韻に次す
君是真男誰敢經　　君是れ　真の男　誰れか敢て軽ぜん
曾入學舍爲諸生　　曾て学舎に入りて　諸生と為る
人間未見書萬卷　　人間　未だ見ず　万巻の書
弱冠已期四海名　　弱冠　已に期す　四海の名
胸中文海難為水　　胸中の文海　水と為り難し
寧比豚犬守閭里　　寧くんぞ　閭里を守る豚犬に比せんや
捷筆縱横卷波瀾　　捷筆　縱横として　波瀾を巻く
笑殺世上彫蟲伎　　笑殺す　世上　彫蟲の伎
我亦學製裁羅袿　　我れ亦た　羅袿を製裁するを学ぶ
阿母目下坐幽閨　　阿母は　目下　幽閨に坐す
父兄俱逝家柞薄　　父兄は　俱に逝き　家柞薄し
不願執帚爲人妻　　願はず　帚を執りて人妻と為るを
獨抱遺書辭陋屋　　独り遺書を抱きて　陋屋を辞す
世路艱險嘗盡熟　　世路　艱険　嘗て盡く熟す
那料天末得知己　　那ぞ料らん　天末　知己を得んことを
特推赤心置人腹　　特に　赤心を推して　人腹に置く
周旋一日翰墨筵　　周旋す一日　翰墨の筵
豈唯三舍頻遷延　　豈　唯だ　三舍　頻りに遷延せんや
今朝也是海東去　　今朝　也た是れ　海東に去る
側身西望萬里天　　身を側めて　西のかた望めば　萬里の天

〇赤心：一つに集中する志向。

加藤玄章は平群の加藤霞石の次男。この時玄章は二十歳の青年であった。詩の順序からすれば、鏡浦から平群に戻ることになるが、平群から鏡浦観光に出て、また霞石の家に戻ったとも考えられる。玄章に宛てた詩には自らの身の上を吐露し、旅を続けている状況が書かれている。玄章の妻は鱸松塘の妹である。

次韻水谷翼齋　　水谷翼齋に次韻す
鏡浦風光冠此州　　鏡浦の風光　此州に冠たり
與君況復得同遊　　君と況んや復た　同遊を得るをや
従前沈醉輕離別　　従前　沈酔して　離別を軽んず
轉覚老來涕涙流　　轉た覚ゆ　老来　涕涙流る

翼斎は号で、名は豊作。忍藩の学者で海岸防備のため北条鶴谷に勤務していた。ここには忍藩の陣屋があったという。上記の詩によれば翼斎と鏡浦に遊んだ模様である。以前は離別を軽んじていたが、年をとって知る別れの切なさを詠んでいる。翼斎の他に塩野専蔵、号を苔園という忍藩士にも会っている。

贈未亡人岩崎氏	未亡人岩崎氏に贈る
客久他郷似出郷	久しく他郷の客となりて　郷を出づるに似たり
遅回幾度解輕装	回ること遅し　幾度か　軽装を解く
君家姉妹皆經過	君が家　姉妹　皆　経過す
子独孤孀絶艶粧	子独り　孤孀　艶粧を絶つ
園有寒梅憐晩節	園に寒梅有り　晩節を憐ひ
氣如脩竹凌風霜	気は脩竹の如く　風霜を凌ぐ
女兒吾亦生涯淡	女児　吾れ亦た　生涯　淡し
夜雨聯床兩不防	夜雨　聯床　両つながら防がず

〇経過：行き来する、付き合うの意。（李白・詩・少年行）〇孤孀：夫を亡くした妻。やもめ。〇脩竹：細長い竹。

岩崎氏については不明。館山と洲野崎の間に家があったと思われる。未亡人の家の近くには姉妹が住んでいてお互いに行き来している様子が書かれている。また寒梅の園があったという。未亡人の質素だが気丈な暮らしぶりを詠んでいる。洲崎村では名主の渡邊仁右衛門[294]を訪ねている。

贈関谷林国手	関谷林国手に贈る
同是西州客	同じく是れ西州の客
相逢東海頭	相逢ふ　東海の頭
君開一家業	君は一家の業を開く
吾異有方遊	吾方遊有るを異む
談細憐郷語	談細　郷語を憐む
情眞忘旅愁	情真　旅愁を忘る
佳兒君珍重	佳児　君　珍重す
七歳氣呑牛	七歳　気は牛を呑む

洲崎村では渡邊仁右衛門の近くに住む医者の池田元章、名は貞、字は士揺、号を関谷林という人に会っている。国手は医者の意。詩に「同是西州客、相逢東海頭」とある如く、

[294] 地元の人に依れば古くは「綿鍋」と書いたという。幕末、白河藩の松平侯が休憩したといわれる渡邊家の広大な土地は現在竹藪に覆われている。

九州の人であったようである。また「佳児君珍重、七歳気呑牛」とあり、七歳の子がいたことがわかる[295]。

留別

学是同門國比隣　　学ぶは是れ同門[296]　国に比隣す
三千里外始相親　　三千里の外に　始めて相親しむ
歓留累月難離別　　歓びは　累月に留めて　離別難し
不奈臨行涙瀑布　　行くに臨みて　涙瀑布となるを奈せん

池田氏に対する留別の詩である。異郷に在って、同じ西国の人に会い、別れ難い思いが詩に込められている。洲崎の手前、波左間では糸我屋新平衛に会っている。ここには洲崎砲台の松ヶ岡陣屋があり、白河藩士の墓が坂田の西方寺や波左間の光明院にあったという[297]。采蘋はこの人たちの墓を訪ねたのかもしれない。洲崎では他に養老寺というお寺にも泊まっている。洲崎村から伊戸村に向かい、黒川隆圭、友次朗孝政を訪ね、圓光寺や、洲崎大明神の別当である吉祥院にも足を伸ばしている。かつて大沼枕山も吉祥院[298]に泊まったという[299]。洲崎の先、坂田村では西方寺を訪ね、また名主の海老原市朗左衛門を訪う。川名村では飯田三郎兵衛正賢、飯田新兵衛を訪ね、そこから犬石村に出て、名主の嶋田理兵衛を訪う。嶋田家は医者としても有名。ここから南下して漁港のある布良村に到り豊崎藤右衛門延治家か小谷吉右衛門伊親家[300]に宿ったと思われる。星巌や枕山の詩にも布良や洲崎を詠んだ詩があり、采蘋も同じ人々を訪ねたようである。

遊海潮寺　号尾浦山[301]

海潮寺静日稍長　　海潮寺　静日　稍や長し
歳暮清閑屬此郷　　歳暮　清閑　此郷に屬す
刳木取泉夜疑雨　　木を刳き　泉を取りて　夜雨かと疑ふ
穿窓窺客月臨房　　窓を穿ち　客を窺ふ　月は房に臨む

半島を回り白浜町根本に到り、名主の森周蔵氏を訪ねた後、海潮寺（現海福寺）に宿泊している。尾浦山海福寺は山を背にした静かな場所にあり、采蘋の詩はその情景をよく描写している。根本から川下村に早川古右衛門、号松鱗を訪い、原田村の行方早人を訪ねる。

---

295 采蘋のメモに玄章の子は阿定とある。池田家は現在も子孫が住んでおり、家は新宅と呼ばれている。
296 「同門とは亀井門なるべし」との山田氏のメモがある。
297 鶴岡節雄前掲書
298 現在は洲崎神社となっている。
299 鶴岡節雄前掲書
300 神田屋は現存しており郵便局を営んでいる。
301 山号を尾浦山という。

近くの青木村で医者を開業していた鈴木東海に会う。

名倉浦施網　　名倉浦に網を施す
世故忽忙屬抄冬　　世故　忽忙として　抄冬に屬す
吾曹歳晩有從容　　吾が曹　歳晩　従容有り
更乗夜月催漁叟　　更に夜月に乗じて　漁叟を催す
網得細鱗醉後供　　網　細鱗を得て　醉ひて後　供す

〇世故：俗事。〇忽忙：忙しい。慌ただしい。〇吾が曹；仲間。ともがら。〇従容：勧める。勧誘する。

鈴木東海は島崎村の里正行方平左衛門の妹の子で、館山の医者鈴木正立の長男。名は才助。江戸で医学を学び、帰郷してから、母の生家に近い青木村で開業し、近隣の子弟に漢学を教えていた。　東海二十七歳であった。東海には未刊の「東海詩集」があるが未見。その中に「爛月十九日、同采蘋観濤茁斎好海、乗興夜漁、還共分韻」とあるという。それによりこの詩は十二月十九日に、東海らと連れだって夜漁に行った後に詠んだものとわかる。ここに出てくる観濤と茁斎は原村の人で、東海の友人である。佐野観濤、字は有道、元治は通称か。吉田茁斎、字は之義。

探梅
清操不攻野渓頭　　清操として　攻められず　野渓の頭
獨立東風誰與儔　　独立して　東風　誰と儔にせん
開偏枝枝欲作雪　　偏く枝枝を開き　雪と作らんと欲す
休將玉笛上高樓　　玉笛を将つて　高楼に上るを休めよ

この詩もおそらく東海や彼の友人たちと出かけた時に詠んだと思われる。青木村、島崎村には長らく滞在した模様である。

歳暮書懐
任他世上笑我惷　　任他　世上　我惷を笑ふ
忙裏晏然對夜釭　　忙裏　晏然として　夜釭に対す
年老征途無定上　　年老いて　征途　定上無し
詩成才子詫新腔　　詩成りて　才子　新腔を詫ぶ
半生落泊慚塵俗　　半生　落泊　塵俗を慚ず
萬斛愁心付酒缸　　萬斛の愁心　酒缸に付す
有客兩三慰孤寂　　客有り　両三　孤寂を慰む
幾回来往話燈窓　　幾回か来往し　燈窓に話す

〇新腔：曲調。歌い方や節回し。〇落泊：落ちぶれて身を寄せるところもないさま。〇塵俗：俗世界。〇萬斛：きわめて多くの。〇酒缸：酒がめ。

旅先の暮れの述懐である。東海の寓居か行方氏の宅に泊まっていたと思われる。年老いて旅先にあって、さすがの采蘋も愁心を拭えない。しかしここでは「有客両三慰孤寂　幾回来往話燈窓」とあることから、東海たちが毎晩訪ねてきて話してくれるので、孤独がまぎれると詠んでいる。

遊野島　　野島に遊ぶ

浪遊唯任閑人誘　　浪遊して　唯　閑人を誘ふに任す
坐是班荊勝綺筵　　坐して是れ　班荊　綺筵に勝る
地盡東南天際水　　地は東南に盡く　天際の水
春隣村落樹含烟　　春は村落に隣して　樹は烟を含む
鰲身波黒鴻濛躍　　鰲身　波黒く　鴻濛躍る
帆影風収夕照鮮　　帆影　風収めて　夕照鮮やかなり
興至一詩題複壁　　興至り　一詩　複壁に題す
朗吟敢向世人傳　　朗吟　敢て世人に向ひて傳ふ

野島崎の風景を臨場感あふれる詩に表現している。野島崎は房総半島の南端で、現在は灯台が立ち、観光名所となっている。采蘋も東海や東海の友人に案内されて岬を訪れたのであろう。ここは後述する「予十九年前遊野島作」という詩で明らかなように、十九年前にも訪れた場所である。

次韻木東海見贈　二首

行盡千山又萬川　　行き盡す　千山又萬川
曽無一句上雲箋　　曽て一句として無く　雲箋に上る
羨君才逸風塵外　　君が才逸を羨む　風塵の外
詩思宛如出水蓮　　詩思　宛も出ること水蓮の如し

又　　丁未（弘化四年）除夜

往々人生同逆旅　　往々　人生　逆旅に同じ
重来偏怪故人家　　重ねて来りて　偏に怪しむ　故人の家
寓公更迓曽遊客　　寓公　更めて迓ふ　曽遊の客
賓至相忘問樹花　　賓至り　相忘れて　樹花を問ふ
（于時鈴木東海寓并行片（方）氏本宅故及）五十歳乗処々過

〇逆旅：宿屋。〇賓至：「賓至如帰」賓客が自分の家に帰るかのように訪ねてくる。非常に親しいさま。

この詩の最後に「于時鈴木東海寓　行方氏本宅故及」とあることから逗留先は東海寓居から行方平左衛門氏の本宅に移ったようである。十九年前もここに泊まったことが上記の詩から分かる。ここで弘化四年の除夜を迎えた。

弘化五年春王正月　元旦　三首

豈不懐歸有老親　　豈に帰るを懐はざらんや　老親有り
廿年思夢故園春　　廿年　夢に思ふ　故園の春
三千里外魂愈遠　　三千里の外　魂　愈いよ遠く
猶作東隅歡國賓　　猶　東隅と作りて　国賓を観るがごとし

又

賓日芙蓉東海春　　賓日　芙蓉　東海の春
遊踪到處社盟新　　遊踪　到る処　社盟新たなり
蔵奇樓下藏丹醸　　蔵奇楼の下　丹醸を蔵す
占得風流賢主人　　風流を占め得たり　賢主人

又

立春元日異郷身　　立春　元日　異郷の身
想得先君致仕辰　　想ひ得たり　先君　致仕の辰
兒也猶無一丁字　　児も猶ほ　一丁字無し
但覚吟聲天地淪　　但だ覚ゆるは　吟声は天地の淪であると

異郷に在って新春を迎え、故郷に思いを巡らし、親を想う。また先君（父）の致仕にも及び、小さかった時の状況を回想している。「但だ覚ゆるは　吟声は天地の淪であると」と詩句にあるように、詩人としての素質はすでにこの時から芽生えていたことを示唆している。二首目には「蔵奇樓下蔵丹醸　占得風流賢主人」とあることから風流な賢主人は秘蔵の酒を客のためにふるまってくれたのである。「蔵奇樓」は、山田氏によれば行方氏の書斎であるとのこと。弘化五年の正月は行方氏本宅で迎えたと思われる。

畳韻和木東海　三首　　鈴木東海に畳韻して和す　三首

吟客情同骨肉親　　客情の同じきを吟ず　骨肉の親
相看莫逆意如春　　相看て逆ふ莫れ　意は春の如し
修辭必竟祖先業　　修辞は必ず竟に　祖先の業にして
漫興詩篇豈爲賓　　漫興の詩篇　豈に賓と為らんや

又

君是纔迎四七春　　君是　纔に四七の春[302]を迎ふ
詩書双賞自清新　　詩書双賞　自ら清新
男兒処世非容易　　男児の処世　容易に非らず
只合嘐嘐期古人　　只だ古人の期する嘐嘐に合ふのみ

又

同是烟霞痼疾身　　同じく是れ　烟霞　痼疾の身
番番早已及花辰　　番番として　早く已に　花辰に及ぶ
唯吾萍水過知命　　唯吾　萍水　知命を過ぐ
抛却生涯甘委淪　　生涯　抛却して　委淪に甘んず

○嘐嘐：志や発言が大きいさま。○痼疾：病気がなかなか治らないさま。○知命：五十歳。『論語』の為政から「五十にして天命を知る」から。

詩中に「君是纔迎廿七春」とあることから、東海の年齢が知れる。絶句三首からは東海との親密な関係が伝わってくる。息子のような年齢の東海の将来に対して、助言や励ましの言葉をかけている慈愛に満ちた采蘋の姿が彷彿とされる。しかし二首目では自分の人生に対して消極的になっている。

雨中遊神余　　雨中神余に遊ぶ
趣約何辭雨　　約に趣きて　何んぞ雨に辞せんや
春遊興更長　　春遊　興更に長し
坂泥隨馬歩　　坂泥　馬の歩むに隨ひて
山路繞羊腸　　山路　羊腸を繞る
自笑虚名噪　　自笑す　虚名の噪しきを
殊教應接忙　　殊に応接を忙しからしむ
隨處拚沈酔　　隨処　沈酔を拚す
詩債不遑償　　詩債　償ふに遑なし

神余は白浜から館山に向かう山中にある。おそらく出張教授を頼まれ、行方家より出かけたと思われる。采蘋の名声を聞きつけてはるばる神余の知識者から招待があったようである。あちこちで酒宴に招かれ、「殊教応接忙」と見えることから、応接に忙殺されて、「自笑虚名噪」と自嘲している。

[302] 東海はこの時二十七歳。

贈善長翁

東海盡頭西海客　　東海の盡頭　西海の客
何圖累日得相同　　何ぞ圖らん　累日　相同を得るを
閑談一夜春風坐　　閑談す　一夜　春風の坐
百結愁腸意始融　　愁腸を百結し　意始めて融く

〇愁腸：侘しい気持ち。

神余では金丸六右衛門と和貝大作に会う。大作の号が善長である。「閑談一夜春風坐」とあるから翁に招かれてそこで宿泊したのであろう。

客中送客

楊柳參差空自青　　楊柳　参差として　空は自ら青なり
陽春有脚暫難停　　陽春　脚有り　暫しも停め難し
落花芳草人傷別　　落花　芳草　人別に傷む
濁水清塵酒易醒　　濁水　清塵　酒　醒め易し
客舎頻年喜同宿　　客舎　頻年　同宿を喜ぶ
遊蹄何日得帰寧　　遊蹄　何れの日か　帰寧を得んや
送君不覺離城遠　　君を送りて　覚えず　城を離れて遠し
悵望看過幾短亭　　悵望して看過す　幾短亭

この詩と次の二首はどこで詠んだものかは不明。野島崎の行方氏滞在中に詠んだものであろうか。

早春遊望

相携詩伴弄新晴　　詩伴を相携ひて　新晴を弄す
草自焼痕經雨生　　草　焼痕より　雨を経て生ず
一首苦吟吟未穩　　一首　苦吟　吟未だ穏かならず
間閑有鳥已春聲　　間閑として　鳥有り　已に春声

「早春遊望」の下に十日とあるので一月十日に作った詩とわかる。

春夜花下獨酌[303]

風送清香月色多　　風送りて　清香　月色多し

[303] 井上本は「春夜花下飲」となっている。

千鐘不盡可如可　　千鐘　盡さず　可なるにしくべし
姮娥亦是孤棲侶　　姮娥　亦た是れ孤棲の侶
対影三人舞且歌　　影に対ひて　三人　舞ひ且つ歌ふ

上の二首と同様、野島崎の行方氏滞在中に詠んだものと思われる。「三人」とあることから東海とその友人とで春夜の花見に興じた模様である。

留別行方氏　　行方氏に留別す
遠別已経十八年　　遠別　已に　十八年を経る
相看悲喜涙潸然　　相看て　悲喜　涙　潸然たり
暫留明日還征路　　暫く留りて　明日　征路に還る
離恨茫茫水接天　　離恨　茫茫として　水は天に接す

行方家を辞する時が来た。「遠別已経十八年」と、以前にもここに滞在したことを示す。行方兵左衛門は大庄屋であったから長期の滞在が許されたのであろう[304]。そればかりでなく行方氏と采蘋の交友の深さをこの詩は物語っている。

別木東海　　鈴木東海に別る
萍水何辺無別離　　萍水　何辺　別離無く
偶縁奇遇故遅遅　　偶たま奇遇の縁ありて　故に遅遅たり
若非君輩憐孤客　　若し君輩　孤客を憐れざれば
安得天涯有一知　　安んぞ　天涯　一知を有するを得んや
唱和三旬重歳酔　　唱和三旬　歳を重ねて酔ふ
東西明日負春之　　東西　明日　之れ春を負ふ
数株楊柳微風岸　　数株の楊柳　微風の岸
愁緒揺揺幾萬絲　　愁緒　揺揺として　幾萬の絲

行方氏に別れを告げ、東海、茁齋、観濤と白浜滞在中に共に遊び、また酒宴も共にした若者たちとも別れを惜しんだ。上記の鈴木東海に贈った詩に対して東海も次の詩を采蘋に贈っている。

送采蘋女史
交在情性合、不関舊與新、烟霞同痼疾、風月結清因、教戒真慈母、唱酬恰故人、何圖離別速、秋殺百花春、

[304] 地元の人によれば、行方氏は代々訪問者を歓待し、また困った人を助ける家柄であったという。

（采蘋女史を送る

交の情性合ふ在りて、舊と新に関はらず、烟霞　痼疾を同じくし、風月　清因を結ぶ、教戒は真の慈母、唱酬は恰も故人のごとし、何圖　離別は速し、秋殺す　百花の春。）

東海の詩からは采蘋を慈母のように慕っていた様子が伝わってくる。野島崎滞在中の采蘋は東海らの若者に対して親身になって相談にのり、母親のように教えさとしたと東海の詩は伝えている。

別吉田茁齋　　吉田茁齋に別る
迎新送舊屡同盟　　新を迎へ　舊を送る　屡しの同盟
児女亦知散客名　　児女は亦た　散客の名を知る
一夜樽前告別處　　一夜　樽前　別れを告ぐる処
風吹春思難爲情　　風は春思を吹き　情を為し難し

吉田茁齋は東海の友人か弟子であろう。野島崎滞在中に采蘋の教えを受けた一人である。

同佐野観濤
遊水滔滔流不盡　　遊水　滔滔として　流は尽きず
浮萍泛泛去無痕　　浮萍　泛泛として　去きて痕無し
形骸自有心魂在　　形骸　自ら有り　心魂も在り
臨別何留一片怨　　別れに臨みて　何んぞ留めん一片の怨

佐野観濤も同様に、采蘋に教えを受け、共に遊んだ地元の青年である。

早春發村　　早春村を発す
抛却人間事　　人間　事を抛却して
心頭無所營　　心頭　営む所無し
浪遊占余適　　浪遊　余適を占ひ
獨往不期程　　独往　程を期さず
咄咄書空雁　　咄咄として　空に書す雁
嚶嚶出谷鶯　　嚶嚶として　谷に出ずる鶯
留連應有限　　留連　応に限り有るべし
吾亦蹈春行　　吾れも亦た　春を蹈んで行く

長逗留の後、別れを惜しみながらしかし「留連応有限」と自らをせきたてて島崎村を後にした。

予十九年前遊野島作　　予十九年前野島に遊びて作る
微茫滄海水涵天　　微茫たる滄海　水　天を涵す
風収鵬際帆如立　　風収まりて　鵬際　帆立つが如く
波穏鰲背山似眠　　波穏やかにして　鰲背　山眠るに似たり
累日携樽移謝屐　　累日　樽を携へ　謝屐を移す
同朋弄筆聳王肩　　同朋　筆を弄して　王肩を聳やかす
酔余笑我耽清賞　　酔余　我が清賞に耽るを笑ふ
月下隨行骨欲仙　　月下　随行して　骨　仙ならんと欲す

〇清賞：李白の「尋陽城を下りて、彭蠡に汎び、黄判官に寄す」に「名山佳興を発し、清賞亦何ぞ窮まらん」とある。〇骨仙：仙骨は仙人のこと。

上記の詩は、十九年前に野島崎に遊んだ時に作った詩を思い出して再現したものと思われる。詩の内容からは、三十代の始めの、人生を謳歌しているエネルギッシュな采蘋の姿が再現されている。

布袋
稺童自有眞　　稺童　自ら真有り
情界盡迷津　　情界　迷津に盡きて
無縁竟難度　　無縁　竟に度し難し
愼勿示時人　　慎んで　時人に示す勿れ

行方氏に別れを告げた後、下澤の佐野真亮に会い、白子（現千倉）では佐野屋弥助を訪ねている。ここには房州台場の梅カ岡陣屋があったという。又南三原にも立ち寄っている。この詩はこの間に詠んだものと思われる。

重宿海発山自性院　　重ねて海発山自性院に宿す
屈指曾遊十九年　　指を屈すれば　曾遊十九年
也知離合有因縁　　也た知る　離合は因縁有るを
春風一夕梅窓夢　　春風　一夕　梅窓の夢
滿室清香繞枕邊　　満室の清香　枕邊を繞る

海発（現南房総市和田町）の臨済宗自性院には十九年前にも宿泊したことがこの詩から知られる。自性院でのゆったりした時間を詠んでいる。星巌夫妻もここに宿泊した可能性

が高いと鶴岡氏は言う[305]。

春雪酬保田綉齋　　春雪　保田綉齋に酬ゆ
気韵遠慚道韞才　　気韵遠く　道韞の才を慚づ
襟懐只是對君開　　襟懐　只だ是れ　君に対して開く
春風忽送簷前雪　　春風　忽ち送る　簷前の雪
好擬謝家評絮来　　好んで謝家を擬し　絮の来るを評す

〇道韞：王凝之の妻謝氏。文才があったことで知られる。〇謝家の評絮：叔父の謝安が雪が降ってきたのをみて道韞と兄の二人に「これは何に似ているか」と質問した。兄は「塩を空中にまき散らしたようだ」と答えたが、妹の道韞は「柳絮が風にさそわれて舞い飛ぶのに似ている」と答えた故事を指している。

和田村の保田綉齋は字を子権、名を衡といった。近隣の子供たちを教え、その住居跡は医者屋敷と呼ばれていたという[306]。このほか和田村では里正の庄司五朗左衛門、嶋村屋弥助、八代市兵衛、泉屋林兵衛、白河屋又八などを訪ねている。春雪をみて、謝道韞の故事をうまく取り込んで一首を保田綉齋に贈ったようである。

二睡圖
妙宇饒舌後　　妙宇[307]　饒舌の後
寒拾倶逃避　　寒拾　倶に逃避す
四大即是空　　四大　即ち是れ空
独擁於菟睡　　独り於菟を擁きて睡る

〇於菟：オト。トラのこと。春秋楚の方言。（左・宣四）

和田村で見せられた二睡図に賛を頼まれて書いたものと思われる。

示保田詩盟　　保田詩盟に示す
幾日春寒防出遊　　幾日の春寒　出遊を防ぐ
因君忘却遠人愁　　君に因り　忘却す　遠人の愁
今朝好霽風光暖　　今朝　好霽　風光暖かにして
試向青山著屐不　　試しに青山に向ひて屐を著けず

保田綉齋に贈った詩である。春の寒さが続いていて出遊を阻まれていたが、今朝は暖か

[305] 鶴岡節雄前掲書
[306] 前田淑前掲論文参照。
[307] 山田編「詩集」では「豊于」となっている。

くなったので、履を著けずに山に登ることにしようと采蘋らしい一面をのぞかせている。

答同

浮遊未返日滔滔　　浮遊　未だ返らず　日は滔滔たり
麥潤南枝東龍聲　　麥潤　南枝　東龍の聲
勿怪殺波終不上　　怪む勿れ　波を殺して　終に上らず
纔殘靉靆□秋毫　　纔に残す　靉靆として□秋毫

保田綉齋の詩に答える詩と思われる。

天面途中贈綉齋　　天面途中　綉齋に贈る
麥畦黃緑蝶飛低　　麥畦　黄緑にして　蝶　低く飛ぶ
二月春風卉木蔞　　二月　春風　卉木　蔞
有約不孤復同恨　　約有り　孤ならず　復た恨むを同じくす

天面（現鴨川市太海）に向かう途中で、再び保田綉齋に一首を贈っている。残念ながら結句は見当たらない。天面では里正の裕九郎宅に泊まったようである。天面の里正に招待されたのか、「有約不孤復同恨」とあるのは気が向かないのをしぶしぶ応じている様子が見える。

杏林齋寓居　雨窓寂寂独坐無聊偶閲主人之稿遂歩其韻　九首

杏林齋寓居にて、雨窓寂寂として独り坐して聊しむ無し。偶たま主人の稿を閲す。遂に其の韻に歩す、九首。

有志何人更不酬　　志有れば　何人か　更に酬ひざらむ
多君成業冨春秋　　君は多く　業成りて　春秋に冨む
風流別愛烟霞客　　風流　別だに　烟霞の客を愛す
借與園池洗旅愁　　園と池を借りて　旅愁を洗ふ

又

出都如昨日　　出都　昨日の如し
来此忽春風　　此に来て　忽として春風あり
坐愛佳山水　　坐して愛す　山水の佳なるを
詩材幸不空　　詩材　幸ひ空ならず

又

山嶺載帽看含雨　　山の嶺は　帽を載き　含雨を看る
二月春寒少女風　　二月　春寒　少女の風
一炷香烟一甌茗　　一炷の香烟　一甌の茗
思詩人坐客窓中　　詩を思ひて　人は坐す　客窓の中

又
都門春色厭塵譁　　都門の春色　塵譁を厭ふ
跋渉將探閑處花　　跋渉し　将に探らん　閑処の花
雨勒春寒花發晩　　雨は春寒を勒して　花は晩に発す
空留行季日煎茶　　空しく留り行く　季日の煎茶

又
詩篇一部愛新清　　詩篇　一部　新清を愛す
語語響人意表情　　語語は響き　人意の情を表す
吾亦江湖結盟轉　　吾れ亦た　江湖の結盟に転ず
不知時節客中更　　知らず　時節　客中更むるを

又
房州地暖少氷霜　　房州　地暖かく　氷霜は少し
已見菜花隔歳黄　　已に見る　菜花　歳黄を隔つ
節過春分還料峭　　節過　春分　料峭を還る
殘寒未枚一枝香　　残寒　未だ枚かず　一枝の香

〇料峭：春の風が肌寒いさま（陸亀蒙－詩・京口）

又
詩客於春尤有情　　詩客　春に於いて　尤も情有り
豫披花暦祈新晴　　豫披　花暦　新晴を祈る
冠童五七君期否　　冠童　五七　君期すや否や
何必咏歸待服成　　何んぞ必らずしも　服成を待つて帰るを咏はんや

又
知君綺語帶烟霞　　君知るや　綺語　烟霞を帯るを
山色當軒翠黛斜　　山色　軒に當りて　翠黛斜なり
一氣呵來拂絹素　　一気　呵ひ来りて　絹素を拂ふ
天然風韵筆生花　　天然の風韵　生花を筆す

又

環州瀛海幾湾湾　　州を環る　瀛海　幾湾湾
湾頭峭壁挾霄間　　湾頭　峭壁　霄間を挾む
就中波大尤奇絶　　就中　波大にして　尤も奇絶なり
垂釣人従鰲背還　　垂釣の人　鰲背に従ひ還る

波太（現鴨川市太海）の医者阿部玄節は平久里の医者加藤霞石の門人で、号を蓬州、字は淳徳といい、住居を杏林堂医院といったことから杏林齋とも称したようである。ここで雨に阻まれて滞在中、杏林齋の詩稿を添削し、自らもその韻に歩して九首を詠んだ。

杏園席上贈主人　　杏園席上主人に贈る
来遊得所便如歸　　来遊し　所を得　便す　帰るが如し
誰向青山論是非　　誰か青山に向ひて是非を論ず
吾性與人白鷗鷺　　吾が性　人と白鷗鷺
對談早已忘心機　　対談す　早已に心機を忘る

〇青山：「青山可埋骨」蘇軾・詩

同じく杏林齋に宛てた詩。杏林齋は詩も解した医者であり、波太は風光明美な場所ということもあり、しばらくここに滞在したようである。

波太
空洋一碧渺茫中　　空洋　一碧　渺茫の中
鵬際無邊何処通　　鵬際　無邊　何れの処にか通ず
人道鰌魚驅鰯至　　人は道ふ　鰌魚　鰯を驅りて至り
長呼狂走促漁翁　　長呼　狂走して　漁翁を促すと

波太には治承四年（1180）、石橋山の戦いに敗れた源頼朝が安房に逃れた際、平野仁右衛門に助けられ、この島で平家軍から一時身を隠したといわれる仁右衛門島があり、星巌夫妻も訪れてここで詠んだ詩を残している。波太を後にした采蘋は、磯村の某氏を訪ね、前村で木村周斎、東條村（現鴨川市）で高階氏や亀田元、字は徒叔、号を皎斎という人に会っている。

送別澤柳王斎　　澤柳王斎に送別す
共是天涯両斷蓬　　共に是れ　天涯　両断の蓬

與君三処得相同　　君と三処　相同を得る
他時西海帰寧路　　他時　西海　帰寧の路
未識何邊名刺通　　未だ識らず　何邊に名刺通ずるかを

澤柳王斎は俗称を友之助といい、加賀の人とある。以前にも会ったことがあり、ここで会い別れて、又いずこで再会できるのだろうかと詠じている。

暮春即興次韻
冥冥花雨已連朝　　冥冥として　花雨　已に連朝なり
海氣含氛猶未消　　海氣は　氛を含みて　猶ほ未だ消えず
若使天公解人意　　若し天公　人意を解せば
一句光景日和調　　一句の光景　日と和し調ふ

春の終わりの東條村か内浦あたりで詠んだものであろう。長雨に阻まれ、晴れる日を待ち望む気持ちが詠われている。

将遊赤城沮雨　三首　　将に赤城に遊ばんとするに雨に沮まる　三首
一路風烟不厭賒　　一路の風烟　賒を厭はず
卜晴将酔赤城霞　　晴を卜ひて　将に赤城の霞に酔はんとす
豈圖箕畢為讎敵　　豈に圖らんや　箕畢みて　讎敵となるを
明日恐非今日花　　明日は　今日の花ならぬを恐る

又
風暄百卉一齋開　　風暄かにして　百草　一斎に開く
好是凞々春上臺　　好し是　凞々として　春上の臺
其奈花時神女妬　　其れ奈んせん　花時　神女の妬むを
翻雲覆雨故遲回　　翻雲　雨を覆ひ　故に回るに遅し

又
雨濃恰似主人情　　雨濃く　恰も　主人の情に似る
留著遊蹄不使行　　遊蹄を留めて　行かしめず
閒客無心爭日月　　閒客は　心無く　日月と爭ひ
為花惆悵問前程　　花の為　惆悵し　前程を問ふ

〇惆悵：慌ただしいさま。

東條村の後は内浦（現鴨川市内浦）で渡邊喜内を訪問している。赤城もこのあたりの地名か。主人の引きとめる気持ちにもかかわらず、旅程を急ぐ心情を詠んでいる。

雨中市坂書懐

東道花無主　　東道　花主無くして
詩盟到此寒　　詩盟　此に到りて寒し
羊腸度泥濘　　羊腸　泥濘に度り
魚貫下雲端　　魚貫　雲端に下る
不辨人情険　　人情の険を辨ぜずば
安知行路難　　安んぞ　行路の難きを知らん
前途尋韻士　　前途　韻士を尋ねて
来訪及春闌　　来訪　春闌なるに及ぶ

市坂は小湊（現鴨川市内浦）から植野に至る山路である。小湊には日蓮聖人生誕の地誕生寺があり、星巌の詩にも「小湊」「市坂」などの詩が見える[308]。

新晴植野採蕨　二首

一丘一壑弄春妍　　一丘　一壑　春妍を弄ぶ
何事東皇慳霽天　　何事か　東皇　霽天を慳しむ
微物猶嗔風雨暴　　微物　猶ほ　風雨の暴を嗔る
満山柔蕨奮空拳　　満山の柔蕨　空に拳を奮ふ

〇東皇：春をつかさどる神。

又

惟暮之春雨後天　　惟だ暮るる春　雨後の天
焼痕吹緑蕨抽拳　　焼痕　緑を吹きて　蕨は拳を抽く
山蹊一日披茅塞　　山蹊　一日　茅塞を披き
手摘柔荑到絶巓　　手づから摘む　柔荑　絶巓に到る

〇柔荑：女性の白く細い手のたとえ。

上総に入り、植野村（上野・現勝浦市）では市川左仲、名を宜仲、字を篤徳、号を梧桐という人を訪れた。ここで蕨取りに興じた時に詠んだ秀歌である。

[308] 鶴岡節雄前掲書、188-189 頁。

湧金楼席上贈翠斎　　湧金楼席上翠斎に贈る
君家泉石好池臺　　君が家　泉石　池臺を好む
幾日使人不憶回　　幾日　人をして憶ひ回さしめ
洞裏水流園裏落　　洞裏　水流れて　園裏に落ち
月中花在鏡中開　　月中　花在りて　鏡中に開く
半生旅食從吾好　　半生　旅食　吾の好みに従ひ
七歩高吟憐子才　　七歩　高吟　子才を憐む
萍跡東西無定止　　萍跡　東西　定め止まる無く
相逢親処賦帰来　　相逢　親処　帰来に賦す

翠斎はだれか不明であるが、翠斎の家である湧金楼に招待されて詠んだものであろう。植野村あたりと推測される。

春日雑詠　四首
荏苒春將暮　　荏苒　春将に暮れんとす
羈遊人易傷　　羈遊　人は傷つき易し
花落無空知　　花は落ち　空しく知る無し
鳥啼欲夕陽　　鳥は啼き　夕陽ならんと欲す

又
積雨烟渓漲　　積雨　烟渓漲り
陂塘芳草芬　　陂塘　芳草芬る
春深人布野　　春深く　人は野に布く
日暖鳥呼雲　　日暖く　鳥は雲を呼ぶ

又
春曙山如笑　　春曙　山は　笑ふが如く
窓暄人惹眠　　窓暄　人は　眠りを惹く
園庭半宵雨　　園庭　半宵の雨
楊柳萬條烟　　楊柳　萬條の烟

又
春色隨流水　　春色　流水に隨ひ
滔滔欲作空　　滔滔として　空らに作らんと欲す
林庭夜來雨　　林庭　夜来の雨
無地避残香　　地は残香を避くる無し

植野村から興津に出た采蘋は相寿院に泊まったと思われる。雨に阻まれて逗留した時に詠んだと思われる四首の詩には、春の農村の風景が見事に描写されている。かつて菅茶山は神辺の農村の風景を描写した詩で有名であったが、その菅茶山を尊敬していた采蘋も、房総の農村の風景を見事に描写した秀歌を多く残していることはあまり知られていない。

同相壽院方丈及豊水詩盟　遊東光寺月下看　分東坡句得清字（相壽院方丈及び豊水詩盟と同に、東光寺に遊び月下を看る。東坡の句を分ちて得清字を得る。）

紅雲屯処梵王城　　紅雲　屯す処　梵王の城
卜夜優遊尤有情　　卜夜　優遊　尤も情有り
月譲春風転西院　　月譲　春風　西院に転じて
落花満地履痕清　　落花の満地　履痕清し

勝浦沮雨　　勝浦にて雨に沮まれる

山環村落海環山　　山は村落を環り　海は山を環る
菜畦麥壟翠微間　　菜畦　麥壟　翠微の間
人候潮聲卜陰霽　　人は潮聲に候して　陰霽を卜ふ
共言明日雨潜潜　　共に言ふ　明日は　雨　潜潜たりと

〇翠微：もやのたちこめた青々とした山

勝浦では里正の熊切弥左衛門に宿り、雨に阻まれ逗留したものと思われる。「勝浦沮雨」は勝浦の情景をよく詠いこんでいる。翌日は晴れて、勝浦を出て、岩切で武岡泰充、字は通孝という人に会い、六軒町（現夷隅郡御宿）では鶴澤勇吉を訪ね、久保村（現夷隅郡）で岩瀬五朗左衛門を訪ねている。

春盡前一日訪山田村里正鈴木謙齋次韻　二首

要向山村問詩客　　山村に向はんことを要めて　詩客を問ふ
雨餘泥滑路悠悠　　雨餘　泥滑　路　悠悠たり
秧針黄緑纔抽寸　　秧針は黄緑にして　纔に寸を抽く
節物遽然隣麥秋　　節物　遽然として　麥秋に隣る

〇節物：その季節に特有の食べ物・風景・品物など。〇遽然：突然・にわかに。

又

樂地相逢楽更新　　楽地　相逢ひ　楽しみ更に新なり

天将奇福付斯身　　天　将に奇福として斯の身に付さんとす
訪君郭索泥中路　　君を訪ねて　郭索す　泥中の路
韶景猶餘一日春　　韶景　猶ほ一日の春を餘す

〇韶景：春の美しい景色。

久保村から山田村（現勝浦市）に出て、里正鈴木謙齋を訪う。謙齋は名を図書と言い、天然楼とも号した。暦の上では春の終わる前日、泥中の路をたどって謙齋を訪ねた。また山田村では鈴木慎兵衛という人にも会っている。

春盡　二首
積雨纔晴春又回　　積雨　纔に晴れて　春は又回る
人生八九恨難栽　　人生　八九　恨み　栽ち難し
因風柳絮輕輕起　　風に因りて　柳絮　軽軽として起る
拂露藤花裊裊開　　露を拂ひて　藤花　裊裊として開く
幸有新知論風雅　　幸ひ　新知有りて　風雅を論ず
狂吟長句資嘲咍　　狂ひて長句を吟じて嘲咍と資す
群芳正是清和節　　群芳　正に是れ　清和の節
只恐啼鵑向客催　　只恐る　啼鵑　客に向ひて催すを

又、
頑雲漸退雨初停　　頑雲　漸く退きて　雨初めて停む
幾點溪山入眼青　　幾つ點ぜん　溪山　眼青に入るを
知是井田甘霤足　　知る是れ　井田　甘霤足る
蛙鳴四面静中聽　　蛙鳴　四面　静中に聴く

上記の「春盡」二首は春の終わりの季節を詠んだ秀歌である。柳絮が飛び、藤花が花開く季節を満喫し、喜びにあふれている采蘋の姿がある。山田村から苅谷村（現夷隅郡）の糀谷鈴木伝右衛門を訪ね、次に今関村（現夷隅郡）の田丸健龍を訪う。次に臼井村（現夷隅郡岬町）の南部藩士堀江東民を訪ね、長者町では吉田崇軒に会っている。

戯次韻
未学茫茫昏古原　　未だ学ばず　茫茫として昏き古原を
不須矯飾過王門　　須ひず　矯飾　王門を過ぐるを
唯迷酒海文場際　　唯だ迷ふ　酒海文場の際
逢著孔家常滿樽　　逢著す　孔家の常満の樽

〇逢著：ふと出くわす。（張籍・詩・逢賈島）

長者町から一ノ宮に行く途中、網田（現長生郡一ノ宮町）の里正高原五朗右衛門を訪ねた。このあたりで詠んだものか、誰かの詩に戯れに次韻した詩である。また網田では八百屋長四郎という人にも会っている。

和田朴齋　二首

偶然相對恰南薫　　偶然相対す　恰も南薫
何料虚名達久聞　　何ぞ料らん　虚名　達して久しく聞くを
一曲使人能解慍　　一曲　人をして能く慍を解かしめむ
主盟従此好推君　　主盟　此れ従り　好んで君を推す

〇一曲之人：（荘・天下）考え方が一部分にかたよっていて物事の全体を見通すことが出来ない人。

又

自出江都已隔年　　自ら江都を出て　已に隔年
賞音忽見假良縁　　賞音　忽として見る　假の良縁
幽閑半日君不惜　　幽閑　半日　君　惜まず
猶是清和景物研　　猶ほ是れ清和にして　景物研ぐ

和田朴齋もこのあたりの人であろう。

贈鈴木氐　　鈴木氐に贈る
小時難再得　　小時　再び得難し
日月無停光　　日月　光停ること無く
憶昨來遊日　　憶ふ　昨　来遊の日
寓君迎青陽　　君に寓して青陽を迎ふ
一別不相見　　一別　相見えず
廿年亦已長　　廿年　亦　已に長し
唯記別時顔　　唯だ記す　別時の顔
寧知鬢邊霜　　寧んぞ知らん　鬢邊の霜
恍如墜烟霧　　恍として烟霧の墜つるが如し
往事洋茫茫　　往事　洋として　茫茫
獨喜損應篪　　独り喜ぶ　篪に應じ損するを
和樂有餘慶　　和楽　餘慶有り

階庭生蘭玉　　階庭　蘭玉を生ず
振振自異常　　振振として　自ら常と異る
珍重須培養　　珍重して　須く培養すべし
願流千里芳　　千里の芳　流るるを願ふ

再び山田村の鈴木謙齋を訪ねたか、あるいは逗留していたものか。日記中の詩は必ずしも旅の道程通りではなく、メモをもとに後で記入した可能性が考えられる。鈴木家を去る時に詠んだ詩である。「憶昨来遊日　寓君迎青陽」と、十九年前にもここを訪れたことがわかる。

一之宮題旅店壁上　　一之宮旅店壁上に題す
過客不須速　　過客は　速きを須ひず
来遊爲問奇　　来遊は　奇を問はんが為なり
總山迎且送　　総山は　迎へ　且つ送る
有似舊相知　　舊相知るに似たる有り

鈴木家を辞し、上総一ノ宮に出て、そこの旅店壁上に「過客不須速　来遊為問奇」と書き、後から来る旅人にメッセージを残している。

沮雨
海郷卜晴雨　　海郷　晴雨を卜ふ
一是聽濤聲　　一つに是れ　濤声を聴く
今夜濤聲轉　　今夜　濤声　轉ずれば
明朝定快晴　　明朝　定めて快晴ならん

一ノ宮の旅宿で雨に阻まれた。波の音を聞いて晴雨を占う。「今夜濤声転　明朝定快晴」と明日は晴れることを期待する。

訪人不遇題壁上　　人を訪ぬれども遇はず壁上に題す
家在西天天盡處　　家は西天の　天盡くる処に在り
身來東海海窮頭　　身は東海の　海窮の頭に来る
心情不管知音少　　心情　知音の少きを管せず
聊記遠人汗漫遊　　聊か記す　遠人　汗漫の遊

〇管せず：気にかける。気に留める。〇汗漫：広々として限りのないさま。

遠く西国の地からはるばる訪ねてきたが、知人は留守で会うことが出来なかった。仕方なく壁に一首を書き残して、いささか旅人の郷愁を滲ませている。

呼酒
酒唯人一口　　酒は　唯だ　人一口
戸銭不須多　　戸銭　多くを須ひず
詩思有時渇　　詩思　時に渇くこと有らば
呼盃醉裏哦　　盃を呼びて　酔裏に哦ふ

旅の途中、酒を題材にした詩。「詩思有時渇　呼杯酔裏哦」どこかの旅宿で雨に阻まれ、お酒を飲みながら作吟しているのだろう。

客舎沮雨　　客舎雨を沮む
蕭蕭客窓雨　　蕭蕭たる　客窓の雨
耿耿枕邊燈　　耿耿たる　枕邊の燈
難結還郷夢　　結び難し　還郷の夢
欲眠氣愈澄　　眠らんと欲すれども　気　愈いよ澄む

旅宿で雨に阻まれ、故郷に帰った夢を見たいと思うのに、眠ろうとしても気が益々冴えて眠れない心情を詠んでいる。

夢中還郷　　夢中郷に還る
結成故郷夢　　故郷の夢　結成すれども
夢斷忽遺忘　　夢断ちて　忽ち遺忘す
唯記孀親話　　唯だ記す　孀親の話
離愁絮絮長　　離愁絮絮として長し

故郷に帰った夢を見た。年老いた親が病気と聞き、旅の費用を捻出するためもあって、この旅に出たと思われる。親を想う気持ちは忘れたことがないとたびたび詩にも詠じている。

思郷
五十親猶健　　五十の親　猶ほ健かにして
餘慶抵萬金　　餘慶　萬金に抵たる
豈云千里遠　　豈に千里遠しと云はんや
浩浩有歸心　　浩浩たる帰心有り

旅も終りに近づき、望郷の念は押えがたく「五十親猶健」「浩浩有帰心」という句にその気持ちが詠みこまれている。

即興

雨後田間路　　雨後　田間の路
泥深移屐難　　泥深く　屐移し難し

一ノ宮から四天木に行く途中、一ッ松（現長生郡長生村）で、里正の森権右衛門宅に泊まったと思われる。「即興」と題したこの詩は五言絶句の書きかけで、途中でやめてしまっている。このあたりでの作か。雨後のあぜ道の様子を書きかけている。

五清堂席上

緑樹森森晝亦凉　　緑樹　森森として　晝亦凉し
煎茶一椀有餘香　　煎茶　一椀　餘香有り
名聲已熟新如舊　　名聲　已に熟して新は舊の如し
晤語何論短與長　　晤語　何をか論ず　短と長と
空翠滴階天欲雨　　空翠　階に滴りて　天は雨ふらんと欲し
明窓把酒客忘郷　　明窓　酒を把つて　客は郷を忘る
若非君輩憐孤独　　若し君輩の孤独なるを憐むに非れば
爭得清酣解結腸　　爭でか清酣結腸を解くを得んや

四天木（山武郡大網白里町）の斉藤四郎右衛門を訪ねる。四郎右衛門は字を公和、拳石と号し、又の名を五清堂といった。自宅は大洋庵と呼ばれ、土豪でこのあたりの大網元であった。星巌もここに宿泊している。四天木ではもう一人、斉藤成憲字は伯章、滄海と号す人にも会った。「緑樹森森晝亦凉」と詩に見えるように、季節は既に夏となっていた。五清堂に別れを告げ、上総を北上し江戸に帰ったと思われる。
『東遊漫草』にはこの詩の後にさらに三首の詩を書き連ねているが、人名録は四天木が最終地となっている。

2-4 人名録について

『東遊漫草』の稿の最後には、この旅で出会った人々の名が地名ごとに記録されている。これらの人々は詩に現れない人々も多く含まれている。この人名録によって采蘋の旅程をかなり明確に辿ることが出来ることと、また幕末の房総の知識者・有力者の人名を知ることが出来る。采蘋が宿泊した場所は裕福な名主階級や医者の家、または寺院などであった。また幕末の房総には房総沿岸防備のために各藩の陣屋が設けられ、南房総だけでも十か所近くの台場が設けられており、異国船を見張る役目であった。弘化四年、采蘋が房総を遊

歴した頃は会津藩と忍藩が房総の警備を担っていた。人名録の中に各藩士の名前が見えるのは采蘋がこれらの人々とも交流していたことを示している。以下にそのリストを示す。

地名	名前	字	号	職業・身分など
木更津	遠山元水	貞伯		浅川門人
	近藤兼吉			岡部藩士・浅川門人
	生澤良仙			医者
富津	織本嘉右衛門			
	糟谷直輔			
	磯崎永助			
	小松貞吉			江戸人
	稲次作左衛門			薬屋
天神山湊	井上宗旦（宗瑞）			医者
百首	乃木文迪			医者
元名村	岩崎泰輔	冝民	樫斎	
保田	川崎温平			善兵衛
勝山				旅宿
市部	小澤政右衛門			里正
平久里	加藤済	世美	霞石	蓑丘招隠
谷向	鈴木齢助	彦之	松塘	邦（名）
館山				宗真寺
長須賀	池田金七		琴嶺	池田屋 里正
園村	景山与左衛門		含翠	京（名）里正
片岡村	小柴新右衛門			
寶貝村	本橋次右衛門		文溟	璞(名)
安東村	相川十左衛門		義長	
	宮澤胖	廣甫	竹堂	丹波藩士
	西村幸内		晴坡	忍藩士
	水谷豊作		翼斎	忍藩士
二子村	谷崎元益	廉夫	栗園	医者
鶴ヶ谷	塩野専蔵		苔園	忍藩士
洲崎村	渡邊仁右衛門			里正
	池田玄章	士揺	関谷林	貞（名）
	養老寺			眞識
伊戸村	黒川隆圭			

	吉祥院			海龍(名)
	圓光寺			通仙(名)
	黒川友次朗	孝政		
坂田村	西方寺			仙峯（名）
	海老原市郎左衛門			里正
川名村	飯田三郎兵衛	正賢		
	飯田新兵衛			
波左間		新兵衛		糸我屋
布良村	豊崎藤右衛門	延治		
	小谷吉右衛門	伊親		神田屋[309]
犬石村	嶋田理兵衛			
根本	森周蔵			
	海潮寺		尾浦山	恭龍
川下村	早川古右衛門		松鱗	
原田村	行方早人[310]			福本屋
青木村	鈴木才助		東海	館山人（医）
原村	佐野元治	有道	観濤	亀屋
	吉田茁齋	之義		
神余村	金丸六右衛門			
	和貝大作		善長	
嶋崎村	行方兵左衛門[311]			里正
下澤	佐野真亮			
白子	佐野弥助			佐野屋
南三原	佐々圭悦			
和田村	保田綉斎	子権		衡(名)
	庄司五朗左衛門			
	嶋村弥助			嶋村屋
	八代市兵衛			菜種屋
	泉林兵衛			泉屋
	白川又八			白川屋
天面	裕九郎			里正

[309] 神田屋は神田氏で小谷家とは別家。
[310] 原田村行方家は代々三左衛門と呼ばれている。
[311] 島崎村行方家は屋号を川端、また藤右衛門とも呼ばれている。行方兵左衛門の妹が鈴木東海の母である。

波太	安部玄節	淳徳	蓬州	杏林斎
磯村	佐野逸民			
前村	木村周斎			
東條	高階	子	三友	
	亀田元	健叔	皎斎	
内浦	渡邊喜内			
植野村	市川左仲	篤徳	梧桐	宜仲（名）
	市川左仲	仲義	龍山	義生（名）
	紫水鼎	梅餽		
興津	相寿院		假稽	
	東光寺			天嶺
勝浦	熊切弥左衛門			里正
岩切	武岡泰充	通孝		
六軒町	鶴澤勇吉			
久保村	岩瀬五朗左衛門			
山田村	鈴木図書	子憲	謙齋	天然楼
	鈴木慎兵衛			
苅谷	鈴木伝右衛門			糀屋
今関村	田丸健良			医者
臼井	堀江東民			南部藩士
長者町	吉田崇軒			
網田	高原五郎衛門			里正
	長四郎			八百屋
一ッ松	森権右衛門			里正
四天木	斉藤四郎右衛門	公和	拳石	五清堂・大洋庵
	斉藤成憲	伯章	滄海	

2-5 旅程図

人名録及び詩稿を本に采蘋の訪問先を地図上に示した。

旅程図：筆者作製

三節　房総における采蘋の足跡

采蘋は弘化四年（1847）から五年の夏にかけての約一年近くの房総遊歴中、精力的に人々に会い、また多くの詩の応酬・贈答をくり返し、百首近い詩を残した。このことは、采蘋の詩人としての業績を物語るだけでなく、彼女の人間性をも色濃く現している。

この旅のコースは天保十二年（1841）の梁川星巌の房総遊歴とは逆のコースを辿ってい

るが、訪問先はほぼ重なっている。しかし、星巌が訪ねなかった多くの人々が采蘋の人名録には見られる。このことは、二回の房総旅行によって采蘋の独自の人脈を開拓したことと、房総における采蘋の名声が広まっていたことを物語っている。実際に江戸では天保八年（1837）に刊行された『現存雷名　江戸文人寿命附』に見られるように女性詩人の中で最高の得点を得ている。しかしその評価は采蘋の詩中では「何料虚名達久聞」「笑我厚顔噉名客」という謙遜とも自嘲ともとれる詩句となって表されている。ともかく江戸における采蘋の名声は江戸と房総を往来する文人たちによって房総にもたらされた。幕末の房総には梁川星巌の門人の鈴木松塘や安積艮斎の門人の鈴木東海、太田錦城に学んだ平井世雄などが帰郷し、名主として或は医者として開業の傍ら、漢学塾を開いていた。江戸から近く風光明媚な房総には山本北山の門人や梁川星巌の門人が次々と訪れている。大沼枕山も二十歳のころより毎年訪れている。このような子弟の交流は、滞在先の家族の文化意識を高めるだけでなく、地域の子弟の文化水準をも高めるのに一役を担った。寒村に暮らす知識人は江戸からやって来る文人を競って招待し、詩酒を交わすことを楽しみとしていたのである。采蘋の詩には連日の招待に疲れたと本音を漏らしている場面が見える。また気が乗らない招待も断れない辛さを詩に表現している。勿論、苦情ばかりではなく地元の知識者との交流を楽しむ詩も多く見られる。

采蘋の房総での足跡を見れば、例えば、鱸松塘の娘采蘭はその名を采蘋と紅蘭からとり、漢詩人として成長し、後に父を助けて「七曲吟社」で多くの女弟子を教えるに至った。二回にわたる采蘋の房総の旅は、采蘋の詩嚢を肥やすだけでなく、房総地方の青年たちにとっても「采蘋先生」の残した足跡は大きかったと言える。

以上見て来たように、『東遊漫草』によって、幕末の房総半島には遊歴の漢詩人を受け入れる裕福な知識人層の存在があったことをあらためて知ることが出来る。

第Ⅶ章　帰郷

文政十年（1827）、単身故郷を出発してから二十年間を異郷で暮らした采蘋は、嘉永元年（1848）、母に孝養を尽くすため秋月に帰郷した。この度の帰郷の目的は母への孝養を尽くすことであり、それを終えた後、またすぐにでも江戸に戻る心ずもりでいたようであるが、采蘋の当初考えていた期間より大幅に長期に及び、十年間の滞在となった。采蘋が母に孝養を尽くし終えて、再び江戸に出発する時にはすでに六十二歳になっていた。その間采蘋は母に孝養を尽くすだけでなく、父や兄弟の墓碑を原家に相応しいものに建て替え、父兄への孝も尽くしたのである。このため九州各地の遊歴に出かけ、十分な資金を得たものと思われる。遊歴の記録は『西遊日歴』『漫遊日歴』として残されている。特に『西遊日歴』は三百首の詩からなる詩集であり、采蘋の最晩年の、詩人としての業績の集大成ともいえる著作である。本章では山家での采蘋の晩年の暮らしぶりと『西遊日歴』『漫遊日歴』等を中心に、二年以上に亘る肥薩遊歴の足跡を辿り、十年間に及んだ郷里での采蘋の晩年の姿を浮き彫りにしたい。また江戸を目指して再び出郷し、萩で六十二歳の生涯を閉じた終焉

の状況も検討して行きたい。

一節　帰郷後の采蘋

嘉永元年（1848）の冬に帰郷した采蘋のために、翌二年の春、秋月の士子達は「楽只亭」において歓迎の雅会を開いてくれた。「楽只亭」は古処がたびたび詩会を開いた場所で、采蘋にとっても懐かしい場所である。江戸で二十年間活躍したことで、その評判は秋月にも届いていたはずである。席上戸原春坪[312]は一詩を贈って歓迎の言葉とした。その結句に云う。「賢媛名士曽評品、借問当時得幾人（賢媛名士　曽て評品、借問す　当時　幾人をか得ると）」采蘋答えて曰く、

豈不思歸有老親　　豈に帰るを思はざらんや　老親有り
□□莫若故山春　　□□故山の春にしくはなし
東都文物皆纖功　　東都の文物　皆　纖功
碧悔擊鯨無一人　　碧悔　鯨を撃ちて一人として無し[313]

郷里の友を前にして、采蘋は東都の文物は繊細過ぎて物足りなかったと帰郷後の感想を漏らしている。この年の秋、采蘋は兄と弟の霊を弔うために戸原卯橘と手塚律三郎を伴って豊前を訪れた。戸原家と手塚家は原家にとっては親せき筋に当たる。この紀行については戸原卯橘の『北豊紀行』の原本が戸原家に現存するという[314]。この日記によれば七月二十日、采蘋はまず母の養家と同族の佐谷昌才を訪ねている。二十一日には長源寺、二十二日は猪膝駅の中嶋謙山、香春駅の平石湯山と、二十年前に東遊した時に滞在した人々を再訪する形となっている。二十三日、漸く村上佛山の家にたどり着き、二泊した。初め秋月の原家の塾で学び、後に豊前の白圭の塾で学んだ村上佛山は、水哉園という塾を経営し、すでにこの地において名声を得ていた。明治の政治家として名を馳せた末松謙澄は村上佛山の塾に学んだ人である。采蘋の村上佛山に贈った詩がある。

贈村上佛山子　　村上佛山子に贈る
久客遠歸自武蔵　　久しく客となりて　遠く武蔵より帰れば
故郷一變似他郷　　故郷　一変して他郷に似る
却來隣國尋相識　　却つて隣国に来り　相識を尋ね
説至弟兄空斷腸　　説き至りて　弟兄　空しく断腸す
幸有斯文伝後死　　幸ひ斯文有り　伝はりて後死す
喜看家學及遐方　　喜び看る　家学の遐方に及ぶを

---

312 秋月藩医。戸原卯橘の長兄。
313 杜甫の詩
314 近藤典二「旅に生き旅に死す」『近世に生きる女たち』海鳥社、1995 年 5 月。

名聲千古無消盡　　名声は　千古消え盡くすこと無からん
夭寿人間何足傷　　夭寿は人間　何んぞ傷むに足らん

二十年ぶりに帰った故郷はかつての面影もなく、弟兄が最後に塾を開いていた豊前にやってきた采蘋は、話が弟兄の事に及ぶと悲しみに浸ったが、幸い白圭の弟子であった佛山がこの地で立派に原家の家学を広めていることを知り、安堵している。続いて二十五日には今井村の片山出雲守宅に泊まり、二十六日は村正の村山幾太郎宅に二泊している。二十八日に到って稗田村の村正をしている佛山の兄彦助の家に二泊した後、三十日から帰路につき、また香春駅の平石湯山に二泊し、八月二日に猪膝駅の中嶋謙山に二泊、四日には小野谷の桑野寿伯宅に四泊し、八日に秋月に戻っている[315]。小野谷の桑野寿伯宅は、文政八年、采蘋の東遊に同行し、消息が分からなくなって大騒ぎを起こした桑野琳次郎の家で、琳次郎は兄の寿伯とともに甘木の原古処の塾に入門し、神童と目された少年であった。采蘋が江戸にあった頃、医学を学んだが三年後の天保八年、二十七歳の若さで病没した。小野谷での四日間の滞在は琳次郎を弔うためであった。

豊前への小旅行を終えて秋月に戻った采蘋は、原家の養嗣子となった坂口玄禎に養われていた母を引き取り、下座郡屋永村（福岡県朝倉市屋永）の専照寺の一室を借りて母子水入らずで住み始めた。この頃、帰郷の挨拶がてら徳堂村に住む倉富篤堂[316]を訪ねている。その雅会の席上で二首を詠んでいる。

答篤堂雅兄　　篤堂雅兄に答ふ
自笑老衰心已蓬　　自ら笑ふ　老衰　心は已に蓬んなり
精神索莫失家風　　精神　索莫として家風を失ふ
惠詩人是湘中客　　詩を惠む人は　是れ　湘中の客
處生身從塞上翁　　處生　身は塞上の翁に従ふ
鴻雁天高蘆荻冷　　鴻雁　天は高く蘆荻冷たし
田園秋深稻粱豊　　田園　秋は深く稲粱豊かなり
童蒙望我應如鶴　　童蒙　我に望んで　鶴の如く應ず
狐負霜楓二月紅　　狐負す　霜楓　二月の紅

〇湘中の客；湖南省の客となるの意から旅人をいう。〇塞上の翁；「人間万事塞翁馬」の故事から、運は天に任せるという意。

この詩には老境に入ってまさに悟りの境地にある采蘋の心境が窺われる。異郷にあった時のさびしげな郷愁はなく、故郷に帰って母とともに暮らす安心感のようなものを感じさせる。

[315] 近藤典二前掲論文
[316] 外交官倉富勇三郎氏の父。広瀬淡窓門人。

神無月

初冬正佳會　　初冬　正に佳會

六十六州神　　六十六州の神

聞説赤繩政　　聞説らく　赤縄の政

何由缺一人　　何に由つてか一人を缺く

この詩は神無月、つまり神様が出雲に集まり、不在である月。采蘋は、出雲は縁結びの神様と聞くが何故私だけ仲間外れにされたのであろうとおどけている。采蘋の「おうよう」な性格は健在である。

母と暮らす幸せを得たものの、生活の糧を得るため、翌年の嘉永三年七月、九州の要道である山家宿に転居した。采蘋はここで私塾「宜宜堂」を開塾した。采蘋の山家での塾の様子は近藤典二氏の「近世末期の手習塾」[317]、並びに『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』に詳述されている。ここではその論稿を参考にしながら采蘋の塾の実態を再現することで、帰郷後の采蘋の生活状況を明らかにしたいと考える。

1-1 幕末の山家の状況

江戸時代末期の山家駅は交通の要所であり、薩摩、肥後、筑後などの大名が参勤交代の途次宿泊する場所であり、また長崎奉行所に勤務する幕臣たちが行き来する際にも宿泊する場所となっていた。このため薩摩屋、長崎屋、柳河屋と称する旅館が立ち並び、黒田家の別館お茶屋もあったことからお茶屋奉行の常駐もあったようである。このように一大宿場町を形成していたため寺院・医者・豪商なども集まり住居を構えるようになっていた[318]。采蘋が母を伴って、秋月からさほど遠くないこの地で塾を開いたのは上記の状況を考慮しての事であった。現在は筑紫野市山家駅の近くの住宅地の中に「日本唯一閨秀詩人　原采蘋塾跡」の石碑が建っている。

山家村には文政十二年（1829）から文久三年（1863）まで、もと秋月藩士で浪人となった司馬來助こと岩井太四郎が手習い塾を経営していた。この塾に関しては『筑紫野市史　下巻、近世・近現代』に詳しく書かれている。そのなかの司馬來助塾「門弟名附写」によると入門者の名前、年齢、人数、入門時などが分かり当時の山家村の教育状況が概観できる。采蘋の山家での塾に関する記録は、司馬來助の塾に入門していた子弟の父親で薬種商を営む松尾屋の満生武四郎が記録していた大福帳から判明できる。満生武四郎の子供四人が司馬來助塾で学んでおり、それぞれの子どもの謝礼が記録されている。

大福帳に采蘋の塾の記録が見え始めるのは安政二年（1855）七月七日からで「五〇文、

[317] 近藤典二「近世末期の手習塾」『福岡地方史研究会会報　第 24 号』福岡地方史研究会、1985 年 4 月。

[318] 春山前掲書

学文先生え肴大、福太郎」とあり、さらに十二月十五日には「三六〇文、学文所、福太郎出し前」と見え、十二月のお歳暮は「壱貫弐百文・酒壱升　采蘋」と書かれている。福太郎が司馬塾のほかに学文所に通い始めたことを示している。司馬來助塾への謝礼は「師匠様御礼」となっていることから采蘋の塾は安政年間に「学文所」と称されており、采蘋は「学文先生」と呼ばれていたことが分かる。

采蘋が山家村に居を移した時期についても松尾屋の会計簿である「大福萬控帳」にある嘉永三年の「借家覚」から判明できる。それには、

女先生

一、年中六拾匁割　七月より十二月まで家賃

一、銭三拾目

内弐百五拾文　晦日受取

〆

とあり、采蘋の嘉永三年七月からの借屋契約が見られ、「女先生」と呼ばれていたこともわかる。翌年の「借家覚」にも同じように「女先生」と書かれているが、嘉永五年になると「女先生」から「原先生」になり、嘉永六年以降は「学問所」と変わっている。塾の名称の変化から采蘋の塾の評価が次第に格上げされていった経緯が分かる。

1-2「宜宜堂」の開塾

采蘋の山家の塾は、嘉永六年以降は「学問所」と呼ばれていたことが「大福萬控帳」によって分かったが、采蘋自身は「宜宜堂」と名付けていたようである。このことは広瀬淡窓門人で、筑後御井郡日比生村で塾を開いていた久留米藩士の井上直次郎[319]、号知愚斎が、嘉永四年七月に山家駅に宿泊した時に偶然采蘋の塾を知り、再会したことを「知愚斎先生詩集所記」に記していることから知られる。それには次のようにある。

上略　忽思女儒采蘋。今寓山家。昨夜店主人言之豈可不訪之以傾數杯遺斯懐。既到則窮民家。寥如無人。采蘋界其中央居焉。其厨内不類蓄酒肴者矣。然名譽之女。久居上國者。談話頗美。云。「吾友和田一平　廉叔之名　今在於高良山矣。我將伴之以訪君家。君能飲乎。」曰。「一合耳。」曰。「我則二合。幸有一瓶。請共飲之。」乃飲而盡之。中略　詩成。大覺其拙。擧頭則壁上題曰宜宜堂。因賦一首。曰。

（上略　忽ち女儒采蘋を思ふ。今山家に寓す。昨夜店主人之を言ふ、豈之を訪ひて以て数杯を傾けずば、斯懐を遺る可けんや。既に到れば則ち窮民の家なり。寥として人無きが如し。采蘋其中央に界居す。其厨内酒肴を類蓄せず。然れども名譽の女なり。久

[319] 直次郎は嘉永五年に久留米藩より御有筆格、七人扶持を給せられた。

しく上國に居れば、談話頗る美なり。云ふ、「吾が友和田一平　廉叔之名　今高良山に在り。我将に之を伴ひて君が家を訪はんとす。君は能く飲むや。」曰ふ、「一合のみ。」曰ふ、「我則ち二合なり。幸ひ一瓶有り。請ふ共に之を飲むことを。」乃りて飲みて之を盡す。中略　詩成る。大ひに其の拙なるを覺ゆ。頭を擧ぐれば則ち壁上題して宜宜堂と曰ふ。因りて一首を賦して曰ふ。）

思君昔日着紅裾。文壘相傳娘子軍。何料宜宜今在此。潛龍猶見吐奇雲。[320]

（君を思ふ　昔日　紅裾を着け、文壘相傳ふ娘子軍。何んぞ料らん宜宜として今此に在るを。潛龍猶ほ奇雲を吐くを見るがごとし）

井上直次郎が「思君昔日着紅裾」とその詩に言う昔日とはいつのことであろうか。直次郎が広瀬淡窓の咸宜園に入門したのは文政三年七月のことであるという。采蘋が父に同伴して咸宜園に淡窓を訪問したのは文政三年秋であった。この時の咸宜園での雅会についてはすでに淡窓の日記によって広く知られている事実である。「采蘋時に年二十三、四、幼より書を読み文字を学び詩に長ず、その行事磊々落々男子に異ならず、又よく豪飲す。」淡窓によってこのように描写された采蘋を目の前で見たのが直次郎であったと思われる。赤い裳裾を付けた二十代の采蘋の像は、若い直次郎にとって強烈に残っていたであろう。それが三十年の後に偶然山家で再会することとなる。そして、三十年後の采蘋を結句の「潛龍猶見吐奇雲」によって見事に表現している。宜宜堂を訪ねた直次郎に贈った采蘋の詩がある。

示井上知愚斎	井上知愚斎に示す
曽携几杖客濠田[321]	曽て几杖を携へ　濠田に客す
回首參商三十年	首を回らせば　參商三十年
豈料白頭歸養日	豈料らんや　白頭　歸養の日
重償前債得吟聯	重ねて前債を償ひて吟聯を得たり[322]

直次郎と再会した翌年の夏、采蘋は弟子の和田廉叔を伴って知愚斎を訪ねた。その時の知愚斎が采蘋に与えた詩がある。

後、采蘋與和田廉叔訪知愚斎。是夜月蝕。知愚斎賦詩示采蘋曰。

---

320 山田新一郎『第三巻　采蘋詩鈔』(『原古処・白圭・采蘋詩鈔』)
321 濠田は咸宜園の所在地。
322 山田新一郎『第三巻　采蘋詩鈔』

（後に、采蘋は和田廉叔と知愚斎を訪ふ。是の夜月蝕。知愚斎詩を賦して采蘋に示して曰く。）

月已微兮且勿歌。幽思無限此中過。嫦娥如示讓陽意。知得蘋君感慨多。[323]

（月已に微なり、且く歌ふこと勿れ。幽思限り無く、此の中に過ぐ。嫦娥讓陽の意を示すが如し。知り得たり、蘋君　感慨多し。）

采蘋の山家での住居は春山育次郎氏の調査によると「采蘋の住宅は八畳二間、六畳二間より成り、庭園を隔てて別に長屋あり。一部は土塀を以て繞らされ、庭園の外、菜園あり。庭園にはあんずの大木あり、年々多く実を結べり。」[324]とあるように宜宜堂を開くには十分な広さであったと思われるが、先の「大福萬控帳」によれば家賃の未納分がたまり、年末にはそれが帳消しとなっている記録がある[325]。暮らしぶりは決して豊かではなかったことがこの記録から察せられる。その暮らしぶりを垣間見せてくれる采蘋の詩がある。

謝人贈魚　　人の魚を贈るに謝す
千里省親歸草盧　　千里　省親　草盧に歸る
山中供養只蔬采　　山中の供養は只蔬采のみ
謝君情意深於海　　謝す君が情意　海よりも深きを
忽使寒厨食有魚　　忽ち寒厨に食魚を有らしむ

1-3『戸原卯橘日記』に見る山家時代の采蘋

山家時代の采蘋の動向を知る史料として『戸原卯橘日記』がある[326]。戸原卯橘（1834-1863）は、継明、字は公實、卯橘は通称である。天保六年（1834）、秋月藩の藩医である戸原一伸の四男に生まれた。采蘋の帰郷当初、豊前にともに旅行した時の卯橘の記録『北豊紀行』についてはすでに紹介したが、『戸原卯橘日記』は山家に住む采蘋との交流を詳述しており、采蘋の山家時代の動向を知る上で貴重な史料である。原本の所在は明らかではないが、おそらく戸原家に所蔵されているものと考えられる。以下日記に従って二人の交流を追ってみたい。

〈嘉永四年〉

正月二十七日　早朝、太宰府天満宮参詣のため秋月を出発し、途中二村で秋月藩士白水

[323] 山田新一郎『第三巻　采蘋詩鈔』
[324] 春山前掲書、166 頁。
[325] 筑紫野市史編さん委員会編『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』筑紫野市、1999 年 3 月、465 頁。
[326] 筑紫野市史編さん委員会編前掲書、466 頁。

田龍・同亥三郎が福岡に行くのに出会い、茶点で談話中、雨が激しく降り出したので山家に引き返し、采蘋居に泊まる。

八月十三日　山家の原女史を訪ねる。酒を携えて観音山に登り大酔、恍惚として下山、緒子と連れだって天山村西方寺に講法を聞きに行き、五更に帰宅。

八月十四日　采蘋女史と三奈木村に行くと約束したが、母の雪の具合があまり良くないし、手伝いの手塚納が秋月に帰っているので中止となり、やむなく秋月に帰る。その夜原女史は門弟の釈義龍をつれて秋月に来た。

十五日　女史と釈義龍と三人で三奈木村の荷原に行き、儒医の熊本幼柔宅に泊まる。熊本幼柔は広瀬淡窓の門人である。

十六日　午後、幼柔の妻および幼柔の門人と酒を携え、一里ほど先の帝釈坂まで登る。

十七日　熊本幼柔を辞し、女子より先に帰る。女史は翌日秋月に帰宅。

十月十六日　山家の原女史の家に泊まり、翌日太宰府天満宮に参詣する。

〈嘉永五年〉

閏二月十六日　山家の原女史の家に泊まる。

十七日　女史と玄遵と三人で太宰府参詣。参拝後、岩踏川の田島徳三郎を訪問。徳三郎は島原藩士で淡窓門人。大宰府で淇水亭という塾を開いていた。

十八日　淇水亭で酒を飲み詩を賦し、徳三郎と延壽王院に行き、さらに画家の斉藤秋圃を訪ねる。大酔して暁に帰る。また女史と酒を酌む。

十九日　終日淇水亭にあり。夕刻亀井少進宅を訪問（亀井少進は南冥の次男雲来の子）。

二十日　正午、亀井少進宅を辞して帰途、阿志岐村の円徳寺に寄り大酔。寺僧に送られて某医生宅に行き、また酒を飲み、柴多川原でまた酒を飲み大酔し、歌を歌いながら夕刻山家に帰り風呂屋で入浴。

二十一日　采蘋女史宅を辞し、帰途滝井竹渓を訪問したが父兄ともに不在。

七月二十五日　太宰府天満宮に参詣。帰途、山家の采蘋女史宅に泊まる。翌日女史宅を辞し、森山村の滝井竹渓宅に泊まる。

八月十一日　采蘋来宅。

十五日　大雨、夜、采蘋と詩を賦す。

十六日　午後晴、秋月藩儒者右田勇蔵宅を訪問。采蘋山家に帰る。

〈嘉永六年〉

正月六日　母に従い山家の原女史を訪問。不在。たまたま門弟の玄遵が来てその寺に案内され飲酒大酔。西福寺に向かう途中で采蘋が酔って帰るのに出会ったので、寺を辞して帰ったが、采蘋女史はすでに眠っていた。

七日　采蘋女史を促して太宰府に行く。采蘋女史は二日酔いと、転んで足を痛めていたので行くことをためらったが、強く促したので午後出発し、田島徳三郎を訪問、酒が出る。夕刻、母・女史・徳三郎・新太郎とうそ替えの神事を見に出る。…店に戻ったところ女史と徳三郎はすでに帰っていたので徳三郎宅に戻ると二人は酒を飲んでいた。夜甚だ寒い。徳三郎は一晩中眠れなかったという。「女史多口、厭ふべし」と卯橘は書く。

八日　諸子、夜の明けぬうちから酒を飲む。母親のお伴で観世音寺に参詣し、徳三郎宅に戻り、三人で酒を飲む。彩霞（斉藤秋圃の弟子）という画家が来る。和田一平が来る。彩霞画伯の家に誘われまた酒。画伯を辞して山家に帰る。午後四時。采蘋女史が頻りに泊まっていけというので泊まる。

九日　午後、采蘋女史を辞す。

十六日　采蘋女史は去る十二日に馬関に行ったという。

八月二十九日　福岡留学中の青木医伯を辞し、弟の五郎と太宰府参詣。山家の采蘋を訪問。午後八時ごろ秋月に帰宅。

十月十七日　暁秋月を発し阿弥陀が峰で夜明。山家の采蘋女史に立寄り談話…。

〈嘉永七年〉

九月二十一日　午前七時秋月出発、山家に到り采蘋女史を訪問、「女史を見ざること已に九月」、濁酒を飲み大酔。「夢蝶小巻」を女史に示す。山家駅の桶職人宗助、親孝行で福岡藩の表彰を受けに庄屋の引率で福岡に行ったことを聞く。さきに采蘋女史が詩を作って宗助の親孝行を賞したことによる。正午、山家駅を出立、酔ってしばしば転びそうになる。…午後五時ごろ田中元立宅に帰着。（卯橘は嘉永六年正月十八日、秋月藩校稽古館を首席で卒業、福岡の青木某に入門、続いて赤坂の田中元立に入門して医学の修業中であった。）

〈安政二年〉

正月十日　弟春軒（五郎）と秋月に歸省の途中、山家の原女史宅に寄ったが不在。秋月に行っているとのこと。

三月八日　弟春軒と福岡の留学先に戻る途中、山家の原女史を訪問、しばらく談話。午後四時、福岡の寓居に着く。

十二月十四日　天満宮に参詣、…正午山家駅に着き原女史を訪ねる。筑後草野の某寺の僧が来談中、一緒に酒を飲む。食事後、午後三時頃辞去。

（「第五章　教育と文化」『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』1999 年 3 月による）

この日記は、采蘋が山家に住み始めてからの八年間に亘る交流を、卯橘の日記の中から抽出したものであるが、卯橘がしばしば太宰府天満宮に参詣していることが分かる。そのたびに途中にある山家の采蘋宅を訪問していることも明らかとなった。戸原家は原古處の実母の最初の嫁ぎ先であり、原家とは近しい関係であったと思われる。藩医であった戸原歴庵が江戸に滞在した時に、采蘋の母が娘を案じて「よきに御さとし下さるべく候」[327]と歴庵に手紙で要請していることからも両家の関係が信頼関係にあったことが分かる。日記の中で興味深いのは嘉永六年正月七日の条に「女史多口、厭ふべし」と卯橘が書いていることである。酒のせいもあると思われるが「女史多口」という記述はおそらくこれまでの采蘋の性格の描写の中では初出と思われる表現である。このような理由から、『戸原卯橘日記』の原本には卯橘が見た采蘋像がさらに詳しく書かれている可能性もあるので、今後の翻刻の出版が待たれる。それにしても采蘋の酒豪ぶりは健在で、転んで足を痛めたりはしているものの、若い卯橘と行動を共にし、同等に酒を飲んで付き合っている。卯橘は春山氏によれば、采蘋の最も傑出した弟子と書かれているが[328]、上記の日記からは宜宜堂に学んだ形跡は見えないが、宜宜堂で学んだ時期は采蘋が帰郷した当初のことであったのかもしれない。卯橘は医者になるために福岡に留学している。また江戸にも留学していることから采蘋に教えを請うたとすれば詩文についてであったと思われる。采蘋が卯橘に宛てた手紙[329]に詩についての教示が見える。卯橘はことあるごとに詩文の添削を采蘋に頼んでいたことが窺われる。卯橘の『北豊紀行』の詩稿部分は采蘋の批点が加えられているとのことである[330]。

日記はこのあと、卯橘が安政三年正月に江戸に出て塩谷宕陰に学び、采蘋が肥薩遊歴に出かけたのが同年四月であったから、卯橘の日記に采蘋の名が登場するのは采蘋が萩で客死した時まで待つことになる。

1-4 宜宜堂の門弟

采蘋の宜宜堂では嘉永三年七月から安政二年頃までの期間に子弟の教育が行われていたと考えられる。宜宜堂に弟子入りした門弟は近隣のお寺の子弟が多かった。春山の調査によれば、まず眞宗西福寺の三兄弟、和田玄遵・大巖・大醒、阿志岐の圓徳寺の兄弟宮崎義龍・道成などがおり、和田玄遵は長年に亘って塾長を務めている。道成も玄遵の後を継いで塾長になっている。このほかにも東中牟田の西福寺の子高田恕一、東小田の教覚寺の子行武法鎧、山家駅の富豪の子山田甚次郎などが入門していた。また代官などの役人の子弟や庄屋、豪商などの子弟、例えば満生武四郎・加畠利右衛門・中野港・近藤恕一郎・濠井養律・中村驥十郎・須藤次内などが学んでいたという。中でも和田玄遵と宮崎義龍は最も

[327] 近藤典二前掲論文、177 頁。
[328] 春山前掲書、166 頁。
[329] 『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』、471～472 頁。
[330] 近藤典二前掲論文、181 頁。

詩文にたけていたと言われる。

采蘋の授業の内容は、『孝経』の素読から始まり、『爾雅』など『小学』の古典、『論語』へと進み、また習字をも教えたようである。授業の様子は、機織りをしながら監督し、怠けた子がいれば機織りの木片で子供を叩きながら教えたという。また塾長の和田玄遵に与えた書状には「…明今両日相休候ては諸生の為不宜候間何卒御繰合御出席可被下候」[331]とあり、采蘋が用事で授業が出来なくなるので塾長の玄遵に代講を頼んでいる。門弟に対する責任の強さは、父古処の姿を見て育った所以であろう。

采蘋の母雪は嘉永五年六月に亡くなり、その後三年間の喪に服した采蘋は宜宜堂を閉じて安政三年四月に肥薩遊歴に出発した。塾を閉じるにあたって采蘋は門弟を豊前の村上仏山に紹介した。村上仏山の塾「水哉園」の「入門姓名録」によれば和田玄遵はすでに安政二年の四月十日に入門している[332]。同じく安政三年正月二十五日には宮崎義龍の弟道成が入門している。春山氏によれば正月二十一日付の采蘋の紹介状があり、「此の小僧両三年鄙人世話致す…（玄遵よりは）才は劣り候へども…西歸以来教授の間も女紅而已送日、看書の暇無之、面目増可惜」[333]などの記述が見えるという。采蘋は宜宜堂を閉じるにあたり信頼できる村上仏山に門弟を紹介することで身辺の整理をしていったと思われる。

二節　肥薩遊歴

采蘋が宜宜堂を閉じて肥薩遊歴に出かける決心をした陰にはある唖僧の言葉があったという。西福寺の下僕文三は采蘋と親しくしていたが、あるとき雲水[334]の僧が西福寺に一週間程滞在した。詩文を解する僧であったので采蘋と筆談によって詩の応酬をした。僧は帰る時に采蘋の相を見て「十五年以内の壽なり。今にして名を揚げざれば終生の恨事たるべし。」と言い残したという。文三の伝として山家の近藤義男氏が春山氏に語った話であるが、「采蘋是より感奮する所あり、蹶起して上木の費を獲むことを期し、斯くて南遊の途に上りたりと云ふ。」[335]と春山氏は書いている。帰郷して以来事あるごとに知人に上木の願いがあることを漏らしていたが、日常の雑事と母の喪などによって先延ばしにしていた状況が窺われる。采蘋が意を決したきっかけが唖僧の言葉であったことも納得のいくことである。

2-1 『西遊日歴』について

『西遊日歴』は安政三年四月二十三日から同五年夏までの采蘋の肥薩遊歴の記録である。記録といっても文章はなくすべて詩で綴られている。肥薩遊歴の記録は他に、房総遊歴の記録『東遊漫草』の末尾に、山家出発の四月二十三日から五月二十三日までの日記が付されている。約一カ月間の日記は、出発当初の様子を伝える貴重な史料である。この日記の

---

[331] 春山前掲書、169 頁。
[332] 『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』、473 頁。
[333] 春山前掲書、167 頁。
[334] 所定めず遍歴修業する僧。
[335] 春山前掲書、174 頁。

他にも天草滞在中、鹿児島・熊本に足を延ばした時に記録した安政四年三月から十二月までの日記『漫遊日歴』[336]がある。これは、詩は含まれない日常の記録のみの日記である。『西遊日歴』が後に詩のみを清書したと思われる詩集であるため、旅の詳細を知る上で、上記の二つの日記は貴重な手助けとなる。

現在『西遊日歴』は、東北大学図書館加納文庫所蔵本があり、また佐谷松窓が安政六年春、つまり采蘋没後の年に筆写した『原采蘋女史西遊日歴抜粋』と、後年他者によって佐谷松窓写本を写した『原采蘋女史西遊日歴抜粋』の二冊が秋月郷土館に所蔵されている。東北大学図書館加納文庫の『西遊日歴』を見る限りでは、写本ではなく原采蘋本人の清書による自筆本ではないかと筆者は考えている。始めは清書されたと思われるきれいな字で書き始められているが、後半に進むに従い字も乱れており、訂正も目立ってくる。采蘋が肥薩遊歴から山家に戻り、原家の墓を相応しいものに立て直した後に、父の詩稿の上木を果たすために故郷を出発するにあたって、古処が清書した詩稿八冊を采蘋は秋月の戸原春平宅に預け、もし不幸にも上木不可能な時は保存を願う意向を示したという[337]。古処が清書した詩稿は采蘋にとっても大切なものであるから旅先には持ち歩かなかったのは采蘋の配慮であろう。

さて　采蘋自信の詩稿についてはどうであろうか。采蘋は萩で流感にかかり、死に臨んだ時、土屋蕭海に父の詩集の上木を請願した。その際、自らの詩稿について尋ねられた時、できれば父の詩集の最後に附録として付けてほしいと頼んでいる。東北大学図書館加納文庫の『西遊日歴』は明らかに何かの目的で清書をしたものであると考えられる。これまでの采蘋の自筆本は旅先で記録したままの『東遊漫草』などが残っているが、詩集として清書したものは断片のみでまとまったものは残っていない。『西遊日歴』は二年以上にわたる長期の記録であり、三百首の詩が盛り込まれている。采蘋にとって最晩年の作品となるこの詩集を上木してもよいと考えたのではないだろうか。佐谷松窓氏が写した原本は東北大学図書館所蔵の『西遊日歴』であるのか、あるいは采蘋の草稿が別にあったものかは定かではない。またこの清書した『西遊日歴』を采蘋が萩に持参したのか、あるいは秋月に残していったのかも定かではない。よってどのような経緯で人手に渡ったのかも不明である。

春山育次郎氏の伝記は佐谷松窓写本をもとに書かれたようである。本稿では東北大学加納文庫所蔵の『西遊日歴』をもとに、二年間に亘る肥薩遊歴の足跡を辿ってみたい。

2-2 日記にみる肥薩遊歴出発の状況

采蘋は二年以上に亘った肥薩遊歴に出発するにあたって約一カ月間の旅の記録を残している。この記録はなぜか房総遊歴の記録『東遊漫草』に附録のように付されているので、ややもすれば見逃してしまう記録である。タイトルもなくいきなり「初夏」と始まり「廿三日發程…」と続いている。肥薩遊歴の日記を『東遊漫草』と一緒に綴じたものか、或は

[336] 秋月郷土館蔵
[337] 春山前掲書、175 頁。

余白に書きこんだものか理由は定かではないが、旅の始まりの記録として興味深く、貴重であるため下記に示すこととする。

初夏

廿三日　發程走行諸生二十餘人中牟田茶店小酌越疆過小店大飲□人四三島迎渡邊道碩告別開行厨祖道已畢各分袂惜別相随者平嶋春航釋玄遵大勇道成曽平夫婦及完蔵宿之皆飲。哺時達于南筑五穀神第一場楼雲舘主人遊太宰府留宿賒一醉。

（發程して走行す、諸生二十餘人、中牟田茶店にて小酌す、疆を越えて小店を過り、大いに飲む。□人四三島、渡邊道碩を迎へ、告別す。厨を開行し、祖道已に畢る。各おの袂を分かちて惜別す。相随ふ者は平嶋春航、釋玄遵、大勇道成、曽平夫婦及完蔵。宿りて皆飲む。哺時南筑に達す。五穀神第一場楼雲舘主人太宰府に遊ぶ。留宿し、賒りて一酔す。）

廿四日　暴風雨　午後送行者皆歸單孑惘然夕景小酌遂臥。

（暴風雨　午後送行者皆歸る。單孑惘然として夕景に小酌し、遂に臥す。）

廿五日　雨　未歇無聊招順光寺同飲入夜。

（雨　未だ歇まず、無聊。順光寺招きて同飲し夜に入る。）

廿六日　晴　哺時遊順光寺同酌入夜遂宿。

（晴　哺時　順光寺に遊び、同酌す、夜に入りて遂に宿る。）

廿七日　晴　廉叔歸自太宰府来於順光寺其歸途邂后西福寺橘窓□酌半日約明日又来歸。

（晴　廉叔太宰府より歸る。順光寺に来りて其帰途西福寺橘窓に邂后す。□酌すこと半日。明日又来るを約して歸る。）

廿八日　晴　遂酌□□至大喜寺□観。　（晴　遂に酌□□至大喜寺□観。）

廿九日　大雨

晦日　自大喜寺至柳□。（大喜寺より柳□に至る。）

五月

朔　晴　無聊殊甚与和田氏遊新宮茶店主人物色□余爲寫

（晴　無聊、殊甚和田氏と新宮茶店に遊ぶ。主人物色□余爲寫）

二日　猶在田尻氏（猶田尻氏に在り）

三日　應接疲倦（應接し疲倦）

四日　晴　移于平野幸右エ門宅（晴　平野幸右エ門宅に移る）

五日　晴

九　是自柳川至榎木□□雲集有病人遂與雲集至舟

（是より　柳川自り榎木□□に至る。雲集病人有り、遂に雲集と舟に至る）

十日　平旦達嶌原湊過和光（平旦　嶌原湊に達し、和光を過る）

十一日　□□　遊君侯別荘處處招飲（□□　君侯別荘に遊び處處招飲す）

十五日　聴歌（歌を聴く）
十六日　遊酒造家信宿（遊酒造家信宿）
十八日　歸和光院（和光院に歸る）
十九日　認書（認書）
廿　日　遊湊医者乞書一宿（湊の医者玄震に遊ぶ、書を乞はれて一宿す）
廿一日　又認書俵屋揆一使諸生迓余小酌宿於本宅
（又書を認む、俵屋揆一、諸生をして余を迓へしむ、小酌し本宅にて宿る）
廿二日　與強平訪柴原龍齋認書（強平と柴原龍齋を訪ふ、書を認む）
廿三日　雨

四月二十三日、二十余人の送行者と共に山家を出発した采蘋一行は、まず中牟田茶店にて小酌し、次に疆を越えて小店にて大いに飲んでいる。平嶋春航、釋玄遵、大勇道成、曽平夫婦及び完蔵はこの日一緒に泊まり、翌日帰った。采蘋は一行と別れていよいよ一人旅が始まり、広瀬淡窓の門人でかつて甘木詩社に学んだ和田廉叔の所にしばらく滞在する。五月に入り柳川に遊び、田尻氏、平野幸右エ門宅に滞在し、五月九日、和田廉叔と雲集に見送られて若津より舟で肥前島原に渡り、和光院に寓居することとなる。采蘋はここでひと夏を送っている。『西遊日歴』は若津港で和田廉叔に別れる時に詠んだ詩から始まっている。次の詩も島原以前の作と思われるが、村夫子とは誰を指すのか不明である。どこかの酒席で贈られた詩に対して答えたものであろう。采蘋はこれまで女子として生まれたことを恨むと詩に書いてきたが、ここにきて「生爲女子非無樂」という心境に達したのであろうか。

若津別廉叔　　若津にて和田廉叔に別る
徒惜解携到海灣　　徒だ惜む　解きて携へ　海灣に到る
相看無語別願酸　　相看て語無く　別願の酸
欲繡斯文豈容易　　斯文を繡はんと欲すは、豈容易ならんや
獨泛扁舟渡碧瀾　　獨り扁舟を泛べて碧瀾を渡る

答村夫子　　村夫子に答ふ
詩海酒場随處酔　　詩海酒場　随處に酔ふ
優遊何必關名利　　優遊何んぞ必ずしも名利に関はらん
生爲女子非無樂　　生れて女子と爲りて　樂しみ無きにあらず
抛却生涯事無事　　生涯を抛却して　無事に事ふ

十日、島原湊に達し、次の詩を詠んでいる。

湊
六十年前是海寰　　六十年前　是　海寰
即今人屋列沙灣　　即ち今の人屋　沙灣に列す
天公曽役愚公力　　天公　曽て　愚公の力に役す
一夜移来無数山　　一夜移り来りて　無数の山

その後和光院に到り、二師及び諸子とともに小蓬莱に遊び次の詩を賦している。

同和光院二師及諸子遊小蓬莱分韻　　和光院二師及諸子と同に小蓬莱に遊び韻を分つ
金鰲背上小蓬莱　　金鰲の背上　小蓬莱
指點雲山傾幾盃　　雲山を指點して　幾盃を傾く
沈醉不知投宿處　　沈醉して　投宿の處を知らず
天風吹夢落瑶臺　　天風夢に吹く　落瑶の臺

島原では和光院に滞在しながら、十一日には肥前島原藩五代藩主の松平忠精の別荘に遊び歌を聞いたり、十六日には酒造家の家に遊び、十八日にはまた和光院に戻っている。十九日は書を認め、二十日は医者の玄震に招かれ、書を乞われたので泊まることになったとある。二十一日は書を認めた後、俵屋揆一が諸生を迎えによこしたので、本宅に一泊する。二十二日は、強平と柴原龍齋を訪い、書を認む。島原では連日のように書を求められている様子が日記から窺われる。その結果ひと夏をここで過ごすこととなったと思われる。この日記は出発から一カ月後の五月二十三日で終わっているので、その後の道程は『西遊日歴』の詩によって辿る他はない。

八月中旬には長崎に遊んでいることが次の詩によって分かる。

偶成用于濆韻　　偶成。于濆の韻を用ふ
歸郷又出郷　　郷に帰り　又郷を出る
浮遊無定住　　浮遊して　定住無し
日月亦不居　　日月　亦居らず
凉生昨夜雨　　凉生ず　昨夜の雨
清風起蘋末　　清風　蘋を起こすの末
秋色入蒲柳　　秋色　蒲柳に入る
且止東南行　　且く東南の行を止め
先指瓊浦去　　先づ瓊浦を指して去く

この後天草島に渡り、下島の志柿に宿泊、安政四年（1857）の正月をここで迎えている。

天草滞在は結局一年間に及ぶが、三月には鹿児島に移動し、約一か月間滞在してまた志柿に戻る。このように天草島の志柿を拠点にして熊本、鹿児島、琉球等南九州を旅行して廻った。この時の日記が『漫遊日歴』として残されている。以下その日記にそって旅程を考察して行きたい。

2-3『漫遊日歴』について

『漫遊日歴』は肥薩遊歴中、天草に滞在している時に鹿児島・熊本方面に足を伸ばした時の日記である。安政四年三月から十二月までの簡単な日常の記録であり、ここには詩は一切含まれていない。この間に詠まれた詩は『西遊日歴』に書かれている。この意味でも『西遊日歴』は詩集としてまとめたとも考えられる。三百首の大作として後に出版を考えていたことも十分考えられる。ここでは『西遊日歴』の詩を理解するうえで参考となり、また最晩年の原采蘋の動向を知ることが出来るので『漫遊日歴』の全部を下記に示すこととする。

安政丁巳季春
漫遊日暦

三月
朔　晴七絶二首
二日　晴泛舟拾海蔬
三日　雨遊庵見花五津
四日　暴風雨
五日　晴登聽濤樓賀落成
六日　遠近里正來飲抱雪樓認數紙七絶三首
七日　晴無夜半雷雨是日邂逅　桂州江都殘草人一齋門人
八日　雨乍晴與桂舟半日話午後宮崎氏招飲
九日　晴次郎八富岡行
十日　晴衆芳亭昆比羅祭禮認書數紙
十一日　晴又衆芳亭見花且飲
十二日　晴賦衆芳亭櫻花詩且書之次郎歸
十三日　晴歩海濱見染嶽櫻花
十四日　晴
十五日　晴遊于江川晡歸于志柿睡于花前起而賦韻
十六日　僧葬招飲
十七日　晴放舟將遊于薩路経諸方至早崎是處海道絶嶮干潮歩遲晡時
十八日　南風舟沮午後雨至

十九日　沮風雨
廿日　　晴雨後風頗烈渡海不可得藥店招飲
廿一日　雨遊于宮崎八幡祠官家広瀬門人田代隼人　前日訪余于寓居
廿二日　雨未止
廿三日　朝細雨午後晴

三月十七日、天草を出発して鹿児島に向かう。二十一日、雨の中、広瀬淡窓門人の宮崎八幡祠官田代隼人を訪ねる。約一カ月間の鹿児島滞在中、鮫島白鶴、宮内維精、柳田来鳳らと交流している。鹿児島城を訪れた時に詠んだ詩がある。

麑城
北是朝鮮西滿州　　北は是れ朝鮮　西は満州
封連三國到琉球　　三国を封じ連なりて　琉球に到る
金甌鐵壁無傷缺　　金甌鐵壁　傷缺無し
虎視耽耽萬古秋　　虎視耽耽として　萬古の秋

このほか、鹿児島では八田知紀が古処の和歌を賞したことに対して感激し、一絶を賦して贈った。これに対して八田知紀は和歌で答えている。

聞八田知紀見賞先人和歌。有感。因賦一絶。却以奉呈
八田知紀先人の和歌を賞むらるる聞く。感有りて因て一絶を賦す。却て以て奉呈す
糊口四方歳月深　　四方に糊口して　歳月深し
千山萬水幾升沈　　千山萬水　幾か升沈
此行有喜君知否　　此行喜び有り　君知るや否や
始爲先巖得賞音　　始めて先厳の爲に賞音を得たり

みちぬしに始て見まゐらせし日、から歌つくりて贈られしかば　　知紀
かくはしきかきりならすや橘の花さへ實さへ見ゆることの葉

采蘋は父の和歌を褒めてくれた偉大な歌人に感謝し、その喜びを「始めて先厳の爲に賞音を得る」と結句に表している。

八日　晴與島名氏遊于加藤平八人定初歸宿
九日　晴加藤氏三男来話
十日　晴遊加藤隱宅
十一日　陰雨書十五六枚

十二日　雨書十枚西村覺一郎招飲書畫展玩
十三日　雨午後加藤氏三五男来乞書
十四日　雨午小酌夜夫婦反目
十五日　雨欝陶送日
十六日　雨午後晴遊于紀伊野孫太郎宅半日閑話晩歸
十七日　快晴遊加藤氏入夜歸
十八日　陰午後雨森長氏來乞書
十九日　大雨午晴書手本一巻及列子賛
　　是夜来鳳言宮内維清明日當逢已達老職遊無復忌憚
廿日　晴觀砲術歸路聞鳥
　　午歸晡時訪宮内席有二人新納山田姓之
廿一日　晴西村覺一郎来鳳森永運治島名伊右衛門　壱岐國手及姉來訪晡時雨
廿二日　大雨終日不出又不來
廿三日　陰認文章二篇訪來鳳不在
廿四日　晴結髪認前田氏御頼書數紙將訪舊知心中
廿四日　晴挂席直至于阿久根問屋言未經脇元覧察則不容入麑島不得已又還舟向脇元役人他出日已傾終當所問屋江宿
廿五日　雨無聊不可言
廿六日　雨未歇發脇本陸行貳里達于阿久根宿于問屋藤本林助
廿七日　晴自阿久根至仙臺岩屋松兵衛
廿八日　晴縦仙臺至于市來松屋平左衛門
廿九日　雨食時小晴出市來行數里鑿山爲道凡十三町餘又行小許名縄代川土民敵朝鮮人訪余何之余日鹿児島又行數里経一大川超山至伊集院疲甚矣高山甚左衛

四　月
朔　晴發伊集院至麑島投和田直次郎入夜對酌
二日　晴賦一絶疲未已
三日　晴遊于南林寺號松原山歸路過島名伊右衛門午後歸宅主人言明日鮫島來
四日　晴午後鮫島吉左衛門來同酌入夜聽琵琶
五日　晴縫袷
六日　訪島名伊右衛門
七日　暗柳田來鳳來見誘余其主人種子島蔵屋敷入夜歸琉球人三名來鼓三味線不佳遂止
廿五日　雨無聊甚大風夜半下樓
廿六日　風雨未歇午睡覺時始晴
廿七日　晴訪島村伊右衛門午過宮内詩盟
廿八日　晴島名氏招飲過約往加藤氏言別

廿九日　雨晡山内清之進来鳳來飲

五　月

朔　　晴與來鳳遊玉龍山福寺桂山大乗院松峰山淨光明寺歸來飲于來鳳宅

二日　晴遊水車塲會歌人

三日　晴吉野觀擇馬

四日　雨遊下町御用達

五日　過桐野加藤赴宮内飲

六日　陰将發程宮内至餞別加藤桐野河南島名柳田諸子相尋至飲餞中雨亦至諸子強留不得已遂留過飲桐野氏

七日　雨未歇草卒衝雨發宿伊集院

八日　陰出伊集院過市来宿仙

九日　陰宿西方

十日　至阿久根是日薩州後宮宿予亦宿

十一日　晴留

十二日　晴乗舩過黒□瀬戸至天草横島泊

十三日　晴着舩于下浦超山歸于志柿少醉安臥

十四日　雨丹酒午睡醒時夕陽

十五日　晴結髪午後飲衆芳亭

十六日　雨女工物斷縫　（薩摩カスリ）

十七日　大雨女工物斷琉球紬

十八日　雨未歇處々挿秧

十九日　晴挿秧晩客來

廿一日　晴予往衆芳此日對岳樓挿秧

廿二日　晴歸對岳楼

廿三日　晴入梅午往衆芳亭歸臥一日間違□

廿三日　與大江庄屋隱居大島子金穴衆芳亭三夜待

廿四日　微雨抱雪樓客來予避于衆芳亭主人過午逢客

廿五日　快晴主人大島行予不往作詩

廿六日　晴認舊作

廿七日　晴先生御惱氣

廿八日　晴主人遊龜入川予飲衆芳亭

廿九日　晴航于富岡投大矢氏

晦　　微雨與主人及香村飲

五月十二日にはまた天草島に戻り、翌日志柿に帰っている。ここでは薩摩・琉球の旅で

求めた薩摩カスリや琉球紬を裁断し、着物を作るなど余有のある時間を過ごしている。

閏五月
朔　　雨將訪香村而止
二日　晴弔門小松氏邂逅八十島又橋
三日　雨午後過富田屋見生花入夜歸
四日　雨未歇解醒
五日　微訪香村
六日　雨随小矢氏遊長崎晡着岸
七日　晴訪小曾根六郎遂訪鐵禪師又尋長川貞十郎
八日　晴寫亞國日記夜遊丸山
九日　促歸乘舩丸山女郎千隈妓小竹者至風浪不可歸留里正宅
十日　雨尚在茂木
十一日　歸富岡
十二日　陰無事
十三日　晴訪小松氏脇谷妻來同飲
十四日　晴無事賦一絶
十五日　晴無事
十六日　晴
十七日　寫靜處遺稿
十八日　黒左へ
十九日　同寫数紙
廿日　　黒左へ
廿一日　微雨與永野氏飲夜過佐藤君遂投大矢君
廿二日　晴女工
廿三日　晴畫賛
廿四日　晴認書六枚
廿五日　晴無事
廿六日　晴富岡府吏飯村氏來代脇谷氏
廿七日　晴畫賛二ッ絹一ッ
廿八日　雨入暑
廿九日　書十枚

閏五月には小矢氏に従い六日から十日まで長崎に遊ぶ。八日の「寫亞國日記」とあるのはどのような日記を写したのか不明である。夜は丸山に遊んだことが日記に見える。十一日には天草島下島の富岡に帰る。富岡海岸では高台に登って「天草遊中登高望西洋」とい

う詩を賦して、遠く西海を眺めながらアヘン戦争に思いを馳せている。

天草遊中登高望西洋　　天草遊中　高くに登りて西洋を望む
扶桑地盡頭　　扶桑　地盡くる頭
登高極遠望　　高きに登りて遠望を極む
眼界無物遮　　眼界　物の遮る無く
落日在空洋　　落日　空洋に在り
遐想神聖國　　遐かに想ふ　神聖の國
葵心傾夕陽　　葵心　夕陽に傾く
満清一猾夏　　満清　一たび夏を猾すや
文物非舊章　　文物　舊章に非ず
加之英夷暴　　之に加ふるに　英夷の暴
荼毒及三殤　　荼毒　三殤に及ぶ
防禦無男子　　防禦　男子無く
貞烈纔劉娘　　貞烈　纔かに劉娘あるのみ
髡頭辮髪客　　髡頭　辮髪の客
畏犬如虎狼　　犬を畏るること虎狼の如し
人生僅知字　　人生　僅かに字を知らば
慷慨憂難忘　　慷慨して　憂ひ忘れ難し
此是海外事　　此れは是れ海外の事
徒労九回腸　　徒らに労す　九回の腸

〇「貞烈　纔かに劉娘あるのみ」；乍浦の劉氏の娘がイギリス兵の凌辱に抗して死を選んだ悲劇。〇九回の腸；憂えもだえる様。

采蘋はおそらく長崎で見聞きしたアヘン戦争についての知識をもってこの詩を詠んでいると考えられる。「慷慨して　憂ひ忘れ難し」とその気持ちを詠むが、「此れは是れ海外の事」と割り切ろうとするが、「徒らに労す　九回の腸」と、とても簡単には割り切れる問題ではないと結び、その衝撃の強さを表している。

六　月
朔日　晴訪春遊題屏風
二日　認數紙告別歸于陣屋
三日　大雨舟不發終與大矢主人飲
四日　快晴認書數紙
五日　主人拜領上下地因迎村老觴予亦同飲

六日　雨午前放晴
七日　晴外史
八日　無事同
九日　同　同
十日
十一日　晴酷暑
十二日　晴　同
十三日　晴賦一絶
十四日　晴讀外史
十五日　晴　同
十六日　讀外史
十七日
十八日
十九日
廿日　　雨讀外史
廿一日　雨
廿二日　雨爲霖讀外史
廿三日　晴讀外史
廿四日　晴外史卒業濯髪
廿五日　晴京師篆刻者及大坂詩人來
廿六日　従前日暑甚
廿七日　晴亀戀桃核刻山水
廿九日　晴微涼觀彫刻
卅日　　陰涼氣滿襟二客告別七絶二首贈亀戀

六月七日には頼山陽の『日本外史』を読み始め、二十四日には読み終え、漸く洗髪したとあり、その集中度が窺われる。また京都の篆刻者や大坂の詩人とも交流をしている。

初　秋（七月）
朔　　聽濤樓觀漁船
二日　雨中西谷砂五三竹作杖三杖晡群飲
三日　好雨絶殘炎認書十五六枚
四日　晴将以明日向東肥主人云暑未退且待盆後涼生而發余亦畏暑甚遂止
五日　晴宮崎氏招飲
六日　晴暑甚午後雷雨
七日　晴酷暑午後密雲不雨益熱

八日　雨涼氣初蘓夜風
九日　風未歇觀細工
十日　晴又觀細工
十一日　晴　同
十二日　木硯成就
十三日　晴少々風
十四日　雨鑿硯
中元　晴清風徐來
十六日　晴寫本
十七日　晴　同
十八日　晴又微雨
十九日　晴
廿日　晴主人上津浦行
廿一日　晴風未歇
廿二日　晴風サカリニノム午微雨
廿三日　朝微雨直晴殘暑未退午後小雨
澤不至濕物夜大雨且雷
廿四日　雨遊衆芳亭飲
廿五日　晴飲衆芳亭夜雨
廿六日　晴認書數紙
廿七日　晴與京師伊勢長崎之三子飲
廿八日　晴衆芳亭留別
廿九日　風雨

仲　秋（八月）
朔　微風順渡海□舟□下津浦　金太父母梅之□男
二日　晴暴風不可渡
三日　晴早發下ッ浦午達于島原南津川
斜日挂席至梅渡一迫
四日　待潮至發達高橋債人於熊本訪町野氏不在過旅店二軒皆断然不留遂至竹屋町豆腐屋休息晩町野氏舍弟遅来至新坪井六間町米屋幾平託余
五日　晴訪町野氏邂逅淨行寺上人遂携余去
六日　晴邂逅白木柏軒午後訪澤村席上會諸士姓名不錄
七日　雨午後過澤村晡辛島氏招飲夜半歸宿澤村氏
八日　晴書肆　招飲
九日　晴無事與書肆終日飲

十日　陰與法讀僧光岸寺飲遂別
十一日　晴無事韻士二人來話
十二日　雨讀南華無事
十三日　陰
十四日　晴篆刻人來飲
十五日　晴祭禮暑甚矣
十六日　晴無事深澤金坂二子來訪
十七日　雨窓寂寞
十八日　雨法事
十九日　陰雨
廿日　　大雨混雑
廿一日　晴十八日より是日迄精進
廿二日　進盛饌是日柏軒來約妙華寺之行
廿三日　晴女工甚急
廿四日　晴田中司馬町野二子來訪女工中應接
廿五日　折簡謀柏軒止妙華寺約
廿六日　晴猶女工
廿七日　晴　同
廿八日　晴　同
廿九日　雨
卅日　　五更雨女工畢

八月三日には天草を出発し、島原に戻り一泊して翌日は熊本に出かけている。天草を発つときに詠んだ五首の詩がある。

別苓洲諸友　五首　　苓洲[338]諸友に別る　五首
少壯軽離別　　少壮　離別軽し
瓢瓢千里雲　　瓢瓢として　千里の雲
如何衰老甚　　如何せん　衰老甚きを
滿眼涙紛紛　　満眼の涙　紛紛たり

擧手互相招　　手を擧げて互に相招く
潮急舟行駛　　潮急にして　舟行駛し
狂風尚有情　　狂風　尚ほ情有り
次著苓洲涘　　次いで著す　苓洲の涘

[338] 天草のこと

別酒尚未醒　　別れの酒　尚ほ未だ醒めず
蓬窓和愁睡　　蓬窓　愁睡に和し
風濤晩繫舟　　風濤　晩に舟を繫ぐ
未離天草地　　未だ離れず　天草の地

離恨如緘口　　離恨　口を緘ずるが如し
相看涙已先　　相看て涙已に先んず
愁來歌一曲　　愁来りて　歌一曲
起舞共□□　　起舞共□□

漸遠久留地　　漸く久留の地を遠ざく
誰知何限意　　誰か知る　何んぞ意を限らん
蒼然鼇頭山　　蒼然たり　鼇頭山
回看亦一涙　　回り看て　亦一涙

八月四日、熊本に着いて町野氏を訪ねるが不在。そこで旅宿を二軒断られ、豆腐屋で休憩している所に町野氏の舎弟が来て米屋幾平宅に泊まることとなった。結局熊本では浄行寺[339]を拠点にして近隣の名所や古処の知人を訪ねて一年間を過ごした。熊本藩士澤村西坡、藩医の町野鳳陽、木下犀潭、村井洞雲、白木粕軒、仏壟上人、阿部壺山、岡松甕谷、小野蘇堂らとの交流をする中で、玉琴女史との出会いがあった。玉琴女史は原古処の書いた「読源語五十四首」[340]を絶愛したので、采蘋はこれを書写して彼女に与えた。そのいきさつを次の様に記している。

余遊熊府也。於澤村翁之許。與玉琴女史始相見。爾後周旋。情好日深。女史絶愛先人讀源語之詩。賞歎不已不獨余知友。亦爲先人得一賞音也。因盡寫五十四帖。以呈清鑒。繫以一絶。

（余熊府に遊ぶ。澤村翁の許に於て、玉琴女史と始めて相見ゆ。爾後周旋す。情好日に深し。女史先人の「讀源語」の詩を絶愛す。賞歎已まず獨り余の知友のみにあらず。亦先人の爲に一賞音を得る。因りて盡く五十四帖を寫し。以て清鑒を呈す。一絶を以て繫ぐ。）

---

[339] 浄光寺
[340] 拙稿「原古処「讀源語　五十四首」について」日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No13参照

老眼執針殊恨遅　　老眼針を執るに殊に遅きを恨む
煩君幸得彌縫亘　　君を煩して幸ひ彌を得る縫に亘しき
客中何以酬深意　　客中何を以てか深意に酬ゆ
爲寫先人源語詩　　爲に先人の源語詩を寫す

玉琴女史については詳しいことは分からないが、澤村翁の所で始めて会ってから親交を深め、たびたび行動を共にし、親しく閑談している様子や、「右題玉琴女史墨竹」と題する詩が『西遊日歴』に見えることから、画が得意な女性であったことが考えられる。采蘋の人生の中で親しく交際した女性は広島で琴を習った阿策という女性と、浅草の文鳳女史ぐらいが思い出されるが、熊本の玉琴女史は采蘋が心を通わせた数少ない女性の一人であったと思われる。

また熊本では細川侯より書を徴せられその時の気持ちを賦した詩がある。

町野國手奉　内命。被賜浪華酒皐之鶴者。事出於非望。菅容自失之間。偶有兩三和友來。聞之曰。子實天涯一蜉蝣耳。何以蒙此寵光乎。幸爲吾輩分餘光。不然子将飽而死矣。余肅然恐懼。急開莚與衆共飲。酔後賦一絶以自賀。

（町野國手　内命を奉る。浪華酒皐の鶴を賜はる。事は非望に出づ。菅容自失の間偶たま兩三の和友来る有り。之を聞ひて曰く。子實天涯一蜉蝣のみ。何以てか此寵光を蒙らんや。幸ひ吾輩の爲に餘光を分つ。然らざれば子将に飽きて死なんとす。余肅然として恐懼す。急ぎ莚を開きて衆と共に飲む。酔後一絶を賦して以て自ら賀す。）

銀燭青烟客滿堂　　銀燭青烟　客堂に満つ
厭厭不識丸皐霜　　厭厭として識らず　丸皐の霜
戛然忽有長鳴鶴　　戛然　忽ち有り　長鳴の鶴
載到一州知是揚　　一州に載せ到り　是れ揚るるを知る

采蘋は長年漢詩人として精進してきたが、その甲斐もあってここで思いもかけない光栄に浴した。身に余る光栄を喜び、友人を集めて雅宴を開き、酔後に自賀の一絶を賦している。

九　月
朔日　無事
二日　晴訪澤村玉琴來話
三日　晴玉琴携槾袍來供

四日　晴訪玄叔歸精舍
五日
六日　遊泰平山安國寺
七日　觀壷井飲壷山宅
八日　　玉琴女史來話二子壷山東海尋來二更町野國手至半夜宴罷
九日　　晴　是日黙々過去夜飲
十日　　遊　　寺入夜引山主歸飲
十一日　訪町野乞添書乃酒遂叩澤村主人不在夜
十二日　陰阿蘇行延引周藏子來
十三日　晴與主人賞月
十四日　訪澤村氏約同行
十五日　發程宿大津驛邂逅大矢野格次
十六日　出大津觀數鹿流瀑布宿赤水
十七日　過的石山莊賦一絶小酌過内牧宿役犬原里正宅
十八日　書數紙小飲午後至宮地宿紺屋
十九日　轉宿田島氏讀朱陵詩書韻爲蘇山行之礎
廿日　　栗原氏招飲
廿一日　去至坊中訪學頭坊宿成滿院
廿二日　登蘇山
廿三日　午出坊中至内牧宿日隈氏
廿四日　在内牧
廿五日　出内牧超二重嶺至大津宿西岡次郎衛門
廿六日　認書
廿七日　在大津
廿八日　遊陣内
廿九日　還大津晩與主人飲
晦

九月十五日、大津駅を出発して大矢野格次に出会う。大矢野氏は号を宣春といい亀井門人である。この夜大矢野氏に宿る。その時に詠んだ詩がある。

　發熊城至大津、宿大矢野氏。　　熊城を發して大津に至り、大矢野氏に宿る。
將爲不速客　　将に不速の客と爲らんとす
相顧共三人　　相顧る共に三人
□□過枯木　　□□枯木を過ぎて
沿流至大津　　流れに沿ひて　大津に至る

那知投宿處　　那れか知らん　投宿の處
得與舊知親　　舊知と親しむを得たり
半夜燈窓話　　半夜　燈窓の話
相忘語更眞　　相忘れて　語更に眞なり

九月十六日大津（熊本県菊池郡大津町）を出て阿蘇山に向かう。途中瀑布を見ながら里正宅や紺屋に宿泊しつつ、ついに九月二十二日阿蘇山に登る。

上阿蘇山、用朱陵韻　　阿蘇山に上り、朱陵の韻を用ふ
蘇山崚嶒峻極天　　蘇山崚嶒　峻　天を極む
雲梯石棧斷又連　　雲梯石棧　断えて又連なる
風生雨腋雲生脚　　風雨腋より生じて　雲脚を生ず
飄飄欲逐步虛仙　　飄飄として　逐はんと欲す、步虛仙
回首諸峯如子姪　　首を回らせば　諸峯　子姪の如し
平視獨指久住巔　　平視獨り指す　久住の巔
白雲在天飛不盡　　白雲天に在りて　飛んで盡きず
文永年來永刼烟　　文永年来　永刼の烟
雲烟起滅無晝夜　　雲烟起滅して　晝夜無し
可難人代古今遷　　難む可し　人代古今に遷るを
我今遠來名山裡　　我今遠く来る　名山の裡
欲逑幽懐留一篇　　幽懐に逑べ　一篇を留めんと欲す
池水常沸翻五彩　　池水常に沸き　五彩を翻す
何似死灰不復燃　　何に似てか　死灰復た燃えず
移杖徘徊踏焦石　　移杖徘徊して　焦石を踏む
山靈不怒著塵跡　　山霊怒らず　塵跡に著く
短日西傾歸路遥　　短日西に傾くも　帰路遥なり
魚貫山下人影變　　魚貫山下　人影の變
請見宮地前宵雨　　請ふ　見よ宮地　前宵の雨
山間已疑殘雪白　　山間　已に疑ふ残雪の白きを
此行若非綠村郎　　此行　若し村郎に緑るに非んば
老脚安得勝情長　　老脚　安んぞ勝情の長を得んや
有石天然可磨墨　　石有りて　天然の墨を磨くに可し
揮毫且書登山章　　揮毫し且つ書せん　登山の章を

發内牧。途中望阿蘇山。前日村井子先余歸熊本
内牧を發す。途中阿蘇山を望む。前日村井子余の先に熊本に歸る。

三人爲伴向蘇山　　三人伴を爲して蘇山に向ふ
緩歩聯吟数日間　　緩歩聯吟　数日の間
二子繙然弄吾去　　二子繙然として　吾を弄して去く
蘇山獨立送吾還　　蘇山獨立して　吾の還るを送る

六十歳にして念願の阿蘇山に登る。その感慨は七言の古詩に詳述されている。二首目の詩から分かるように二人の村郎（村井洞雲の男）と共に阿蘇山に登ったようである。「此行若し村郎に緑るに非んば、老脚安んぞ勝情の長を得んや」と二子に感謝し、その登山が楽しいものであったことを二首目の詩が物語っている。

十　月
朔　與大矢野母子送余至枯木村
二日　出
三日　遊南方遂宿浴蘭堂
四日　出
五日　遊入道水村歸南方
六日　還熊本
七日　閑
八日　訪澤村氏語令子賞遊留飲歸路訪町野氏謀水前寺遊
九日　觀篆刻
十日　雨遊水前寺
十一日　夜訪書肆
十二日　女工田中司馬來訪閑話數刻約十五日
十三日　女工
十四日　女工畢
十五日　雨赴田中約
十六日　歸僑居
十七日　町野氏以君命來求余書卽日認贈
十八日　書坊中囑托之詩町野子息來
十九日　書源語之詩并觀刻
廿日
廿一日　持讀源之詩將出町野氏來告　君命携酒瓶及肴料　将□拜載畢往謝遂訪澤村氏路次過玉琴贈源語宿澤村氏
廿二日　認書呼按摩與玉琴女史閑話
廿三日　過淨行寺微雨與龜巒同酌

廿四日　暖甚矣雨屋小野子來話留相飲賦詩
廿五日　修蔵來共觀篆刻
廿六日　陰釋敝槾袍
廿七日
廿八日　夜與主人及龜巒飲
廿九日　上人他行余書四枚

十月に入り熊本に落ち着き、度々水前寺に遊ぶ。また篆刻を見たり、女工をしたりと我が家にいるような日常の生活が日記から伝わってくる。十九日には古処の「讀源語詩」を書写し、二十一日にそれを玉琴女史に贈っている。二十二日には按摩を頼んで、その合間に玉琴女史との会話を楽しむのどかな日常が記されている。

十一月朔　結髪玉琴来話同行過飲于酒樓還而又飲
二日　晴
三日　晴訪澤村詞宗
四日　歸
五日　小野田中壺山來飲會主小野氏□
六日　村上氏來云伯母病革若不可諱則暫不得來夜雨
七日　冬至村井洞雲相飲
八日　出村井過澤村與玉琴遊御藥園竹田　醉歸投宿小堀
九日　歸澤村
十日　與□□□肥前生訪玉琴女史
十一日　澤大人釣鮒歸作鱠一酌
十二日　歸淨行寺雨
十三日　無事
十四日　同
十五日　拜清正公　歸路新町買瓢
十六日
十七日　買島縮緬裁縫
十八日　女工大雨
十九日　女工永松宮門來
廿日　　晴天工畢金坂來
廿一日　往于澤村氏路次過町野約菊池行
廿二日　町野子來余醉餘陷天井疾痛　甚矣
廿三日　氣息奄々
廿四日　町野國手治療

廿五日　六下濟七日罷下濟
廿八日　下濟
　　無聊度日

十一月に入り、玉琴女史と酒楼で飲み、帰ってまた飲むとあり、玉琴女史と頻繁に交流を楽しんでいる様子が窺われる。このころは淨行寺と沢村氏の家を拠点に行動していたと思われる。十一月二十二日、澤村西坡の餞鳳軒に寓居している時、町野氏が訪ねてきて、一緒に飲み飲み過ぎて天上から落ちるという事件があった。そのいきさつを次の様に記す。

丁己仲秋。余寓在于餞鳳軒。念二之夜。酔餘突奔陥于天井。起坐疾痛。氣息奄奄者果日矣。幸因鳳陽老國手治療。得免鬼録。欣然賦一絶謝呈
（安政四年仲秋、余餞鳳軒に寓在す。念二の夜、酔餘突奔して天井に陥つ。起坐疾痛、氣息奄奄は累日なり。幸ひ鳳陽老國手に因りて治療せらる。鬼録を免るるを得る。欣然として一絶を賦して謝して呈す。）

未得冷然御風去　　未だ冷然として風を御し去るを得ず
無端失脚墜樓人　　端無く脚を失ふ　墜樓の人
喜君能換塵凡骨　　喜ぶ君能く換ふ塵凡の骨
教我再生迎幾春　　我再生して幾たびか春を迎へしめむ

山家滞在時にも飲み過ぎて度々転んで足を痛めたことが戸原卯橘の日記に見えていたが、今回はさらにエスカレートして「鬼録を免れる」ところまで行ったのである。主人の澤村西坡はさぞ驚いたことであろう。幸い町野国手によって一命を取り留めることが出来た。その感謝の気持ちを詩に賦して贈った。

十二月
三日　　痛未止強歸浄行寺翌日又往澤村氏
五日　　龜巒
廿一日　與玉琴女史訪小野氏于本店投宿書肆
廿二日　歸淨行寺與主人過書肆邂逅小野氏共趁岡松辰吾入夜投宿玉琴女史
廿三日　歸淨行寺
廿四日　無事
廿五日　澤村氏忘年會
廿六日　微雨
廿七日　晩歸淨行寺
廿八日

十二月に入っても痛みは治まらなかったが、三日には強いて淨行寺に帰り、翌日はまた沢村氏を訪ねた。二十一日にはまた玉琴女史と会い、ともに小野蘇堂（龜巒）を訪ねている。暮れの二十五日には沢村氏の忘年会に招待され、二十七日には淨行寺に帰った。

この日記は十二月で終わっているが、安政五年の正月は澤村西坡[341]の餞鳳軒で迎えた。その時に詠んだ詩がある。

安政戊午春王正月
元旦次韻澤村詩盟

兩度春風兩處年　　両度の春風　両處の年
迎春送舊各陶然　　春を迎へ舊を送る　各おの陶然たり
單身不結鴛鴦夢　　単身結ばず　鴛鴦の夢
淡淡生涯地上仙　　淡淡たる生涯　地上の仙

六十一歳の正月を旅先で迎えた心境を詠んだこの詩には、「淡淡たる生涯　地上の仙」とあるように、悟りの境地に達している采蘋の姿がある。

この後、六日には澤村家を後にし、肥前（佐賀県）に向かう。ここで草場佩川と出逢って詩を寄せている。

邂逅草場佩川翁。席上。　　草場佩川翁に邂逅す。席上。
自誇老健不夷猶　　自ら誇る　老健かにして　夷猶にあらず
猶與少年爲壯遊　　猶ほ少年と壯遊を爲す
天下文章歸火海　　天下の文章　火海に歸す
城中賢達盡風流　　城中の賢達　盡く風流
梅花開遍千枝雪　　梅花　開きて遍し　千枝の雪
楊柳輕梳萬緒愁　　楊柳　輕く梳く　萬緒の愁
興至何遑掩吾拙　　興至りて　何ぞ遑る　吾が拙を掩ふを
且拈禿筆漫賡酬　　且つ禿筆を拈りて　漫して賡酬す

〇夷猶：ゆったりとかまえたさま・ぐずぐずして進まないさま。〇賡酬：人と詩歌を贈答し合う。

寄草場翁　　草場翁に寄す
初我來遊處　　初めて我　來遊する處
逢君病起時　　君に逢ひ　病起の時

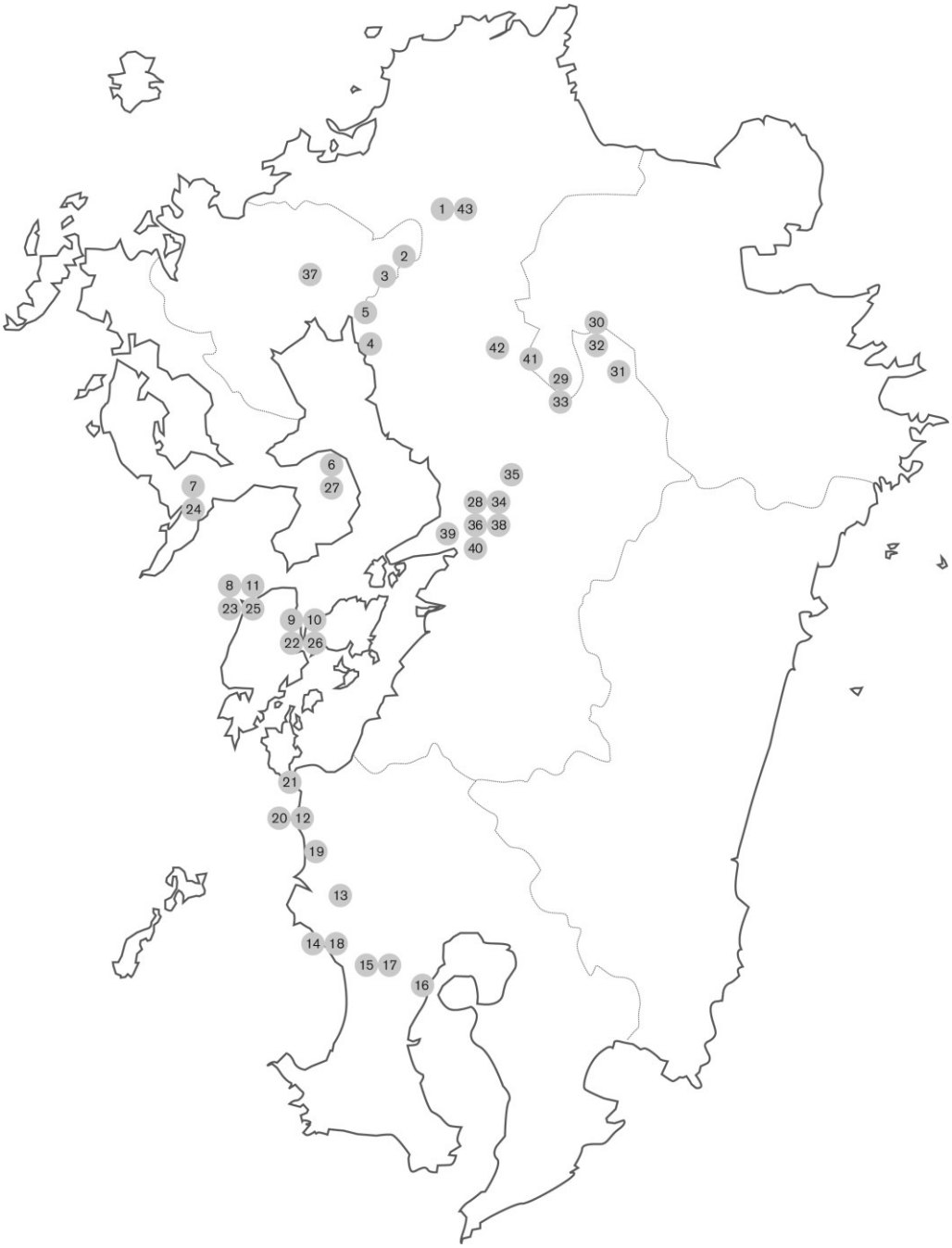
[341] 佐藤一齋の門人

春風生滿坐　　春風　満坐に生じて
日夕尚修辭　　日夕　尚ほ修辭あり
一見歡難盡　　一見して　歓盡し難く
重尋希可期　　重ねて尋ぬるに　期すべきを希ふ
合離應有數　　合離　應に數有るべし
惆悵枉栽詩　　惆悵として　枉らに詩を栽す

再び熊本に戻り、宇土、八代に遊び、また熊本に帰って菊池氏の跡を訪ね、植木、山鹿等の諸士を訪ねている。山鹿驛では日輪寺に遊んだことが詩に見えている。この詩を最後に盛夏の中を漸く山家に帰っていった。

2-4 肥薩遊歴の旅程図

『漫遊日歴』や『西遊日歴』を元に肥薩遊歴の旅程図を作製し、下に示した。



訪問先	訪問した場所・人物	滞在日及び期間
①山家		安政 3/4/23 出発
②久留米		4/24～27
③大善寺		4/28～29
④柳川		4/30～5/9

⑤若津		5/9
⑥島原	和光院	5/10～ひと夏
⑦長崎		8 月中旬
⑧富岡		8 月中旬
⑨志柿		8 月下旬～
⑩志柿		安政 4 年 3 月鹿児島に出発
⑪富岡	大矢氏	3/9～
⑫阿久根	藤本林助	3/26
⑬仙台	岩屋松兵衛	3/27
⑭市来	松屋平左衛門	3/28
⑮伊集院	高山甚左衛門	3/29～4/1
⑯鹿児島	和田直次郎	4/1～5/6
⑰伊集院	高山甚左衛門	5/7～8
⑱市来	松屋平左衛門	5/8
⑲西方		5/9
⑳阿久根	薩州後宮	5/10
㉑黒之瀬戸		5/12
㉒志柿	衆芳亭	5/13～29
㉓富岡	大矢氏	5/29～閏 5/5
㉔長崎	大矢氏同伴、小曾根六郎、迭禅師、長川貞十郎	閏 5/6～10
㉕富岡	大矢氏	閏 5/11～
㉖志柿		8/1 熊本へ出発
㉗島原	和光院	8/3
㉘熊本	淨光寺	8/3～9/15
㉙大津	大矢野格次	9/15
㉚内牧	犬原里正	9/17
㉛阿蘇山		9/22
㉜内牧	日隈氏	9/23～25
㉝大津	西岡次郎衛門	9/25～30
㉞熊本		10/6～8
㉟水前寺		10/8・10
㊱熊本	安政五年正月は澤村西陂の餞鳳軒で迎える。	10/11～
㊲佐賀	草場佩川	安政五年 1/6～

㊳熊本	淨光寺	
㊴宇土	清光精舎	
㊵熊本	百花園（淨光寺）	5/3 に送別の会あり
㊶隈府	城野氏・木下氏	帰路の途中立ち寄る
㊷山鹿	伊藤氏・日輪時	〃
㊸山家		夏ごろ帰る

三節　最後の出郷

安政五年の夏、二年を超える肥薩遊歴から戻った采蘋に戸原春坪が歓迎の詩を贈った。それに対して次韻した采蘋の詩がある。

次韻戸原君却呈　　戸原君に次韻して却て呈す
書堂冥寂絶書聲　　書堂冥寂として　書声を絶す
問著隣嫗聽始驚　　隣嫗に問著し　聴きて始て驚く
尚我優遊筑南返　　尚ほ我優遊して　筑南より返る
知君悽愴渭陽情　　知る君　悽愴として渭陽の情
九原難起歎何限　　九原起こし難し　歎きは何ぞ限らん
万事不平詩以鳴　　万事平らかならず　詩以て鳴る
造物由来無定理　　造物の由来　定理無し
紛粉何必説方生　　紛粉として何ぞ必らずしも方生を説かん

山家に戻った采蘋は、二年以上もの間家賃を支払っていたとは考えにくいので、遊歴の前にすでに宜宜堂を引き払っていたのではないか。そこで近くに住む桶屋の曽平の家に仮住まいをしたと考えられる。この曽平は母を孝養して三十歳を過ぎるまで結婚をせず、慎み深く生活していたことを知った采蘋は、庄屋と協力して藩庁に孝行ぶりを推奨した。それが采蘋が曽平の為に作った詩が以下の詩である。

靄然教化及農工　　靄然たる教化　農工に及び
苦體動身供養豊　　苦體動身　供養豊かなり
感汝事親三不惑　　感じて汝が親に事ふるに　三たび惑はず
看他錫類一無窮　　看るに他の錫類を　一つとして窮り無し
反哺烏噪庭前木　　反哺烏噪　庭前の木
皷吹蛙喧秧抄風　　皷吹蛙喧　秧抄の風
世運一波溺妻子　　世運一波　妻子を溺す
安將孝道醒昏蒙　　安んぞ孝道を将つて　昏蒙を醒まさん

贈孝子曽平。曽平山家駅一傭工也。天性至孝。年三十三而未娶。且無私財。非不解酒中之趣者。以有老母在不敢飲也。予深感其志故第三及之。　　原氏采蘋女史

（孝子曽平に贈る。曽平山家駅の一傭工なり。天性至孝。年三十三にて未だ娶らず。且つ私財無し。酒中の趣を解さざる者に非ず。老母在有るを以て、敢えて飲まざるなり。予深く其の志に感じ、故に第三之に及ぶ。　　原氏采蘋女史）

これにより曽平は黒田家より青銅三貫文を授けられた。また采蘋はこの翌年、秋月から曽平の妻となる女性を選んで二人を結婚させたということである[342]。上記のいきさつから采蘋にとって曽平は息子同然であり、曽平の子供が生まれると養子に欲しがったほどかわいがったという。采蘋は最後に山家を出るときに書棚や筆洗いなどの遺品を曽平の家に残して旅だった。

おそらく采蘋は原家の習慣で新年には詩を賦す習慣があったのであろう。次の詩は山家で迎えた最後の新年に詠んだ詩である。六十二回目の春を迎えた采蘋は、結句の「乃ち知る儒佛是れ同倫」が示すように、儒教と仏教はお互いに反目し合っていたが、儒も佛も結局は同じ教えであるとの境地に達している。晩年の采蘋は厭世的な傾向が強まり、仏教の教えを認めるようになったものと考えられる。

巳未元旦　　安政六年元旦

生來六十二回春　　生来　六十二回の春
半在頭陀逢歳新　　半ば頭陀に在りて　歳新たなるに逢ふ
搔首踟躕世途険　　首を搔き踟躕す　世途の険
乃知儒佛是同倫　　乃ち知る　儒佛是れ同倫

この年の二月、采蘋送別の雅会が長谷山楽只亭にて行われた。六十二歳になった采蘋の再出発に対して友人たちは反対したと言うが、すでに心に決めたことは実行する采蘋の人柄に人々は納得せざるを得なかったであろう。思い出深い楽只亭に集まって皆に最後の別れを告げた。

楽只亭留別　　二首

偶来巴子舊山荘　　偶たま来る巴子旧山荘
且對金蘭飛羽觴　　且つ金蘭に對して羽觴飛ぶ
少女風寒灞橋雨　　少女風寒し　灞橋の雨
負花明日發家郷　　花を負ひて　明日家郷を發せん

[342] 春山前掲書、172 頁。

軽装衝雨出家荘　　軽装雨を衝いて家荘を出ず
爲惜別離強飛觴　　別離を惜しまんが爲　強ひて觴を飛ばす
從是優遊無定住　　是れより優遊にして　定住無し
明年春色屬何郷　　明年春色　何郷にか屬せむ

この詩に対し戸原継明（卯橘）が次韻した詩「奉送采蘋先生」が残っている。秋月の諸氏に別れを告げて山家に戻った采蘋を、舅の佐谷松窓が最後の別れを告げに来訪した。采蘋はその好意に対し、七絶を以て応えている。

山家駅　佐谷松窓来訪、賦贈　　明日将に東遊せんとす　故に及ぶ
一從吟杖出山行　　一たび吟杖に従ひて　山を出でて行く
蕙帳徒看猿鶴驚　　蕙帳徒らに看る　猿鶴の驚くを
欣子遠將倦遊客　　子の　遠く将に遊客に倦まんとするを欣ぶ
依依獨有渭陽情　　依依として獨り　渭陽の情有り

孤負
孤負恩師與父兄　　恩師と父兄に孤負す
雲樓水宿不留行　　雲樓水宿　行を留めず
但吾縱作山阿骨　　但だ吾れ縱ひ山阿の骨と作るも
不許無名入故城　　許さず名無くして故城に入るを

「孤負」は舅の佐谷松窓が采蘋の遺品の筐の底に秘め置かれたものを発見した詩である。この遺品の筐は佐谷松窓の家に預けていったものか、それとも萩に持っていったものであるのかは分からない。おそらく山家を出発する前に書いたものであろう。親類や友人が止めるのも聞かず、また旅に出て、たとえ他の地で命を落とすことがあろうとも、父の遺言を果たさなければならないという決心をこの詩に託して自分自身を奮い立たせたものと思われる。

3-1 萩での二カ月

安政六年二月、秋月を出発してから萩に到着するまでの采蘋自身の足取りはつかめていないが、八月半ばに萩に到着したことは萩藩士土屋蕭海が采蘋を藩の郡奉行前田陸山に紹介する手紙の日付けによって推測出来る。萩に到着するまで六カ月間を要しているが、この間の記録は残されていない。山田新一郎編『原采蘋詩鈔』の「臨再発郷諸詩」中には福岡で詠んだ十二首の詩が含まれているが、これらの詩は『西遊日歴』の末尾に見える詩で、肥薩遊歴から山家に戻り、その後福岡に遊んだ時の詩である。最後の出郷に際し、亀井家こそ訪ねてはいないものの博多の有力者に挨拶をして廻ったと思われる。あるいは肥薩遊

歴の御土産話を披露する目的もあったのかもしれない。ともかく博多では医者の平島伯珉を訪ね、一詩を詠んでいる。

訪平島氏　　平島氏を訪ぬ
聚散紛如落葉分　　聚散　紛として　落葉を分つが如し
天風吹送又逢君　　天風　吹き送りて　又君に逢ふ
庭栽慈竹人稱孝　　庭栽の慈竹　人孝を稱す
池養錦魚水作紋　　池は錦魚を養ひて　水は紋を作る
醫術有方明診察　　醫術方有りて　診察明らかなり
家聲不随喜傳聞　　家聲に随はず　傳聞を喜ぶ
節先南至回春意　　節は南至に先だちて　春意は回る
檻外梅花一點薫　　檻外の梅花　一點の薫

結句「檻外の梅花　一點の薫」から博多を訪れたのは梅花の頃であったことが分かる。

この後も博多の富豪大賀氏や福岡藩医の鶴原道室等を訪ねてしばらく滞在したものと思われる。

萩に到着してからの采蘋の動向は幸い資料が残されており詳しく知ることが出来る。萩における采蘋の名声を知る上で貴重な一通の采蘋宛ての詩と序文の写しが秋月郷土館に所蔵されているという[343]。硯海坂譲という十七歳の青年が、萩に来ている采蘋の評判を聞きつけて面会を求めた経緯が書かれている。以下にその全文を掲げる。

安政巳未仲秋日、余自川嶋返焉。時過午。父告余曰、有女史号采蘋、達書及詩文章、常時漂遊、宿於萩城瓦坊松村氏宅云。余嘗雖聞先生之絶敏、未嘗会面矣。心欣然。余少年而未能通天地之理、若先生者一不可不拝也。因訪先生於瓦坊寓次。時先生使余閲一二詩。詩意清談雨聲露華氣、筆力錬勁、飛電奔雷、閲之心曲竦然、愈恥余拙矣。覬先生、余雖鈍、幸莫棄絶。一寸松又潅培之、則終蔽萬壑。一寸蛇亦蕃蓄之、則終□雲矣。余忘固陋賦之、以呈上想當一笑也。此日也、小雨空濛、庭樹森霑、聊足避市街之□□矣。[344]

（安政六年仲秋日、余川嶋自り返る。時午を過ぐ。父余に告げて曰く、女史采蘋と号する有り。書及び詩文章に達す。常時漂遊して、萩城瓦坊松村氏宅に宿すと云ふ。余嘗て先生の絶敏を聞くと雖も、未だ嘗て会面せず。心欣然とす。余少年にして未だ天地の理に能く通ぜず。先生のごときは一として拝せざるべからず。因りて先生を瓦坊寓次に訪ふ。時に先生余に一二詩を閲せしむ。詩意は雨声に清談し、華気を露す、筆

[343] 前田淑前掲書、320 頁。
[344] 前田淑前掲書、320 頁。

力錬勁にして、電飛び、雷奔しる。之を閲して心曲竦然として、愈いよ余の拙なるを恥ず。先生覬み、余鈍なると雖も、幸ひに棄絶する莫し。一寸の松又之に培潅して、則ち終に萬壑を蔽ふ。一寸の蛇亦之を蓄蕃し、則ち終ひに□雲。余固より陋を忘れて之を賦し、以て呈上し一笑に想ひ当る。此の日、小雨空濛として、庭樹森霑、聊か市街の□□を避くるに足る。）

先生入国門、僑居慰旅身、聞古處翁子、姓原名采蘋、余訪先生來、　僥倖得相陪、年老語稜々、竦然覚心開、書詩使余閲、閲此恥余拙、詩是言意志、意志甚俊傑、先生問余年、今茲甫十七、先生六十餘、抵今未定室、漂游元何心、畢意爲余輩、余輩雖讀書、未除心中穢、談酬日將沈、細雨敲松林、松林尤幽致、未飽話古今、隔窓有棋客、戛聲秋色深、須曳已黄昏、秋日奈短何。

右奉呈原采蘋老先生案下　　硯海坂譲再拝[345]

（先生国門に入る、僑居して旅身を慰む、聞くならく古処翁の子、姓は原名は采蘋、余先生を訪ね来る、僥倖にして倖相陪するを得。年老ひても語は稜々たり。竦然として心開くを覚ゆ。書詩余に閲せしむ。此を閲して余の拙なるを恥ず。詩は是れ意志を言ふ。意志甚だ俊傑なり。先生余の年を問ふ。今茲に甫十七、先生六十余。今に抵りて未だ室を定めず。漂游元めは何なる心ぞ、畢意余輩が為なり。余輩書を讀むと雖も、未だ心中の穢を除かず、談酬して日将に沈まんとす。細雨は松林を敲く、松林尤も幽致なり。未だ古今を話すに飽きず、窓隔てて棋客有り。戛声秋色深く、已に黄昏を曳くを須つ。秋日の短きを奈何せん。）

右奉呈原采蘋老先生案下　　硯海坂譲再拝）

これによれば、硯海坂譲は僅か十七歳の青年であるが、采蘋の評判をかつてから聞いていたとある。たまたま父から采蘋の来萩の話を聞き、面会を望んだのである。六十二歳にして若き青年に面会を求められた詩人采蘋の名声の高さを知るには十分である。青年は、六十二歳まで嫁がず毅然として生きている老先生の詩書を見せられ、自分の拙を恥じ、終日教えを乞うたのである。

萩に着いてから采蘋は、萩藩士土屋蕭海に手紙を書き、訪ねたようである。次の手紙は土屋蕭海が、藩の上司である前田陸山に采蘋を紹介したものである。

土屋蕭海與前田陸山書

有采蘋者、原古處女也、現来宿瓦街三笠屋、致介、求見、就而接之年方六十二、才思翁勃、善作詩、文亦雄健、直攄胸臆。可謂本邦呉相如矣。彼言。先父遺稿、未得上梓、是妾平生痛心也。將欲遍謀海内諸彦、以仲吾蓄志。其不自顧惜、千里獨行。遑々道路

[345] 前田淑前掲書、321 頁。

者、以此焉耳。其志氣之雄絶、豈閨閣中物哉。走幼聞。近時女子之才者。以美濃細香、京師紅蘭、江戸文鳳、筑前小琴及采蘋、爲尤。而或死、或耄。総為隔世想。而獨采蘋健在。歯髪未衰、突然来得以相見於此地。是亦不近來一談欠哉、所恨面無脂頭不櫛耳。今借其舊稿二巻、轉呈供嘱。願老台明日携此稿於朝、與同官諸公乗間瀏覧、亦足破俗況之一悶。不一。[346]

八月十八日

土屋矢之助

（土屋蕭海、前田陸山に與ふる書

采蘋なる者有り、原古處が女なり。現来て瓦街三笠屋に宿る、介を致し、見を求む、就て之に接するに、年方に六十二、才思蓊勃として、善く詩を作る、文も亦雄健なり、直に胸臆を攄す、本邦の呉相如と謂ふ可し。彼言ふ、先父の遺稿、未だ上梓を得ず、是れ妾の平生の痛心なり。将に遍く海内の諸彦と謀り、以って吾が蓄志を伸さんと欲すと。其れ自ら顧惜せず、千里獨行す。遑々たる道路は、此を以てのみか。其志気の雄絶、豈に閨閣中の物なるかな。幼より聞を走らす、近時女子の才ある者、美濃の細香、京師の紅蘭、江戸の文鳳、筑前の小琴及び采蘋を以て、尤と為す。而して或は死し、或は耄たり。総じて隔世の想と為す。而して獨り采蘋健在なり。歯髪未だ衰へず、突然来り得て以て此地にて相見ゆ、是れ亦た近来の一談欠にあらず、恨む所は面に脂無く頭は櫛らざるのみ。今其旧稿二巻を借りて、轉呈して嘱を供す。老台、明日此の稿朝に携ふを願ふ。同官諸公にと間に乗じて瀏覧せしめ、亦俗況の一悶を破るるに足る。不一。）

八月十八日

土屋矢之助

土屋蕭海は名を棖、通称矢之介、字は松如、蕭海はその号である。蕭海は安芸の坂井百太郎に師事し、後江戸に出て羽倉簡堂について学んだ。帰国してからは門弟数百人に及ぶほどの名士となり、藩校明倫館助教、藩主の侍講、藩の政事堂記録方を兼務した。日頃より吉田松蔭、妙圓寺僧月性との交際を深めており、「蛤御門の変」においてそれまでの職を解かれ蟄居し、間もなく三十六歳でこの世を去った。采蘋との面会は初めてであったようだが、萩は原古処の旧知が多いことと、また羽倉簡堂や坂井百太郎とのネットワークを頼りに采蘋は萩での拠り所として土屋蕭海を頼ったのであろう。

前田陸山は通称岩助、名は利濟、字は致遠、陸山は号である。萩藩の郡奉行兼用談役という地位にあり、百七十三石を食み、この時四十三歳であった。吉田松蔭を擁護し、後、「蛤御門の変」で要職にあったため元治元年(1864)十二月、斬罪に処せられた。

蕭海は采蘋が父の遺稿の上木の願いを長年抱いていることを聞いて、なんとか手助けを

[346] 井上蘭崖「萩に於ける古處山樵と其女采蘋女史」『筑紫史談』第五十八集、1933 年 4 月。

考え、前田陸山に古処の旧稿を持参し、同官諸公にも見てもらいたいと考えたのである。興味深いことに、蕭海は幕末に活躍した女性詩人に美濃細香、京師紅蘭、江戸文鳳、筑前小琴及采蘋を挙げている。この記述から、当時名が知られていた女性漢詩人はこの五人であったことが判明するのである。その中で、「獨り采蘋健在なり。」と言っているのは現役で活躍している詩人という意味であろう。紅蘭は明治まで長生きをしたし、細香も采蘋よりは長生きをしているが、彼女たちは「或は耄たり。」に数えられたのであろうか。「獨り采蘋健在なり。」という言葉からは蕭海の采蘋に対する評価の高さが窺われる。

3-2 萩における終焉

采蘋の萩における終焉の状況とその後の処置等については『筑紫史談』に井上蘭崖氏が発表した「萩に於ける古處山樵と其女采蘋女史」[347]と前田淑氏の「女流漢詩人　原采蘋の晩年」[348]にすでに紹介されている。この二つの論文は秋月に残る土屋蕭海の手紙と秋月の原家の遺族からの手紙などの全文を紹介することで、二か月近く過ごした萩での采蘋の最後の様子を詳しく伝えている。ここでは上記の二つの論文を参照しながら、采蘋の死後土屋蕭海が秋月藩に送った手紙の内容を検討し、さらに秋月の原家親族からの返書、また土屋蕭海の手塚来助・戸原養甫[349]宛ての手紙の内容をあらためて検討することによって采蘋の臨終の状況を把握したいと考える。

采蘋は萩に到着してしばらくしてから流感に罹り、十月一日、土屋蕭海の看護の甲斐もなく六十二歳の生涯を閉じた。土屋蕭海は死後の始末の一部始終を書いて秋月藩の役人に報告している。この手紙には采蘋の看病の様子から臨終に至った経緯、その際の采蘋の遺言、さらには墓の世話から初度の法要まで、土屋が執り行った事実が事細かに報告されている。これによって采蘋の病が一度は快方に向かい、重陽前日には同伴遊行まで出来たことが知られる。また遺言の内容についてもこの手紙によって知ることが出来る。

> …当萩表江到着相成候由當人より承り及候…追々効験も相見え氣力も快く相成候故重陽前日には同伴遊行など致候、繼而再發終に伏枕に至申候。然処旅舎混雑中彼是差障節に有之に付、兼而諸國文武修行之爲被建置候旅舎江当人自力を以て滞留致度段拙者より願出候処、女中之義に候得共希有之人物故、格別之筋を以、如願沙汰相成、直様其方江引移申候。日夜看病無懈加養候得共、長病之事故、腸胃衰弱甚敷、終に当月朔日朝没去被致候。早速役筋江届出検分人等引請、無故障事相済候上、拙者旦那光善寺内江仮葬致置申候。
>
> 当人病中、貴藩江御懸合に及、親類等も有之候はゝ伝達可致と、再度申聞候得共、一向に引受無之候。天外獨遊之身に候得は不及其義、萬一不諱之節は厄介なから拙者旦

[347] 『筑紫史談』第五十八集、1933 年 4 月。
[348] 前田淑『江戸時代女流文芸史〔俳諧・和歌・漢詩編〕』笠間叢書 321、笠間書院、1999 年 2 月。
[349] 手塚家は原古處の実家であり、戸原家は古處の実母の最初の嫁ぎ先。

家へ土葬致呉候はゝ更々遺憾無之候、只心懸りは先父之詩稿未た上木不致に付、兄江託候故、折も有之時は念願相届候様、是のみ賴入との事に候。且又當人詩文稿は可取者あらは先父の後に附刻し、尚墓銘等相調被呉候はゝ望外なりと申居られ候。折角の懇嘱難抛當人之心願相果度存候得共、貴藩江相伺候上ならては自己に取計も心苦敷候故、遺骸は壺中江貝炭を錮め藩法に随ひ先假葬式取行申候。當人如願當地へ本葬し、墓碣等建調候義、御差障無之候はゝ、被仰納候上、先例も有之候故、役筋江願出如形相計ひまゐらせ候。直前後費用等は小々潤筆等も有之候故、彼是取集め行置申候。尤昨二日晩刻當人世話致候者共取集め寺内にて初度之法事相營申置候。荷物等は拙者方に預りい置候間、貴藩御答之上便宜所置可致候。

役筋より此度人差出候事故、表方取計之義は其入江御懸合可被遣候。尚御内存も有之候はゝ無殘被御開可被下候。

右之次第原氏跡筋へ可申入候処、当人存生中相尋候得共、差たる一言も無之、様子不相分□□已貴藩御役筋江御風□に及申候。先者右之件申上度、乍匆略如此御座候。以上

十月三日　　土屋矢之介　拝具

秋月御藩にて諸藩懸り御役人中様　御史

匆々相認文字誤脱失敬等之處も有之候得共不□改書□□重々も御了怒可被下候。

又白。[350]

上記の手紙から土屋蕭海は生前の采蘋から原氏跡筋について聞きだそうとしたが、天涯独遊の身であると言い張って、一切話そうとしなかったことが分かる。そのため蕭海は仕方なく秋月藩宛てに手紙を差し出した訳である。臨終にあたっての采蘋の願いは父の遺稿の上木と、出来れば自分の詩稿も附録として上木したいと伝えている。その他、墓碑銘等のことも頼んでいる。これに対し、実際に土屋蕭海が果たしたことは、葬義、初七日の法事、墓碑銘等の調達は滞りなく済ませたが、念願の古処と采蘋の詩稿の上木は果たすことが出来なかった。この事の詳細については後に示す土屋蕭海の第二信に説明されている。

下記の手紙は、土屋蕭海の報告に対して秋月藩が原家に連絡したが、当主の原正助がたまたま参勤交代の御供で留守中ということで、親類の者が代わりに返事を送ったもののようである。

飛禮拝見仕候然者原采蘋義八月中旬頃より貴藩え罷出貴家へ御便り申し上げ候ニ付追々御世話被下途中より不快ニ御座候由其末流行之病ニ懸り就而ハ療用等不一方御芳志ニ預り候段千萬奉拝謝候爾後病症次第ニ危篤に相迫り終ニ及大故遺骸ハ御且寺へ土葬被下且世話致呉候者共に佛事の御營迄御計被下候旨此節公邊之御厄害ニ相成候段

350 萩藩土屋蕭海『采蘋女史訃報』寫（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵

重々奉恐入候義ニ御座候猶又貴君よりハ初中後御深情之御世話被下候義拝謝難有盡筆紙将又采蘋臨終ニ申置候義彼是當方支障之義も無之候ハヽ墓碑等御建立も被下候趣重疊御懇切之程奉感銘候當藩采蘋家本原正助與申者此度主人参勤之供ニ而旅行仕留守之義ニ候へハ何も不能委細親類申合一應書中之御禮答申上置候何様不日壹人差出候様可仕含ニ候間萬事期其時候先ハ貴酬迄早々如此御座以上

十月九日認

原正助親類中

土屋矢之助様

二白萬一不得已御用事御座候ハ節黒崎驛主人甲斐守蔵屋敷御座候間下之關へハ不断便船御座候下之關御屋敷迄御書状御指出被下候得より早速相達可仕候為念此段申上置候用事迄早々以上[351]

（飛礼拝見仕り候ふ。然れば、原采蘋が義、八月中旬頃より貴藩え罷り出で、貴家へ御便り申し上げ候ふニ付、追々御世話下され途中より不快ニ御座候ふ由、其末流行の病ニ懸り、就而ハ療用等一方ならず御芳志ニ預り候ふ段、千萬拝謝し奉り候ふ、爾後病症次第ニ危篤に相迫り終ニ大故に及び、遺骸ハ御且つ寺へ土葬下され、且つ世話致し呉れ候ふは、共に佛事の御営迄御計り下され候ふ旨、此節公邊の御厄害ニ相成り候ふ段、重々恐入り奉り候ふ義ニ御座候ふ。猶ほ又貴君よりハ初中の後御深情の世話下され候ふ義、拝謝筆紙に盡して有難し、将た又采蘋が臨終ニ申し置き候ふ義、彼是當方支障の義も之無く候ハヽ、墓碑等御建立も下され候ふ趣、重疊御懇切の程感銘奉り候ふ。當藩采蘋家本原正助と申者、此度主人参勤の供ニて旅行仕り留守の義ニ候へハ、何も委細能ず親類申し合せ一應書中の御禮答へ申し上げ置き候ふ。何様にも日ならず壹人差し出だし候ふ様仕り可く含ニ候ふ間、萬事其時を期し候ふ先ハ貴酬迄早々此の如く御座候ふ。以上。

十月九日認

原正助親類中

土屋矢之助様

二白。萬に一も已を得ず、御用事御座候ふ節ハ、黒崎驛主人甲斐守蔵屋敷御座候ふ間、下之關へハ不断便船御座候ふ。下之關御屋敷迄御書状御指し出だし下され候ひ得るより早速相達し仕る可く候ふ。念の為、此段申し上げ置き候ふ。用事迄早々。以上。）

秋月藩に送られた土屋矢之助の手紙は前部の欠損から采蘋の病状についての説明が不明であったが、上記の返書によって、萩についてから体調を崩し、流行病に罹ったことが判明する。病状は一時は快方に向かったことは土屋氏の手紙にあるが、その後次第に悪化し

[351] 『筑紫史談』第五十八集、1933 年 4 月。

て遂に危篤となったと書かれている。原家の後継者原正助はたまたま参勤交代の御供で留守中とはいえ、土屋蕭海に対する返書が親類中から出されたことについては、采蘋が臨終に当たって原家の後継者について一言も話さなかった事からも容易に察することが出来る。この後に、手塚来助と戸原養甫が連名でお礼の手紙とともに秋月の名品を土屋蕭海に送ったものと見られる。そのことは蕭海が手塚来助と戸原養甫宛てに第二信として十月二十日付で送った手紙の内容から分かる。蕭海の第二信を以下に示す。

過日飛脚之者罷歸候節、公邊御状并貴柬到來拝讀原子御様子了悉慰心此事ニ候。当時原氏御跡筋在江戸ニ付而は、御親家中様御配慮之程奉察候。繼而今般專介被差御兩家連名之御答書慥ニ到手薫誦仕候、未得拝面候得共、御兩家益御健勝之由奉慶賀候、小生無異御放慮可被遺候。來柬厚き御挨拶ニ預候のみならず、御國産帶地紫金苔兩品御惠投、汗顔之到ニは候得共折角之御懇志忝奉拝受候。扨、古處先生遺稿上木之義同人差たる手当も不相見候。

没後探両懸候處、手箱に金子拾兩包壱ツ、三兩包壱ツ、財布中ニ壱兩ト國札二十目計も御座候故、幸此度之一件雜用に相用ひ申候。委細は別紙一ツ書之辻篤と御覽可被下候。又好手段も御座なく候得共、同人御遊歴之趣意は処々にて潤筆等を得、其力にて素志御企之様子ニ相見申候。当地御滞留中追々詩作等乞候者も有之、無事之義ニ候ハヽ少しの助には相成可申之処、病中故不任意、僅カ金子壱兩余も呈シ候者のみにてはかばか敷事も無御座候。右之次第故古處翁之詩稿上木之義不輕事ニ御座候得共、小生知人大阪書林河内屋と申者、此節小生校閲致候書籍を上木ニ取懸り候最中故、相濟次第右古處翁遺稿采蘋君詩集上梓之義相談ニ及ふへき覺悟ニ御座候、其節ハ友人よりも少々之助力は可致候と存候のみ、外に好手段も無御座候、尤貴藩にて思召も御座候ハヽ何時にても御返し可申候、此度は父子稿本は先留置候間、左様御承知可被下候、荷物は相改御来使江相渡候故、別紙付立前御照被成御受取可被下候。

當人病中著服絹綿入れ弐枚は其侭にて埋め置申候、外に穢れ候衣服壱枚は宿の下女江遣シ申候。銀の小きかんさし御座候故、同様下女江遣申候。寺中江は國之常例に任せ絹袷壱枚相納度故、御來使御相談の上如形取計申候。

墓碣は此節彫刻最中にて、当月中には出來可仕候。

孝愍女史原采蘋君墓

と表江金字彫りに致候積に御座候。委細御来使江御聞取可被遣候。右之次第逐一申上候間此段御承知可被遣候。一応之御答まて早々如此御座候。時下冷寒御自愛可被成候。不一。

十月廿日　　土屋矢之介　拝

手塚来助様

戸原養甫様

二賢机下[352]

上記の手紙によって親せき筋の手塚来助と戸原養甫が原正助に代わって蕭海のこのたびの親切に対してお礼をしたことが明らかである。蕭海は二人に対して、采蘋の遺言である古処の遺稿の上木に関して状況を詳しく説明している。それによれば、采蘋の所持金は僅かに十三両ほどでとても遺稿の上木には足りないこと、そのため自分の知り合いの大坂書林に頼んで、友人からの出資を募り出版にこぎつけたい旨を書いている。秋月に伝わる話として、「采蘋は出版費用として三百両の資金を持参していたはずである。」と言われるが、確かな証拠があるのかどうかは知り得ていない。また蕭海は、取り行った遺品の後始末についても詳細に説明し、所持金の使い道は別紙にて詳しく報告している[353]。墓碣についても「彫刻最中にて」と報告しているように、蕭海は「萬一不諱之節は厄介なから拙者旦家へ土葬致呉候はゝ更々遺憾無之候」と采蘋が希望した通り、土屋家の菩提寺である光善寺の墓所に土葬し、烏帽子型の自然石でいかにも采蘋に相応しい墓石を建立した。光善寺は明治の中期に廃寺となり現在は三千坊という寺に合併されている。采蘋の墓は三千坊の墓所に現存する。采蘋の墓は別に秋月の原家の墓所西念寺にも建てられているが、こちらには萩から持ち帰った頭髪などが収められているという。住宅地に囲まれた三千坊の墓所には、はるか秋月から離れて采蘋の遺骸が葬られている。采蘋の遺品から見つかったという「孤負」という詩はそのことを象徴しているかのようだ。

第Ⅷ章　終章

一節　采蘋にとっての「孝」

采蘋は儒教の経典の一つ『孝経』を最も尊重した父原古処の教育を受けて、江戸に在っても毎年の新年に『孝経』を書写している様子が日記に見えるほど孝を重んじた人であった。この姿勢は多くの友人知人が認めることであり、戸原卯橘が采蘋の再発郷にあたって送った詩序に「先生孝の純者なり」と言い当てていることからも納得出来ることである。

原古処の教育の厳しさを窺わせる出来事は、古処が次男の瑾次郎に贈った手紙の内容によって知ることが出来る。

> 中元にはお出と存候處如何なる次第に候や、みちに詰問いたし候處色々申譯のみいたし候へ共、大風雨もなく男子の不被参事は無き事と存候。今日杯も病用には他行の由、病用には参り、両親えは無禮、書物は何の爲に讀候や承度候。…下渕おどりの由お出等無用に候、町家中は遠慮之様申候、御領分之儀此折柄料簡違等は無之様存候。申遣すにも不及事なから中元の禮も打ぬかす位之人物故又心得違もやと爲念申入候。」[354]

---

[352] 『采蘋女史訃報　寫』（山田信一郎氏写本）秋月郷土館蔵

[353] 『采蘋女史訃報　寫』（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵

[354] 山田新一郎編『第一巻　原古處先生小伝』、28 頁。

この手紙は古処が甘木詩社で教えていた頃、中元の挨拶に来なかった次男の瑾次郎に対する無礼を非難したものである。このような父の厳しい態度を知っている采蘋は、父の教えに逆らうことなく日々努力したことであろう。采蘋の孝に対する気持ちは平生から父母兄弟を想いやる気持ちとして詩に表れている。次の詩には弟瑾次郎に対する思いが込められている。

暮春懐家弟在豊　　暮春　家弟豊に在るを懐しむ
吾弟遊豐北　　吾弟　豊北に遊びて
歸期阻滞霪　　帰期　滞霪を阻む
春光逐流去　　春光　流れを逐ひて去り
日暮倚門吟　　日暮　門に倚りて吟ず
滴滴疑人至　　滴滴として　人の至るかと疑ひて
依依忘夜深　　依依として　夜深きを忘るる
栽詩題四壁　　詩を栽して四壁に題すれば
枉破寂寥心　　枉らに　寂寥心を破る

この詩は弟の瑾次郎が豊前に遊学している時に、その寂しさから帰りを待ちわびている様子を詠ったものである。文政六年以降の詩とみられる。次の詩は、父の病気の知らせを聞いて、兄伯圭が豊前巌邑より帰省し、久しぶりの再会を喜び、詩に賦したものである。

伯氏從豊帰、喜而賦。　伯氏の豊前より帰る、喜こびて賦す。
時月之間不見君　　時月の間　君に見えず
胸中鄙客日紛紛　　胸中　鄙吝　日び紛紛たり
何圖一夕圍爐處　　何ぞ圖らん　一夕　爐を圍ふ處
淡蕩詩懐劈絮紋　　淡蕩詩懐　絮紋を劈く

人日
今年春勝去年春　　今年の春は　去年の春に勝る
兄弟承歓陪二親　　兄弟歓を承け　二親に陪す
憶在長安行樂地　　長安の行楽地に在るかと憶ふ
曽爲人日思郷人　　曽て人日は郷人を思ふが為なり

上記の詩にみられるよう采蘋の兄弟を思う気持ちは人一倍強く、それは采蘋の詩中に多く登場している。采蘋の孝心は兄弟だけでなく父母に対しても同様であった。後にこの孝心の強さは采蘋の人生を思わぬ方向へと導く結果となったのである。本節では采蘋の父母

兄弟への孝をそれぞれの項目に分けて考察することで、彼女の人生にどのように影響を及ぼしたのかを検証する。

1-1 父に対する孝心

采蘋の父に対する孝心は、幼い時からの父の教えによって育まれていったことは上記で見て来た。采蘋の父への孝心を顕著に示す出来事は、京都の遊学中に父の病を聞いて急遽帰郷し、病床に付き添い、看病に当たったことである。漢詩人として名を揚げるために単身京都に遊学したこと自体、実は孝を実践するためであったが、父の看病を優先させることを選択した。これは兄白圭の依頼でもあった。文政十年、采蘋の手厚い看護にも拘わらず父が亡くなり、京都出発前に渡された「不許無名入古城」という送別の辞は遺言となった。この時から六十二歳で生涯を閉じるまで、このフレーズは繰り返し采蘋の詩に登場し、彼女の人生を制約し続けることとなる。

父の死後江戸に旅立つ途中、豊前岩熊（福岡県京都郡勝山町）の白圭を訪ね、その時に塾生であった村上彦輔[355]の送行の詩に対して答えた詩にこの句が早速登場する。

村上彦輔有送行之詩　　村上彦輔の送行の詩有り
三千屈指予期程　　三千指を屈して　予め期を程す
幾歳琴書尋旧盟　　幾歳の琴書　旧盟を尋ぬ
數脚胡床移水面　　数脚の胡床　水面に移して
一樽村酒有風情　　一樽の村酒　風情有り
絳河星少懸明月　　絳河星少なく　明月に懸る
俊嶂秋高佳夕晴　　俊嶂秋高くして　夕晴に佳なり
看取此行我有誓　　看取す此の行　我に誓ひ有り
無名豈敢入山城　　名無くして豈に敢て山城に入らんや

愛する兄弟に別れて、女性の身で単身遠い江戸を目指すこの旅に、不安は大きかったであろう。結句に父の遺言を入れることでこの旅の目的意識を明確にし、自分自身にも自覚させる意味が込められている。

次の詩は途中広島の頼杏坪を訪ねた時に杏坪の詩に次韻したもの。

次韻杏坪先生　　杏坪先生に次韻す
父執有君孤不孤　　父執君有り　孤にして孤ならず
相依遍接搢紳徒　　相依りて遍く接す　搢紳の徒
區區自抱地方寸　　区区　自ら抱く　地の方寸
杳杳重遊天一隅　　杳杳　重ねて遊ぶ　天の一隅

[355] 村上仏山の兄

羈雁飛鳴迷沢國　　羈雁　飛び鳴きて　沢国に迷ひ
家人思夢入江都　　家人夢に思ひて　江都に入る
如教志業青年遂　　如し志業をして　青年に遂げしめば
世上寧無逐臭夫　　世上　寧んぞ臭を逐ふの夫無からんや

〇方寸：心。〇沢国：水郷地帯。

杏坪は父を失った采蘋を心配し、結婚をするよう勧めたのに対して采蘋は次の様に答えている。「もし若いうちに志を遂げる事が出来たら、世の中には物好きな人がいて、私のようなものでも好きになってくれるかもしれない。その時には結婚もしましょう。」と。結婚を望まないわけではないが、父への孝を優先する采蘋の決心を表している。

江戸で暮らし始めて十年近くが過ぎた新年の作にもその決意が表れている。「多病」「白髪」「帰心」という言葉は江戸の生活が決して楽ではないことを物語っている。『孝経』を書写していた采蘋の新年にあたっての誓いである。

新年書懐　　新年に懐ひを書す
撞破楼鐘百八聲　　撞破す　楼鐘　百八声
還郷夢斷已天明　　還郷の夢断ゆれば　已に天明
清晨照影憐多病　　清晨　影を照らして多病を憐れみ
白髪形愁生数茎　　白髪　愁ひを形りて数茎を生ず
詩興久因医藥廢　　詩興　久しく医薬に因りて廃し
歸心空逐夕陽傾　　帰心　空しく夕陽を逐ひて傾く
十年孤客遺言在　　十年　孤客　遺言在り
豈敢無名入故城　　豈に敢て名無くして故城に入らんや

「豈敢無名入故城」のリフレインによって自らの人生の目的を再認識しているように思われる。最後の出郷の時に携えていた遺品の中に発見されたという紙片に書き遺された次の詩にもこの句がある。この句の意図する所は言うまでもなく「成功するまでは故郷に帰ることを許さず」というものである。これまで采蘋の人生を検証してきた限りでは、采蘋の名声はすでに房総半島から九州鹿児島・琉球に到るまで行き届いていたことを確認できた。とすればこの句の意味する所は采蘋にとって異なる意味を持っていたことになる。はたして采蘋にとってこの句の意味する所は何であったのか。

孤負
孤負恩師與父兄　　恩師と父兄に孤負す
雲樓水宿不留行　　雲樓　水宿　行くを留めず

但吾縱作山阿骨　　但だ吾れ縱ひ山阿の骨と作るも
不許無名入故城　　許さず　名無くして故城に入るを

采蘋の一生は「孝」のために生きた人生であったという印象が強い。第Ⅳ章で見て来たように采蘋は父の死後、遺言となった「不許無名入古城」という詩句を自らの人生の目標と定め、六十二年の生涯を父の遺命を全うするために費やした。そのため采蘋の人生の背後には常に原古処の遺命が付いて回り、一生涯その遺命から逃れることは出来なかった。この理由から采蘋の生涯は、詩集から受ける限り苦痛に満ちた哀愁の色合いが濃いものとなっている。この点は同じく自らの意志によって人生を選択した江馬細香や梁川紅蘭の人生観とは異なった印象を与えている。采蘋が孝のために選択した人生は、名声を得て、家名再興を果たすまでは、生涯嫁がず、江戸においてそれを全うすることであった。この選択が江馬細香や梁川紅蘭と違い完全に自分の意志でなかったところに采蘋の人生が悲壮感を感じさせる所以であると思われる。

要するに采蘋の苦悩は、父の遺言である家名再興を実現することと、江戸時代に課せられた女性の婦徳との板挟みに翻弄され続けた結果によるものであった。「孝」を最も重視した采蘋の苦悩は「若し獨立して一家と作らんの後を待たんと欲せば、後に其の養を致すと。安んぞ能く其の風樹の恨無きを保つあらんや。是れ蘋の晨夕惚悩する所以なり。幾たびか狂を發せんと欲す。」[356]という言葉によく表れている。秋月藩主に提出した上書には采蘋の「孝」に対する考えがはっきりと示されている。「妾固く人に嫁さず、獨立経営、爲す所有るを欲す、亦た唯だ父母の爲なり。」と言う言葉からは、采蘋の選択した人生が父母に対する「孝」の理念から生まれたものであることを明確にしている。父の遺言を全うし、遺稿の上木を果たすのは父への「孝」であったが、母に対する「孝」はまだ存命である母に孝養を尽くすことである。

1-2 母への孝養

采蘋は父への孝心として、遺言を果たすべく江戸に暮らして既に十年以上が過ぎたころ、名声は江戸のみならず関東近郊に届いていたが、父の遺稿の上木が果たされないままであった。母の様子は時折手紙によって知らされていたと思われるが、年老いた母を他人に任せ、遠くで暮らすことに良心の呵責に悩んでいた。すでに第Ⅴ章で詳述したように、天保十二年、采蘋は意を決して秋月藩の井上参政に宛てて上書を提出し、母を江戸に呼び寄せることを請願したのである。もしこれが実現すれば、江戸において父の遺稿の上木と母への孝養も同時に出来ると考えたのであろうが、秋月藩の藩政はこれを許さず、采蘋はこの数年後、母の病気を期に帰郷を決心したのである。父の遺稿の上木が果たせないまま帰郷することは苦渋の選択であったことは明らかである。しかし、かつて京都に遊学中、父の病気を聞いて志半ばで帰郷した時と同じく老母の看病を優先することを選んだのである。

[356] 天保十二年に参政井上庄左衛門に提出した上書。

帰郷後の采蘋は第Ⅶ章で述べたように母を原家の養子の元から引き取り、親子水入らずで暮らすことで、長年の親不幸を解消することに努めた。この頃の母への孝養の一例として挙げられることに、絹の綿入れを作ってあげたことがある。采蘋は山家に移ってから家塾で子弟を教える傍ら、自ら蚕を飼い、糸を紡ぎ、布を織り、それに綿を入れて綿入れを作って母にプレゼントした。これを知った秋月藩は折からの倹約令のため上司から注意を促してきた。これに対して采蘋は「自力をもって綿を作り、老親を慰め、孝道の一端を致したるなり、老者に綿を衣するは古来の道にして奢侈贅沢を為すものにあらず、親に孝を尽くすに何の妨げかこれ有らむ」と答えたという[357]。

1-3 父母兄弟の墓の整備

肥薩遊歴後、采蘋は原家の墓所の整備に当たった。母の死去に伴い墓石を建立するに当たり、父の墓石も秋月藩儒としてその業績に相応しいものに建て替えたのである。この計画はかなり以前からのもので、江戸に在住していた時、弟子の吉田平陽に墓碑の撰文を依頼していたことが平陽の采蘋宛ての手紙に、「古處先生墓誌漸く出来、行状書取揃指出候…墓誌思召通相叶可申哉些模様違に被存候得共、御熟覧可被下候。此分にて宜敷候者、早速御下し可被成候」[358]とあることから知ることが出来る。しかし結局采蘋はこの撰文を使わなかった。古処の墓碑の撰文には天保六年に書かれた亀井昭陽の草稿が残っているが、采蘋はこれも採用しなかった。

そもそも文政十年に亡くなった原古処は遺言に「我死則子母印、孤犢刀、以飾遺骸、多栽花柳、題詩人原古處墓而可也。」[359]と残している。遺族は遺言に従って墓石を建立し、花柳を栽えたと思われる。しかし采蘋はその墓碑は碩儒原古処に相応しいものではないと考え続けていたのである。采蘋が父の偉業を顕彰するに相応しいと考えて立て直した墓石は大きな花崗岩に「原古處先生之墓」と書かれており、墓前には石灯籠を建て、そこに「安政五年戊牛采蘋建之」と刻んである。墓碑の背後に刻した撰文には亀井昭陽のものでもなく、また平陽に依頼したものでもなく、広瀬淡窓が古処の退黜に当たって贈った詩を採用したのである。その詩は、

梅苑春風鳴佩環、承恩嘗厠侍臣班、嚢中諫草焚皆盡、唯有新詩落世間。

（梅苑春風佩環を鳴らす、承恩は嘗て侍臣の班に厠く、嚢中の諫草盡く皆焚き、唯新詩世間に落つる有り）

○佩環：玉の装飾品

---

[357] 春山前掲書、164 頁。
[358] 山田新一郎『第一巻　原古處先生小伝』34 頁。
[359] 山田新一郎前掲書、33 頁。

というものであり、古処の退黜の理由を明らかにしている。采蘋がこの詩を刻した理由は、古処の退黜の理由をはっきりと後世に知らせることで、父の無念を晴らすことであったと思われる。そのためならば父の遺言も聞き入れなかったのである。采蘋にとってただ単に父の偉業の顕彰だけならば亀井昭陽の立派な撰文があり、これを採用するはずである。淡窓の詩を選んだところに原父子の秋月藩との葛藤が見られる。

秋月藩は采蘋が新たに建て直した自然石の古処の墓に対して、分不相応であると注意を下した。采蘋は「孝は百孝の本なり古語にも罔極と謂へる如く孝に限度あることなし。自力を以て親に至情を致すに何不都合かこれ有んや」[360]といってその注意を無視したという。

1-4 父の遺稿の上木

采蘋は人生の中で自ら成し遂げるべき孝を心に決めて、長年その機会を待って次々に実行に移していった。これまで成し遂げた孝は上記で見て来たように、①家名を揚げること、②母に孝養を尽くすこと、③父母兄弟の墓を改造することであった。最後に残された孝は父の詩集の上木であった。原古処の詩集は現存のもので十八冊あると言い、およそ五、六千首に達するという[361]。この難事業は江戸在住中に成し遂げる予定であったと思われるが、母の病気によって帰郷を余儀なくされたため実現出来なかった。采蘋は帰郷後盛んにその事業を気にかけ、友人にも話していることからも、采蘋にとって心残りの事業であったことが察せられる。そのことは河野鐵兜が村上仏山に寄せた書にも書かれている。

> 河野鐵兜寄村上佛山書曰（女史寓筑前山家駅、養母下帷）
> 山家より（采蘋を）引つ張つて太宰府に至る。二宿して別る。古處翁遺稿上木の事を願ひたり。願くは先生加力せよ。[362]

河野鐵兜は采蘋の願いを聞いて「願くは先生加力せよ」と、願いが叶うよう頑張ってほしいとの気持ちを村上佛山に伝えている。

しかし、山家駅での生活は苦しく、遺稿上木の費用など出来るはずはなかった。その後采蘋は肥薩遊歴の旅に出るのだが、これによって得た資金はほぼ原家の墓所の整備に使われたと考えられる。もともと三都にて上木する願いがあったと思われ、故郷でのなすべき孝を終えた采蘋はいよいよその目的達成のために江戸に向けて出発した。采蘋の最愛の弟子と言われた戸原卯橘はこの時二十五歳、たまたま江戸遊学から戻り、采蘋の最後の出郷を送った。その時の詩序は采蘋の孝に対する考えを見事にいい尽くしている。以下にその文を揚げる。

---

[360] 春山前掲書、182 頁。
[361] 山田新一郎編『第一巻　原古處先生小伝』35 頁。
[362] 山田新一郎編『第三巻　原采蘋詩鈔』78 頁。

送采蘋先生序

…己未之春二月。將復出秋月。年已六十二矣。所齎者古處先生之遺集也。郷人或笑之或柅之曰。君已老矣。將安適也。予聞之曰。是二人未足與議也。先生孝之純者也。而此行也。孝之尤大者也。先生之在江戸也二十有三年。一日聞大孺人病。山海三千里。晝夜兼行輙歸。乃侍左右。承色奉歓。定省三年。無所不至也。聞之昔時古處先生之病烝也。亦自京師返。致養畢服。而後出郷。人稱其至孝云。今先生之孝。既已如終竟者。然此行也。人或不能之。父母死則曰。羞甘嘗旨已能致養。我無復恨矣。是世俗之所謂孝也。白圭先生早卽世。其後易世者四人。而先生孑然獨存。於是常以梓遺集爲任。今瓢然不持寸緡而出郷。其成宿志。期以千日。則其立身行道。揚名後世。以顯父母者。是爲孝之大且終也。…[363]

（…己未の春二月。将に復た秋月を出んとす。年已に六十二。齎す所は古處先生の遺集なり。郷人或はこれを笑ひ或はこれを抳ひて曰ふ。君已に老たり。将に安んぞ適せんや。予これを聞きて曰く。是二人未だ議に與するに足らず。先生孝の純なる者なり。而して此の行や。孝の尤も大なる者なり。先生の江戸に在ること二十有三年。一日大孺人の病を聞くや、山海三千里。晝夜兼行輙ち歸る。乃ち左右に侍る。色を承り歓を奉ず。定省すること三年。至らざる所無し。これを聞くに昔時古處先生の病烝たり。亦京師より返る。養を致し服を畢る。而して後郷を出づる。人其の孝の至れるを稱して云はく。今先生の孝、既に已に竟り終る者の如し。然れども此の行なり。人或ひはこれを能はず。父母死して則ち曰ふ。甘を羞じ旨を嘗めて能く養を致すと。我復た恨無し。是れ世俗の所謂孝なり。白圭先生早く即世す。其後世を易る者四人。而して先生孑然として獨り存す。是に於て常に遺集を梓するを以て任と爲す。今瓢然と寸緡を持たず郷を出づ。其の宿志を成すに、千日を以て期す、則ち其れ立身して道を行く。名を後世に揚げ、以て父母を顯はすものなり。是れ孝の大にして且つ終と爲すなり。…）

卯橘は言う、父と母の病のために旅先から戻り、二人のために孝養を尽くしたことで十分であるのに、六十二歳でまた旅立つことを決心したという。郷人はこれを非難したり止めたりした人もあったが「孝の純者」である采蘋は聞く耳を持たず、その目的のためにまた郷を出づるという。「則ち其れ立身して道を行く。名を後世に揚げ、以て父母を顯はすものなり。是れ孝の大にして且つ終と爲すなり。」と卯橘が書くように、采蘋にとっての孝は立身出世をして、家名を揚げることで父母を顕すことであった。そのためには父原古処の詩集の上木と自らの詩集も付加して出版することは不可欠であるとの考えであった。「千日を以て期す」とあるように采蘋は三年間の予定で宿志を成し遂げたいと考えていたようで

[363] 春山前掲書、176-177 頁。

ある。

二節　采蘋のジェンダー意識

某人擧女子請予字之	某人の女子を擧ぐるに、之に予の字を請ふ[364]
生女休言不足奇	女に生まるに　言ふを休めよ　奇とするに足らずと
慰情他日勝男兒	慰情は他日　男児に勝る
卽將女子爲其字	即ち女子を将ちて　其の字と為す
幼婦黃絹是好辭	幼婦の黄絹　是れ好辞

上記の詩は、東遊の途中、広島を過ぎて尾道に至るまでのどこかで詠んだ詩である。女子が生まれると「奇とするに足らず」とがっかりするものだが、そんなことはない「慰情は他日　男児に勝る」と女子が生まれたことを称賛している。この気持ちの裏には、采蘋自身が女に生まれたことを悔やみ、また父も采蘋が男であったらと望んだに違いないと思う気持ちを、あえて否定し、「男児に勝る」ものであるからがっかりすることはないと自分自身にも言い聞かせている。

采蘋のジェンダー意識を問う場合、江戸時代の家父長制度による原家の後継者問題に遡って考えなければならない。長男・次男の病弱による家督相続の困難さと、采蘋の養子縁組の不成立によって三代続いた儒者の家系は絶えた。原古処はこの無念さをはらすために、原家の家学再興の夢を娘である采蘋に託したのである。

> 悲しいかな。世に生れて女と爲る。千里獨行、豈に容易ならんや。始めて蘋東遊するや、聞く者皆令笑す。以て女侠の流を學ぶと爲す。[365]

上記の文章は江戸に暮らし始めてすでに十四年が過ぎた頃の述懐である。采蘋は二十代のころから父の願望を一身に受け、その望みを実現したいという野心と自信に満ちていたことはすでに第Ⅲ章と第Ⅳ章で見て来た通りである。文政八年（1825)、二十八歳の正月に始めて単身京都に向けて出発する時の心意気は、諸葛亮孔明と自分の人生を比較した高揚したものであった。三国志時代の英雄諸葛亮孔明と自分を比較するという発想は、女性としての意識は背後に押しやられている。この頃の采蘋は古処の塾生たちと学び、また教え、あるいは酒席で男性たちに交じって詩の贈答を繰り返していたが、すべて男性の世界でのことで、女性の存在は常に采蘋一人であった。こうした状況の中で、漢詩人として成功するためには自らも男性として意識するほうが自然であったのかも知れない。自分は既に二十八になって孔明に後れを取ったことを愧じているのも采蘋にとってはごく自然な発想で

---

[364] 『東遊日記』中の「□思唱和集」に見える詩。
[365] 天保十二年、井上参政に提出した上書。

あったのであろう。

文政八年の正月、東遊に先立ち福岡の亀井昭陽に挨拶に訪れた際に、昭陽は采蘋が広瀬旭荘に贈った詩を読み、次のような詩を賦した。

讀原女贈廣郎[366]詩。又有此贈。小引。

乙酉人日　　昭陽陳人昱

原詩之起曰。人生爲女定何縁。其結曰。周郎一炬破瞞年。蓋原氏二十八．言男女無如決戦何之意也。故余亦自表其年。以寄窮達無如名士何之情。申挑廣郎之賡酬云。

（原詩の起に曰ふ。人生れて女と爲る定めは何の縁ぞ。其の結に曰ふ。周郎の一炬瞞年を破ると。蓋し原氏二十八。言ふに男女決戦に如ち無きは何の意なりとぞ。故に余亦た自ら其年を表はす。以て寄するに窮達名士に如き無きは何の情ぞ。廣郎の賡酬に挑んで申して云ふ。）

天下大名盛孝章。丈夫雄物有誰當。孔融五十方過二．欲上論書瞞已亡。

（天下大名孝章盛んなり。丈夫雄物有りて誰か當らん。孔融五十方に二を過ぐ。論書を上んと欲して瞞されて已に亡しと。）

広瀬旭荘が采蘋に贈った詩は以下の通りであった。

席上得賈韻

相逢相避鶴城南、一夜清談任酒酣、更羨剪刀栽錦手、還將文筆拂烟嵐。

（席上賈の韻を得る

相逢ひ相避く鶴城の南、一夜の清談酒酣に任す、更に剪刀錦手を栽つを羨む、還た文筆を将ちて烟嵐を拂ふがごとし。）

これに対し采蘋が広瀬旭荘に贈った七言絶句は一句目の「人生為女定何縁」と結句の「周郎一炬破瞞年」のみが残されているということである[367]が、この時の采蘋は上記にも示したように、諸葛亮孔明と同じように戦いに挑む心境であったために昭陽の顰蹙を買ったのである。

2-1「爲阿源」にみるジェンダー意識

[366] 廣郎は広瀬旭荘のこと。
[367] 春山前掲書、102 頁。

采蘋の遺稿中、僅かながら采蘋の思想を著す文章が『原采蘋文集』として写本で残されている[368]。その中に「爲阿源」と題する一文がある。采蘋は江戸でこの阿源という女性に会って強烈な印象を受けたようである。貝原東軒と並んで采蘋の思想に強い影響を与えた女性の一人であったと思われる。以下に全文を掲げて采蘋の思想に迫りたいと考える。

爲阿源

余於某侯後宮。識奕者阿源。其爲人純一無他技。專心圍碁。數十年如一日。其至也雖男子不能及者多矣。況於女子乎。可謂一世之女奕楸也。是以大售。出入諸侯後宮。粗無虚日。弘化丙午。其師因碩翁。褒其專心致志。加以一等。併前爲三段。便使畫工寫師弟對局之圖。懸之其所崇信。限日地蔵尊之龕。以爲報恩謝徳也。且需余書其顚末。余不學奕。雖然奕之爲數。其如用兵乎。心操機關之險。手握生殺之權。僅三尺之局。決勝于両陣之間。先者制人。後者制于人。或誤一著。全軍覆没。誰謂奕小數邪。當今四海昇平。而昇平楽事。獨從事于斯。則似忘機却存機。抑居安而不忘危者歟。

（余某侯の後宮に於いて、奕者阿源を識る。其の人と爲り純一にして他技無し。圍碁に專心すること數十年一日の如し。其の至れるや、男子と雖も及ぶ能ざる者多し。況んや女子に於てや。一世の女奕楸なりと謂ふべし。是を以て大いに售る。諸侯の後宮に出入し粗ぼ虚日無し。弘化丙午（三年）。其の師因碩翁。其の專心致志を褒む。加ふるに一等を以てす。前に併せて三段と爲す。便ち畫工をして師弟對局の圖を寫さしむ。其の崇信する所、日を限り地蔵尊の龕に懸く。以て報恩謝徳と爲す。且つ余に其の顚末を書するを需む。余奕を學ばず。然りと雖も奕の數の爲るや、其れ兵を用ひるが如し。心は機關の險を操る。手は生殺の權を握る。僅か三尺の局。勝を両陣の間に決す。先者は人を制し。後者も人を制す。或は一著を誤り、全軍覆没す。誰か謂はん奕の小數なりとを謂ふ邪。當今四海は昇平たり[369]。而して昇平は楽事なり。獨り斯に從事す。則ち機を忘るるに似て却て機を存す。抑そも安きに居ては危を忘れざるものかな。）

某侯の後宮で知りあったという阿源という女性奕者は、圍碁一筋に精進したため、その実力は男子でも右に出る者がいないほどであった。そのため諸侯の後宮に連日出入りして休む暇もないほどの売れっ子となっていた。彼女の師である因碩翁は阿源の專心して志に到った努力を褒めて、三段の褒勝を与え、画工に師弟對局の圖を画かせ、また采蘋には顚末の書を需んだのである。弘化三年は采蘋の江戸在住最後の年である。采蘋も同じ女性であり漢詩人として成功するために精進してきた。その過程で女性が男性の職業を選択し、結婚もしない生き方を非難され続けて来た。采蘋にとって阿源との出会いは、まさに自分の選択した生き方を肯定し、女性であってもその道に精進すれば、男性にも勝る実力を備

[368] 慶應義塾大学斯道文庫蔵。
[369] 昇平：太平の世。

えることが出来るという自信と勇気を与えてくれた出会いであったと思われる。

2-2「讀南汎録」にみるジェンダー意識

第Ⅴ章の二節で述べたように、采蘋は羽倉簡堂の伊豆大島巡視から一年後にその巡視の記録「南汎録」を簡堂から借りて読み、その感想を「讀南汎録」として残している。その冒頭部分から采蘋のジェンダー意識を窺うことが出来る。

讀南汎録

去歳三月五日。向島白鬚祠官家。邂逅松本實甫[370]。談及明府巡視之事。特恨身非男子。陪縱無由。今承示南汎録。記載之審。造語之妙。若引人著其地。遊目諸勝。曰。

（去歳三月五日、向島白鬚祠官の家にて松本實甫に邂逅す。談は明府巡視の事に及ぶ。特だ、身は男子に非ずして、陪縱の由無きを恨む。今南汎録を承げ示さる。記載審かなるにして、造語の妙、人を引きて其地に著け、目を諸勝に遊ばしむがごとし。曰く。）

すでに述べたように、采蘋は江戸在住の時、向島白鬚祠官家で松本實甫に出会い、話は羽倉簡堂の伊豆大島巡視の計画に及んだ。松本實甫は羽倉簡堂に陪従してその巡視に参加する予定であることを采蘋に語ったのである。若い實甫はおそらくこの計画について熱っぽく語ったと思われる。これに対して采蘋は、「特だ恨む、身は男子に非ずして、陪縱の由無きを」と残念がっている。采蘋にとっては松本實甫や広瀬旭荘らと「心は同等である」と思って対等に付き合っていたと思われるが、巡視に陪従出来ない理由が「女性」であることに直面した時に、その不合理さに対して采蘋の恨みの気持が表れてくるのである。

2-3 貝原東軒への眼差し

貝原東軒（1652-1713）は秋月藩士江崎広道の娘で名は初、字は得生といった。父の広道は郡奉行や馬廻り役、代官頭等を歴任し、百八十石の知行地を有し、また朱子学を奉じて畏斎とも号した。貝原益軒が藩命により秋月藩で朱子学を講じたことをきっかけに東軒との出会いがあったと考えられる。東軒十七歳、益軒三十九歳の時に二人は結婚した。東軒は益軒を師と仰ぎ、多くの技芸を学んだ。その結果、和歌・箏・胡琴・書等に巧みであった。特に楷書に優れていたため、人々の求めに応じて書を書き与えていたことが「応需録」として残されている[371]。その他東軒は、益軒の著述の書写をし、内助の功でその名が知られている。そればかりでなく東軒は「夫人之性、端直ニシテ精靜、言寡クシテ貌恭し。四徳早ニ成リ、高朗ニシテ其ノ柔ヲ傷ケズ。厳格ニシテ其ノ和ヲ害ワズ。家ニ在リテハ孝友

370「 松本重信、字實甫、一字來蔵、号寒緑、會津人、學古賀精里、勇壮義烈、常以邊妨爲念、女史交友也」と山田氏の註あり。

371 三浦末雄『物語秋月史　中巻』秋月郷土館、1975 年 11 月。

聴敏ヲ以テ、父母ニ鍾愛セラル。」[372]とその性格を表現されるように、儒教政策下における模範的な女性であったことでも知られている。

同じ秋月城下に生まれた采蘋にとって東軒を理想の女性と考えることはごく当たり前の事であった。しかし、采蘋の運命は東軒のような人生を歩むことを許さなかった。後年采蘋は、江戸の稱念寺の住職から東軒の書に跋を依頼されるという偶然の恩惠に与った。次に揚げる跋には采蘋の東軒に対する思いが寄せられている。また江戸時代の一般的な女性観に対しての采蘋の考え方がはっきりと示されていて興味深い。

貝原東軒手書程伯子詩跋

俗言女子無才便是德。王節婦非之。曹大家云。婦不賢則無以事夫。豈有不才而四德兼備者乎。夫子稱才難。而有婦人。則才之於女子。似無害。惟夫世之妬婦悍妻。累其君子者。固不為不多矣。然是獨有才者之罪乎。我邦稱佳偶者。獨有吾宗藩貝原益軒先生而已。其室江崎氏才德兼備。而博涉經史善書及和歌。先生之著述亦頗有内助云。余先世嘗從遊于先生。業成而爲藩文學。是以具伝聞其事蹟。且常汲々有企羨之志。雖然資稟不才。徒倣其顰。使人掩口耳。伊勢人川喜田氏。持江崎氏手書程伯子詩者。託光澤山主晁公。需予一言。展觀其書。則雲烟高妙。名不虚傳。其為眞無疑也。余未嘗學書。然亦不問姓名。而知美人之爲美。則焉不知妙書之爲妙哉。余今客于千里之外。偶爲東軒作斯言。是所謂宿因縁者耶。此余所以不辭以不敏也。欽羨之餘。聊賦一絶。以附其後云爾。

一代鴻儒是所天。　從遊探遍幾山川。人生至樂期經史。何況瑟琴偕老年。[373]

（貝原東軒手書程伯子詩跋　　貝原東軒の伯子に程する詩の手書に跋す

俗に言ふ女子才無きは便ち是れ徳と。王節婦は之に非ず。曹大家云ふ。婦の賢ならざれば則ち以て夫に事ふる無し。豈に不才にして四徳兼備する者有らんや。夫子才の難きを稱す。而して婦人有り。則ち才の女子に於けるや。害無きに似たり。惟だ夫れ世の妬婦悍妻、其の君子を累はす者、固より多からずと為さざるのみ。然るに是れ獨り才有る者の罪ならんや。我が邦佳偶と稱する者、独り吾が宗藩貝原益軒先生有るのみ。其の室江崎氏才徳兼備。而して博く経史に渉り、書及び和歌を善くす。先生の著述亦頗る内助有りと云ふ。余の先世嘗て先生に従遊す。業成て藩の文学と為る。是を以て具に其の事蹟を伝へ聞く。且つ常に汲々として企羨の志有り。然りと雖も資稟不才なり。徒らに其の顰に倣ふ。人をして口耳を掩はしむ。伊勢人川喜田氏。江崎氏の手書し伯子に詩を呈するを持つ者。光澤山主晁公に託して。予に一言を需む。其の書を展き観るに。則ち雲烟高妙。名は虚傳にあらざる。其の眞と爲

[372]「貝原東軒婦人墓誌」三浦末雄前掲書、257 頁。

[373] 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』。この書は黒川桃子氏によれば江戸を離れる前年の作とされる。（黒川桃子「原采蘋の女性意識」『江戸風雅　第 3 号』 2010 年 11 月、109 頁）

すは疑ひ無し。余未だ嘗て書を學ばず。然して亦た姓名を問はず。而るに美人の美と爲るを知る。則ち焉ぞ妙書の妙たるを知らざらんや。余今千里の外に客たり。偶たま東軒の爲に斯の言を作る。是れ所謂因縁を宿す者か。此れ余不敏を以て辭せざる所以なり。欽羨の餘。聊か一絶を賦して。以て其の後に附して云ふのみ。

一代の鴻儒是れ所天なる。　從遊探遍すること幾山川。人生の至楽経史を期す。

何ぞ況んや瑟琴偕に老年なるをや。）

〇顰に倣ふ：「顰に倣ふ」よしあしの区別なくむやみに人まねをすること。（荘・天運）春秋時代、越の美女の西施は胸を病んで眉をひそめていた。それが美しかったので、ある醜い女がそれをまねて顔をしかめたところ、村人がその醜さに驚いて逃げ去ったという故事から。〇欽羨：尊敬し敬う。（魏・楊播伝）〇瑟琴相和：夫婦また兄弟の仲の良いたとえ。

この跋文で采蘋は、儒教の徳目について説いた「女訓書」に言及し、「女子才無きは便ち是れ徳」[374]と一般的にいわれるが、これに対して反論する王節婦や曹大家の説を引用しつつ、「婦の賢ならざれば則ち以て夫に事ふる無し。豈に不才にして四徳兼備する者有らんや。夫子才の難きを稱す。而して婦人有り。則ち才の女子に於ける。害無きに似たり」と自らの意見を述べている。采蘋は儒教の徳目で女性に求められた四徳（婦徳・婦言・婦容・婦功）を兼備するにも、夫に仕えるにも不才ではできないことであり、また夫に才能がない場合でも、夫人に才能があればそれを助ける事が出来るので、女子の才あるは何も害にはならないだろうと説く。つまりこの考えは貝原益軒と東軒の夫婦のあり方を理想と考える采蘋の思想の裏付けであり、自らが王節婦や曹大家らの女訓書から学んだ上で、女性のあるべき姿として目標としてきたものであろう。

上記の跋文によれば、采蘋は江戸に住んでいた時に、偶然稱念寺の住職晁公より東軒の書を見せられ、跋を求められた。「是れ以て具に其の事蹟を伝へ聞く。且つ常に汲々として企羨の志有り。然りと雖も資禀不才。徒らに其の顰に倣ふ。」とあり、采蘋が東軒に対して抱いていた気持ちが述べられている。東軒は采蘋が生まれる八十五年前に没しているが、その事蹟は益軒とともに語り伝えられたという。采蘋は東軒のようになりたいと日々努力したが、天賦の才能がなく、物まねにすぎなかったと謙遜しているが、東軒の存在が采蘋にとっていかに尊大であったかがこの文章から理解できるのである。その尊敬してやまない秋月藩の先輩の書に跋を求められるとはなんと光栄なことであろう、それも遠い故郷から離れた江戸において。采蘋はこれを「所謂宿因縁者耶」といっている。

2-4『漫録』にみる政治への関心

秋月郷土館蔵の采蘋自筆本の中に『漫録』[375]と書かれた文章がある。

---

[374] 陳継儒『安得長者言』

[375] 秋月郷土館蔵

天保十一庚子夏六月尹吉利人寇于海邊據定海縣清将衣利布督兵二万餘守寧波両軍踰歳相持盖尹吉利諸蠻来鬻阿片之一項職爲乱階云今紀所聞如左

（天保十一庚子夏六月、尹吉利人海邊を寇す。蘓州定海縣。清将衣利布督兵二万餘に據りて寧波守る。両軍歳を踰えて相持す。盖し尹吉利諸蠻来りて阿片の一項を鬻ぎて職乱階と爲ると云ふ。今聞く所を左の如く紀す）

と始まる「紀阿片煙之變」と題する十五・六頁に亘るアヘン戦争についての文章である。采蘋は政治に対する関心を示さなかったという論文も見られるが、もともと儒学を学んだ以上政治に対して無関心であるはずもない。江戸在中の広瀬旭荘の日記には大塩平八郎の事件に言及する記事や、幕末の尊王攘夷運動に身を置いていた梁川星巌と頻繁に交流する等幕末の政情に関係する記事が散見している。この時に采蘋も彼らと頻繁に交遊していたことは旭荘の日記にも表れている。当然のことながら知識として受け入れており、関心もあったと思われる。残念ながら僅かな江戸の史料の中からは采蘋の政治への言及は見つけることが出来ない。ただ詩の中では、政治について語るよりは自己の問題について語ることに忙しかったように思われる。采蘋が政治について積極的に関心を示し始めたのは晩年になってからで、肥薩遊歴の旅に出かけた時の詩には多くの政治に関する詩が散見する。このほかに采蘋は詩のほかに文章も僅かながら残しているが、これらの文章によって采蘋の思想的傾向をよりはっきりと知ることが出来る。

「紀阿片煙之變」は采蘋の政治に対しての考え方を知る上で貴重な史料である。この書の後部に、

此書傳爲草場佩川處紀佩川佐嘉藩巨室多久氏家臣櫂易肥侯儒員嘗從精里先生與韓使接語事具載對礼餘藻記中處述盖亦往来于崎港親聴譯人者故異聞詳載或以爲侗庵先生作恐非但未看後編是爲可憾耳。

（此書草場佩川の爲す處の紀と傳ふ　佩川佐嘉藩巨室多久氏の家臣にて櫂易肥侯の儒員なり。嘗て韓使として精里先生に從ふ。語を接ぎ事具に對礼餘藻記を載す。中に述ぶる處盖し亦た崎港に往来し親しく譯人に聴きし者故に異聞詳載或は以て侗庵先生の作と爲す。恐るるに非ず。但し未だ後編を看ざるは是れ憾む可しと爲すのみ。）

とあることから、もともとは草場佩川が書いたものと伝えられている書である。あるいはまた古賀侗庵の作とも言われているとある。采蘋がどこで誰に借りて筆写したものであるのかは不明であるが、肥薩遊歴の際、長崎か佐賀あたりで筆写したものと考えられる。アヘン戦争についての一部始終を十四・五頁に亘って詳述したもので、ここでは全文を揚げることはしないが、采蘋はこの文章を筆写することでアヘン戦争についての知識を得たも

のと思われる。残念ながら筆写した「紀阿片煙之變」には采蘋の読後の感想は書かれていないが、天草で詠んだ詩にはアヘン戦争に対する采蘋の思いが詠まれている。

天草遊中登高望西洋　　天草遊中　高きに登りて西洋を望む
扶桑地盡頭　　扶桑　地盡くる頭
登高極遠望　　高きに登りて遠望を極む
眼界無物遮　　眼界　物の遮る無く
落日在空洋　　落日　空洋に在り
遐想神聖國　　遐かに想ふ　神聖の國
葵心傾夕陽　　葵心　夕陽に傾く
満清一猾夏　　満清　一たび夏を猾すや
文物非舊章　　文物　舊章に非ず
加之英夷暴　　之に加ふるに　英夷の暴
荼毒及三殤　　荼毒　三殤に及ぶ
防禦無男子　　防禦　男子無く
貞烈纔劉娘　　貞烈　纔かに劉娘あるのみ[376]
髪頭辮髪客　　髪頭　辮髪の客
畏犬如虎狼　　犬を畏るること虎狼の如し
人生僅知字　　人生　僅かに字を知らば
慷慨憂難忘　　慷慨して　憂ひ忘れ難し
此是海外事　　此れは是れ海外の事なるも
徒勞九回腸　　徒らに労す　九回腸

この詩は天草での遊歴中、高台に登り遠く中国大陸を望み、古の中国の歴史に思いを馳せる。しかし、自分が学んだ唐や明の誇り高い文化はすでに落日の如く消え去り、これに加えてイギリス人による暴虐を防ぐことが出来る男子もいない。ただ一人劉氏の娘がイギリス兵の凌辱に抗して死を選んだのみであると。我が国が手本として憧れ続けた隣国で起こったアヘン戦争の悲劇を「紀阿片煙之變」を書写することで詳細を知ったと思われる采蘋は「人生僅かに字を知らば、慷慨して憂ひ忘れ難し」と、その内実を知ってしまったが故の心情を吐露している。最後の二句では「此れは是れ海外の事なるも、徒らに労す九回腸」と海外での出来事であるけれど、やはり憂いもだえるとアヘン戦争の悲惨な状況に対しての采蘋の苦悩がにじみ出ている。

2-5 上書にみる経済への関心

采蘋は江戸在住中、天保十二年に井上参政に宛てた上書の追申として天保の飢饉に対す

[376] 乍浦の劉氏の娘がイギリス兵の凌辱に抗して死を選んだ悲劇。

る経済対策として養蚕を奨励する一文を書いている。それには次のようにある。

副啓

五畝之宅。樹之以桑。五十者可以衣帛矣。我郷知農。而未知桑。故女工唯有木綿爾。乃木綿比之于他郷。亦爲麤矣。甚不便老人之體。前與令嗣談。及養蠶之事。且約録上其方。然渉筆不矢口。老親猶在家。幸煩下問。養蠶先要樹桑。風土洵美。草木條長。樹桑必繁殖。且桑葉可以養蠶。皮可以造紙。四五年後。頗有所獲。是或富国之一助。聊表螻蟻志心云爾。

桑紙。信州松代之産。[377]

（副啓

五畝の宅。樹は桑を以てせば、五十は帛衣を以て可なり。我が郷は農を知る。而して未だ桑を知らず。故に女工は唯だ木綿有るのみ。乃ち木綿は他郷と比びて、亦た麤と爲す。甚だ老人の體に便ならず。前に令嗣と談ずるに、養蠶の事に及ぶ。且つ録を約して其方に上る。然しながら筆に渉りて矢口[378]せず。老親猶ほ家に在り。幸ひ下問を煩はす。養蠶は先づ桑の樹を要す。風土洵美にして、草木は條長なり。桑の樹は必ず繁殖す。且つ桑葉は養蠶に可なり。皮は造紙に可なり。四五年後。頗る獲る所有り。是れ或は富国の一助となれり。聊か螻蟻志心を表して云ふのみ。桑紙。信州松代の産。）

この「副啓」の内容は、桑の樹を植えて養蠶を藩の産業にすることによって「是れ或は富国の一助となれり。」と提言したものである。資料は残されていないものの、采蘋の遊歴の足跡は江戸より北上して東北まで足を伸ばしたことが先行研究では指摘されている[379]。手紙に信州松代の産の桑紙を使用していることからもその事実は裏付けられるが、桐生の絹織物を扱う豪商で、漢詩人としても名を知られた佐羽淡斎の家にも采蘋の書が書かれた扇を見たという[380]話も伝わっているごとく、采蘋がこの内容の提言をした根拠は、実際に桐生での経験に基づくものであると推測される。またすでに原古処存命の時にも古処の提案で実施された政策であった。この件については采蘋も以前に井上参政の子息と話し合い、約束を交わしたが、実際には実現していないことなどが文中に見える。采蘋の言動は、一女子の言動の枠を遥かに超えて、秋月藩政に対し、直接の提言を行っていたことが明らかである。秋月藩は女子の藩外に出ることを許さず、采蘋は藩籍を脱しているにも関わらず、秋月藩の経済状況を心配してのこの提言は、故郷に対する采蘋の思いが込められている。

三節　采蘋の自我意識

377 『原采蘋文鈔』慶應義塾大学斯道文庫蔵
378 誓いの言葉を言いきる。
379 春山前掲書
380 春山育次郎前掲書

3-1　采蘋の恋愛にみる自我意識

采蘋の一生は一見して儒教の孝道を貫いた人生であったと言える。采蘋は父の遺命を果たすために生涯をささげたと言っても過言ではない。この点は同じく自らの意志によって人生を選択した江馬細香や梁川紅蘭の人生観とは異なっている。儒教の経典である『孝経』を座右の銘として江戸在住の時も新年に当たって書写していた采蘋にとって、遺言を全うすることは他に選択の余地がなかったことである。このために采蘋が選択した道は、名声を得て家名再興を果たすまでは生涯嫁がず、江戸でそれを全うすることであった。この選択は女性である采蘋にとって多くの障害を伴うものであった。そもそも原家には二人の男子があり、古処の跡を継ぐはずであったが、すでに見て来たように原家の血筋は絶えたのである。この原因は母親の血筋を問題視する采蘋の婚約の破談に端を発し、「血筋を断つ」と古処が憤激したとも伝えられているが真相ははっきりしない。

このようないきさつから、女性である采蘋は、家督相続は出来ないものの家名再興の望みを父から託されたのである。采蘋は目的を達成するまでは結婚をしないと誓ったが、頼杏坪に贈った詩には「如教志業青年遂　世上寧無逐臭夫」[381]と見えることから、三十歳の時点では、早く志を達成出来れば結婚の意思があることをほのめかしている。采蘋は自らは結婚を否定したわけではなく、家庭の事情によって結婚願望をあきらめざるを得なかったと考えられるのである。

3-2 馬関・広島での恋愛

采蘋は孝のために生涯独身を通したが、六十二年の生涯の中で二回あるいは三回の恋愛を詠った詩が残されている。いずれも相手は妻帯者であるため結婚の可能性はなかった。初めて恋愛を思わせる詩が登場するのは『東遊日記』中の馬関（下関）でのことである。

二日　朝友人に詩一首を賦して贈る。

　　與君離別後無日不相思対鏡慵梳髪弄毫狂寫詩

君と離別の後、相思はざる日無し。鏡に対し慵く梳髪を弄し、毫に狂ひて詩を写す。

扁舟從此去	扁舟此従り去り
千里向天涯	千里の天涯に向かふ
墨和雙行淚	墨　双行の涙に和す
親緘寄阿誰	親しく緘ずは阿誰にか寄する

この詩は別後の悲しさを詠ったものであるが、前書きにある「鏡に対し慵く梳髪を弄し」は明らかにただの友人との離別とは思われない情感が表現されている。この土地でいったい何が起こったのかは、これ以上の記録がないために知ることが出来ないが、意中の人と

[381] 『有煒楼草稿抜粋』

の出会いを示唆する詩である。

『東遊日記』の後部に収録された「□思唱和集」は、九月九日の重陽の節句以降から書きはじめられた無名氏宛ての相思の詩が含まれており、相手の無名氏と取り交わした詩によってその時の状況を窺い知ることが出来る。無名氏と取り交わした詩は二十数首が収録されているが、別れた後に詠んだ詩にもその恋情は綿綿と綴られている。この件に関しては春山氏の伝記にも言及されており、春山氏の知り得た情報によれば広島での二カ月間にただ一度水明楼での面会の機会を持ったのみで、あとは文通によってお互いの情意の交流を図ったとある[382]。また無名氏については、文政十二年、十八歳の時に父に従ってこの地方を遊歴した際、その才学を耳にした名家の子息であり、その時以来憧れを抱いていた人であった可能性があるという。「十年聞才質　千里侍輿時」と唱和集の詩にも見えることでそれも納得できる。「重陽後、一夕佳人を訪ねんと欲す。心期果さず、悵然として数首を録して支韵と作す。」と始まる「□思唱和集」の「答□子」と題する次の詩からは、采蘋の相手に対する想いと、またこの恋愛が春山氏の指摘するように人目を忍んで交わされたものであることが分かる。

君意吾方信　　君が意　吾れ方に信ず
吾心君那戯　　吾が心　君那んぞ戯れんや
到門又帰去　　門に到りて　又帰去す
恐被月明知　　月明に知らるを恐る

次の詩は陰暦の十五夜の月を眺めながら相手を思い詠んだ詩である。

望月十五日
吾心本如月　　吾が心本月の如し
君亦更同月　　君亦更に月に同じ
同心千里別　　同心千里の別
只是共明月　　只是共に明月

ただ一回の水明楼での面会の時の様子を詠んだ詩がある。この詩は、二人の関係を周囲が知らない中での同席の場面を詠んだものであり、その時の情景が見事に描写されている。文通を続ける中での酒席での唯一の会合である。「鴛央夢成る時、比處春意多なり」と率直にその気持ちを表現している。同時にその気持ちを他人に知られることを恐れる緊張感を詠っている。

和

[382] 春山前掲書、148 頁。

餅菊落寒影　　餅菊　寒影落ちて
小樓上燭時　　小楼　上れば燭の時
待人々未到　　人を待つも　人未だ到らず
情思有誰知　　情思　誰か知る有り
氤氳花氣暖　　氤氳　花気暖かなり
鴛央夢成時　　鴛央　夢成する時
此處多春意　　此処　春意多し
洲會恐得知　　洲會　知り得るを恐る
酒冷燈將減　　酒冷く　燈将に減んとす
水明殘衣時　　水明　残衣の時
喜悲似爲字　　喜悲　字と為すに似たり
此恨與誰知　　此の恨　誰とともにか知る

次の詩は無名氏と別れて広島を離れる際、水明楼の前を通り過ぎたときに詠んだ詩と思われる。その時のことが思い出されて、「潮來不閣舟」と潮の流れがきても舟をとどめていたとあり、なかなか未練を断ち切ることが出来ない采蘋の想いが読み取れる。

亭午舟過殘夜水明樓　　亭午舟は残夜水明楼を過ぎる
篠川兩派流　　篠川両派に流れて
上有小高楼　　上れば小高楼有り
此際多情思　　此の際　情思多し
潮來不閣舟　　潮来るも　舟を閣かず

〇亭午：ちょうど。ぴったりの。〇残夜：明け方。未明。

三畳
十年聞才質　　十年　才質を聞く
千里侍輿時　　千里　時に輿るを侍つ
深契亦天助　　深く契る　亦た天の助け
鬼神有預知　　鬼神　預知有り
樓燭宵將半　　楼燭　宵将に半ばならんとす
重來結夢時　　重ねて来つて夢を結ぶ時
澄紅深日夜　　澄紅　日夜深く
曉月獨相知　　暁月　獨り相知る

上記の詩からは、恋愛の相手の才質について十年前から聞いていたこと、遠く離れて暮

らして再会の機会を待っていたことなどが知られる。水明楼での会合は後々までも思いだされ、三十日が過ぎてもその事を思っている様子が次の詩に書かれている。

七日夕天晴月色玲瓏風尚不歇　　七日夕　天晴月色玲瓏として風尚歇まず
篷底抱痾片枕寒　　篷底　痾を抱きて　片枕寒く
思人況後意辛酸　　人況を思ひて　後意辛酸す
水樓別後三旬過　　水楼　別後　三旬を過ぐ
今夜月明不忍看　　今夜月明かにて　看るに忍びず
獨對殘燈不展眉　　獨り残燈に對して眉を展かず
寒濤拍岸舟斜欹　　寒濤岸を拍ちて舟斜に欹く
容光在目半衾冷　　容光目に在りて半ば衾冷し
正是情人思我時　　正に是れ情人我を思ふ時

君怙我有時　　君怙む　我に時有り
寧可為情死　　寧そ情の為に死す可きや
天書値萬金　　天書は　萬金に値す
正是平安字　　正に是れ　平安の字

一首目では別れてなおその恋情を詠っているが、二首目では「君怙む　我に時有り、寧そ情の為に死す可きや」とすでに冷静な気持ちを取り戻し、前向きな采蘋の性格を窺わせている。

十月十日に広島を離れる時に詠んだ詩にも「花を吟じて　空しく相思ふ」と未練の想いを寄せている。

餞十月九
蘭山芳野鴨水湄　　蘭山芳野　鴨水の湄
棹月吟花空相思　　月に棹さし　花を吟じて　空しく相思ふ
苒土三千東下日　　苒土三千　東下の日
孤燈或有把杯時　　孤燈或ひは有り　杯を把る時

采蘋の恋愛は秘密事に行われたはずであるが、女性の一人旅であるがために人々の嫌疑は避けられなかったとみえる。次の詩は八月十三日、大塚昌伯を訪ねた時の詩である。大塚昌伯の詩に和したものであるが、おそらく女性のあるべき姿を説教されたことに対しての反論であると考えられる。　大塚昌伯の詩の内容が分からないのは残念であるが、采蘋の詩の内容から推測して、この頃すでに醜聞は広まっていたと思われる。

得失寧関粧不粧　　得失寧んぞ　粧と不粧とに関らんや
鏡奩何必□□□　　鏡奩　何んぞ必ずしも□□□
風流到處通家足　　風流到る處　通家に足る
未向文塲用剣芒　　未だ文塲に剣芒を用いて向はず

〇文塲：文塲は文学者の社会。文学界。

其二、
丈夫應有丈夫儀　　丈夫應に丈夫の儀有るべし
兒女寧無児女姿　　児女寧んぞ児女の姿無らんや
若使臭聲在淫具　　若し臭聲をして淫に在りて具はしむれば
人間何地避嫌疑　　人間何れの地にか嫌疑を避けん

また次の詩は賴杏坪の詩に次韻したものであるが、この頃采蘋は意中の人と交際している最中である。同じように杏坪の詩の内容は分からないが、独身を通すことに異論を呈したものと思われる。それに答えた次の詩には結婚の意志があることを示している。

次韻杏坪先生　　杏坪先生に次韻す
父執有君孤不孤　　父執君有り　孤にして孤ならず
相依遍接搢紳徒　　相依りて遍く接す　搢紳の徒
区区自抱地方寸　　区区　自ら抱く　地の方寸
杳杳重遊天一隅　　杳杳　重ねて遊ぶ　天の一隅
羈雁飛鳴迷沢國　　羈雁　飛び鳴きて　沢国に迷ひ
家人思夢入江都　　家人夢に思ひて　江都に入る
如教志業青年遂　　如し志業をして　青年に遂げしめば
世上寧無逐臭夫　　世上　寧んぞ臭を逐ふの夫無からんや

〇方寸：心。〇沢国：水郷地帯。

春山氏によれば無名氏は妻帯者である可能性を示唆しているが、采蘋にとっても父の遺命を果たすまでは結婚をするつもりはなかった。しかし、おそらく采蘋の人生で初めての理想の男性に出会ったのではないだろうか。この広島での出来事は「孝」のために出発した旅の途中であったが、図らずも理想の男性との恋愛を通して、僅か二カ月間ではあったが、女性としての自己に忠実に向かい合うことが出来た事件であった。父の死後、遺言となった「不許無名入古城」という言葉は常に采蘋の行動を束縛していた。広島での出来事は束の間ではあったが、采蘋を孝の束縛から解放し、精神の自由を味わった貴重な経験で

あったと思われる。春山氏が「山陽の遊跡中に於て此好ましからざる小説的の珍事実を発見したるを喜ばむと欲す」[383]と記すように采蘋の人生において、三十代で真剣に人を愛した経験を持ったことは、むしろ喜ばしいことで、采蘋が心身共に健康で、女性としても人並の経験をしたことに采蘋の人間性の豊かさを感じるのである。

3-3 駿府の石上氏との恋愛

二つ目の恋愛は第Ⅴ章で紹介した獄南の田中藩士である石上氏との恋愛である。これは昭和の初めに公開された三通の秘蔵の手紙によって明らかになったものであるが、これまでの研究では漢詩人としての名誉を損なうとしてこれらの恋愛に関する部分には言及されなかったようである。この理由は恋愛の対象がどちらも既婚者であることに対する配慮からとも考えられる。しかし実際には広島での恋愛もまた江戸における獄南の田中藩士との恋愛にしても、松崎慊堂の日記にもあるように采蘋の恋愛は「浮名」となって市中に広がったのである。これらの醜聞が漢詩人としての采蘋の名声にどれほどの影響を及ぼしたのかははっきりしないが、少なくとも公の場での仕事を得る上では支障をきたしたであろうことは松崎慊堂の日記からも推測出来る。駿府の石上玖左衛門の子息か孫と思われる石上氏との手紙のやり取りは、広島での初々しい恋心とは違った、恨みの情が多い文面になっている。書柬一には次の様にある。

> 篠田樓にて別後文通御断り申し候ふ時の御一言、も早御忘却遊ばされ候ふ哉。何故此の節は一字も無きや、寄遠の人恨むべし々（恨む）べし、西鄙々人の情義山の如し、此心眷々たるを以て移すべからず　彼の薄情測り難く候。

書柬二には

> 朝夕杳想奉り候。偖て先此馬淵君帰り、紙包斗にて、御手書は之れ無き由申され候故、深く御怨望申し上げ、三田え参り、莊子を披き薫讀仕り候処、間より御手書の小箋出て、始て心は釈然と相成り、怨望の段後悔仕り候。昨暮三田へ行かけ馬淵君え投宿仕り候處、先日は御託の書を賜り、御忘却の由にて、今日落掌、數回讀み捧り縷々御深情感刻々々。然し乍ら半五君えの書状、馬淵君え御頼み遊ばされ候様、仰せられ古越候へ共、君一向覺なき由に御座候。筆頭の語、半信半疑此儀は少々御恨に存じ奉り候。其後無一字御近況如何、不堪杳想候。も早細君も御歸り嘸々御樂妬む可し、憎む可し。

とあり、状況は必ずしもいい方向には向かっていないことが判明する。案の定、この恋愛も失恋に終わった様子が、書柬三の詩と文章に見える。

---

[383] 春山前経書、148 頁。

別後聴雨　　別後雨を聴く

雨蕭々兮四簷鳴　　雨は蕭々として　四簷鳴く

燈耿々兮夢不成　　燈は耿々として　夢成らず

身在天涯別知己　　身は天涯に在りて　知己と別る

千廻百轉難爲情　　千廻百轉　情と爲し難し

袖邊香殘人更遠　　袖邊香残り　人は更に遠く

不知何處聴斯聲　　知らず何處に斯の聲を聴かん　　（君能眠恐不聞斯聲）原文のママ

相對し情を話さず、別れに臨みて衣を牽き難し、心腸は之の爲に破碎す、涙は睫に承けて而下る畏倒観走入、枕に就かんと欲して一睡を得るも二郎妨を爲す、起座茫然として□□有るが如し忽ち掃愁の賜を得、鳴瀬に留まりて□□□子痛飲時を移す、漸く入る醉郷眠神熟醒の時。昏黄、閑話少時、各就寝獨り眠る能はず、□頭拈此奉寄已隔、着雲山□□補天縮地之術、安能聚首話情、吾輩事業幸属文章尺書、有脚の詩豈翼哉、向後呈する所高和を賜はらんことを願ひ、迭和迭鳴行將に巻成らんとす、或ひは閑宵獨處、巻を披き低聲吟の□慰寂寥、猶ほ相見の如く之は君以て如何にせん。□□命（？）實天地間之一棄物、未だ生□を知らず死悲を知る、然りと雖も老親在り、兒何をか敢へてせん。死、今より低眉憐を乞ふ、容に世耳を務め求む、幸にも深念を爲す勿れ、唯願ふ臥して花眠柳の人、珍重千萬々々珍重書　言盡きず、謹んで待つ明年の祗役、頓首。

駿府の石上氏との恋愛については、資料が昭和時代に入ってからの公開ということもあって春山氏の伝記には書かれていない。ともかく「□思唱和集」にある相思の詩と駿府の石上家に秘蔵されていた采蘋の書柬によって、采蘋が一人の女性として既婚者の男性を真剣に愛するという経験を二回していることが明らかとなった。またその状況についてもある程度知ることが出来た。この二つの恋愛についてはスキャンダルとして周囲の人々には広まっていた。春山氏が指摘するように、広島での無名氏についても、当時の人々は特定していたはずである。江戸での恋愛についても松崎慊堂の日記で明らかなように、浮名となって市中に広まったのであった。しかし、これは見方を変えれば名声があったからこそスキャンダルも広まり、人々の関心を得たとも言えるのである。

本論稿では先行研究とは異なった視点から、二つの恋愛事件をスキャンダルとして封印するのではなく、采蘋の自我意識の表明であると捉えるものである。また女性として生まれて来た采蘋のジェンダー意識の表明であったとも捉えることが出来る。こうした観点から上記の二つの恋愛事件を詳細に検討することによって、これまでの伝記や先行研究には見られなかった、女性としての原采蘋の正直な心情を知ることが出来たのである。この事は采蘋の全体像を知る上で見逃してはならない出来事であると考える。

四節　漢詩人としての原采蘋

載筆十年未博官　　筆に載せて十年　未だ官に博さず
（東遊小稿　百首之三）[384]

上記の詩は東遊中に詠んだ詩である。詩人として今だ成功していない状況を詠っている。この後二十年、采蘋なりに努力して江戸詩壇での名声を得ることが出来た。采蘋にとっては「何料虚名達久聞」「笑我厚顔噉名客」と言い放つ名声であっても、各地を遊歴するに当たってはこの名声のお陰で揮毫を求める人、書の指導を求める人が多く、生計を大いに助ける結果となった。しかし、采蘋が江戸で成し遂げたかったことはこの程度の名声を得ることではなかったようだ。

その証拠に采蘋の遺品の箱の中から父の遺言である「不許無名入古城」という詩片が見つかったことからも、この詩片の意味する謎を十分に解明する必要があると思われる。采蘋の東遊の目的は父の遺命を果たすこととされたが、その遺命とはすべてが詩片の一句に言い現わされているものなのか。もし、その詩句通りに解釈すれば、目的は十分達成されたと思われる。しかし采蘋は江戸に住み続けることを選択し、秋月藩に上書を提出し、出来れば母を呼び寄せて、永住する覚悟であったことも窺い知れるのである。

采蘋の願望は一体何であったのか。それは江戸で一家をなし、家名を広めること、さらに父の遺稿の上木をすることで父の名を後世に残すこと、また当然ながら自らの詩人としての業績を残すために詩集の出版も念頭に置いていたと考えられる。江戸に住んで十四・五年後に、今だその望みが果たせないことと、母に対する不孝のジレンマから上書を決心したのである。

もし采蘋の願望が、単に漢詩人として名声を得るだけならば、江戸詩壇での成功を見る限り、達成できたと言える。しかし、もともと采蘋の江戸行きは父の願望の基礎の上に築かれたものである。父の遺言の背後には、儒者としての失脚、それに伴う秋月藩の冷遇によって、秋月城下において家塾を営むことさえ難しくなったことに対する無念さが込められている。よって采蘋の願望は、漢詩人としての個人の願望のみならず、原家の家名を背負ったものであったために「女児の身に重かる可し」と頼山陽に言わしめたのである。

結果的に采蘋はこの重責を果たし、各地を遊歴し、地方で活躍する儒者・医者などの知識階級の人々と交流し、原家の家名を広めることに貢献したと言える。さらに漢詩人としても遊歴中に書かれた詩は五百首以上に上り、それ以外を含めると七百首以上の詩が現存している。

采蘋の詩人としての評価は江戸の「人名録」でもすでに見て来たが、江戸後期に活躍した著名な詩人・学者による評価が采蘋と交わした詩の中に散見される。これらの人々は一部であり全国を遊歴した采蘋はさらに多くの詩人や学者と交流し、詩の贈答を繰り返して

[384] 石上東藁「原采蘋の書柬と詩草」『本道楽』第十三巻第一号、1932 年。

いた。

4-1 男性文人の評価

漢詩人としての原采蘋に対して、江戸後期の男性文人はどのような評価を下していたのだろうか。采蘋と交流のあった文人・儒者が采蘋に贈った詩の中から検討して行きたい。

①古賀朝陽[385]

喜古處山人見過、時帯令愛采蘋女。　　朝陽

山人削迹混塵氛、獨有詩名終不群、老子東来乗紫気、史公南滞誤青雲、言談草閣燈花冷、風雨江城木葉開、膝下彩雄携道薀、才情愧苑卓文君。[386]

（古処山人の過らるを喜ぶ、時に令愛采蘋女を帯ぶ。

山人迹を削り塵氛混りて、獨り詩名終に群れざる有り、老子東に来て紫気に乗る、史公南に滞りて青雲を誤る、言談草閣燈花冷し、風雨江城木葉開く、膝下彩雄道薀を携え、才情苑卓文君に愧づ。）[387]

古賀朝陽にとっても古処が連れて来た采蘋は稀に見る才媛として映ったことであろう。謝道薀・卓文君に喩えて褒めている。

②中村嘉田

原采蘋。是古處硯学仲女。一時閨秀。莫或先之。二十餘歳未嫁。從尊大人行天下。此日初見。

君自班家曹大姑、低看卓氏巧當壚、笄年偃蹇數夫去、宛轉關何爲掌珠。[388]

（原采蘋。是古處硯学の仲女なり。一時の閨秀。或ひはこの先は莫し。二十餘歳にして未だ嫁がず。尊大人に従ひて天下を行く。此の日初見す。

君は自ら班家曹大姑、卓氏巧に壚に當るを低看し、笄年偃蹇數夫去る、宛も轉關何んぞ掌珠と爲らんや。）

○笄年：女子の結婚適齢期。○偃蹇：多く盛んなさま

佐賀藩儒の中村嘉田も曹大姑や卓氏に喩えて采蘋を褒めているのは、和文の巧みな女性

---

385 古賀精里の門人で佐賀藩医（1773-1837）。詩・書に優れていた。
386 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』70 頁
387 春山育次郎前掲書、79 頁
388 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』70 頁

を清少納言と紫式部に喩えるのと同じである。

③鈴木松塘

酬采蘋女史次其見贈韻

閨裏有斯秀、男兒眞媿君、弓鞋輕萬里、彤菅掃千軍、習氣非巾幗、才情過錦文、賡酬我何敢、筆硯殆将焚。[389]

（采蘋女史に酬ひて　其の見贈の韻に次す

閨裏に斯の秀有り、男児眞に君に媿づ、弓鞋萬里に輕く、彤管千軍を掃く、習氣巾幗に非ずして、才情錦文に過ぐ、賡酬我何んぞ敢てせん、筆硯殆んど将に焚かんとす。）

○巾幗：女性をさす

松塘にとっては母親に当たるほど年上の先輩である采蘋に、多くの影響を受けたことは間違いない。娘の名前采蘭にしても、詩社「七曲吟社」の弟子が多く女弟子であったことなどを考えれば、二十五歳で采蘋に出会い、自宅で教えを受けたことは松塘の人生ににとって幸運であった。

④大沼枕山

贈原氏采蘋

近来藝苑多閨秀、丹青往々競才奇、就中一二稱領袖、彼工草字此小詩、別有女中真豪傑、原氏采蘋出西陲、文章経史盡通暁、班女蔡姫兼有之、漫遊幾歳觀上国、遍扣名流無定師、弓鞋踏破三千里、彤菅慣裁絶妙詞、枕生一見驚且嘆、相識已恨十年遅、不櫛進士何足説、丈夫之膽丈夫姿、慨燃忽起寧親志、手理行篋望天涯、新篇今日試折簡、會客河樓薦別巵、満樓人士齋張陣、詩城酒壘酣戦時、原氏大呼衆解甲、無復一個是男兒。[390]

（近来芸苑に閨秀多く、丹青往々にして才奇を競ふ。就中一二領袖と稱す。彼草字に工にし此の小詩あり。別に女中の真豪傑有り。原氏采蘋西陲を出づ。文章経史盡く通暁す。班女蔡姫兼てこれ有り。漫遊幾歳にして上国を観る。遍く名流を扣きて定師無く、弓鞋踏破三千里。彤菅裁つに慣れて絶妙の詞。枕生一見して驚き且つ嘆く。相識ること已に十年遅きを恨む。不櫛進士何ぞ説くに足らん。丈夫の膽、丈夫の姿。慨燃忽ちに寧親の志を起す。手理行篋天涯を望む、新篇今日折簡を試す。客は河樓に會し

389「松塘詩鈔」入谷仙介解題『日本漢詩　18』汲古書院、1988 年 12 月。
390 山田新一郎前掲書、77 頁。

別巵を薦む、満樓の人士斎しく陣を張る、詩城酒壘戦の酣る時、原氏大いに呼し、衆は甲を解く。復た一個もの是れ男児無し。）

明治期を代表する漢詩人、大沼枕山も梁川星巌を通じて采蘋との交際を深めたと思われる。采蘋が江戸を去る時の送別の席で、男子をも圧倒する姿を称賛している。

⑤中島棕隠

送采蘋女史赴江戸

爲弘家學越彊行、粉気脂香帯字清、一劒霜寒當大獄、雙眉緑秀照滄瀛、聞鴻互訢離群恨、仰月高杼攣桂情、關吏他年能認否、女中又有棄繻生。

（送采蘋女史の江戸に赴くを送る

家学を弘めんが為に彊を越へて行く、粉気脂香字に帯びて清し、一劒霜寒にして大獄に當る、雙眉の緑秀て滄瀛を照す、鴻を聞きて互に訢ふ離群の恨、月を仰ぎて高く抒る攣桂の情、關吏他年能く認んや否や、女中にも又棄繻の生有り。）

嘗愧嬌柔無所爲、獨行奮志向天涯、風鬟霧鬢秋千刷、銀筆玉叙花両枝、顧影暗揮懐母涙、憐才誰贈代媒詩、縦諳先籍能相授、情事應須異蔡姫。[391]

（嘗て嬌柔爲す所無きを愧づ、獨行志を奮ひて天涯に向ふ、風鬟霧鬢秋千刷く、銀筆玉叙花両枝、影を顧て暗に母を懐ふ涙を揮ふ、才を憐みて誰か媒に代ふ詩を贈らん、縦ひ先籍を諳んじて能く相授るも、情事應に須らく蔡姫[392]に異らん。）

中島棕隠は家学を広めるために単身江戸に向かう采蘋の事情は、同じ名家の出身で、漢詩人でもあり、才媛とうたわれた後漢時代の蔡文姫とはもともと異なると言っているのは興味深い。

⑥頼山陽

…何圖纖纖玉指、具此鵬龍之力、可見家庭鐘愛、教訓有素也、女兒身可重、況非尋常女兒、願自珍惜、以福祉局之意耳。

山陽外史襄批[393]

---

391 中島棕隠『金帚集　』巻一、京摂書林、1868 年。

392 蔡文姫：後漢時代末期の大学者蔡邕（さいよう）の娘で文学・楽曲に優れた才媛として有名。詩集に『悲憤詩』がある。

393 渡邊虚舟（果然）選『采蘋先生詩集』（写本）、1918 年、秋月郷土館蔵。

（…何ぞ圖らん纖纖たる玉指、此れ鵬龍の力を具ふ、家庭鐘愛せらるる可し、教訓素より有り、女児身重かる可し、況んや尋常の女兒に非んや、自ら珍惜することを願ひ、福祉局の意を以てするのみ。）

頼山陽の女性観は、女子は常に女性らしくあるべしというのが女弟子を指導する時の山陽の態度であった。采蘋に対しては尊敬する古処の娘であり、その女性らしくない才能も十分に認めているが、「教訓素有り、女児身重かる可し」と、その境遇に同情を示している。

⑦梁川星巌

讀采蘋女子閨詠却寄

當今作律詩者、率皆委弱支離、女史何従而得、此骨力雄勁氣脈連絡来、想家厳所教乎、将天授乎、但恨未免笨手粗脚耳、向後益専力於讀書、旦精熟唐人詩集、則優柔漸妙之味自出焉。[394]

（采蘋女子の閨詠を読みて却て寄す

當今の律詩を作る者、率ね皆委弱支離、女史何に従りて得るか、此の骨力雄勁にして氣脈連絡来る、想ふに家は厳所の教か、将に天授か、但し恨むらくは未だ笨手粗脚を免れずのみ、向後は益ます讀書に専力し、旦つ唐人詩集を精熟すべし、則ち優柔漸妙の味自ら出ずるならん。）

⑧菅茶山

次原女史見贈韻

椿堂曽是定交人、莫怪逢君即相親、更看髯蘇送行句、詞華羨見一家春[395]

（原女史の贈れる韻に次す

椿堂曽て是れ交を定めし人、怪む莫れ君に逢ひて即ち相親しむを、更に看る髯蘇[396]が行を送るの句、詞華羨みて見る一家の春。）

茶山註：女史父古處翁、曾屢過余、女史酒閒。出示家兄送別詩、東坡有妹、頗富才藻。

（茶山註：女史の父古處翁、曽て屢び余を過る、女史酒の閒に、家兄送別の詩を出し示す、東坡妹有りて、頗る才藻に富む。）

---

[394] 「西征集」『注解梁川星巌全集　第1巻』梁川星巌全集刊行会、1956年。

[395] 『黄葉夕陽村舎詩集　遺稿五』富士川英郎解題『詩集日本漢詩9』汲古書院、1985年11月、240頁。

[396] 蘇東披の異称

茶山は原古処の知友である。古処は采蘋の修業のために茶山に教えを乞うよう神辺の茶山を訪問させた。この時采蘋は兄白圭の送別の詩を茶山に見せた。茶山は白圭を蘇東坡に準えて、「東坡妹有りて、頗る才藻に富む。」と婉曲に采蘋を褒めているところが茶山のウイットである。

⑨渡邊東里

采蘋女史見示某人之詩、席間次韻却寄

他席逢秋已是三、客邊辛苦或能諳、登楼作賦心如火、陟屺思人味不甘、把酒豪談塵外女、揮毫羞死世間男、百川原自朝東海、欽爾才名動斗南。[397]

（采蘋女史某人の詩を示さる、席間次韻し却て寄す

他席秋に逢ひ已に是れ三、客邊辛苦し或ひは能く諳んじる、楼に登りて賦を作るも心は火の如し、陟屺人を思ひて味甘ならず、酒を把りて豪談す塵外の女、毫を揮ひて世間の男を羞死せしむ、百川原自ら東海の朝、爾の才名斗南を動かすを欽ふ。）

長州藩の支藩である清末藩の儒官渡邊東里は頼山陽とも交際のあった人で、采蘋とは江戸で親しく交際をしたようである。広瀬旭荘とも連れだって一緒に遊んだ仲間であるが、采蘋の才能をよく見抜いていた。

⑩丸川松隠

采蘋女史之至也、余老耄愚直、不敢自揣、規誨百言、頗似督責、女史徐云、可使有一、不可使有二、吟酌之餘、微及身世之事、詩中亦粗暢其意、迨至告別、揮涙言志、其言切至、悲壮慷慨、使人感激不已、眞可謂女中丈夫子不可有二者矣、余哀其志、且喜余前言不虚、又冀女史戦戦慄慄、懼尤物移人之戒、懐保晩節之難、遂忘固陋、因前韻賦二絶、遂而奉呈之、亦唯老婆之戇、無罪幸甚。

（采蘋女史の至なり、余老耄愚直にして、敢て自らを揣らず、規誨百言、頗る督責に似る、女史の徐に云ふ、一有ら使む可し、二有ら使む可らず、吟酌の餘、微かに身世の事に及ぶ、詩中亦粗ぼ其の意を暢ぶ、別告迨び至りて、涙を揮ひて志を言ふ、其の言切至り、悲壮慷慨にして、人を使て感激已まず、眞に女中の丈夫子二有る可らずと謂ふ可き者かな、余其の志を哀む、且つ余の前に言虚ならざるを喜ぶ、又女史戦戦慄慄なるを冀ふ、尤物の人の戒に移るを懼れ、晩節を保つの難を懐ふ、遂に固陋を忘れ、前韻に因りて二絶を賦して、遂にこれを呈し奉る、亦唯老婆の戇なるのみ、罪無ければ幸甚なり。）

一片丹心天地知、巷傳途説筆華奇、雨晴中夜無人語、閑見青霄月半規

[397] 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』75 頁

憶帷載筆思超然、到處翩翩推汝賢、折得似誰月中桂、寸心只有答旻天。

黄薇　丸川茂延拝呈[398]

（一片の丹心天地を知る、巷傳途説筆華奇、雨晴中夜人語無し、閑見青霄月半規
憶帷筆を載せて思ひ超然たり、到る處翩翩として汝が賢を推す、折り得たるは誰にか似る月中の桂、寸心只旻天に答ふる有り。　黄薇　丸川茂延拝呈）

嘗ての備中関藩の参与であり、大阪の懐徳堂にて書を講じていた丸川松隠は、采蘋が訪ねた時は備中西阿知に隠居の身であった[399]。老婆心ながら采蘋の千里独行を非難し、説教をしたが、采蘋は七絶を以てそれに答え、松隠を納得させたのである。

以上、采蘋と交際のあった儒者・漢詩人などの采蘋評を総括してみると、采蘋の才能を男性でも太刀打ちできないほど優れていると褒め、中国の歴代の才女、曹大姑・蔡文姫・謝道蘊・卓文君などを例に並び称している。それにも関わらず、江戸時代の男子の矛盾しているところは、采蘋の行動を儒教の規範の中に押し込めようとしていることである。これらの詩は本人に贈られた詩であるため、当然美辞麗句は免れないが、注目する点は、これらの詩を贈った人々は、江戸時代後期から明治にかけて活躍した著名な儒者・詩人たちであったということである。

4-2 江馬細香・梁川紅蘭・原采蘋の漢詩人としての意識の違い

江馬細香・梁川紅蘭・原采蘋は江戸時代の三大女性漢詩人として、女性史や漢詩の分野で紹介されてきた。特に女性史の分野では、男性の教養とされた漢詩を学び、その分野で秀でた女性として、いわゆる新しい生き方を実践した女性として論じられる場合が多い。江戸時代の後期に活躍したこの三人の女性漢詩人は、実は同じネットワークの線上で結ばれており、それぞれが互いの師を通じて交流の機会があったが細香と采蘋だけはなぜか会う機会を持たなかった。江戸時代後期を代表する漢詩人梁川星巌・頼山陽の二人は互いに交流があり、また彼らを軸に梁川星巌の妻紅蘭、山陽の女弟子細香、原古処の娘采蘋の交遊関係が成立していた。采蘋は本来父古処を師としていたが、父の死後は父の詩友である菅茶山・頼杏坪・梁川星巌・頼山陽らの一流詩人を師と仰ぎ、詩の添削を頼みながら精進を続けた。従ってそれぞれの女性たちはお互いにライバル意識もあったであろうし、また同じ師を持つもの同士の同志意識も存在していたと考えられる。しかしこの三人の女性の漢詩人としての意識の持ち様はそれぞれ異なっていた。細香は始め京都の僧玉潾について画の修業をし、その技は次第に上達し、大垣藩中にも名が知れる程になったという[400]。その後も頼山陽との師弟関係によって浦上春琴に師事する機会を得ることが出来、また篠崎

[398] 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』74 頁
[399] 春山前掲書、150 頁。
[400] 江馬文書研究会編『江馬細香来簡集』思文閣出版、1988 年 6 月、3 頁。

小竹、大倉笠山・袖蘭夫妻との交遊によって画家としてのキャリアを確立していった。細香の画家としての名声は次第に高まり、画の注文も増えたという。事実、竹を描いた細香の画は多く目にすることが出来る。それでは細香の漢詩はどうであろうか。文化十年、細香二十七歳の時、頼山陽が大垣の江馬家を訪れた。細香の父蘭斎はこの時娘を山陽に弟子入りさせたという[401]。この時から細香の漢詩修業は始まることになる。周知のように山陽の女弟子の指導法は共通して「女らしさ」を求めたものであった。また第Ⅰ章二節でみて来たように、山陽は清の袁枚を意識していたふしがあり、この事から細香を自らが望む理想の女弟子に育てようと指導に余念がなかった。細香は必至でこれに答えようと努力したことは二人の来簡集や詩集に読み取ることが出来る。こうした経緯を見てみると細香にとっての漢詩とは「比較的私的な営みの色合いが濃い。彼女自身は自らを詩人であるよりもむしろ画人として意識していたふしがある。」[402]と、福島氏は指摘するが、それを証明する出来事として、師の山陽が再三詩集の上梓を勧めたにも関わらずこれには応じなかったという。一方画に関しては「竹に題す」と題する四十二歳の時の詩には「流伝せば後有るが如し、必ずしも児無きを恨まず」[403]と見えることから細香にとって画は、子供と同じように後世に足跡を残すものとして考えられていたのである。

紅蘭の場合はどうであったのか。幼少の頃から美濃華渓寺の太随和尚に漢学・習字を習ったという紅蘭は再従兄弟である星巌が江戸遊学から帰って開いた梨花村草舎で学び始め、後に星巌が結んだ詩社「白鷗社」でも江馬細香らとともに詩作の勉強に励んだ。その後星巌と結婚した紅蘭は『三体詩』を暗記するよう夫から宿題を与えられた。夫の星巌は自分の遊歴中にすべてを暗記した妻の努力を認め、以後すべての遊歴に妻を同伴した。紅蘭の漢詩は夫との遊歴によって培われたものである。紅蘭の詩は『三体詩』の暗記からスタートしたこともあり、古体詩よりもむしろ近体詩にそのセンスが発揮されていると福島氏は指摘している。紅蘭は五百首以上の漢詩を残しているが画にもその才能を発揮している。竹を得意とした細香に対して紅蘭は蝶をモチーフにした画を残している。色彩の豊かさと愛らしさは晩年の「道学先生」と呼ばれた理屈っぽい紅蘭のイメージとは程遠い華やかさがある。

采蘋の詩の中に「題紅蘭女史畫菊」[404]という詩がある。

五斗風塵不折腰　　五斗の風塵　腰を折らず
一枝芳菊堪盈把　　一枝の芳菊　盈把に堪ふ
料知張氏憐清節　　張氏　清節を憐れむを料り知らん

---

401 『江馬細香来簡集』4 頁

402 福島理子『江戸漢詩選　第３巻「女流」』岩波書店、1995 年 9 月、320 頁。

403 「流伝如有後　不必恨無児」『江戸漢詩選　第３巻「女流」』51 頁

404 この詩は『東遊漫草』の後半に書かれた詩であるが、山田氏によれば江戸に帰ってからの詩ではないかと推測しておられる。あるいは房総遊歴の途中で紅蘭の画を目にして題した可能性も考えられる。

寫来付與同心者　　寫し来つて　同心の者に付與す

『易経』を学び、星巌から「道学先生」とあだ名された紅蘭をうまく表現した詩である。清節を憐れむ張氏紅蘭の姿勢が菊図にも見事に描かれているというのだろう。

江馬細香と梁川紅蘭の交遊関係については藤川正数氏の興味深い論文[405]がある。それによれば細香は、西遊の旅から帰った後の星巌夫妻をたびたび訪ね、交遊を深めたという。もともと細香は星巌の始めた詩社「白鷗社」の同人として詩を学んでいたこともあり、また紅蘭もその時からの顔見知りであったと思われ、同郷の文人同士の親密さがあったと思われる。藤川氏は細香と紅蘭の交際を「女流仲間意識」と位置付けて論じている。未刊の「細香詩稿」の中に、嘉永元年正月、紅蘭が細香に贈った詩「正月廿日、同袖蘭女史、遊東山、有懐細香女史、賦此以寄」があり、この詩の中で紅蘭は「女伴相携へて唱酬に好し

杯酒情ありて能く老を慰め　春山処として同遊せざるなし」と、袖蘭との同遊の楽しさを詠っている。さらに紅蘭は「夢寝にも君を待つ君早く到れ」と、細香がこの場にいたならさらに楽しいものになるだろうと細香への思慕を募らせている。袖蘭は京都に住んでいる関係から星巌夫妻とは日々面会していたということであり、細香についてもよく話題に上ったという。この詩によれば夫婦同士での遠遊もあったであろうが、女同士で出かけることがあったことをにおわせている。また嘉永四年の正月、袖蘭は細香に次の様な書簡を送っている。「当年は兼て御一覧被成度仰之月瀬梅見如何、是非々々御出懸奉待候。」と月瀬の梅見にぜひ同行したいと誘っている。他に誘われたがあなたと行きたいので他は断ったとまで書いている[406]。上記の書簡や嘉永元年の紅蘭の詩からは、袁枚の女弟子の交流を彷彿とさせる、女性文人同士の景勝地での交遊が、京都を基盤にして存在していたことを窺い知ることが出来る。

果たして采蘋は女性文人同士の交流をどの程度持ったのであろうか。旅の先々で女性の名前が登場することはあるが、上記の紅蘭・袖蘭・細香のような「女流仲間意識」関係とは異なった関係を求めていたと思われる。采蘋にとっての「女流仲間意識」とは貝原東軒や阿源のように男性も及ばない技を習得しえた女性たちとの仲間意識であったと考える。采蘋にとっての仲間意識は、むしろ女性よりも男性に対して働いていたと考えられる。江戸後期の漢詩壇が袁枚の影響もあって、女性の漢詩人を積極的に輩出した中で、女性漢詩人としての采蘋は異色であり、また評価も群を抜いていたことは第Ⅴ章三節で見て来た通りであり、また萩藩士の土屋蕭海が上司の前田陸山に与えた手紙の中でもそのことが実証されている。

4-3 近代への架け橋

---

[405] 藤川正数「江馬細香と梁川紅蘭―漢詩による交遊関係を中心に―」『岐阜女子大学国文学会会誌』第 19 号、1990 年 3 月。

[406] 藤川正数前掲論文、58 頁。

采蘋の残した三つの主な遊歴の日記を中心に、その中の詩を通して采蘋の生き方を検討してきた。それぞれの遊歴の日記は三十代、五十代、六十代と年代によって、また置かれた境遇によって生じる、人生に対する考え方や見方の相違が反映されている。漢詩人として始めての本格的な遊歴を経験した三十代では、原古処の娘として父の友人・知人から優遇され、将に父の恩恵を被りながらの江戸までの旅であった。その後、江戸での二十年間は漢詩人としての実力を試される試練の二十年間であったと思われる。その結果実力は認められ、当時活躍する女性漢詩人の中でも最高の評価を得ることが出来たのであるが、生活はそれほど楽ではない様子は日記や詩から読みとれる。しかし、この名声は儒者や詩人の間で各地に広まっており、生活の糧を得るために訪れた地方では漢詩人として優遇され、揮毫や漢詩の指導に忙しい日々を送っている。

五十代で訪れた房総半島では、すでに名声を得たものの、母に対しての孝養や、父の遺稿の上木が果たせない無念さから、遠い異郷にあってその郷愁は最も色濃く反映されている。その後帰郷してからの采蘋は、目的を次々に果たし、故郷にいる安心感と前向きな態度で後半の人生を楽しんでいる様子が感じられる。六十代に出かけた肥薩漫遊の旅にもそれは窺われる。父母を見送り、残るは墓地の整備と、さらに父の詩集の出版と自らの詩集の出版であり、その計画を着々と進めていたのである。肥薩遊歴の日記からは、自らの境遇を認め、孝の負い目からも解放された、采蘋本来の「おうよう」な性格に戻っている。六十歳にして阿蘇山に登ったり、飲み過ぎて天井から落ちるハプニングなどはその例である。二年超の肥薩の旅は必要な費用を得るための目的もあったと思われるが、一か所に一年近く滞在しながら、『日本外史』を読破したり、詩集を書写したりと、余裕のある旅を続けながら、また各地での観光を兼ねた旅を楽しんでいる。金銭的にも精神的にもようやく余裕が出来たことを窺わせる。この遊歴中に詠んだ詩は三百首。この詩集を携えて萩に向かい、父の遺稿と共に上木する予定であった。

第Ⅰ章二節で見て来たように、采蘋が活躍した江戸後期には中国詩壇の影響もあり、漢詩・漢学を学ぶ女性たちが一種の流行のように輩出したが、それも儒者や医者などの一部の階層の妻・娘に限られていた。地域的に見ても江戸詩壇では山本北山が女弟子を積極的に受け入れ、頼山陽や梁川星巌もそれにならって女弟子を育てたが、地方詩壇においては封建的な風潮は強く、亀井昭陽の少琴に対する、あるいは九州・山陽地方の儒者の采蘋に対する女性観に見られるように江戸とは大きな差があった。

江戸後期から明治に活躍した儒者中村栗園（1806-1881）は、豊前中津藩の片山東蘿の子で、亀井昭陽の門人となった人であるが、女子に学問をさせることに対して徹底して反対の意見を示している。

不可使女子讀書論

昭陽亀井先生使其女少琴讀書。比長學力冨膽氣象磊落。而睫底無復男子。後先生噬臍。是余所覩聞也。古處原翁女采蘋。亦好讀書。漫遊四方以才藻梟于時。而頗有醜聲。其

他可類推。余深惡女子讀書。故余門無女子矣。[407]

（女子に書を讀使むべからずの論
昭陽亀井先生其の女少琴に讀書せしむ。長ずるに比して学力冨み膽気象磊落なり。而して睫底復た男子無し。後先生臍を噬む。是余の覩聞する所なり。古處原翁女采蘋あり。亦好みて讀書す。四方を漫遊して才藻を以て時に梟がす。而して頗る醜聲有り。其他類推すべし。余深く女子の讀書を悪む。故に余の門に女子無し。）

こうした当時における漢学を学んだ女性たちの生きづらさはすでに揖斐高氏の指摘するところであるが[408]、詩集出版に関しても江馬細香や梁川紅蘭のケースのように、本人主体の詩集を出版することは憚れていた。江戸時代の女性の意識もまた封建社会の常識の枠を乗り越えないまま、単なる教養として漢学や漢詩を学んでいたケースが多いと思われる。この点はお手本にした袁枚の女弟子たちとは自己主張の面で大きな違いが生じている。

このような江戸時代の女性漢詩人の中にあって、原采蘋は江馬細香や梁川紅蘭らが持ち合わせていた「女らしさ」を求めず、またあえてそのグループに属すことを求めなかったように思える。

俗に言ふ女子才無きは便ち是れ徳と。王節婦之に非ず。曹大家云ふ。婦の賢ならざれば則ち以て夫に事ふる無し。豈に不才にして四徳兼備する者有らんや。夫子才の難きを稱す。而して婦人有り。則ち才の女子に於ける。害無きに似たり。惟だ夫れ世の妬婦悍妻。其の君子を累はす者。固より多からずと為さざるのみ。然るに是れ獨り才有る者のみの罪ならんや。[409]

上記は采蘋が貝原東軒の書に付した跋文であるが、このように、男性と同等に漢学を学んだことで日本の女訓書に書かれた女性意識とは異質の女性観を持ち得たのである。これを実行したのが同じ秋月藩出身の貝原東軒であったことは采蘋が終生誇りとしていた所以である。東軒の立場は決して従属的な妻ではなく、夫と対等な立場にいた妻であったと思われ、采蘋の羨望を集めたのであろう。『五山堂詩話』に登場する山本北山の女弟子の中にも漢学を好んで学び、上記と同様の思想を持ちながら北山に弟子入りした女性たちがあった。菊池五山は『五山堂詩話』に取り上げて彼女たちの詩を評価したが、彼女たちの人生はその思想故に不幸な結末をたどったものもいたようである。

このように、江戸時代の儒者や詩人の女性観が、采蘋に対する父の友人たちの助言にも見られるように、表向きには曹大家・蔡文姫・謝道蘊・卓文君と並び称して采蘋の才能を

[407] 春山前掲書、146 頁。
[408] 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』角川書店、2001 年 12 月。
[409] 山田新一郎編『原采蘋詩鈔』

褒め称えるが、本音は結婚こそが女の幸せであると説いていることからも明らかである。結果的に「四方を漫遊して才藻を以て時を梟がす。而して頗る醜聲有り。其他類推すべし。」というのが、江戸後期に才能を持ちながら、結婚せず、独立生計を立てた原采蘋に浴びせられた九州・山陽地方での評判であったのだろう。

多田季婉、大崎文姫、原采蘋のような男性をも凌ぐ才能を持ち合わせた女性が平安に自立して生計をたてることが可能となったのは、やはり明治になってからである。明治期には女学校が設立され、私立の女子校では国漢系の学校では漢学も教えた。江戸後期に漢学を学んだ女性たちは明治期になって私塾や女学校を設立し、女子生徒に漢詩・書・画の教養を学ばせることになる。跡見花蹊や三輪田真佐子はその代表的な女性であり、花蹊の門人の詩は『日本閨媛吟繰』下巻に多く採録されている。「七曲吟社」を結んで女弟子を多く育てた鱸松塘は、明治十年四月、『七曲吟社閨媛絶句』を出版した。これは女性の詩だけを集めた詩集としては最初であると思われる。七曲吟社中の十一名の女性の詩が載せられており、袁枚の『随園女弟子詩選』を思わせる詩集である。明治になってようやく、清の袁枚の随園と同じ光景が東京でも見られるようになったということである。その後松塘は明治十二年に『七曲吟社詩』の前編を、明治十八年に後編を出版したが、後編の巻八には九人の女弟子の詩を載せている。続いて明治十三年には、同じく女性のみの詩を集めた『日本閨媛吟繰』[410]が水上珍亮によって出版され、五十四人の女性の詩が採録されている。上巻では江戸時代に活躍した女性詩人を載せ、下巻では明治期の上層階級・知識階級の娘たちで、女学校で教育を受けた女性たちが目立つ。また鱸松塘の「七曲吟社」で学んだ女弟子も名を連ねている。明治十六年から徐々に刊行された『東瀛詩選』は岸田吟香が清末の鴻儒兪曲園に依頼して編纂したもので、『日本閨媛吟繰』を参考にして『東瀛詩選』の巻四十には三十六名の女性の詩を載せている。

このように明治期に続々と出版された詩集に女性漢詩人もようやく名を連ねることが出来たのである。しかし采蘋の詩は『日本閨媛吟繰』と同様『東瀛詩選』にも「秋思」「舟入隅州」の二首のみが採録されている。女性の漢詩を集めた詩集に採録された采蘋の詩は他の女性漢詩人、例えば江馬細香や梁川紅蘭に比べて決して多くはない。漢詩人としての力量は男性と肩を並べるほどであったはずであるが、女性漢詩人という枠の中で評価される場合、采蘋の詩は不利であったと言えるのである。

謝化蝶道人　　化蝶道人に謝す
脚底無繩安有家　　脚底に繩なく　安くにか家は有る
思人須讀是南華　　人を思ひ　須く讀むべきは　是れ南華
他生願作双飛蝶　　他生願ひて　双飛の蝶と作らん
遊戯莊周園裏花　　遊戯す　莊周　園裏の花[411]

[410] 水上珍亮編の上下二冊からなる女性五十四人の詩を集めて明治十三年に刊行された詞華集。
[411] 石上東藁「原采蘋の書束と詩草」『本道楽』第十三巻第一号、1932 年。

この詩は江戸に着いて間もなくのころ詠んだ詩である。采蘋が天性の優れた漢詩人であったことは本研究で明らかとなったが、一方女性としての自分自身を受け入れ、それを享受するまでには長い時間がかかった。三十代の始め、江戸で詠んだ上記の詩に采蘋の本音を見るのは私だけであろうか。他生を「双飛の蝶」のようにと願う采蘋が求めたものは、夫を助け共に成長し、尊敬し合える夫婦像ではなかったか。同郷の貝原東軒こそが采蘋の理想とする女性であったと思われるのである。

以上

原資料・参考文献

原資料

(1)原采蘋遺稿
『古処先生批点采蘋女史遺稿』（自筆）秋月郷土館蔵
『有煒楼詩稿』（自筆）秋月郷土館蔵
『草稿』（自筆）秋月郷土館蔵
『漫録』（自筆）秋月郷土館蔵
『有煒楼草稿抜粋』（写本）秋月郷土館蔵
『原采蘋女史西遊日歴抜粋　完』（佐谷氏写本）秋月郷土館蔵
『原采蘋詩稿』（佐谷氏写本）秋月郷土館蔵
『原采蘋女史詩集』（土岐氏写本）秋月郷土館蔵
『采蘋先生詩集』（渡邊虚舟（果然）氏選・写本）1918 年、秋月郷土館蔵。
『東遊漫草』（自筆）秋月郷土館蔵
『有煒楼日記』（自筆）秋月郷土館蔵
『金蘭簿』（自筆）秋月郷土館蔵
『漫遊日歴』（写本）秋月郷土館蔵
『東遊日記』（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵
『古処遺稿・采蘋遺稿』（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵
『采蘋詩附読源語詩』（写本）国立国会図書館所蔵
『原采蘋文抄』（写本）国立国会図書館所蔵
『西遊日歴』（写本）東北大学付属図書館蔵
『東遊日記』（写本）大阪大学付属図書館蔵
『原采蘋詩集』（写本）慶応義塾大学斯道文庫蔵
『原采蘋文集』（写本）慶応義塾大学斯道文庫蔵
「采蘋詩集」『日本儒林叢書　第一三巻』1978 年

(2)その他
『古処先生詩集』（自筆）秋月郷土館蔵
『古処山堂詩稿奥書・人名心覚書』（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵
『原氏三儒遺詩拾緑』（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵
萩藩士屋蕭海『采蘋女史訃報』寫（山田新一郎氏写本）秋月郷土館蔵
中島棕隠「金帚集　巻の一」『椶隠詩鈔　一』京摂書林、1868 年。
広瀬淡窓『懐旧楼筆記』日田郡教育会、1925 年 12 月。
「原氏遺稿送付目録　付山田氏手許残留書目」、宮内省、1935 年 10 月、秋月郷土館蔵。
広瀬淡窓「懐旧楼筆記」日田郡教育會編『増補　廣瀬淡窓全集　上巻』思文閣出版、1971 年。

緒方無元編『郷土先賢詩書画集』郷土先賢顕彰会、1975 年 6 月。
楊維楨「曹氏雪齋弦歌集序」『東維子文集』（『四部叢刊集部』)卷七
亀井南冥「論語語由」『亀井南冥・昭陽全集　第七巻』葦書房、1979 年 2 月。
亀井昭陽「烽山日記」『亀井南冥・昭陽全集　第七巻』葦書房、1979 年 2 月。
兪樾撰　佐野正己編『東瀛詩選』汲古書院、1981 年 6 月。
錢伯城箋校《袁宏道集箋校》上海古籍出版社、1981 年 7 月。
広瀬旭荘「日間瑣事備忘」広瀬旭荘全集編集委員会編『広瀬旭荘全集　日記篇一』思文閣出版、1982 年 6 月。
菊池五山編「五山堂詩話」『詞華集日本漢詩　第二巻』汲古書院、1983 年 9 月。
羽倉簡堂『南汎録』（金山正好校訂・訳・解説）緑地社、1984 年 11 月。
『春草堂詩鈔』『山陽詩鈔』富士川英郎他編『詩集日本漢詩　十一巻』汲古書院、1986 年 10 月。
広瀬旭荘「梅墩詩鈔」富士川英郎他編『詩集日本漢詩　十一巻』汲古書院、1987 年 10 月。
江馬文書研究会編『江馬細香来簡集』思文閣出版、1988 年 6 月。
松崎慊堂著・芳賀登監修『松崎慊堂全集　附・日歴上・下』冬至書房、1988 年 7 月。
梁川星巌「星巌集」佐野正己解題『詩集日本漢詩　15 』 汲古書院、1989 年 1 月。
入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集『湘夢遺稿』上・下』汲古書院、1992 年 12 月。
『随園詩話』王英志主編《袁枚全集　第三冊》江蘇戸籍出版社、1993 年 9 月。
『隨園女弟子詩選』王英志主編《袁枚全集　第七冊》江蘇戸籍出版社、1993 年 9 月。
『聽秋軒詩集』金陵金陵龚氏、清乾隆 60 年刊。
『小倉山房詩集』王英志主編《袁枚全集　第一冊》江蘇戸籍出版社、1993 年 9 月。
『續同人集』王英志主編《袁枚全集　第六冊》江蘇戸籍出版社、1993 年 9 月。

参考文献

(1)著書

*原采蘋関係

山田新一郎編『原古処・白圭・采蘋小傳及び詩鈔』秋月公民館、1951 年 12 月。
春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会編、1958 年 10 月。
原采蘋先生顕彰会編集部編『原采蘋女史』原采蘋先生顕彰会、1958 年 10 月。
吉木幸子『幕末閨秀　原采蘋の生涯と詩』甘木市教育委員会、1993 年 12 月。
近藤典二「旅に生き旅に死す」『近世に生きる女たち』海鳥社、1995 年 5 月。
福島理子『江戸漢詩選　第３巻「女流」』岩波書店、1995 年 9 月。
前田淑『江戸時代女流文芸史　地方を中心に』笠間書店、1998 年 7 月。

*江戸の詩壇・詩人関係

市河三陽編『寛斎先生余稿』遊徳園刊、1926 年。

木崎愛吉・頼成一編『頼山陽全書〔詩〕』頼山陽先生遺蹟顯彰會、1932 年。
松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその摂取―』明治書院、1963 年 3 月。
富士川英郎『菅茶山と頼山陽』（東洋文庫　195）平凡社、1971 年 9 月。
富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（筑摩叢書　208）筑摩書房、1973 年 12 月。
大原富枝『梁川星巌・紅蘭―放浪の鴛』（日本の旅人 12）淡交社、1973 年。
鶴岡節雄『房総文人散歩・梁川星巌篇』千秋社、1977 年 5 月。
猪口篤志『女性と漢詩―和漢女流詩史―』笠間書院、1978 年 7 月。
伊藤信『梁川星巌翁　附紅蘭女史』象山社、1980 年 7 月。
亀井南冥・昭陽全集刊行会編『亀井南冥・昭陽全集　第八巻上・下』葦書房、1980 年 9-10 月。
安房先賢偉人顕彰会編『安房先賢偉人伝』国書刊行会、1981 年 4 月。
安房先賢偉人顕彰会編『安房先賢遺著全集』国書刊行会、1981 年 4 月。
荒木見悟『亀井南冥・昭陽』（叢書・日本の思想家 27）明徳出版社、1988 年 10 月。
日野龍夫註『成島柳北・大沼枕山』（江戸詩人選集　第 10 巻）岩波書店、1990 年 12 月。
菰口治校注『九州の儒者たち』海鳥社、1991 年 6 月。
庄野寿人『閨秀　亀井少栞伝』（財）亀陽文庫・能古博物館、1992 年 4 月。
入谷仙介監修・門玲子訳注『湘夢遺稿　上・下』汲古書院、1992 年 12 月。
水田紀久他校注『菅茶山・頼山陽』（新日本古典文学大系　66）岩波書店、1996 年 7 月。
永井荷風『下谷叢話』岩波書店、2000 年 9 月。
上野さち子『田上菊舎全集下』和泉書院、2000 年 10 月。
揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』角川書店、2001 年 12 月。
北條秀一『評伝　田上菊舎』2002 年 8 月。
『黄葉夕陽村舎に憩う－菅茶山とその世界Ⅲ―』広島県立歴史博物館図録、2005 年、10 月。
門玲子『江馬細香―化政期の女流詩人』藤原書店、2010 年 8 月（初版、1979 年）。

*秋月藩関係
田代政栄編『秋月史考』秋月史考刊行会、1951 年 10 月。
近藤思川『郷土詩話』思川建碑期成会、1965 年 10 月。
伊藤尾四郎編『福岡県史資料（第四輯）』名著出版、1970 年 11 月。
伊藤尾四郎編『福岡県史資料（第八輯）』名著出版、1972 年 3 月。
三浦末雄『物語秋月史　中巻』秋月郷土館、1975 年 11 月。
『甘木市史　上巻』甘木市史編纂委員会編・発行、1982 年 2 月。
広島県編『広島県史　近世２　通史Ⅳ』広島県、1984 年 3 月。
筑紫野市史編纂委員会編『筑紫野市史　下巻　近世・近現代』筑紫野市、1999 年 3 月。
三浦良一『物語秋月史　抄本』秋月郷土館、2001 年 3 月。

*日本女性史関係
関民子『江戸後期の女性たち』亜紀書房、1980 年 7 月。
山川菊枝『武家の女性』岩波文庫、1983 年 4 月。
福岡地方史研究会編『近世に生きる女たち』海鳥社、1995 年 5 月。

*日中文化交流史
原田伴彦『長崎』（中公新書 54）中央公論社、1964 年 10 月。
神田喜一郎『日本における中国文学　Ⅰ』二玄社、1965 年 1 月。
神田喜一郎『日本における中国文学　Ⅱ』二玄社、1967 年 5 月。
古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人　前編』長崎文献社、1968 年 8 月。
深潟久『郷土歴史人物事典〈長崎〉』第一法規出版株式会社、1979 年 4 月。
大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1981 年 3 月。
上野日出刀『長崎に遊んだ漢詩人』中国書店、1989 年 4 月。
王勇主編『中国江南：尋繹日本文化的源流』当代中国出版社、1996 年 11 月。
中砂明徳『江南―中国文雅の源流』（講談社選書メチエ 250）講談社、2002 年 10 月。
徳田武『近世日中文人交流史の研究』研文出版、2004 年 11 月。
王宝平『清代中日学術交流の研究』汲古書院、2005 年 2 月。
中尾友香梨『江戸文人と明清楽』汲古書院、2010 年 2 月。
長崎市史編纂委員会編『新長崎市史　第二巻近世編』長崎市、2012 年 3 月。

*中国詩人関係
田中克己『李太白』（民族教養新書　9）元々社、1954 年 7 月。
大野實之助『李太白研究』早稲田大学出版部、1959 年 4 月。
青木正兒編『李白』（漢詩大系　8）集英社、1965 年 3 月。
武部利男訳『李白』（世界古典文学全集　27）筑摩書房、1972 年 4 月。
アーサー・ウェイリー著　小川環樹他訳『李白』（岩波新書 847）岩波書店、1973 年 1 月。
小尾郊一『李白』（中国の詩人―その詩と生涯）集英社、1982 年 10 月。
アーサー・ウェイリー著・古田島洋介他訳『袁枚』東洋文庫(650)、平凡社、1999 年 3 月。
前野直彬注解『唐詩選　上』岩波書店、2000 年 10 月。
鄭幸『袁枚年譜新編』上海戸古籍出版社、2011 年 10 月。

*明清女性文学関係
合山究『『紅楼夢』新論』汲古書院、1997 年 3 月。
合山究『明清時代の女性と文学』汲古書院、2006 年 2 月。
蕭燕婉『清代の女性詩人たち』中国書店、2007 年 10 月。

*日本教育史関係
文部省編『日本教育史資料』臨川書店、1969 年。
笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究　下』吉川弘文館、1970 年 7 月。

*各県市町村史
千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史　通史編　近世 2』千葉県、2008 年 3 月。
久留米市史編纂委員会編『久留米市史　第 2 巻』久留米市、1982 年 11 月。
広島県編・発行『広島県史　近世 2　通史Ⅳ』1984 年 3 月。

(2)論文
山田新一郎「亀井南冥家と原古處家（一)」『筑紫史談第四拾八集』1929 年 12 月。
山田新一郎「亀井南冥家と原古處家（二)」『筑紫史談第四拾九集』1930 年 4 月。
山田新一郎「亀井南冥家と原古處家（三)」『筑紫史談第五拾集』1930 年。
石上東藁「原采蘋の書束と詩草」『本道楽』第十三巻第一号、1932 年 5 月。
井上蘭崖「萩に於ける古處山樵と其女采蘋女史」『筑紫史談第五十八集』1933 年 4 月。
井上蘭崖「原古處先生の源語詩巻に就いて」『『筑紫史談第六十二集』1934 年 8 月。
長寿吉「詩人采蘋の生涯」『フェリス女学院大学紀要　第二号』1967 年 3 月。
松村昂「「隨園詩話」の世界」『中国文学報』第二十二冊、1968 年 4 月。
前田淑「原采蘋の晩年」『福岡地方史談話会会報』第 8 号、1969 年。
関民子「幕末漢詩壇と女性詩人の自立への動向」『江戸後期の女性たち』亜紀書房、1980 年 7 月。
柴多一雄「文化・文成期における秋月藩政の展開」『史淵　第百十八輯』九州大学文学部、1980 年 3 月。
名倉英三郎「秋月藩稽古館史試稿」『『日本教育史資料』の研究Ⅴ』日本教育史資料研究会、1986 年 5 月。
宮崎修多「古処山樵東行譜―筑前詞壇瞥見　二」『江戸時代文學誌　第五号』柳門舎、1987 年。
宮崎修多「祭酒期の原古処とその周囲」『福岡県史　近世研究編、福岡藩（四)』1989 年。
井上忠「亀井南冥と竹田定良―藩校成立前後における―」『福岡県史　近世研究編』1989 年。
近藤典二「近世末期の手習塾」『会報　第 24 号』福岡地方史研究会、1989 年 4 月。
宮崎修多「古処山樵東行譜」『江戸時代文學誌　第七号』柳門舎、1990 年。
藤川正数「江馬細香と梁川紅蘭―漢詩による交遊関係を中心に―」『岐阜女子大学国文学会会誌』第 19 号、1990 年 3 月。
徳田武「遠山荷塘と広瀬淡窓・亀井昭陽」『江戸漢学の世界』ぺりかん社、1990 年 7 月。
志村緑「江戸末期知識人女性における自立と葛藤―女流漢詩人原采蘋の場合」『芸林　第 40

巻 第 2 号』1991 年。
宮崎修多「四　漢詩文」『福岡県史　通史編、福岡藩文化（下)』、1994 年 3 月。
片倉比佐子「江戸の女性文芸家たち」『江戸期おんな考　第六号』、桂文庫、1995 年、9 月。
荒木龍太郎「江馬細香論―中国思想・文学の視点から―」『活水日文　第三十五号』活水学院日本文学会、1997 年 2 月。
王標「メディアとしての「隨園画集図」」人文論叢第３１巻、2003 年 3 月。
蔡毅「長崎清客と江戸漢詩－新発見の江芸閣、沈萍香書簡を巡って―」『東方学　第百八輯』東方学会、2004 年 7 月。
朴春麗「長崎の「明清楽」と中国の「明清時調小曲」『文化科学研究　第 17 巻 2 号』中京大学文化科学研究所、2006 年 1 月。
馬越彬子「江戸女流詩人と来崎清客の交流―江馬細香と江芸閣の唱和詩を中心に―」『純心人文研究　第 12 号』2006 年。
賴多万「賴山陽と江馬細香(上)」『中國學論集　第四十三號』中國文學研究會、2006 年 3 月。
西原千代「茶山と春水」『中國學論集　第四十三號』中國文學研究會、2006 年 9 月。
賴多万「賴山陽と江馬細香(下)」『中國學論集　第四十三號』中國文學研究會、2007 年 1 月。
長瀬真理「WOMAN WRITERS OF CHINESE POETRY IN LATE-EDO PERIOD JAPAN」THE UNIVERSITY OF BRITISH COLUMBIA（博士論文)、2007 年。
揖斐高「江湖詩社の出発」『国文学　解釈と鑑賞』第 73 号、至文堂、2008 年。
倉本昭「菊舎尼の漢詩―田上菊舎「長府侯前田別業二十勝」をよむ」『国文学　解釈と鑑賞』平成 20 年 10 月号、2008 年 10 月。
松浦章「来舶清人と日中文化交流」『東アジアの文人世界と野呂介石』（関西大学東西学術研究所研究叢刊 32）関西大学出版部、2009 年 3 月。
黒川桃子「原采蘋の女性意識」『江戸風雅　第 3 号』 2010 年 11 月。
黒川桃子「亀井少栞小伝―父昭陽の詩文を通して―（上)」『江戸風雅　第五号』江戸風雅の会、2011 年 12 月。
徳田武「広瀬旭荘と江戸」『江戸風雅　第七号』江戸風雅の会、2013 年 1 月。

謝辞

漢詩文という、私にとってとてつもないハードルの高い論題に挑戦した本研究に当たり、指導教官である小田切文洋先生には多大なご指導をいただいた。多くの参考文献のご提示に始まり、漢詩文のご指導に至るまでお忙しい中、細かいご指導を賜った。学会発表の時には、常に発表論文のご指導をいただいた。また副指導教官である呉川先生には、上海での学会発表に多大なご協力をいただき、念願の海外発表が実現できた。また漢詩の自筆本の難解な解読をお手伝いいただき、日の目を見なかった原采蘋の詩の紹介が可能となった。また副指導教官である松岡直美先生には紀要論文の英文のご指導をいただき、本研究においては、時々に適切なアドヴァイスを賜るとともに、常に励ましの言葉をかけてくださった。その他、大学院総合社会情報研究科の先生方には、中間発表会等で適切なアドヴァイスをいただき、論文執筆にあたり常に指針を与えてくださった。

原采蘋の史料収集では秋月郷土館を始め、朝倉市立図書館の皆さまにはご親切な対応をいただいた。原采蘋の縁戚関係にあられる戸原正次様には貴重な史料の閲覧を許可していただき感謝申し上げる。また原采蘋研究の先輩である前田淑先生には多くのご教示をいただき、この研究に到るきっかけを作ってくださった。また女性史研究家の柴桂子・片倉久子氏には原采蘋関係の資料のコピーを提供いただき、研究のスタートを助けていただいた。東北大学図書館、大阪大学図書館、広島県立歴史博物館では貴重な史料の複写を許可していただき、本研究の大きな成果となった。特に広島県立歴史博物館の岡野将士氏より、黄葉夕陽村舎資料中の采蘋の未公開の詩をご教示いただき、采蘋の神辺訪問の際の状況に新たな一面を加えることができた。このほかにも各地の図書館や博物館には大変お世話になった。あらためてお世話になったすべての方々に感謝申し上げる。

最後に、三年間この研究のために協力を惜しまなかった家族に感謝している。